

一般国道  
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第22集

# 日 詰 遺 跡 Ⅱ

福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城所在遺跡の調査

2 0 0 5

福岡県教育委員会

一般国道  
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第22集

# 日 詰 遺 跡 II

福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城所在遺跡の調査



日詰遺跡遠景（東から）



近代攪乱坑（石炭殻で満たされた3号攪乱）



近代攪乱坑出土ガラス容器類



近代攪乱坑（石炭殻廃棄坑）出土茶瓶（左）と吉塚遺跡出土の茶瓶（右）

# 序

福岡県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局の委託を受け、1979年度から一般国道210号線浮羽バイパスの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。現在、うきは市（旧吉井町・浮羽町）内の大部分では調査が終了し、一部の区間での一般供用が開始されています。

本報告書は、平成14年度に実施しました、久留米市田主丸町田主丸豊城に所在する日詰遺跡の、第2次調査の記録です。遺跡からは、弥生時代～古代、近代の各時代の様々な遺構を確認することができました。特に古代では、30棟にも及ぶ竪穴住居跡を中心とした集落跡を、また近代では、明治末期から昭和初期にかけての短期間のみ、現在の田主丸と甘木市秋月を結ぶ鉄道として人々に利用されていた両筑軌道に係る遺構を確認することができました。この地域における深い歴史の一端を垣間見ることができる貴重な成果を得ることができたものと考えております。

本書が、地域文化の研究や教育、また文化財愛護思想の発展に対しわずかなりとも寄与できれば幸いです。

発掘調査、整理作業ならびに報告書の作成にあたりまして御協力・御助言をいただきました多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成17年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

## 例言

1. この報告書は、平成14（2002）年度に福岡県教育委員会が国土交通省九州地方整備局の委託を受けて実施した、一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録であり、昭和58（1983）年より刊行を開始した一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第22集である。
2. 本書に記録した日詰遺跡は、一般国道210号浮羽バイパス関係の埋蔵文化財調査第15地点にあたり、福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城に所在する。
3. 日詰遺跡の発掘調査は平成12～13・14・15年度に行い、それぞれの調査を1～3次、調査区をⅠ～Ⅲ区とした。本報告書はこのうち第2次調査（Ⅱ区）についてのものである。
4. 今回報告する日詰遺跡第2次調査（Ⅱ区）は、久留米市田主丸町田主丸豊城99-3、99-4、101-2、101-48、101-51、101-52を対象として行った。
5. 本書に掲載した遺構写真は小澤が、遺物写真は石丸洋、北岡伸一が撮影し、空中写真は九州航空（株）、東亜航空技研（株）に委託した。
6. 本書に掲載した遺構図は小澤が中心となってこれを作成し、能登原孝道、大塚ヒロ子、小西富美子、小西裕子、中村弘子の協力を得た。
7. 本書で使用した方位は、国土調査法第二座標系に基づく座標北である。
8. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館において坂元雄紀の指導のもとに実施した。出土遺物の実測は小澤のほか能登原、平田春美、田中典子、棚町陽子、久富美智子、坂田順子、橋ノ口雅子、堀江圭子、若松三枝子、中村洋子、栗林明美、寺岡和子、中川真理子、荒川妙、中川陽子、西原節子が行った。挿図の浄書は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美、山田智子、辻清子、安永啓子が補助した。
9. 出土遺物・写真・図面は全て九州歴史資料館および文化財保護課太宰府事務所に保管している。
10. 本書に掲載した地図及び空中写真のうち一部には、国土地理院長の承認を得て、5万分の1地形図、空中写真（米軍撮影）を複製したものが含まれる（承認番号平16九複、第286号）。
11. 本書の執筆は第5章を小畑弘己氏（熊本大学埋蔵文化財調査室）に依頼し、その他は小澤が行った。編集は小澤が行った。

## 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の経過	2
第3節	調査の組織	3
第2章	位置と環境	5
第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	7
第3章	発掘調査の記録	19
第1節	遺跡の概要と基本層序	19
第2節	第1遺構面の検出遺構と出土遺物	24
第1項	竪穴住居跡	24
第2項	掘立柱建物跡	56
第3項	土坑	57
第3節	第2遺構面の検出遺構と出土遺物	60
第1項	竪穴住居跡	60
第2項	土坑	66
第3項	その他の遺構	69
第4節	第3遺構面検出遺構と出土遺物	70
第1項	土坑	71
第2項	溝跡	73
第5節	その他の遺物	75
第1項	ピット出土土器	75
第2項	第1遺構面上包含層、攪乱坑出土土器	75
第3項	第2遺構面上包含層出土土器	77
第4項	その他の遺物	78
第5項	近代攪乱坑出土の遺物	80
第4章	福岡県久留米市日詰遺跡から出土した炭化種子とその意義	89
第5章	考察	99
第1節	古代の遺構群について	99
第2節	近代の遺構群について	102
第6章	おわりに	105

## 図版目次

図版1	1	第1遺構面完掘状況（南から）	2	第2遺構面完掘状況（南から）
	3	第3遺構面完掘状況（北から）		

図版 2	1	1号竪穴住居跡（南から）	2	2号竪穴住居跡（西から）
	3	2号竪穴住居跡カマド（西から）		
図版 3	1	3号竪穴住居跡（西から）	2	3号竪穴住居跡カマド（西から）
	3	4号竪穴住居跡（南から）		
図版 4	1	5号竪穴住居跡（西から）	2	5号竪穴住居跡カマド（西から）
	3	6号竪穴住居跡（東から）		
図版 5	1	6号竪穴住居跡カマド（東から）	2	7号竪穴住居跡（北から）
	3	8～10号竪穴住居跡カマド（西から）		
図版 6	1	8号竪穴住居跡カマド（西から）	2	9号竪穴住居跡（西から）
	3	12号竪穴住居跡（東から）		
図版 7	1	13号竪穴住居跡（西から）	2	13号竪穴住居跡カマド（西から）
	3	15～17号竪穴住居跡（西から）		
図版 8	1	18・25号竪穴住居跡（東から）	2	19・20号竪穴住居跡（南から）
	3	19号竪穴住居カマド・土器出土状況（南から）		
図版 9	1	19号竪穴住居跡（南から）	2	21号竪穴住居跡（北から）
	3	22号竪穴住居跡（西から）		
図版10	1	23号竪穴住居跡（南から）	2	24号竪穴住居跡（西から）
	3	26号竪穴住居跡（西から）		
図版11	1	27・28号竪穴住居跡（西から）	2	29号竪穴住居跡（北から）
	3	30号竪穴住居跡（南から）		
図版12	1	1号掘立柱建物（南から）	2	2・3号掘立柱建物検出状況（南から）
	3	1号土坑（北から）		
図版13	1	2号土坑（北から）	2	3号土坑（北から）
	3	4号土坑（東から）		
図版14	1	4号土坑土層（西から）	2	1号溝土層（北から）
	3	2号溝土層（西から）		
図版15	1～6・8～11号竪穴住居跡出土遺物			
図版16	19～29号竪穴住居跡、2～4号土坑出土土器			
図版17	ピット、第1遺構面上包含層・攪乱坑出土土器			
図版18	遺跡出土土製品、製塩土器、石器、金属器			
図版19	1・2号攪乱坑出土近代遺物			
図版20	1～3号攪乱坑出土近代遺物			

## 挿図目次

第1図	日詰遺跡周辺の遺跡分布図 (1/50000) .....	6
第2図	耳納山麓の条里地割と筑後川氾濫原中の埋没河川 .....	8
第3図	浮羽地域の南北地形断面模式図 .....	9
第4図	弥生時代の遺跡分布 (1/100000) .....	10
第5図	古墳時代～奈良時代の遺跡分布 (1/100000) .....	14
第6図	日詰遺跡周辺地形図 (1/3000) .....	19
第7図	Ⅱ区東・北壁土層実測図 (1/60) .....	21
第8図	Ⅰ区西・東壁土層実測図 (1/80) .....	21
第9図	第1遺構面遺構配置図 (1/250) .....	23
第10図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	24
第11図	2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) .....	26
第12図	3号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) .....	28
第13図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	29
第14図	1～4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	30
第15図	5号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) .....	32
第16図	6号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) .....	34
第17図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	35
第18図	8号竪穴住居跡・カマド、9号竪穴住居跡実測図 (1/60・1/30) .....	37
第19図	10号竪穴住居跡・カマド、11号竪穴住居跡実測図 (1/60・1/30) .....	39
第20図	13号竪穴住居跡・カマド、14～16号竪穴住居跡実測図 (1/60・1/30) .....	41
第21図	5・6・8・9～11・13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	43
第22図	17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	44
第23図	19号竪穴住居跡・土器出土状況・カマド実測図 (1/60・1/30) .....	46
第24図	19号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/3) .....	48
第25図	19号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/3) .....	49
第26図	20・21号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	51
第27図	22号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	52
第28図	23号竪穴住居跡、4号掘立柱建物跡、24号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30) .....	53

第29図	25号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	54
第30図	21・24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	55
第31図	1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	57
第32図	1号土坑実測図 (1/30) .....	58
第33図	第2遺構面遺構配置図 (1/250) .....	59
第34図	12号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	60
第35図	26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	61
第36図	28～30号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	63
第37図	28・29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	65
第38図	2・3号土坑実測図 (1/30) .....	67
第39図	2・3号土坑、北東部落ち込み出土土器実測図 (1・2・9・10は1/4、他は1/3) .....	68
第40図	第3遺構面遺構配置図 (1/250) .....	70
第41図	4号土坑実測図 (1/30) .....	71
第42図	4号土坑、1号溝、ピット出土土器実測図 (2は1/4、他は1/3) .....	72
第43図	1・2号溝実測図 (1/40) .....	74
第44図	第1遺構面上包含層・攪乱坑出土土器実測図 (1は1/4、他は1/3) .....	76
第45図	第2遺構面上包含層出土土器実測図 (1/3) .....	77
第46図	遺跡出土土製品、製塩土器、石器、金属器実測図 (11は1/3、他は1/2) .....	79
第47図	1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その① (1/3) .....	81
第48図	1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その② (1/3) .....	82
第49図	1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その③ (1/3) .....	84
第50図	1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その④ (36～38は1/3、他は1/2) .....	85
第51図	1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その⑤ (59～66は1/3、他は1/2) .....	86
第52図	3号攪乱坑出土近代遺物実測図 (1/3) .....	88
第53図	日誌遺跡出土の炭化種子 .....	99
第54図	現生資料と遺跡出土アサ .....	100
第55図	日誌遺跡第2次調査検出遺構群の切り合い関係 .....	101

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯

一般国道210号線は、大分県大分市と福岡県久留米市を結び、九州中央部を東西に横断する、主要幹線道路である。久留米市から浮羽町（2005年3月に吉井町と合併してうきは市となった）にかけての両筑平野における筑後川南岸地域においては、国道210号線は久留米市、田主丸町（2005年2月に久留米市により吸収合併された）、吉井町、浮羽町の各市街地の中心部を東西に貫く、対面2車線の道路となっているが、交通量の増加にもかかわらず、市街地を通過しており歩道も狭いため、交通渋滞、交通事故の発生、住環境の悪化などの問題点を抱えていた。

そこで、渋滞の緩和、交通事故の減少、救急医療活動の支援、沿道環境の改善、地域づくりの支援等を目的として、国道210号線の改築が事業化された。改築は、昭和48年度より浮羽バイパスの建設工事として着手された。工事は、東側より進行し、平成16（2004）年12月現在、うきは市吉井町内の全区間と、同浮羽町内の大部分、久留米市田主丸町内の一部が供用開始されている。

浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財保護の対応については、昭和47年度に、建設省地方建設局福岡国道工事事務所（現在、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現在、福岡県教育庁総務部文化財保護課）に対して埋蔵文化財の有無についての調査依頼があったのを端緒とする。文化課では、これに基づいて工事予定地内の埋蔵文化財の分布調査を行い、これもとに吉井町塚堂遺跡の発掘調査を昭和54（1979）～57（1982）年に実施した。

その後、昭和61（1986）年度に、再度福岡国道工事事務所から分布調査依頼があり、これに基づいて、文化課は前回回答時の成果を踏まえつつ、塚堂遺跡を除く計16地点について発掘調査が必要である旨を回答した。さらに、平成5（1993）年度、10（1998）年度にもそれぞれ分布調査依頼があり、新たに17～19地点の3箇所を包蔵地を回答した。

浮羽バイパスの建設に伴う埋蔵文化財の調査は、これらの一連の分布調査によって把握された19地点を対象として県文化財保護課により行われ、現在までにこのうち16地点について何らかの調査が実施された。調査はすでに足かけ25年にもおよび、延べ調査面積は15万㎡を越え、報告書も21冊が刊行された。これらの過去の調査の詳細については、既刊の各報告書を参考とされたい。

本書で報告する日詰遺跡は、県文化課より福岡国道工事事務所に対し、昭和61（1986）年度に、埋蔵文化財の包蔵地の可能性がある旨の回答が行われた、15地点に該当する。平成9年度、県文化課は当該地の試掘調査を行い、複数の遺構面からなる遺跡の存在を確認した。

その後、遺跡の東側に隣接する田主丸中学校のテニスコート改築に際して、大型車の進入路がないことから、バイパス予定地について、遺跡を南北に縦断する県道33号線（甘木―田主丸線）からの取り付き道路として早急に整備してほしい旨の地元からの要望があった。そのため、日詰遺跡のうち県道の東側部分について、平成12年に隣接する大的遺跡とともに調査を行った。これが日詰遺跡第1次調査（Ⅰ区）である。さらに平成14年には、福岡国道事務所から県道33号線と浮羽バイパスの交差点付近を先行して改修工事したい旨の申し入れがあり、これをうけて同年11月5日より本調査に着手した。これが日詰遺跡第2次調査（Ⅱ区）である。調査対象面積は1000㎡であったが、遺構面が3面確認されたため、調査面積は延べ2,600㎡に及んだ。その後平成15年度に、日詰遺跡

Ⅱ区の西側隣接地について調査を行っている。これが日詰遺跡第3次調査（Ⅲ区）である。日詰遺跡Ⅲ区は、平成17（2005）年度に報告予定である。

## 第2節 調査の経過

日詰遺跡第Ⅱ区は、上記のような経緯により平成14年11月5日に発掘調査に着手した。まず、重機により表土剥ぎを行い、第1遺構面を検出した。表土剥ぎが一段落し、周辺的环境も整って、作業員による遺構の検出に着手したのが11月15日であった。

現地は県道沿いの東半分が一段高くなっており、高い東側が宅地、低い西側が水田として利用されていた。西半分との境界部分には高さ80cmほどの石垣が築かれていた。従って、西半分については遺構面が大きく削平を受けており、遺構の残存状況は悪かった。しかし、東半分については、住宅の基礎やゴミ穴等の攪乱が多かったものの遺構の残存状況は比較的よく、特に南側ではカマドを持つ竪穴住居跡が切り合いながら数多く検出され、遺構面の大半が暗褐色の遺構埋土で覆われる状況であった。また、遺跡の北東側では、石炭殻が詰まった大きな土坑が検出された。当初、この遺構については攪乱として扱っていたが、遺構埋土の下層から近代遺物がまとまって出土し、またこの遺構が明治末期から昭和初期にかけて隣接する県道付近を走っていた両筑軌道という鉄道と関連するらしいことが判明したため、急遽遺物を取り上げて報告することとした。

第1遺構面の調査は12月末までではほぼ一段落し、年末も迫った12月26日に第1遺構面の空中写真を撮影した。第1遺構面で検出された遺構は竪穴住居跡が24棟のほか、土坑、掘立柱建物跡などである。遺構は主に調査区の南東部の一段高い部分に集中していたが、旧地形がやや低くなっている調査区北側にも、大きく削平された竪穴住居跡などが検出された。このほか西側で数多くのピットを確認したが、これらは竪穴住居跡などの壁が削平され、柱穴のみが残ったものと考えられ、本来遺跡は西側にかけて展開していたものと推測された（なお、この推測は第3次調査によって確かめられた）。第1遺構面の調査が最終的に終了したのは、年が明けて1月9日であった。

第2遺構面の調査は、冷え込み厳しい1月10日より着手した。まず、重機による表土剥ぎを行った。当初、今回報告の第Ⅱ区と県道を挟んで東側に隣接する第Ⅰ区の状況から、第2遺構面は第1遺構面よりも50cm以上下層にあるものと考えていたが、調査区の南側部分を20cm程度下げたところで遺構埋土と思われる暗褐色粘質土を確認した。そこで、この深さで一度遺構面を検出することとし、重機による掘り下げを行って人力による遺構検出を行ったところ、大きく削平されてはいるものの、竪穴住居跡が残っていることが確認された。これは、第1遺構面で検出した竪穴住居跡が著しく切り合っており、さらに近代の攪乱がその上から大きく遺構面を掘りこんでいたために、切り合い関係が最も古い住居跡を検出できないまま調査を終了してしまったことが原因であった。そこで、第1遺構面から20cmほど下げた面を第2遺構面として調査を行った。本来この層は弥生時代～古墳時代の遺構面と考えられるが、上記の事情で、第1遺構面と同じ古代の遺構群も検出されている。本報告書では、図面の関係上、調査した遺構面に準じて報告することとするが、竪穴住居跡の切り合い関係などは、第1遺構面との関係を考慮に入れつつその都度述べることにしたい。

第2遺構面の調査は、遺構が削平されて極めて浅かったこともあって、1月中旬には目処が付き、1月22日に完掘状況の空中写真の撮影を行った。その後測量や確認調査を行い、第2遺構面の調査

が最終的に終了したのは1月31日であった。

引き続き第3遺構面の調査に着手した。第3遺構面は南側の舌状台地部分から北側の旧河川流路にかけて傾斜し、第1遺構面からの深さは、最も浅い南側では20～30cm程度で第2遺構面と同じ深さであったが、北側ではおおよそ80cm程度の深さがあった。従って、調査区の南側はすでに第2遺構面調査時に調査を終えたと考え、第3遺構面の調査は調査区の北半分を対象として行った。

第3遺構面では、最も深い調査区の北東隅で溝を2条検出した。また、調査区中央部で4号土坑(井戸)を検出した。4号土坑の存在する場所は、第1遺構面の調査時に攪乱として深く掘り下げた部分に当たり、ちょうど攪乱坑と井戸が重なっていたために第1・第2遺構面の調査時には認識できなかったものが、第3遺構面まで掘り下げてはじめて遺構として認識できたものである。攪乱中から出土した遺物の中には中世の土器が多いが、この多くは4号土坑上部の攪乱(と、おそらくは4号土坑埋土の上層部分)を掘り下げた際に出土したものである。

第3遺構面の調査は2月中旬までかかり、空中写真の撮影を2月13日に行った。その後確認トレンチ等の調査を終了し、2月21日には全ての作業を終了した。

### 第3節 調査の組織

発掘調査および整理・報告書作成の関係者は下記のとおりである。

#### 国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成14年度	平成15年度	平成16年度
所長	森 昌文	増田 博行	増田 博行
副所長	小串 正志	小串 正志	後田 徹
	百田 国広	徳留 忠	徳留 忠
建設専門官	池田 正		
建設監督官	浅井 博海	内田 智視	内田 智視
調査第2課長	久野 隆博	上村 一明	小椎 尾優
	上村 一明		
調査係長	大榎 謙	長友 浩信	長友 浩信
	長友 浩信		
専門調査員	島川 浩一	島川 浩一	
専門員			相島 伸行
国土交通技官	佐藤 博信	立石 洋和	立石 洋和
工務課長	末岡 彰	田中秀之進	田中秀之進
工務第一係長	山口 隆	竹永 浩	竹永 浩
	竹永 浩		
工務第三係長	川内 学	山下 正昭	山下 正昭

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	平成14年度	平成15年度	平成16年度
<b>総括</b>			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	三瓶 寧夫	三瓶 寧夫	清水 圭輔
総務部長	松本 通憲	清水 圭輔	
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
参事兼課長補佐	久芳 昭文	久芳 昭文	
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	川述 昭人	川述 昭人
	川述 昭人	木下 修	木下 修
参事	濱田 信也	佐々木隆彦	佐々木隆彦
			新原 正典
			安川 正郷
<b>課長補佐</b>			
参事補佐兼管理係長	古賀 敏生	古賀 敏生	
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	小池 史哲	小池 史哲
参事補佐兼調査第二係長	児玉 眞一	中間 研志	中間 研志
参事補佐兼文化財保護係長	池邊 元明	池邊 元明	池邊 元明
参事補佐	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋
	赤司 善彦	赤司 善彦	赤司 善彦
	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
<b>庶務</b>			
管理係長			稲尾 茂
事務主査		宮崎 志行	宮崎 志行
主任主事	秦 俊二	末竹 元	石橋 伸二
			末竹 元
<b>調査・報告</b>			
主任技師	小澤 佳憲	小澤 佳憲	小澤 佳憲

現場作業には、地元田主丸町をはじめとして周辺各地からご参加いただいた。氷が張り、雪の舞う悪条件の中、熱心に作業にあられた皆様に心から感謝申し上げます。

発掘調査および整理期間中には、文化財保護指導委員の方々をはじめ、田主丸町教育委員会丸林禎彦・江島伸彦両氏ほか近隣市町の文化財担当の方、北筑後教育事務所、九州歴史資料館、甘木歴史資料館、福岡国道事務所等の多くの方々に御教示、御協力、御支援をいただいた。また、熊本大学文学部の小畑弘己先生には、カマド埋土の採取のため現地に御足労頂き、カマド灰中に残存していた穀物種子について調査・分析され、その成果について玉稿を賜ることができた。この場を借りてお礼申し上げます。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

**日詰遺跡の位置** 日詰遺跡は、久留米市田主丸町田主丸豊城に所在する。小字名を日詰といい、これを遺跡名としている<sup>1)</sup>。

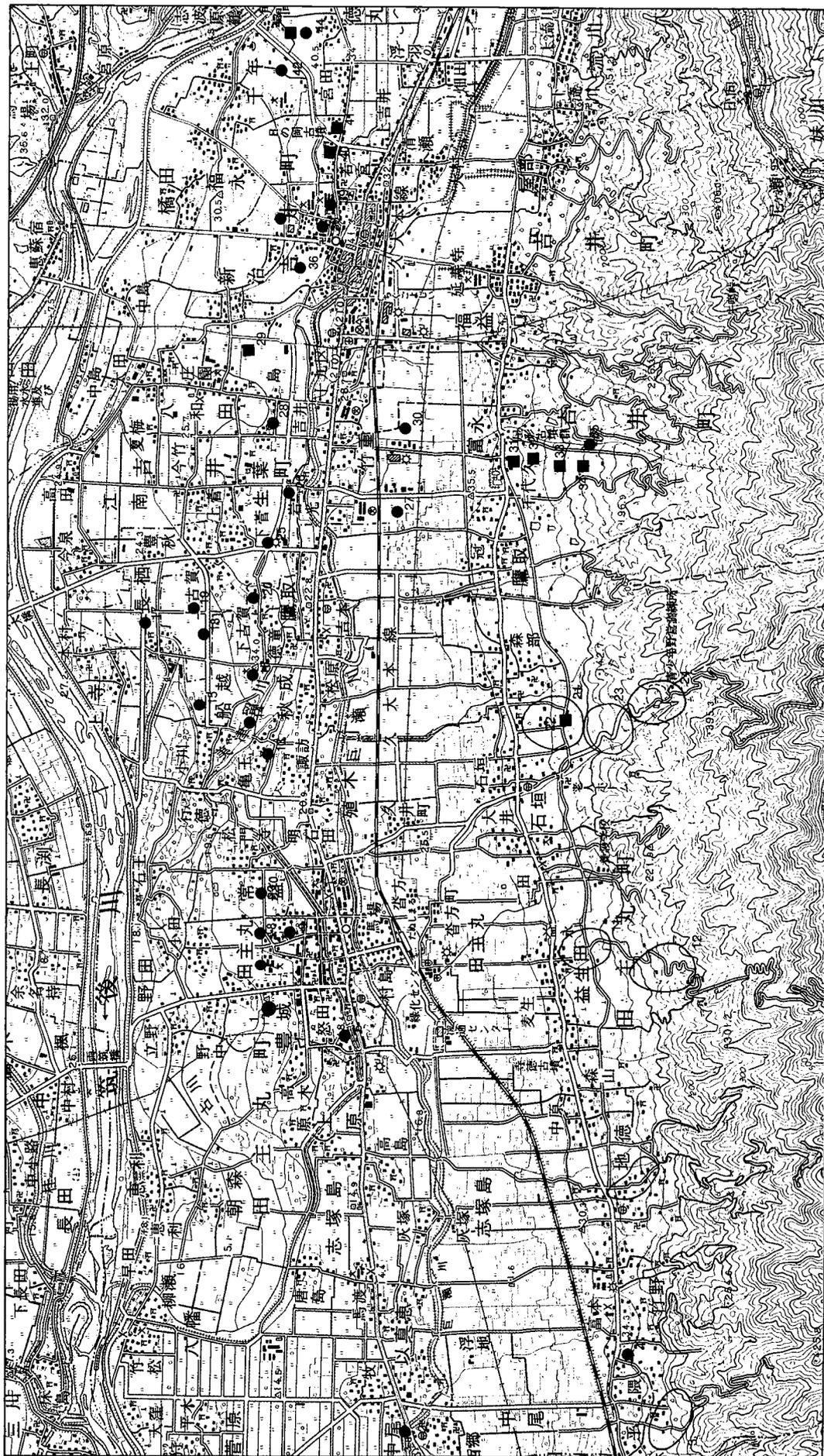
遺跡の所在する久留米市田主丸町は、2005年2月の市町村合併以前は田主丸町であり、同じく2005年3月に合併した旧吉井町、浮羽町とともに、浮羽郡を構成していた。浮羽郡は福岡県の中央やや南寄りに位置し、旧国名では筑後に含まれる。西から順に田主丸町、吉井町、浮羽町の三町が並んでいたが、このうち最も西に位置する田主丸町は、隣接する久留米市と、久留米市周辺の北野町・城島町・三潴町とともに2005年2月に対等合併した。合併により新たに成立した「久留米市」は、面積228km<sup>2</sup>、人口30万人を越える県下有数の大都市となった。また、吉井町と浮羽町も、同年3月には合併して、面積117km<sup>2</sup>、人口3万4千人の「うきは市」となった。

**地形的環境** 浮羽郡は、両筑平野の南側、地形的には筑後川と耳納山脈の間に位置する。筑後川は、阿蘇外輪山の北部に端を発し、大分県の日田盆地で周囲の小河川を吸収して大河へと成長したあと（日田市域では三隈川と呼ばれる）西へと流れ出し、福岡県内に入ってから広大な平野を形成しつつ、福岡・佐賀県境を曲流して有明海へと注ぐ九州一の大河である。この筑後川の解析・堆積作用や有明海による堆積作用により、筑後川の中・下流域には広大な平野が形作られている。これを総称して筑紫平野と呼ぶ。このうち、有明海沿岸部から久留米市西部にかけての平野を筑後平野、久留米市東部から浮羽・朝倉両郡までの平野を両筑平野と呼び分けることがある。これは、筑紫平野の北を画する背振—古処山系から南に向かって派生した丘陵と、両筑平野の南を画する耳納山脈から北に向かって派生した丘陵が、筑紫平野のほぼ中央部に当たる久留米市付近で向かい合うようにしてのびて、筑紫平野を二つに分断するからである<sup>2)</sup>。

両筑平野は、北を古処山系、南を耳納山脈という、二つの山系によって区画されている。この二つの山系は、大分県境付近を扇の要として、東に狭まり西に開く二等辺三角形の両辺のように、直線的に伸びている。さらに、扇が大きく開いた二等辺三角形の西側は、先に述べたように背振山地から派生した筑紫野・小郡・鳥栖付近の丘陵群によってさえぎられている。したがって、両筑平野は、右に倒れて西を底辺とする二等辺三角形のような形を呈する。

筑後川は、この二等辺三角形の東側の頂点から両筑平野に流れ出し、平野の中央南側を直線的に西に向かって流れて、久留米地峡帯を抜けて筑後平野へと流出する。筑後川が平野の南側に片寄るため、平野の北側には広い沖積地が広がっている。この広い沖積地には、さらに北にそびえる古処山系から流れ出して筑後川にそそぐ、佐田川、小石原川、宝満川といった多くの中規模河川がある。一方、筑後川の南側には耳納山脈がせまっているために、沖積地もせまく、筑後川の支流はそれほど発達していない。また、筑後川北岸の支流が筑後川に対して直角に流れ下るのに対し、美津留川、巨瀬川といった筑後川南岸の支流は、せまい沖積地を筑後川と併行して西に向かって流れるのが特徴的である。筑後川北岸と南岸の地形的環境は、このような河川の状況に応じて大きく異なる。

筑後川は、北部九州の河川の多くがそうであるように、現在堆積作用がさほど働いていない。これは、筑後川の上流域が比較的浸食されにくい地形環境である<sup>3)</sup>こととともに、有明海の海水準が



1. 日詰遺跡
2. 西郷天神免遺跡
3. 隅古墳群
4. 竹野小学校遺跡
5. 善院古墳群
6. 豊城中ツブ口遺跡
7. 大的遺跡
8. 玉田遺跡
9. 水分遺跡
10. 松門寺A遺跡
11. 益永古墳群
12. 益生田古墳群
13. 秋成薬王遺跡
14. 船越二ノ上遺跡
15. 船越一ノ上遺跡
16. 船越宮ノ前遺跡
17. 千代久遺跡
18. 長柄高嶋遺跡
19. 殖木遺跡群A地点
20. 船越高原遺跡
21. 大塚古墳群
22. 田主丸大塚古墳
23. 大塚清長橋古墳群
24. 平原古墳群
25. 鷹取五反田遺跡
26. 大塚遺跡
27. 富永正地遺跡
28. 生葉遺跡群
29. 女塚古墳
30. 吉井殿蘇遺跡
31. 珍敷塚古墳
32. 原古墳
33. 鳥船塚古墳
34. 古畑古墳
35. 法華原遺跡
36. 仁右衛門畑遺跡
37. 堂畑遺跡
38. 広園地区遺跡
39. 吉井中学校遺跡
40. 月岡古墳
41. 日岡古墳
42. 千年小築遺跡
43. 塚室古墳
44. 塚室遺跡

第1図 日詰遺跡周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

大局的にみて一定か、やや海退傾向にあることによるものと考えられる。つまり、上流部が浸食されにくければ下流部に堆積する土砂の量も少なく、海退傾向にあれば堆積土砂の場所が海側に広がるからである。堆積作用があまり働かないため、遺跡の埋没する深さは非常に浅く、一般的に地表から1m以上の深さであることはほとんどない。このように、筑後川の堆積作用が現在ほとんど働いていないために、両筑平野の地形環境は縄文海進以降は大きく変わっていないと考えられる。

さて、このように筑後川による堆積作用がわずかであるため、現在みられる両筑平野の地形環境は、筑後川の解析作用と、筑後川の支流の解析・堆積作用に大きく影響されている。このため、支流のあり方が大きく異なる筑後川の北岸と南岸では、地形環境が異なっている。古処山系から流れ出した中河川が広い沖積地を流れ下る筑後川の北岸では、これらの中河川の堆積作用によって、幅が広く傾斜の緩やかな扇状地が形成されている。さらに、この扇状地を、中河川自身や筑後川本流が解析することで、非常に幅の広い河岸段丘が形成されている。このため、筑後川の北岸では広くフラットな段丘面が展開する特徴のある景観が形成されている。この結果、筑後川北岸の朝倉郡や甘木市などでは、この広い段丘面を使った水田耕作や穀物栽培が盛んに行われており、福岡県を代表する穀倉地帯となっている。一方、筑後川の南岸は、耳納山脈が断層により形成されているために筑後川側の斜面が急峻で、さらに筑後川がこれに近い場所を流れるために、広い扇状地や沖積地の発達十分ではない。この結果、耳納山麓にはせまい扇状地帯が形成される一方、扇状地の端部には、筑後川の支流が筑後川と並行して走ることによって形成された自然堤防帯が、東西方向に連なるといふ、これまた特徴的な地形がみられる。この結果、浮羽郡では、扇状地を利用した果樹・苗木の栽培が盛んで、地域を代表する産業の一つとなっている。

**遺跡の立地環境** 日詰遺跡は、筑後川の南岸に形成された自然堤防帯の南端部に立地する。遺跡のすぐ北側には、古筑後川の埋没河川と考えられる幅の広い帯状の窪地が、うねうねと曲がりながら東西方向に走っており、当初、遺跡はこの埋没河川によって形成された自然堤防上に立地するとみられた。しかし、遺跡のすぐ南側には、扇状地の端部が解析によってけずられて舌状になった、現状で低地との比高差が1～2mほどをはかる段丘があり、発掘調査により、日詰遺跡自身はこの舌状の段丘がゆるやかに低地にむかって下る先端部に立地していることが把握された<sup>4)</sup>。つまり、日詰遺跡は、扇状地と自然堤防帯の境界部の扇状地側に位置し、比較的安定した地盤の上に展開していると理解される。日詰遺跡に隣接して、大的遺跡、水分遺跡、旧田主丸中学校遺跡などの多くの遺跡がみられるが、これらはいずれも同様にして形成されたと考えられる段丘端部～段丘上に存在しており、安定した地盤を選んで集落経営を行っていたものであろう。

## 第2節 歴史的環境

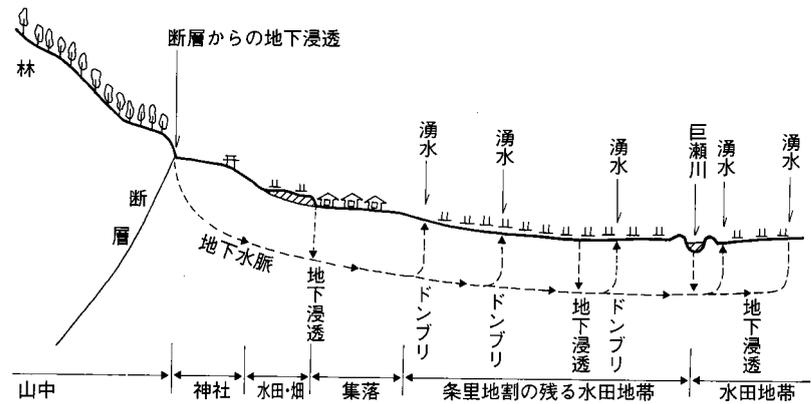
**遺跡分布図から分かること** 第1図に、日詰遺跡の周辺に分布する弥生時代～古代の遺跡を示した。これを見ると、非常に特徴的な分布を示していることが分かる。つまり、遺跡の分布は大きく筑後川よりの一帯と耳納山麓の一帯に帯状に広がっており、その間にはほとんど遺跡が認められないのである。両者にはさまれた市街地部分や扇状地の中腹では発掘調査があまり進んでいないのに対し、耳納山麓部では古くから群集墳の存在が知られ、また筑後川寄りでは圃場整備や道路の建設等の大規模開発が進行して発掘調査が多く行われたという、人為的な要因も影響しているのであろうが、



第2図 耳納山麓の条里地割と筑後川氾濫原中の埋没河川 (1948年米軍撮影)

それだけではなく、先述の平野の地形的環境が強く影響しているものと考えられる。

**水田開発の歴史** まず、筑後川よりの一帯は、東西に細長く展開する自然堤防上や、日詰遺跡のように扇状地の端部に遺跡が多くみられる。これは、いまだ大規模な河川の制御や労働力の結集による用水施設などの建設が行われなかった古代までの段階では、湧水に恵まれて水田と



第3図 浮羽地域の南北地形断面模式図  
(坂本1996より抜粋、一部改変)

しての開発が比較的やさしかった、埋没河川などの低地や、扇状地端部や段丘直下の湿地帯などが優先して利用され、この付近で比較的地盤の安定した、自然堤防上や扇状地・段丘の端部などに集落が営まれたことをよく示すものと考えられる。また、耳納山麓部でも同様に、せまい谷水田などの開発が行われたために、この付近に集落が多く認められるのであろう。

一方、耳納山麓から自然堤防帯までの間に形成された扇状地帯では、大規模な労働力の結集が可能になる古代以降、条里施行による大規模な耕地の開発が進んだものと考えられている<sup>(6)</sup>。この条里地割は現在でもJR久大本線の南北に広く認められる(第2図)。条里制施行の対象となった扇状地帯は、耳納山麓から地下にしみこんだ雨水が、ところどころでドンプリと呼ばれる湧水によって地表面に湧出し(第3図)、耳納山麓から流れる地表水とともに、それまでも水田をうるおす用水として活用されていたと考えられる。しかし、この扇状地帯は細かな扇状地形の連続であって、凹凸が多い。また、地盤が扇状地のため、表面水が浸透しやすい地質で、広い面積の灌漑は難しい。このような諸条件を乗り越えて、広域にわたる水田化を行うためには、強い権力により統率された大規模な労働力と、計画的な水路配置を可能にする技術の結集が必要不可欠であったのだろう。また、扇状地より下部の沖積地では、河川の規模が大きく、河床が低いために、河川からの取水による灌漑は容易ではなく、広域にわたる耕地開発が可能になるのはさらにのちの江戸時代以降である。江戸時代になって幕藩体制が確立すると、大名らによる大規模な耕地開発が各地で行われた。筑後川流域でも、袋野堰、大石堰、山田堰、床島堰のいわゆる「筑後川四堰」が江戸初期に整備されて、初めて本格的に筑後川からの取水による灌漑が行われるようになった。田主丸地方では、五庄屋伝承でも著名な大石堰(浮羽町大字高見)の建設以降、ようやく本格的に扇状地端部以北の沖積平野の開発が行われたが、それまで、この低地帯の開発は、弥生時代以来の湧水に恵まれたわずかな土地の利用にとどまり、大半は荒蕪地として放置されていたものと考えられる(野田他編1957)。

**土地利用の特徴** このような土地利用のあり方は、現代にも脈々と受け継がれている。つまり、耳納山麓では、通称「山苞の道(やまつとのみち)」とこれに併行する県道151号線の周辺が古くから「山辺往還」として整備され、集落が営まれている。一方自然堤防帯付近では、低地中の自然堤防上や扇状地端部の段丘上に古くからの集落が多く認められる。特に近世以降、扇状地端部から巨瀬川までの間の帯状の台地の上には、「中道往還」と呼ばれる交通路が発達した。この「中道往還」

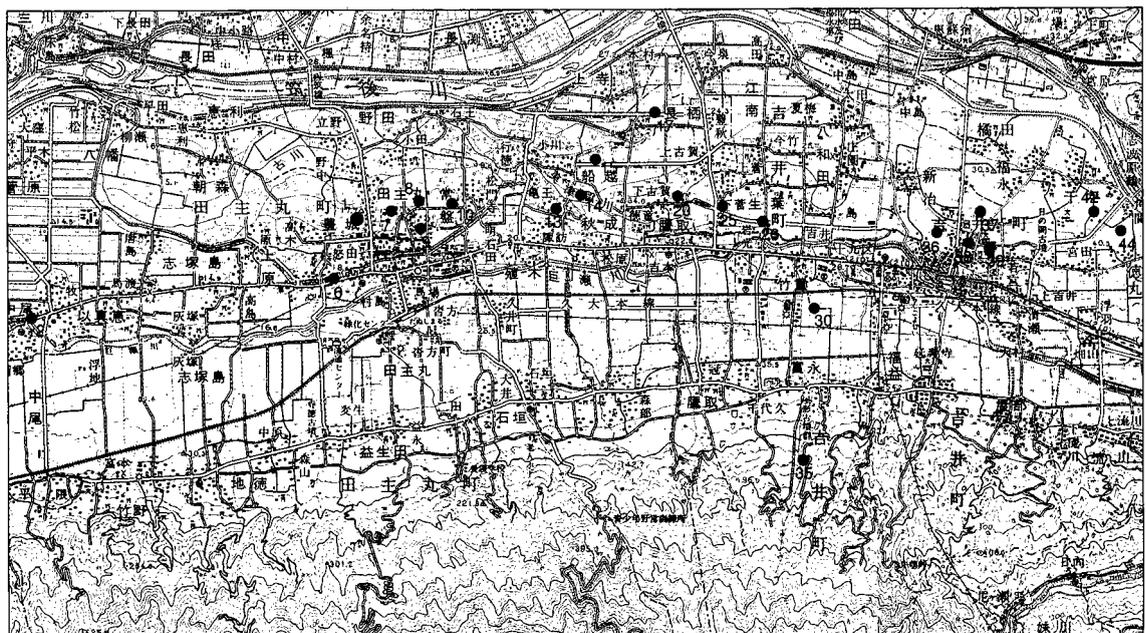
は、久留米と日田とを結ぶ、いわゆる日田往還の一部として、また久留米と大分を結ぶ豊後街道として江戸時代に整備され、田主丸町から吉井町、浮羽町までの間にはこの街道沿いにいくつかの宿場町が栄えた。近代以降、このルート沿いに鉄道や国道が整備されて、現在の田主丸地区の骨格を作ることになった。

耳納山麓では、扇状地の上半部に形作られた水はけのいい傾斜地を利用して、果樹・苗木の栽培が近代以降積極的に取り組まれ、町の基幹産業となった。また、古代以降水田化された扇状地中部～端部や江戸時代以降本格的に開発された沖積低地部は、水田や畑地として利用されて、対岸の朝倉郡と同じく両筑平野の穀倉地帯として現在まで利用され続けている。このように、浮羽地域の土地利用の特徴は、現代に至る歴史をよく反映した特徴のあるものとなっている。

**弥生時代前期の遺跡** 第4図において示したものが、弥生時代の遺跡である。発掘されて時期が判明する資料を中心に、その動態を概観したい。

弥生時代における最も初期の資料は、法華原遺跡における刻目突帯文土器の採集である<sup>6)</sup>。法華原遺跡は耳納山麓の急傾斜地にあり、初期水田農耕が可能な土地は近辺にはせまい谷部しかない。おそらく、甘木市高原遺跡と同様に、在地の縄文集団が土器様式のみを取り入れたものと考えられ、水田農耕の本格的な採用には至っていない可能性が高い。これに対して、船越高原A遺跡・鷹取五反田遺跡では、突帯文土器と板付I式土器が包含層などから検出されている<sup>7)</sup>。資料がわずかであり、遺構を伴わないこと、後続する時期の資料が認められないことなどから、水田農耕を採用した集団が、集落進出を試みたものの、定着しなかったものと理解でき、弥生集団の地域開発におけるフロンティア的存在<sup>8)</sup>とみることができる。

この地域において、主たる生業として水田農耕が本格的に採用されたことを示す最も初出の資料は、日詰遺跡に隣接する大的遺跡の集落である<sup>9)</sup>。日詰遺跡と同様、扇状地端部と沖積低地との境に形成された舌状の段丘先端部に立地する。遺跡に隣接した低地部からは、時代こそやや新しいも



第4図 弥生時代の遺跡分布 (1/100,000) (番号は第1図と共通)

の弥生時代後期～古墳時代の所産と考えられる水田跡が発掘されており、この集落が水田農耕を採用した集団であったことは確実である。大的遺跡からは、円形住居を主体とする遺構群が検出され、口縁部に全面刻みを施す甕や頸・胴部間に沈線を施した壺が発掘されている。いずれも古い段階の要素を残すものの、全体的なプロポーシオンから判断して前期後半の中でもやや古い段階に位置づけられよう。この集落は、その後前期末～中期初頭まで継続して営まれ、この時期を境に姿を消す。また、大的遺跡の東南の段丘上に立地する水分遺跡でも、前期後半～中期初頭の遺構が出土しており<sup>(10)</sup>、日詰遺跡よりやや遅れて進出して中期初頭まで継続する遺跡と理解できる。

日詰遺跡にわずかに遅れて出現する遺跡に、大碓遺跡がある<sup>(11)</sup>。大碓遺跡は、美津留川の南側、巨瀬川の北側にあり、両河川にはさまれた沖積微高地上に立地する集落である。美津留川はこの場所では古筑後川の埋没河川上を流れており、この微高地は古筑後川と巨瀬川により形成された自然堤防と考えられる。おそらく隣接する埋没河川などを可耕地として利用しながら、安定した自然堤防上に居を構えたものであろう。集落は前期後半でもやや新しい段階までには出現し、円形住居を主体とする遺構群により構成される。前期末～中期初頭まで継続して営まれるが、中期前半までに集落は基本的に廃絶する。中期前半には甕棺墓が数基営まれているが、中期中葉までには完全に放棄される。大碓遺跡では、前期後半から中期初頭にかけて、何条かの大規模な溝が掘削されている。調査区に限られるため溝がどのようにめぐるとかを調べることはできないが、おそらく前期後半から中期初頭にかけて繰り返し環濠が掘削された、継続的な環濠集落であると考えられる。この地域において確認されている前期の環濠集落は現在までのところ大碓遺跡のみである。前期段階の地域開発拠点として機能したと考えられ、重要な遺跡である。また、これらとほぼ同時期の遺跡として、西郷天神免遺跡<sup>(12)</sup>、豊城中ツプロ遺跡<sup>(13)</sup>などが挙げられる。いずれも前期後半～中期初頭までの資料が出土しており、この地域における集落経営の一つのパターンとして注目される。

**弥生時代中期の遺跡** これらの遺跡が断絶する前期末～中期初頭に、これらと入れ替わるようにして成立する遺跡群がある。大的遺跡の周辺では、同じ大的遺跡内ではあるが、上述の水田が検出された谷状地形をはさんで東に隣接する舌状の段丘端部に、中期初頭～前半期の土坑がいくつか検出されている<sup>(14)</sup>。調査区が微高地の西側端部までに限られており、集落はおそらく東側の微高地中心部にかけて広がるものと考えられ、今後の調査が期待される。

大碓遺跡の近辺では、東に2 kmほど行った同じ浮羽バイパス関連の調査により、仁右衛門畑遺跡という集落が確認された<sup>(15)</sup>。大碓遺跡が断絶する中期初頭に出現し、中期前半まで継続する比較的規模の大きな集落であるが、中期中葉に断絶する。仁右衛門畑遺跡は、古筑後川の埋没河川（現美津留川流路付近）が大きく北に湾曲する部分の南側にあり、流路から遺構面までは約2～3 mほどの比高差を有する舌状段丘上に位置するため、集落立地としてはかなり安定度の高い土地を選択している点が注目される。この遺跡からは、住居跡等の遺構がかなりまとまって検出されたほか、集落を囲むように伸びる溝状遺構も確認されている。幅や深さなどの規模が小さいために環濠と考えるにはやや抵抗があるが、削平されている可能性も高く、環濠集落の候補としてあげておきたい。中期前半期における拠点集落であろう。

一方、大碓遺跡の西側に約2 kmほど行った船越一ノ上遺跡でも、まとまった資料がみられる<sup>(16)</sup>。この遺跡でも、やはり中期初頭に集落が進出して、中期中葉まで継続して営まれており、この時期の特徴的な集落動態と理解される。竪穴住居跡と甕棺墓がセットで確認されており、貴重な調査事

例といえよう。なお、仁右衛門畑遺跡では、この時期の住居跡の平面形態はほとんどが円形か長楕円形を呈するが、船越一ノ上遺跡ではむしろ円形よりも方・長方形の住居跡が多くみられる。この状況から考えて、この地域において円形住居から方形住居へ移行するのは、おおよそ中期前半～中葉と考えられるが、遺跡によってやや差異が認められるようであり、今後の検討が必要であろう。このほかに、千代久遺跡<sup>(17)</sup>でこの時期の集落を、秋成甕王遺跡<sup>(18)</sup>、広園地区遺跡<sup>(19)</sup>などでこの時期の甕棺墓群を検出している。

これらの遺跡が断絶するのと入れ替わるように、中期中葉に進出する集落として、船越高原A遺跡・鷹取五反田遺跡・堂畑遺跡をあげることができる。船越高原A遺跡は、船越一ノ上遺跡と大碓遺跡のほぼ中間地点に立地する。美津留川は、仁右衛門畑遺跡の付近で大きく北に湾曲して、大碓遺跡の北側を西に向かって流れ下るが、船越高原A遺跡の付近で急に南側に向きを変えて、平行する巨瀬川に接近する。船越高原A遺跡は、この大きく湾曲した美津留川の北側に立地し、美津留川の流れる低地（古筑後川の埋没河川）との比高差は1mほどをはかる自然堤防上に位置する。遺跡からは、方・長方形を呈する住居跡が43棟検出されたほか、多数の土坑や溝が検出された。特に、13号溝は、規模が大きく、一度掘り直されるなどの特徴を持つ中期後半の溝であり、環濠となる可能性も考えられるが、住居跡が溝の外まで広がっていることや、溝の平面形態が不明であることなどから、環濠集落と断定することはできない。ただ、遺跡の規模や遺物量などから考えて、この時期の拠点的な集落であることは確実と考えられる。中期末まで存続するが、後期初頭までにはほぼ断絶している。

鷹取五反田遺跡は、大碓遺跡の西に隣接しており、同一の自然堤防上に中期中葉に進出する集落である<sup>(20)</sup>。遺跡からは、47棟の住居跡が確認された。住居跡の形態は方・長方形を中心とするが、まれに円形住居が認められ、中期中葉前後までは円形住居が残存していた可能性が高い。また、この遺跡からは同時期の甕棺墓群も検出されている。居住遺構と埋葬遺構がセットとなって検出された事例は周辺では限られ、良好な集落資料として注目される。さて、鷹取五反田遺跡は、後期前半まで継続して集落が営まれる点が大きな特徴である。この点は後期の遺跡の中で再度触れたい。

堂畑遺跡は、仁右衛門畑遺跡と美津留川をはさんだ対岸の沖積低地上の微高地に展開する<sup>(21)</sup>。遺跡は、美津留川ともう一つの古筑後川の埋没河川にはさまれた形で東西に細長く展開する自然堤防上に営まれ、中期中葉～後期初頭の多くの遺構が検出された。集落の中心部が古墳時代～古代の遺構や、後世の耕作などによって削平され、失われたために、弥生時代に属する遺構数はさほど多くないが、地形に沿ってゆるやかに湾曲しながら併行して東西に延びる溝が二条確認された。中期末～後期初頭の二重環濠と考えられ、この時期の環濠集落の事例として貴重であり、注目される。

このほかに、断片的ではあるがこの時期の資料が確認された遺跡として、生葉地区遺跡<sup>(22)</sup>などが挙げられる。これらの資料はいずれも中期末～後期初頭で断絶しており、この地域でも玄界灘沿岸域などと同様にこの時期に集落動態の大きな画期があったことが確認される<sup>(23)</sup>。

**弥生時代後期の遺跡** さて、このように、浮羽地域では中期末～後期初頭にほとんどの遺跡が消滅してしまう。その後の集落資料はどのようなになっているのだろうか。

上述したように、鷹取五反田遺跡は後期前半の資料が確認できる数少ない遺跡である。102号住居跡から、この時期の良好な一括資料が出土した。墓域にも、箱式石棺墓や土坑墓といった後期の墓制が認められる。この遺跡は、他の中期集落とは異なり、後期前半まで継続して営まれたものと

考えられる。この地域における後期前半期の集落はほぼ鷹取五反田遺跡だけに限られ、貴重な事例である。ただし、遺構数は中期と比べて急減しており、後期中葉以降への継続性も認められない。

吉井中学校遺跡では、後期前半以降の集落が確認されている<sup>(24)</sup>が、土器を実見した限り、高三瀦式併行期の土器は少なく、いずれも高三瀦式（新相）併行～下大隈式併行とみられ、後期前半というよりは中葉に主体があるようである。

後期中葉前後になると、いくつかの遺跡で資料が確認される。旧吉井町（吉井地域）では、上述した吉井中学校遺跡から、方形の竪穴住居跡が47棟報告された。出土した土器を実見する限りでは、後期中葉から末にかけて集落が存続したようである。この遺跡は、美津留川と巨瀬川にはさまれた沖積地内の高地に立地する。河川にはさまれていることから、この高地は自然堤防に由来するものである可能性もあるが、この付近から南側にかけては耳納山麓から伸びる扇状地がよく発達していること、近接する広園遺跡では地山のかなり浅い部分に礫層がみられたこと、付近の地形が美津留川にむかって段丘状に落ち込んでいることなどを勘案すれば、これが扇状地の端部に当たる可能性も考えられよう。広園遺跡では、箱式石棺墓が数基確認された。出土土器は中期前半が主体を占めるが、これは隣接するこの時期の甕棺墓からの流入と考えられ、吉井中学校遺跡の後期集落に対応する墓域である可能性も考えられる。

吉井中学校遺跡から東に1 kmのところには塚堂遺跡がある<sup>(25)</sup>。塚堂遺跡は、古筑後川の南側、美津留川の北側に形成された自然堤防上に立地する集落である。吉井中学校遺跡とほぼ同時期の後期中葉に進出する。古墳時代以降の削平が著しいため、弥生時代の様相はやや判然としない部分があるが、出土土器から判断すれば、後期末葉以降古墳時代前期まで継続して営まれたと考えられる。

旧田主丸町（田主丸地域）では、水分遺跡でこの時期の資料が確認される。後期中葉～末葉の土器が出土しており、現在田主丸小学校がある台地上にこの時期の集落が存在した可能性が高い。この台地の裾部を浮羽バイパス関連で調査しており（松門寺A遺跡<sup>(26)</sup>、玉田遺跡<sup>(27)</sup>）、これらの遺跡からも、台地上から転落したと考えられる後期土器が多量に検出されている。したがって、水分遺跡はかなり大規模な集落であった可能性が高く、この時期の拠点集落の候補と考えられる。

このほか、旧浮羽町内（浮羽地域）では、浮羽町日永遺跡がほぼ同時期の集落である<sup>(28)</sup>。この遺跡からは、広型銅矛を埋納した土坑が発見されて話題を呼んだ。集落の継続時期は、後期中葉にほぼ限られており、銅矛の埋納と合わせてこの時期の社会動態を示す良い資料となるものと思われる。この点から注目されるのが、対岸の杷木町にある西ノ迫遺跡である<sup>(29)</sup>。この遺跡は、平地との比高差約90mをはかる、北部九州にはまれな高地性集落であり、集落が環濠に囲まれていること、入り口付近に投石と考えられる礫が集積してあったこと、出土遺物が極めて少ないことなどから、弥生時代後期後葉に一時的に建設された、見張り場的な駐屯地であった可能性が高い。筑後川にそってさかのぼった大分県日田市白岩遺跡でも同様の状況が確認されており<sup>(30)</sup>、この時期に一時的に弥生社会が緊張したことをよく示すものと考えられる。日永遺跡における銅矛の埋納と集落の断絶は、この社会的な緊張状態と密接に関係する可能性が高いことを指摘しておきたい。

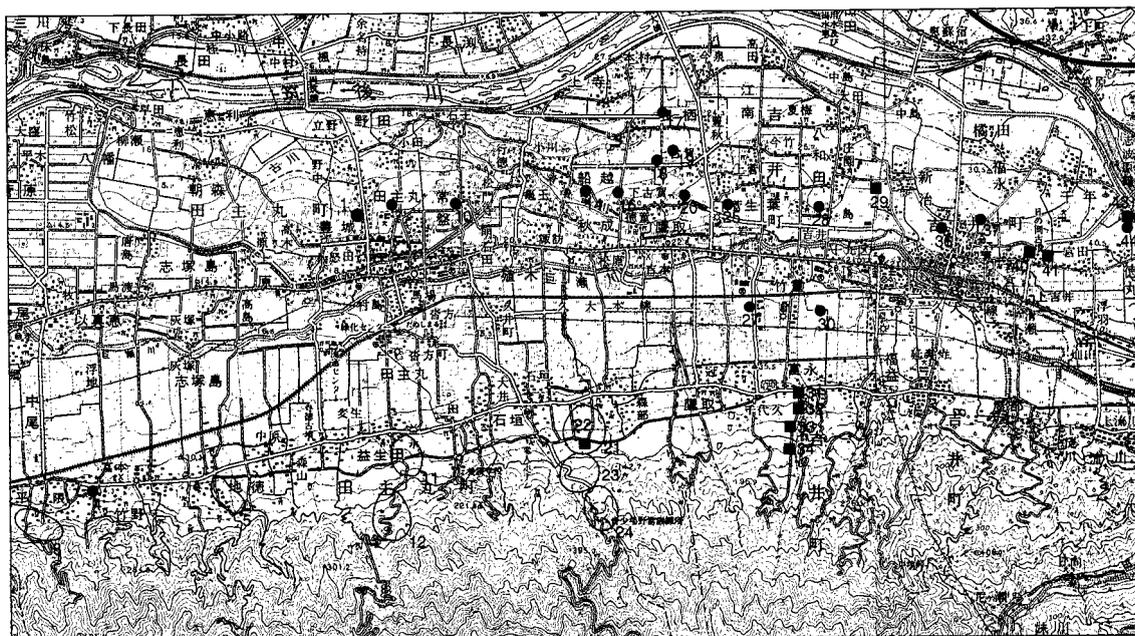
日永遺跡と同様に、後期中葉に一時的に小規模な集落が営まれる例として、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡を挙げることができる。いずれも数棟の住居跡が確認されているが、その後には継続しない。この時期の特徴的な集落動態であり、注意する必要があるだろう。このほかの後期の資料としては、吉井穀蘇遺跡<sup>(31)</sup>で後期中葉の資料が、船越二ノ上遺跡<sup>(32)</sup>、船越高原遺跡、千年小森遺跡<sup>(33)</sup>などで後

期末葉の資料が断片的ながら確認されている。

古墳時代前期の遺跡 古墳時代～古代の遺跡を示したものが第5図である。これらについても、発掘資料を中心に、動態を概観したい。

浮羽地域における古墳時代前期の集落資料は、弥生時代後期末からの継続性が認められない点特徴的である。日詰遺跡の周辺では、前期前半の集落として大的遺跡、千代久遺跡、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡などを挙げるができる。これらはいずれも弥生時代後期末の集落が確認されておらず、庄内式土器も認められない。すなわち、この地域では、古墳時代開始より一段階遅れた前期前半期に、小規模な集落が成立するものと考えられる。これらの小規模な集落は、前期中葉までにはその役割をおえ、消滅していく。これらと入れ替わるようにして、殖木地区遺跡群A地点<sup>(34)</sup>、船越二ノ上遺跡、船越高原遺跡、鷹取五反田遺跡、吉井穀蘇遺跡などが出現するが、これらもやはり小規模な集落であり、中期までにはその役割を終えて消滅していく。このほか、前期の集落として富永正地遺跡<sup>(35)</sup>、長栖高嶋遺跡<sup>(36)</sup>などが挙げられる。詳細は不明であるが、小規模な集落と考えられる。このような前期段階の状況は、この地域で明らかな前期の首長墓が確認されていない<sup>(37)</sup>ことと関連する可能性が高く、総じて貧弱な印象を免れ得ない。ただし、地域開発は前段階よりも進化したと見られ、それまで遺跡の確認されていなかった巨瀬川南岸の扇状地端部に集落が進出している(殖木遺跡群、吉井穀蘇遺跡)。徐々に居住空間が拡張されたことの証であろう。

こうした中で注目されるのが、塚堂遺跡である。塚堂遺跡では、弥生時代後期中葉から一定規模の集落が営まれているが、この集落は古墳時代前期になっても継続して営まれており、前期～中期を通じて一定規模の集落を維持するようである。発掘面積が浮羽バイパスの路線幅に限られており、遺跡自体も古墳時代中期の前方後円墳である塚堂古墳によって破壊されているためにその全容を知ることができない点が惜しまれるが、おそらくは古墳時代前～中期において浮羽郡内では数少ない拠点的な集落として機能したものと考えられ、注目される。また、生葉地区遺跡群では、3重に巡



第5図 古墳時代～奈良時代の遺跡分布 (1/100,000) (番号は第1図と共通)

る古墳時代前期の溝が検出されている。墳丘が削平された古墳であるとされているが、古墳の周溝にしては何重にも巡る点や形態などに若干の違和感があり、むしろ集落付帯施設の可能性もあるのではないだろうか。今後の類例の蓄積が望まれる。

**古墳時代中期の遺跡** 古墳時代中期の集落としては、先ほど挙げた塚堂遺跡のほか、鷹取五反田遺跡、船越高原遺跡、船越二ノ上遺跡、松門寺A遺跡、仁右衛門畑遺跡、生葉地区遺跡、堂畑遺跡、大的遺跡などが確認されている。これらの多くは中期前半～中葉に進出するものであり、吉井町に所在する首長墳系列である若宮古墳群の成立と関わりが深いと考えられる。

中でも特に注目されるのは、塚堂遺跡である。塚堂遺跡からは古墳時代中期の竪穴住居群が見つかったが、このうち中期前半（5世紀前半）の竪穴住居にカマドが付設された例が報告されている。カマドの採用はこれまでの浮羽バイパス関連の調査報告の中でもたびたびふれられているように、この地域では5世紀中葉以降が一般的であり、普及期のカマドの例として重要であるとともに、塚堂遺跡の拠点性を傍証するものとして注目されよう。おそらく、塚堂集落の居住集団が若宮古墳群、特に月岡・塚堂両古墳の造営に主導的な役割を果たしていたのであろう。

若宮古墳群は、月岡古墳<sup>(38)</sup>、塚堂古墳<sup>(39)</sup>、日岡古墳<sup>(40)</sup>の順番で5世紀中頃から6世紀前半の間に連続して造営された前方後円墳群であり、いずれも全長90m前後を誇る規模を有するばかりでなく、武具や馬具などの豪華な副葬品が出土し、日岡古墳の石室の壁には華麗な装飾が施されるなど、筑紫平野屈指の古墳群であるといつてよい。浮羽郡を統括する首長墳系列であったと見たいが、隣接する若宮町の朝田古墳群という古墳時代後期を主体とする首長墳系列との併存を指摘する意見もあり<sup>(41)</sup>、検討が必要であろう。ここでは、集落動態に注目して検討を行いたい。

この地域の古墳時代中期集落は、中期中葉がそのピークであって、後期まで継続する集落に乏しい。先掲の各遺跡群のうち、船越二ノ上遺跡、堂畑遺跡、塚堂遺跡を除いては後期に継続しておらず、なおかつ後期へと継続すると見られがちなこれらの遺跡も後期前半期の遺構が検出されていない。この結果、この地域における後期前半期の集落は、浮羽地域の沖出遺跡<sup>(42)</sup>、日永遺跡にほぼ限られることになる。これは、塚堂古墳の築造を一つの画期として吉井地域の集落が一度断絶し、東の浮羽地域に移動する可能性を示しているものと理解できる。そして、あたかもこの集落の移動を踏まえるかのように、浮羽地域の中心部に朝田古墳群の造営が開始されるのである。

朝田墳墓群は先述のように全長100m前後と推定される法正寺古墳を築造の端緒と考えることができる。その後5世紀前半には西隈上古墳<sup>(43)</sup>が築造されるが、これらの前後をつなぐ首長墳は確定しておらず、西隈上古墳も径24mほどの円墳であり、屋次郎丸古墳が築造される6世紀前葉まではやや衰退した観を呈する。ところが、6世紀前葉から7世紀前半にかけて、全長約50mの前方後円墳である屋次郎丸古墳、径30mの円墳で装飾を持つ塚花塚古墳、全長約70mで石室に装飾を持つ前方後円墳である重定古墳<sup>(44)</sup>、径約32mで巨大な石室を持つ円墳である楠名古墳<sup>(45)</sup>が連続して造営され、朝田墳墓群における造墓活動が活発化するのである。朝田墳墓群において造墓が活発化する6世紀前葉が、若宮古墳群の最後の首長墳である日岡古墳の造営とほぼ同時期で、なおかつ先述した集落の動態において田主丸・吉井地域で集落が一時的に断絶し、浮羽地域へと移動する、古墳時代中期末～後期初頭前後に当たることは、この時期一時的に旧浮羽郡内の勢力図に大きな揺らぎがあったことを示しているものと考えられ、極めて興味深い。

**古墳時代後期の遺跡** しかしながら、古墳時代後期における首長墳（系列）は、朝田墳墓群のみで

はない。田主丸地域では、全長100mを越える前方後円墳である田主丸大塚古墳が6世紀後半～末に位置づけられており、また吉井地域では若宮古墳群でも塚堂古墳に隣接して最近、径40mをはかる6世紀後半頃の円墳が確認された<sup>(46)</sup>。集落においてもこの動向は支持される。中期末～後期初頭に一時的に衰退した田主丸・吉井地域に、再び集落が展開するのである。

この時期に展開する集落として、船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡<sup>(47)</sup>、船越高原A遺跡、鷹取五反田遺跡、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡などがある。これらの集落は、その多くが後期前半（6世紀初頭）に出現し、奈良時代初頭（6世紀末～7世紀初頭）前後まで継続する点で、非常に共通性の高い一群である。また、比較的大規模な集落を形成する点もこれまでの集落とは異なる点として注目される。前段階における集落の様相とは大きく異なっており、旧浮羽群内の勢力が再び勢いを増していることが分かる。

この状況は、群集墳の出現により明確に現れている。旧浮羽群内、特に耳納山麓部は群集墳が集中することで著名である。昭和40年代以降、耳納山麓部の開墾（果樹園化）が進み、これらの群集墳のうち比較的低地にあるものの多くが破壊されたというが、江戸時代末期の記録によれば、旧田主丸町内だけで1000基を超える群集墳があったとされ<sup>(48)</sup>、現在でも多くの群集墳が確認される。これらのうちこれまでに善院古墳群<sup>(49)</sup>、益永古墳群<sup>(50)</sup>、益生田古墳群<sup>(51)</sup>、大塚古墳群<sup>(52)</sup>、大塚清長橋古墳群<sup>(53)</sup>、平原古墳群<sup>(54)</sup>などが調査されているが、これらの群集墳の多くが、6世紀前半代までに成立し、7世紀後半前後まで造墓・追葬を行っていたと考えられている。さらにこの時期は、このような群集墳の中に装飾古墳が多く作られる点も特徴的である<sup>(55)</sup>。このような古墳築造の活発化は、集落の動態と整合しており、この地域の地域集団の活発化を示すものと見て間違いないだろう。

つまり、6世紀前半から中葉にかけて、若宮古墳群を造営していた吉井地域の集団が没落するが、これは極めて一時的な現象であり、むしろ隣接する田主丸・浮羽地域の地域集団が急速に力をつけて、吉井地域の集団と肩を並べるようになったため、相対的に吉井地域の集団が埋没したものと理解することができるのではないだろうか。そしてこの現象はおそらく、各地における群集墳の造営の流行が示すように、全国的な流れの中で理解することができるのではないだろうか。

**奈良時代の遺跡** 7世紀中葉～後半前後を境として、再び旧浮羽群内から集落が激減する。再びこの地域に集落が出現するのは7世紀末～8世紀初頭前後であり、この時期の集落として船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡、仁右衛門畑遺跡、生葉地区遺跡、竹野小学校遺跡<sup>(56)</sup>などが、やや遅れて進出する集落として船越高原遺跡、大碓遺跡、鷹取五反田遺跡、堂畑遺跡などが挙げられる。竹野小学校遺跡は耳納山麓部に位置しているが、この時期に山麓部の扇状地の開発が進行したと考えられている<sup>(57)</sup>ことから、この集落が条里制施行と極めて密接な関係を持っていた可能性が高く、この地域の開発の時期を示す資料として重要であろう。また、この時期の集落は堅穴住居が大規模に密集しており、集落規模の大きいものが多い。この点も条里施行等大規模な水田開発の基礎的条件となつたと考えられ、興味深い。また、この時期には南北・東西方向に直線的に伸びる大溝が集落近辺から確認されることも多く、これらの溝の性格等の位置付けについては上記の点を踏まえながら今後分析を進める必要があるだろう。日誌遺跡からもこの時期の遺構が多く検出されているが、これらについては報文中で詳述することとし、この項を閉じることとしたい。

## 註

- (1) 今井涼子編，2003：大的遺跡，Ⅰ、日詰遺跡，Ⅰ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，19。福岡県教育委員会。
- (2) 小西高昭，1996：生活と歴史の舞台としての風土。田主丸町史編集委員会編：田主丸町史，第二巻（ムラとムラびと、上）。田主丸町。
- (3) 註（2）文献。
- (4) 註（1）文献。
- (5) 松村一良，1988：条里地名の再検討－筑後国竹野郡の条里地名を中心にして－。条里制研究，4。  
田中正日子，1987：筑後古代史の展開。田主丸郷土史研究，創刊号。田主丸町郷土会。
- (6) 片岡宏二，1996：農耕の始まりとその文化。田主丸町史編集委員会編：田主丸町史，第二巻（ムラとムラびと、上）。田主丸町。
- (7) 江島伸彦編，2000：船越高原遺跡。田主丸町文化財報告書，13。田主丸町教育委員会。  
齋部麻矢編，2000：船越高原A遺跡，Ⅰ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，13。福岡県教育委員会。  
進村真之編，2001：船越高原A遺跡，Ⅱ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，15。福岡県教育委員会。  
進村真之編，2002：船越高原A遺跡，Ⅲ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，16。福岡県教育委員会。
- (8) 小澤佳憲，2000：集落動態からみた弥生時代前半期の社会－玄界灘沿岸域を対象として－。古文化談叢，45。九州古文化研究会。
- (9) 註（1）文献、  
今井涼子編，2004：大的遺跡，Ⅱ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，21。福岡県教育委員会。
- (10) 栗原和彦編，1985。田主丸古墳群。田主丸町文化財調査報告書，2。田主丸町教育委員会。
- (11) 水ノ江和同編，1994：境町・大碓遺跡。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，8。福岡県教育委員会。
- (12) 丸林禎彦編，2001：西郷西天神免遺跡。田主丸町文化財調査報告書，14。田主丸町教育委員会。
- (13) 丸林禎彦編，1998：豊城中ツプロ遺跡。田主丸町文化財調査報告書，10。田主丸町教育委員会。
- (14) 註（9）文献。
- (15) 吉田東明編，2000：仁右衛門畑遺跡，Ⅰ（古墳時代以降編）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，12。福岡県教育委員会。  
吉田東明編，2001：仁右衛門畑遺跡，Ⅱ（弥生時代編）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，14。福岡県教育委員会。
- (16) 丸林禎彦編，1996：船越一ノ上遺跡。田主丸町文化財調査報告書，8。田主丸町教育委員会。
- (17) 秀島龍男編，1993：千代久遺跡，Ⅰ。田主丸町文化財調査報告書，3。田主丸町教育委員会。  
秀島龍男編，1994：千代久遺跡，Ⅱ。田主丸町文化財調査報告書，4。田主丸町教育委員会。
- (18) 註（10）文献。
- (19) 江島尚子編，2002：広園地区遺跡。吉井町文化財調査報告書，16。吉井町教育委員会。
- (20) 水ノ江和同編，1998：鷹取五反田遺跡，Ⅰ、稲崎A・B遺跡。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，9。福岡県教育委員会。  
水ノ江和同編，1999：鷹取五反田遺跡，Ⅱ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，10。福岡県教育委員会。
- (21) 重藤輝行編，2002：堂畑遺跡，Ⅰ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，17。福岡県教育委員会。  
大庭孝夫編，2004：堂畑遺跡，Ⅱ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，20。福岡県教育委員会。
- (22) 平川祐介編，1999：生葉地区遺跡群，Ⅱ。吉井町文化財調査報告書，11。吉井町教育委員会。  
平川祐介編，2000：生葉地区遺跡群，Ⅲ。吉井町文化財調査報告書，12。吉井町教育委員会。
- (23) 小澤佳憲，2000。弥生集落の動態と画期－福岡県春日丘陵域を対象として－。古文化談叢，44。九州古文化研究会。
- (24) 平川祐介編，2002：吉井中学校遺跡（遺構編）。吉井町文化財調査報告書，15。吉井町教育委員会。
- (25) 馬田弘稔編，1983：塚堂遺跡，Ⅰ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，1。福岡県教育委員会。  
副島邦弘編，1984：塚堂遺跡，Ⅱ（A地区）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，2。福岡県教育委員会。  
佐々木隆彦編，1984：塚堂遺跡，Ⅲ（E地区）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，3。福岡県教育委員会。  
馬田弘稔編，1985：塚堂遺跡，Ⅳ（D地区）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，4。福岡県教育委員会。  
馬田弘稔編，1986：塚堂遺跡，Ⅴ（E地区）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，5。福岡県教育委員会。
- (26) 今井涼子編，2002：松門寺A遺跡。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，18。福岡県教育委員会。
- (27) 福岡県教育委員会により2003年度に調査（2005年度に報告予定）。

- (28) 緒方泉編, 1993: 日永遺跡, I. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 6. 福岡県教育委員会.  
緒方泉編, 1994: 日永遺跡, II. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 7. 福岡県教育委員会.
- (29) 中間研志編, 1993: 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告, 25. 福岡県教育委員会.
- (30) 大分県教育委員会編, 1997: 佐寺横穴墓群、大迫遺跡、白岩遺跡、下綾垣遺跡. 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書, 6. 大分県教育委員会.
- (31) 平川祐介編, 1998: 吉井大手木遺跡・吉井穀蘇遺跡・富永横枕遺跡. 吉井町文化財調査報告書, 10. 吉井町教育委員会.
- (32) 吉田東明編, 1999: 船越二ノ上遺跡. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 11. 福岡県教育委員会.
- (33) 平川祐介編, 2001: 千年地区遺跡群 (千年小森遺跡・千年西田遺跡). 吉井町文化財調査報告書, 13. 吉井町教育委員会.
- (34) 丸林禎彦編, 1996: 殖木地区遺跡群 A 地点・B 地点、鷹取一条遺跡. 田主丸町文化財調査報告書, 5. 田主丸町教育委員会.
- (35) 平川祐介編, 1997: 富永正地遺跡. 吉井町文化財調査報告書, 9. 吉井町教育委員会.
- (36) 平川祐介編, 1996: 長栖高嶋遺跡. 吉井町文化財調査報告書, 8. 吉井町教育委員会.
- (37) ただし、うきは市 (浮羽町) 法正寺古墳は前期古墳の可能性が示唆されている。
- (38) 平川祐介編, 1986: 月の岡古墳. 吉井町文化財調査報告書, 3. 吉井町教育委員会.  
児玉真一編, 1989: 若宮古墳群, I. 吉井町文化財調査報告書, 4. 吉井町教育委員会.  
児玉真一編, 1990: 若宮古墳群, II. 吉井町文化財調査報告書, 6. 吉井町教育委員会.
- (39) 註 (38) 文献、  
石山勲 (小川誠嗣編), 1982: 塚堂古墳. 吉井町文化財調査報告書, 1. 吉井町教育委員会.  
馬田弘稔編, 1983: 塚堂遺跡, I. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 1. 福岡県教育委員会.
- (40) 註 (38) 文献。
- (41) 重藤輝行, 2000: 仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年. 吉田東明編: 仁右衛門畑遺跡, I (古墳時代以降編). 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 12. 福岡県教育委員会.
- (42) 佐土原逸男編, 1987: 沖出遺跡, 1. 浮羽町文化財調査報告書, 3. 浮羽町教育委員会.
- (43) 児玉真一編, 1986: 西隈上古墳・楠名古墳. 浮羽町文化財調査報告書, 1. 浮羽町教育委員会.
- (44) 註 (44) 文献、  
児玉真一編, 1987: 楠名古墳. 浮羽町文化財調査報告書, 2. 浮羽町教育委員会.
- (45) 註 (44) 文献。
- (46) 吉井町教育委員会により教示。
- (47) 江島伸彦編, 1997: 船越宮ノ前遺跡, I. 田主丸町文化財調査報告書, 9. 田主丸町教育委員会.  
江島伸彦編, 1999: 船越宮ノ前遺跡, II. 田主丸町文化財調査報告書, 11. 田主丸町教育委員会.
- (48) 丸林禎彦編, 2001: 田主丸大塚古墳. 田主丸町文化財調査報告書, 15. 田主丸町教育委員会.
- (49) 江島伸彦編, 2002: 善院古墳群. 田主丸町文化財調査報告書, 19. 田主丸町教育委員会.  
江島伸彦編, 2003: 善院古墳群, II. 田主丸町文化財調査報告書, 21. 田主丸町教育委員会.
- (50) 栗原和彦編, 1984: 田主丸古墳群. 田主丸町文化財調査報告書, 1. 田主丸町教育委員会.
- (51) 註 (50) 文献。
- (52) 江島伸彦編, 2004: 大塚古墳群, I. 田主丸町文化財調査報告書, 24. 田主丸町教育委員会.  
註 (10)・(50) 文献、田主丸町教育委員会により教示。
- (53) 丸林禎彦編, 2003: 清長橋古墳群. 田主丸町文化財調査報告書, 23. 田主丸町教育委員会.
- (54) 註 (10) 文献。
- (55) 吉井町教育委員会編, 1984. 原古墳. 吉井町文化財調査報告書, 2. 吉井町教育委員会.  
赤司善彦編, 1996: 西館古墳. 田主丸町教育委員会.  
江島伸彦編, 2001: 国指定史跡寺徳古墳. 田主丸町文化財調査報告書, 18. 田主丸町教育委員会.  
丸林禎彦編, 2002: 隈 3 号墳. 田主丸町文化財調査報告書, 20. 田主丸町教育委員会.
- (56) 岸本圭編, 2004: 竹野小学校遺跡. 福岡県文化財調査報告書, 188. 福岡県教育委員会.
- (57) 松村一良, 1996: 竹野郡の条里制. 田主丸町史編集委員会編: 田主丸町史, 第二巻 (ムラとムラびと, 上). 田主丸町.

### 第3章 発掘調査の記録

#### 第1節 遺跡の概要と基本層序

**遺跡周囲の微地形** 日詰遺跡は、先述のように、筑後川の埋没河川に隣接する低段丘の先端部に位置する（第6図）。この埋没河川は複雑に分れながら曲流しているが、日詰遺跡の付近で南側に大きく湾入していることが日詰遺跡周囲の字図（今井編2003）や空中写真（巻頭図版）より読み取れる。この湾入の結果、日詰遺跡の立地する低段丘は旧河川に隣接して張り出す岬状の地形を呈する。遺跡はこの旧河川の湾曲の内側に位置しており、旧河川との比高差もあるため、比較的安定した立地といえよう。

日詰遺跡の東側には、同様に扇状地から張り出した舌状の低段丘が何条も伸びている。この結果、一帯には、現在は埋没しているが、緩やかな起伏が繰り返される複雑な地形が広がり、微高地を集落、低地を生産域（水田等）として利用していたことが分かってきた。日詰遺跡の東側には、浅い谷状地形をはさんで大的遺跡の西側集落があり、その東には水田、さらにその東の舌状低台地先端部に大的遺跡の東側集落が確認された。南側の段丘上には、水分遺跡が存在する。このように、低湿地を生産面（水田）として利用し、これに隣接する低台地～段丘崖上を居住域（集落）として利用する土地利用のあり方が、弥生時代から古代にかけて付近では一般的であったと考えられる。日詰遺跡もこのような土地開発形態の中に位置付けることが可能である。



第6図 日詰遺跡周辺地形図（1/3,000）

**遺跡立地の概要** 日詰遺跡は低台地先端部に伸びる舌状の微高地上に立地するため、遺構面は全体的に埋没河川に近い北が低く、台地上に近い南が高い状況を呈する。第1遺構面の標高は南側が17.1mほどをはかるのに対し、北は16.5m程度である。ただしこれは、遺跡の南東部が住宅として利用されていたため削平が少ないのに対し、北西部は水田として利用されていたため削平を受けて50cm以上低くなっていたという調査前の土地利用状況によるところが大きい。そこで、同一面で検出した住居跡の床面レベルをみると、北側の住居跡の床面がおおよそ16.8mに対し、南側がおおよそ16.5m程度であり、第1・2遺構面は遺跡の南端部から北端部にむかっておおよそ30cmほどの傾斜があったものと考えられる。これに対し、第3遺構面は、遺跡の南側は16.7m程度であるが、北側は15m前後と低くなっており、著しく傾斜していたことが読み取れる。したがって、第3遺構面が利用された弥生時代には、北側低地の埋没が進んでおらず、調査地は舌状台地の縁辺部の傾斜面に当たっていたが、その後主に遺跡北側の埋没が進み、第1・2遺構面が利用された奈良時代までには、比較的安定した微高地状を呈していたものと考えられる。また、遺跡の北東部、第I区との境界付近（現在の県道33号線付近）には、南北方向に浅い谷が入っており（北東部落ち込み）、弥生時代以降の埋没は特にこの谷部を中心に認められる。

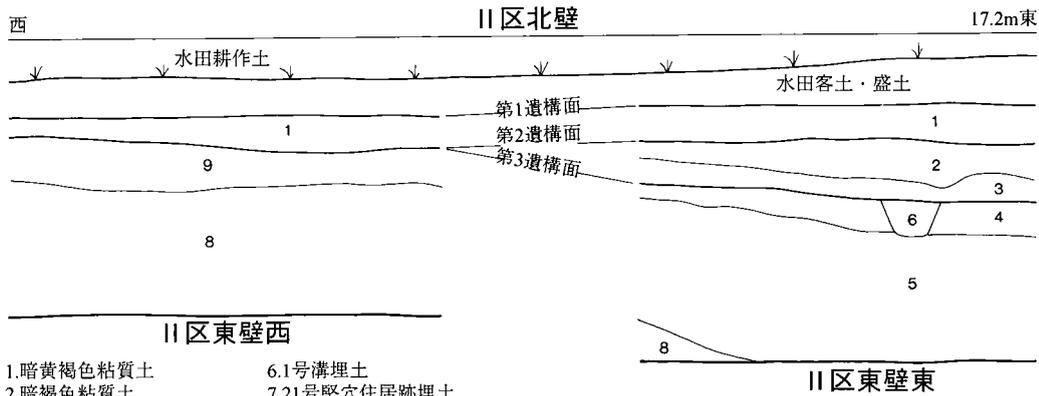
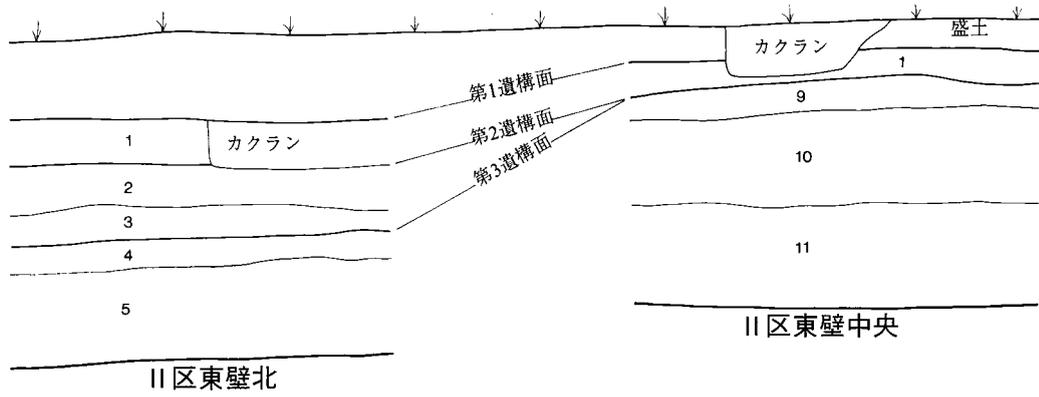
**遺跡の基本層序** 以上のような埋没状況は、遺跡の層序（第7図）からも確認することができる。第1・2遺構面と第3遺構面のあいだには、遺跡の西側・南側では明確な間層を確認することができないが、北東部では、20cm以上の厚さを持つ暗～黒褐色粘質の堆積層が確認される。この第3層は、静かな水中で形成された水成層と考えられ、弥生時代から古墳時代にかけては北側の埋没河川状の低地が沼状の低湿地、おそらくは河川の後背湿地（三日月湖など）であったことを示す。これに対し、遺跡南側の遺構面にはこぶし大程度の礫が散見され、基盤層を下方に掘り進むにしたがって、礫の量と大きさが増し、多量の礫を主体とし、あいだに砂利を含むようになる。これは、この基盤層が急流によって押し流されて形成されたことを物語っており、耳納山地に起源を持つ土砂流出物の堆積によって形成された扇状地の端部か、あるいは古筑後川によって形成された石河原の上に位置すると考えられる。周辺の状況から、おそらく前者の可能性が高いものと考えられる。なお、第II区の第1・2遺構面が第I区の第1遺構面、第II区の第3遺構面が第I区の第2遺構面におおよそ該当する。



遺跡東壁南側の基本土層（西から）

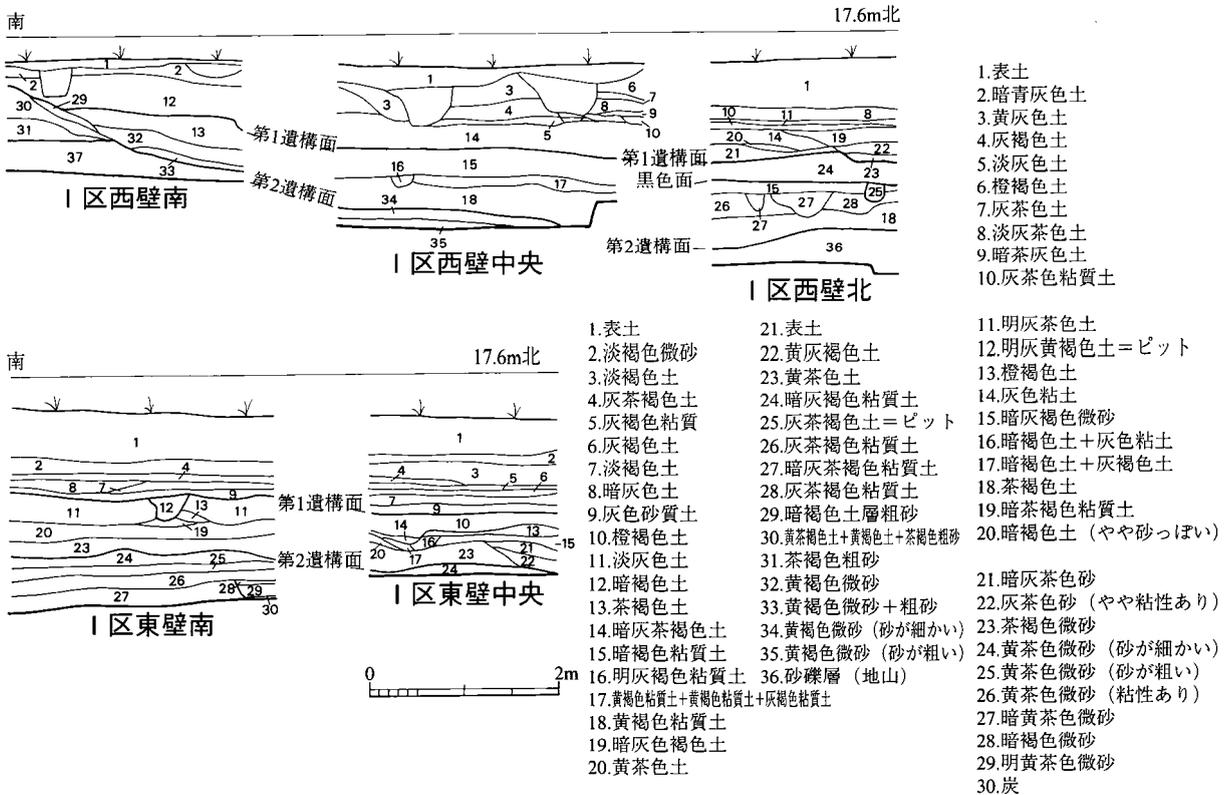


遺跡北壁東側の基本土層（南から）



- 1. 暗黄褐色粘質土
- 2. 暗褐色粘質土
- 3. 黒褐色粘質土
- 4. 茶褐色粘質土 (粘性強い)
- 5. 黄褐色粘質土 (粘性強い)
- 6. 1号溝埋土
- 7. 21号堅穴住居跡埋土
- 8. 青灰褐色砂質土
- 9. 暗黄褐色砂質土
- 10. 暗茶褐色砂質土
- 11. 青灰褐色砂礫土

第7図 Ⅱ区東・北壁基本土層実測図 (1/60)



- 1. 表土
- 2. 淡褐色微砂
- 3. 淡褐色土
- 4. 灰茶褐色土
- 5. 灰褐色粘質土
- 6. 灰褐色土
- 7. 淡褐色土
- 8. 暗灰色土
- 9. 灰色砂質土
- 10. 橙褐色土
- 11. 淡灰色土
- 12. 暗褐色土
- 13. 茶褐色土
- 14. 暗灰茶褐色土
- 15. 暗褐色粘質土
- 16. 明灰褐色粘質土
- 17. 黄褐色粘質土
- 18. 黄褐色土
- 19. 暗灰色褐色土
- 20. 黄茶色土
- 21. 表土
- 22. 黄灰褐色土
- 23. 黄茶色土
- 24. 暗灰褐色粘質土
- 25. 灰茶褐色土=ピット
- 26. 灰茶褐色粘質土
- 27. 暗灰茶褐色粘質土
- 28. 灰茶褐色粘質土
- 29. 暗褐色土層粗砂
- 30. 黄茶褐色土+黄褐色土+茶褐色粗砂
- 31. 茶褐色粗砂
- 32. 黄褐色微砂
- 33. 黄褐色微砂+粗砂
- 34. 黄褐色微砂 (砂が細かい)
- 35. 黄褐色微砂 (砂が粗い)
- 36. 砂礫層 (地山)
- 11. 明灰茶色土
- 12. 明灰黄褐色土=ピット
- 13. 橙褐色土
- 14. 灰色粘土
- 15. 暗灰褐色微砂
- 16. 暗褐色土+灰色粘土
- 17. 暗褐色土+灰褐色土
- 18. 茶褐色土
- 19. 暗茶褐色粘質土
- 20. 暗褐色土 (やや砂っぽい)
- 21. 暗灰茶色砂
- 22. 灰茶色砂 (やや粘性あり)
- 23. 茶褐色微砂
- 24. 黄茶色微砂 (砂が細かい)
- 25. 黄茶色微砂 (砂が粗い)
- 26. 黄茶色微砂 (粘性あり)
- 27. 暗黄茶色微砂
- 28. 暗褐色微砂
- 29. 明黄茶色微砂
- 30. 炭

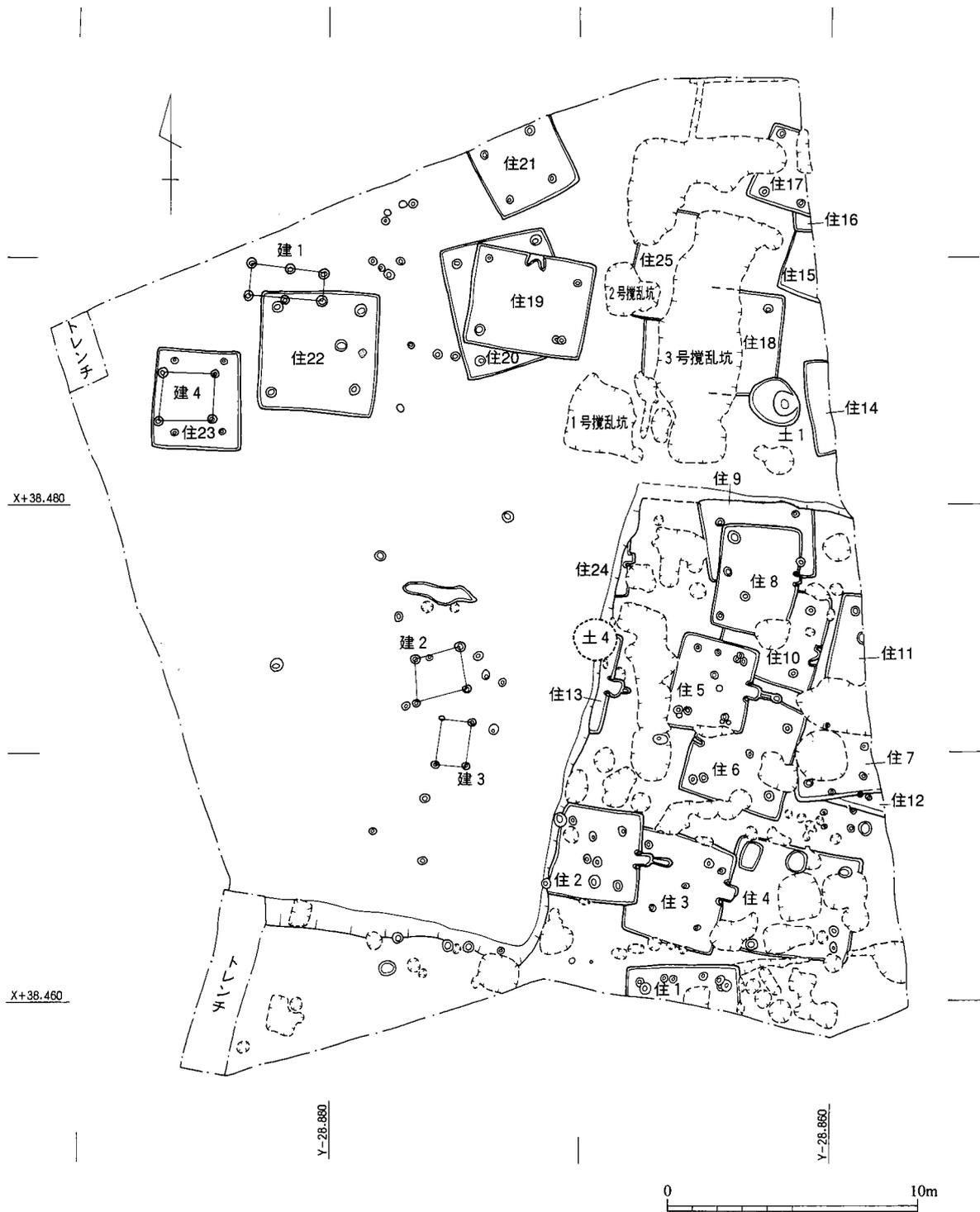
第8図 Ⅰ区西・東壁土層実測図 (今井編2003より転載、縮尺を変更して再トレース) (1/80)

**遺跡の概要** 日詰遺跡の既往の調査では、県道33号（甘木―田主丸）線をはさんで東側に隣接する第Ⅰ区から、弥生時代、古代（6世紀末～7世紀前半、8世紀中葉～9世紀前半）の遺構が検出され、中世・近代の遺物も多く出土した。特に、6世紀末～7世紀前半の竪穴住居跡群は、調査区南側の微高地上という狭い範囲に集中して12棟が確認されており、この時期が日詰遺跡の中心的な時期と考えられた。また、弥生時代前期の遺構はわずかであったが、この地域における同時期の遺跡は少なく、隣接する大の遺跡とともに注目された。

今次調査区でも、この傾向は基本的に同様と考えられる。遺跡が形成された時期は弥生時代、古代、中世、近代の各時期にわたるが、最も大規模に生活が営まれたのは古代と近代である。第1・面からは、古代の竪穴住居跡群が30棟検出された。前述のように遺跡の北西部は削平により多くの遺構が失われたものと考えられ、竪穴住居跡の多くは、遺構面の残存状況が良好であった遺跡南東部に集中して検出され、本来の遺構面がやや低かった調査区北側にも削平を免れた一部の竪穴住居跡が検出された。切り合いが著しかったために第1遺構面の調査時に全てを把握することができず、結果としてこの竪穴住居跡群は2面にわたって調査されることとなったが、時期としては6世紀末～8世紀中葉に営まれ、その大半は7世紀末～8世紀中頃に位置づけられるものと把握してよいであろう。なお、竪穴住居跡が検出されなかった遺跡西側部分でも、多数の柱穴が確認され、このうちの一部を1間×1間の建物跡として調査した。この建物跡はおそらく竪穴住居跡の竪穴部分が削平により失われ、柱穴のみが残存したものと考えられる。周囲の多数の柱穴も、埋土の状況が上述の竪穴住居跡と類似しているものがほとんどであり、竪穴住居跡や掘立柱建物の一部の可能性が高いものと考えられることから、集落は削平された調査区西側部分にも同様の密度で展開していたものと判断できる。この点は、西側に隣接する調査地点である第Ⅲ区（平成14年度調査、17年度報告予定）から、竪穴住居跡群が検出されたことから支持されよう。

これに対し、弥生時代の遺構は、土坑が1基と、やや時期の絞り込みが難しい溝が2条検出されたのみであった。この状況は隣接する第Ⅰ区でも同様であり、弥生時代の集落はさほど規模の大きなものではなく、短期間居住しただけであった可能性が高い。中世に属する明確な遺構も、井戸が1基検出されたのみであった。第Ⅰ区では明確な遺構が検出されておらず遺物のみの出土であることから、これも同様に小規模な集落か集落の縁辺部であったと考えられる。

これに対し、近代については興味深い遺構が検出された。調査地は近代以降住宅地として開発され、浮羽バイパスの建設に伴ってこの住宅地が移転するまで宅地として利用されていたため、調査地には近代～現代の掘り込みが多数存在した。当初は、近代の遺構については現代の掘り込みと埋土上区別ができないこと、近代に開発され現代まで連続する宅地であるためさほど重要視する必要はないと考えられたことなどから、攪乱として処理する方向で進めていた。ところが、遺跡の北東部から検出された巨大な土坑（3号攪乱坑）から多量の石炭殻が出土し、この中から大正期に福岡市南区野間で焼かれ、主に博多駅に供給されたという駅弁容器（駅茶瓶）が出土したため、改めて付近の近代資料を調査したところ、大正～昭和初期に、現在の県道33号線付近を両筑軌道という鉄道が走り、調査地は板町駅の付近に該当するらしいことが判明し、多量の石炭殻は、この両筑軌道で使われていた蒸気機関車の燃料として使われた石炭の燃えかすを廃棄したものである可能性が高いと考えられた。しかし、この両筑軌道については資料が少なく、実情があまり判明していない。そこで、貴重な近代資料としてここ出土遺物だけでも報告することとしたものである。



第9図 第1遺構面遺構配置図 (1/250)

## 第2節 第1遺構面の検出遺構と出土遺物

第1遺構面は標高17.1～16.5mをはかる。基盤層は調査区の南側では暗黄褐色粘砂質土であるが、北側ではこの上部に暗褐色粘質土が堆積して遺構面を形成していた。遺構としては、古代の竪穴住居跡を中心とした居住関連遺構が主であるが、この上位から中世の土坑や近・現代の攪乱坑が多く切り込んでいた。以下、攪乱坑を除く第1遺構面検出の遺構と、出土遺物について述べていきたい。なお、遺跡は前述のように北西部が段落ちになっているが、1～11号竪穴住居跡はこの段の上に位置し、13～25号竪穴住居跡、1号土坑、1～3号掘立柱建物跡は段の下に位置する。

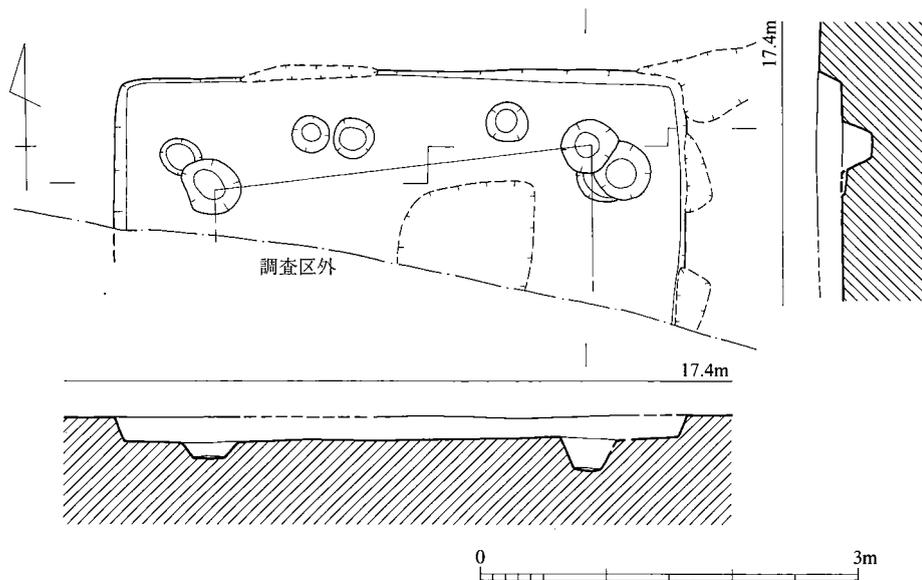
### 第1項 竪穴住居跡

#### 1号竪穴住居跡（第10図、図版2-1）

調査区の南に位置し、半分以上が調査区の外に広がる竪穴住居跡である。中央部を近～現代の攪乱坑（便槽）によって乱される。住居跡の規模は半分以上が未調査のため東西長のみ判明し、4.54mほどをはかる。残存深さは床面まで20cmほど。長・短軸は不明であるが、南北軸にほぼ直交する。ほぼ全体が第2遺構面検出の30号住居跡と重複しており、床面の確認と柱穴の検出が難しく、床下掘り込みの有無が不明のほか、支柱穴についても疑問が残る。埋土は黒褐色粘質土で、一部に地山由来の暗黄褐色土を含む。出土土器から、7世紀末と考えられる。

#### 出土土器（第14図）

須恵器（1） 1は須恵器の坏の胴～底部である。安定した平底から屈曲して斜め上方に伸びる器形を持つ。高台は付かない。底部はヘラ切りにより切り離れた後ナデ調整。胴部上～中位は回転ナデ仕上げだが底～胴部境に一部回転ヘラケズリ痕が残る。ほかに須恵器・土師器の小片が出土したが、図示できるものはない。



第10図 1号竪穴住居跡実測図（1/60）

## 2号竪穴住居跡（第11図、図版2-2）

調査区の南中央部に位置し、段落ちによって西側の一部が失われるが、それ以外のほぼ全形が残存する。東側の壁に、突出型のカマドを付設しているが、このカマド部分を中心として、3号住居跡と重複する（2号住居跡が切る）。主柱穴と考えられるピットが住居跡の4隅に確認されたが、それ以外のピットもあり、これらは2号住居跡に付属するか疑問がある。床面のほぼ全面を一段深く掘り込んでおり、張り床に近い状態となっている。カマド位置から東西を主軸とするが、西壁が全て失われており規模は不明である。南北幅は3.8mほどをはかる。残存深さは25cmほど。出土土器から8世紀前半～中葉と考えられる。

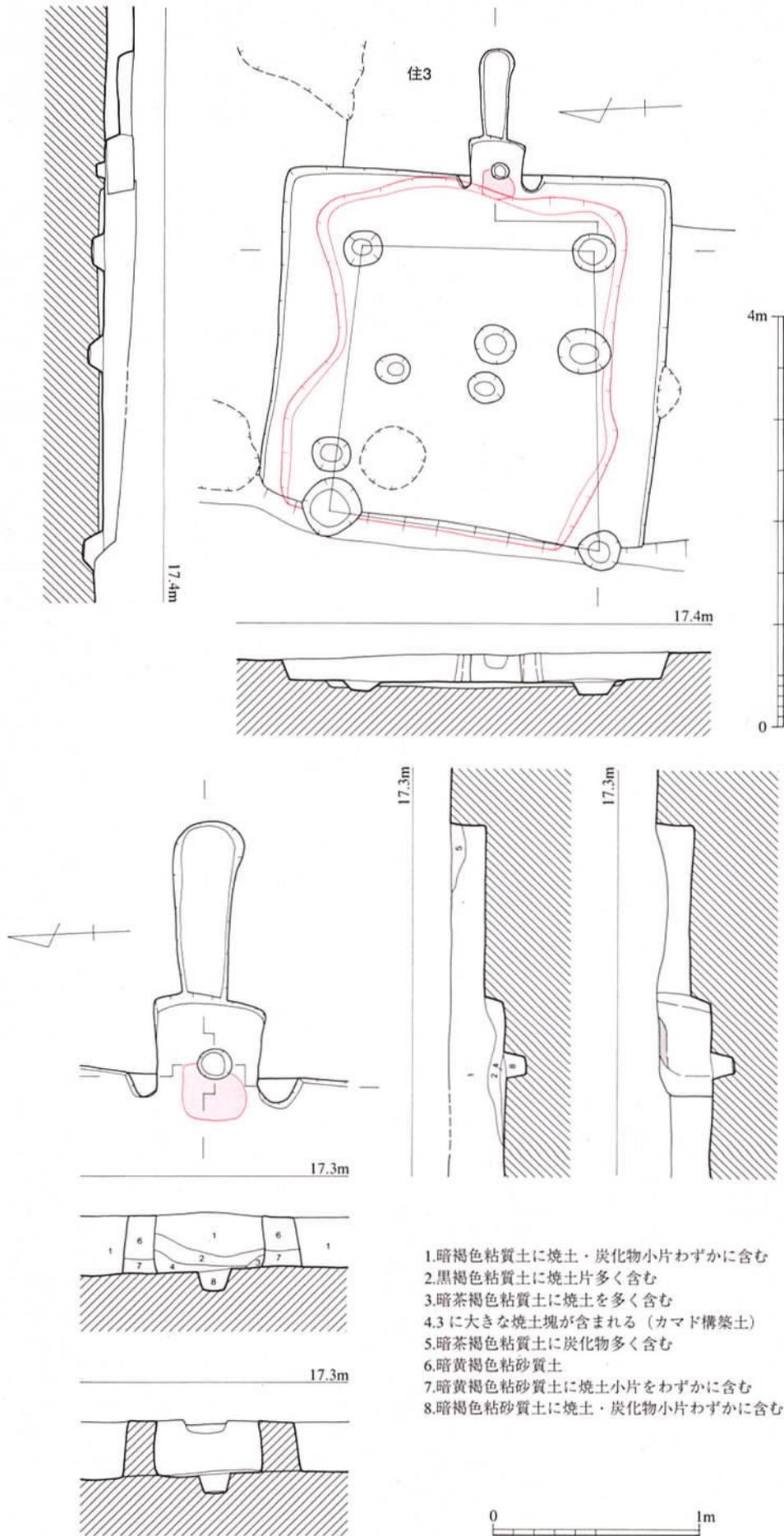
### カマド（図版2-3）

住居の東壁から35～40cmほど掘り込んで燃焼部を作り、さらにカマド奥壁から一段浅く煙道部を伸ばす作りのカマドである。煙道部の長さは85cm程度をはかる。カマド全体が3号住居跡を切って作られており、埋土が似ていることもあり、煙道部敷設時の掘り込みは確認できなかった。カマド袖は地山をベースとした粘質土によって作られており、住居の内側に15cmほど突出させて作られる。支脚抜き取り痕と考えられるピットを燃焼部中央で検出した。このピットの前面がよく焼けて赤変し、暗赤褐色を呈する。また、カマドの左右の壁面上部が黒褐色に変色しており、ススにより変色したものである。カマド埋土は4層に分けられるが、2～4層に焼土片や炭化物を多く含み、特に4層には大きな焼土塊がみられることから、カマドに住居跡埋土が流入する前にカマドの天井が落ちたものと考えられる。カマド床直上に灰層が確認されないことと合わせ、支脚抜き取り→灰層掻き出し→カマド天井の人為的な崩落の可能性を考えさせるが、住居跡の内側からはカマド構築土と思われる層は確認されず、前面に引き倒すというよりは上から潰した（あるいは潰れた）可能性が高い。上層は住居跡の埋土と共通しており、カマドが潰れたあとに住居跡の埋没に伴って流入したものであろう。

### 出土土器（第14図）

土師器（2） 2は、甕または甑の口縁部。わずかに開きながら直線的に上方に伸びたあと外側に如意状に外反する器形を持つ。小破片であり径は不明。全体に摩滅しているが焼成は比較的良好、黄褐色～淡橙色を呈する。内面ケズリ調整、外面はハケ目後ナデ仕上げ。

須恵器（3～6） 3は坏である。ほぼ平坦の底部から屈曲して斜め上方に開く器形を持つ。高台はやや外に開きながら伸びる断面形を呈する。外面全体を丁寧な回転ナデ、内面を横ナデによって仕上げる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は精良でわずかに白色細砂粒を含む。高台径は7cmをはかる。4～6は坏蓋である。いずれも直線的に開いた後下方に屈曲する器形を持つ。おそらくすべてボタン型のつまみを持つものだろう。外面は全体に回転ナデを施し、特につまみ部と端部の周辺を丁寧に仕上げるが、中位には回転ヘラケズリ痕が残る。内面も端部付近は回転ナデ、中央部は横ナデで仕上げるものであろう。4と6は端部片、5はつまみ部付近が残る。4は全体に厚みがあり、屈曲部（端部）も太い。径は小破片でありやや不安があるが復元で18cmを計る。6は全体に薄く、端部も華奢である。端部をわずかに外に突き出す。5は肩部が比較的はっきりした資料であり、器高がやや高くなるものか。いずれも胎土は精良でわずかに白色の細砂粒を含み、焼成は良好で硬質。色調は4が灰色、5が灰黄褐色、6が灰白色を呈する。



第11図 2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

### 3号竪穴住居跡（第12図、図版3-1）

調査区の南側中央部に位置し、西側を2号住居跡によって切られ、東側で4号住居跡を切る竪穴住居跡である。第2遺構面の26号住居跡とも切り合う可能性が高く、3号住居跡が新しい。東壁に突出型のカマドを付設し、主軸を略東西方向にとるが15度ほど南に振れる。2号住居跡によって切られる部分以外はほぼ全形が残存するが、それによれば平面形はわずかにゆがんで平行四辺形状を呈する。主柱穴は東南隅の1本のみが確実だが、西南隅には検出することができず、あとの2本も浅いため確実とは言えない。埋土は上層が暗褐色粘質土で、下層には地山ブロックが混じり、レンズ状堆積が認められないので一気に埋まった可能性がある。宮内克己氏によれば、廃絶後一気に埋め戻された場合、下層には竪穴住居の周堤が使われるが、周堤は竪穴住居を掘ったときの排土が使用されるため、住居跡の埋土の特に下層は地山混じりの土となることが指摘されており（宮内2004）、本住居跡の場合もこの可能性が考えられよう。住居跡の規模は、カマドを除く長さが3.8m、幅は4.3mほどをはかる。残存深さは25cm程度。出土土器と切り合い関係から、2号住居跡に若干先行する8世紀前葉と考えたい。

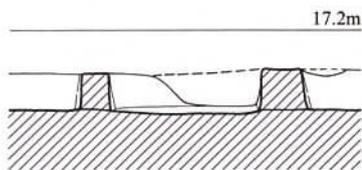
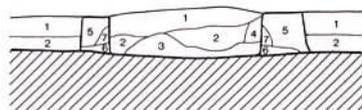
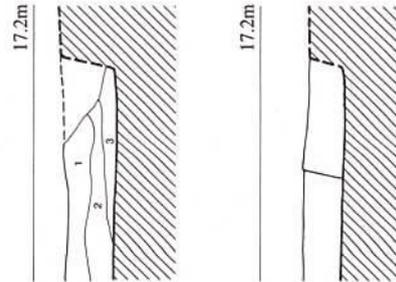
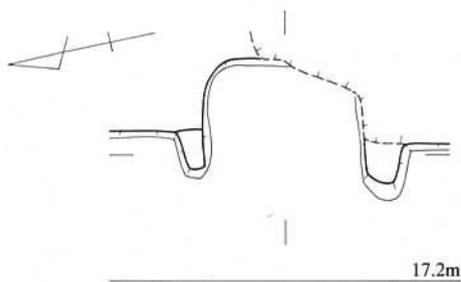
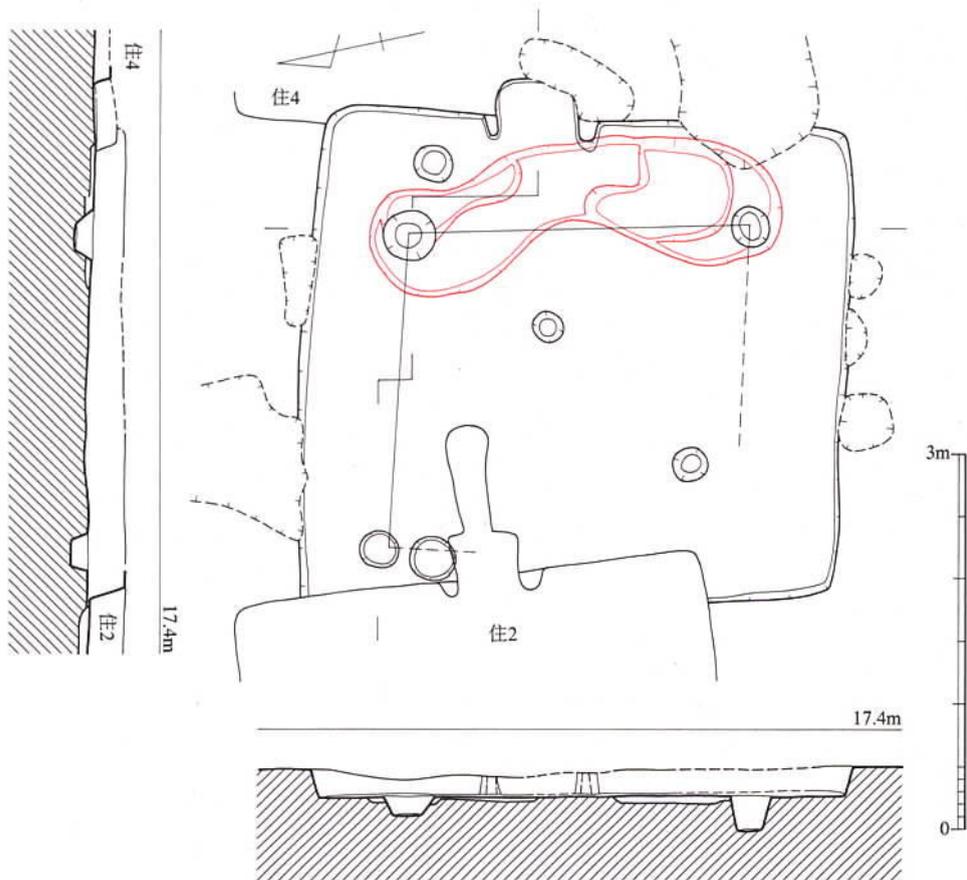
### カマド（図版3-2）

住居跡の東壁から30cmほど掘り込んで燃焼部を作り、住居跡の内側に向かって長さ20cm程度の袖を貼り付けた、突出型のカマドである。おそらく、2号住居跡のカマドと同様に、突出する燃焼部の先に長く延びる煙道が付設してあったものと考えられるが、カマドの奥部が攪乱を受けていることや削平により失われている。カマドの埋土は大きく4層に分けられ、最下層（3層）には灰の堆積層が確認された。その上には、天井の一部が崩落したと考えられる焼土を多く含む層（4層）がみられたが、堆積は一部にとどまっており、住居跡の埋土中にもカマド構築土は認められなかった。カマドの大半が住居跡と同じ埋土により埋まっていることから、このカマドは潰れる前に住居跡の埋没と同じ過程で埋まったものと考えられる。カマド袖は地山を含む暗褐色粘砂質土により構築されている。

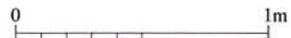
### 出土土器（第14図）

土師器（7～10） 7・8は小型の甕型土器である。いずれも胴部～口縁部の資料で底部は残存しないが、バケツ状の胴部を持ち、口縁部がわずかに如意状に外反する全体形状を有すると考えられる。8は口縁端部に一部ゆがみがある。外面調整はナデ、口縁部付近は回転ナデにより仕上げ、胴部内面はケズリ痕を明瞭に残す。胎土はいずれも小砂粒を多く含むやや粗い胎土で、焼成は良好で黄～橙褐色を呈する。口縁部径は7が14cm、8が13cmをはかる。9は大型の甕型土器の口縁部である。強く湾曲しながら外反する口縁部の小片であり、全体形状は不明だが、おそらく13・14と同様の器形になろう。内面に一部赤色部がみられ、丹が付着したものと判断したが、やや色調が明るく、火色の可能性もある。10は椀型土器。平たい底部と強く内側に湾曲する口縁部をもち、浅い。器壁は薄く、胎土は精良で細砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。調整は内外面ともにナデで、口縁部付近は回転ナデ仕上げ。色調は橙～黄褐色を呈する。口縁部径は13.7cmをはかる。

須恵器（11・12） 11は坏で、底～胴部境に屈曲を有し、わずかに外湾しながら上方に伸びる器形を持ち、おそらく高台を有する。全体に回転ナデ痕が残る。胎土はなめらかでわずかに細砂粒を含み、焼成は良好で全体に灰色を呈する。小片のため口縁部径はやや不安があるが、14cmほどをはかる。12は坏蓋。やや高さがある形状で、端部は折り返す。端部を回転ナデ、内面は横ナデで仕上げ、



1. 暗褐色粘質土に焼土・炭化物小片をわずかに含む  
(住居跡埋土上層)
2. 暗褐色粘質土に黄褐色粘質土(地山)ブロック含む  
(住居跡埋土下層)
3. 暗灰褐色粘質土に炭化物・焼土小片をやや多く含む  
(灰層)
4. 暗褐色粘質土に焼土ブロックを多く含む  
(カマド構築土か)
5. 暗褐色粘砂質土
6. 黄褐色粘砂質土(地山ブロックか)
7. 黄褐色粘砂質土に暗褐色粘砂質土(5層)ブロックを含む

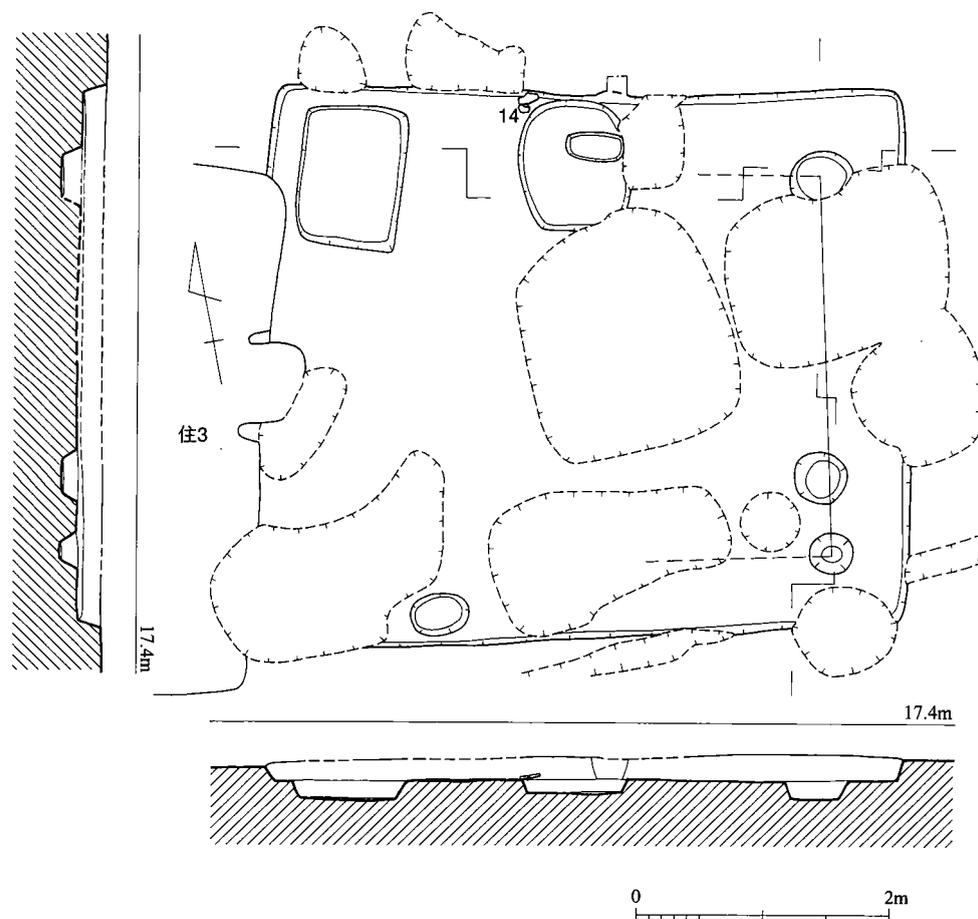


第12図 3号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

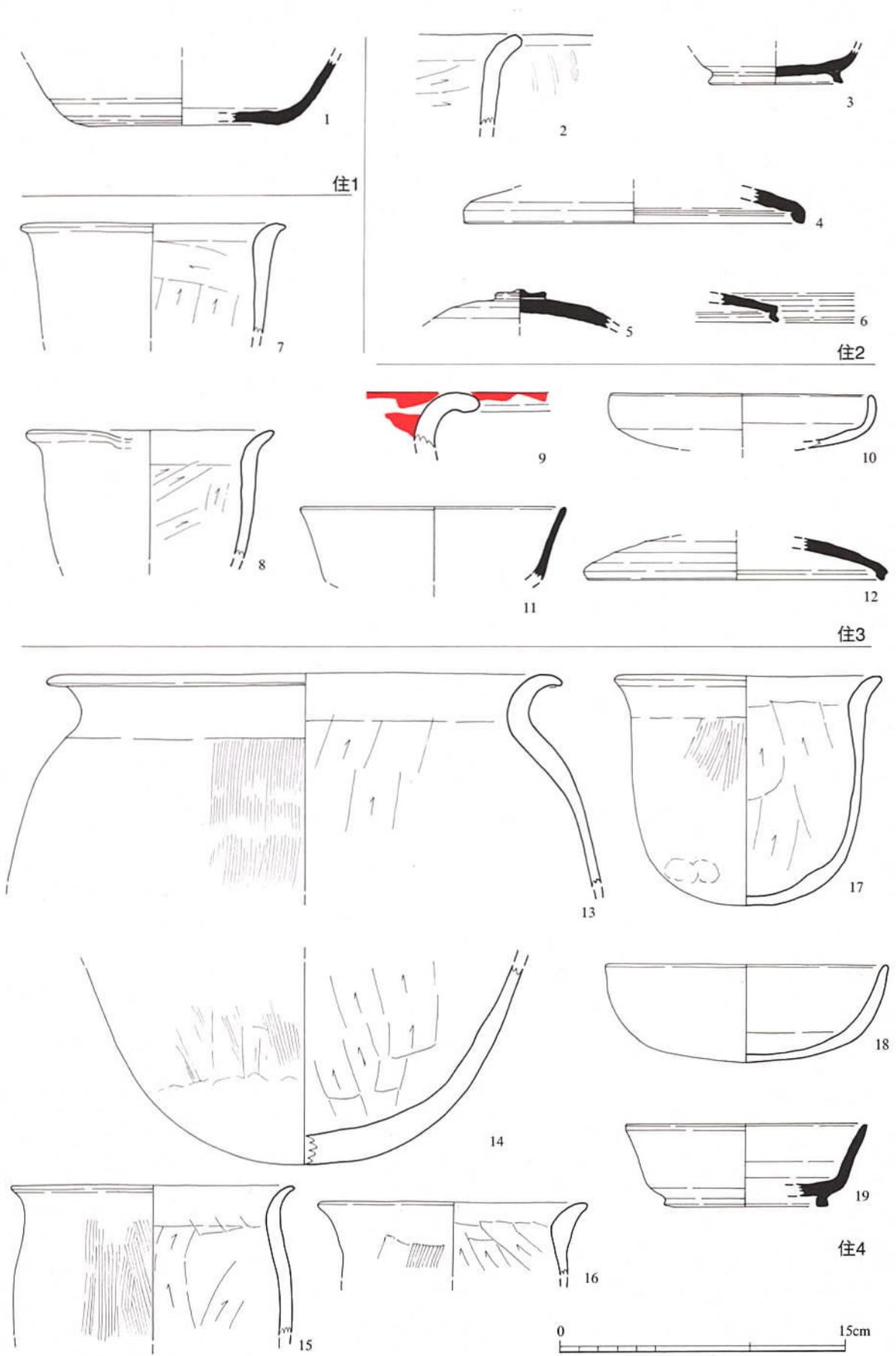
外面には回転ヘラケズリ痕が残る。胎土は精良だがやや焼成が甘く、灰白黄色を呈する。口径は16cmほどをはかる。

#### 4号竪穴住居跡（第13図、図版3-3）

4号竪穴住居跡は調査区南東部に位置し、3号住居跡の東でこれに切られる。第2遺構面の26号住居跡と重複しておりこれより新しい。全体に攪乱による破壊が著しく、カマドを正確に把握できなかったが、焼土の出土状況などから、内接型のカマドを住居跡の北壁に接して持つものと考えた。主軸は南北方向でわずかに東に振れ、長さ4.4m、幅5.3mほどの規模を持ち、やや長方形を呈する。残存深さは20cmほど。住居跡の床面からは、カマド想定位置の南側に隅丸方形の、北西隅に長方形の土坑を検出したが、これらがこの住居跡に付属する施設かどうかは明らかにできなかった。ただし、カマドの位置が想定通りとすれば、カマドの左袖と隅丸長方形の土坑は重なっており、この土坑が遺構面から4号住居跡を切り込んでいたためにカマドの左袖が失われた可能性がある。この場合、この土坑は4号住居跡よりも新しい土坑となるが、検出時には気づかなかった。また、住居跡北西部の長方形の土坑の上部からは多くの土器片が出土したが、これらはいずれも住居跡の埋土中からの出土であり、土坑に伴うものはなかったことから、この土坑は住居跡に先行するものであった可能性が高い。床面からはほかに支柱穴と考えられる柱穴が二つ出土したが、いずれも浅くやや疑問が残る。出土土器と切り合い関係から、7世紀末～8世紀前葉に位置づけたい。



第13図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第14图 1~4号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

#### 出土土器（第14図、図版15）

土師器（13～18） 13～17は甕型土器である。13・14が大型品で、15～17が小型品である。大型の13・14は、繭型の胴部、よく締まった頸部から如意状に強く湾曲しながら外反して開く口縁部を持つ器形と考えられる。外面はハケ目調整、内面はケズリ調整のまま仕上げ調整を付さない。ただし、14の底部付近は板状の工具によって下から上へと強くナデ上げられており、粘土を伸ばした痕跡が波状に確認される。また、13の口縁部は回転ナデ仕上げ。胎土はやや大きな砂粒が多く混じり、色調はいずれも橙褐色を呈する。大きさは、13の口縁部径が27cmを測る。15～17は、バケツ状の胴部から弱く湾曲しながら外反する口縁部を有する器形が共通する。いずれも外面ハケ目、内面ケズリで、底部・口縁部付近のみナデ仕上げが認められる。いわゆる手づくね土器よりは丁寧に作られており、日常使用されたものか。胎土は細砂粒をやや多く含み、色調は橙褐色～灰黄褐色を呈する。大きさはいずれも口縁部径で、15が15cm、16が14cm、17が14cmをはかる。18は椀型土器である。底一胴部境に明瞭な屈曲部を持ち、口縁部がわずかに内湾しながら直線的に伸びる。全体に丁寧なナデ仕上げ。胎土はわずかに細砂粒を含むが精良で良く焼成されており、色調は淡橙褐色を呈する。口縁部径は14.8cmをはかる。

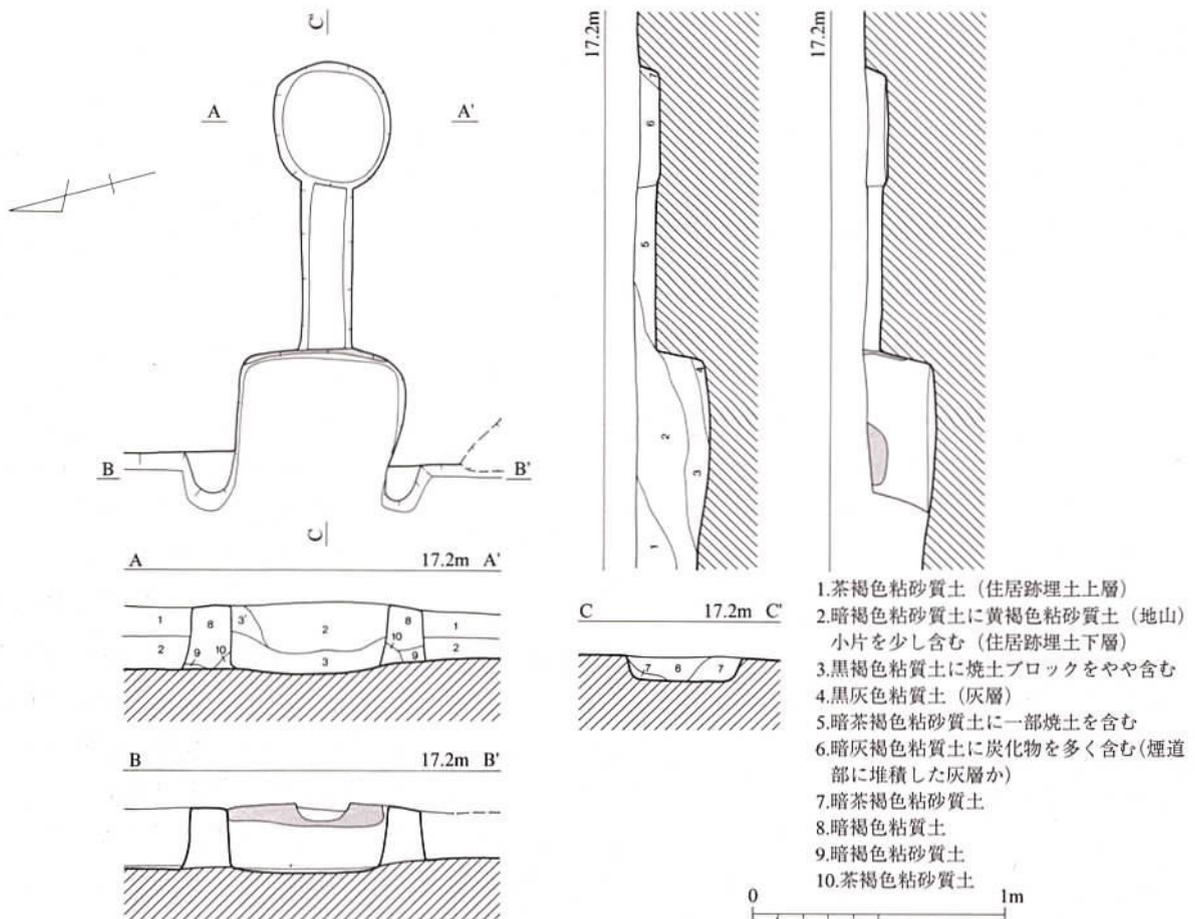
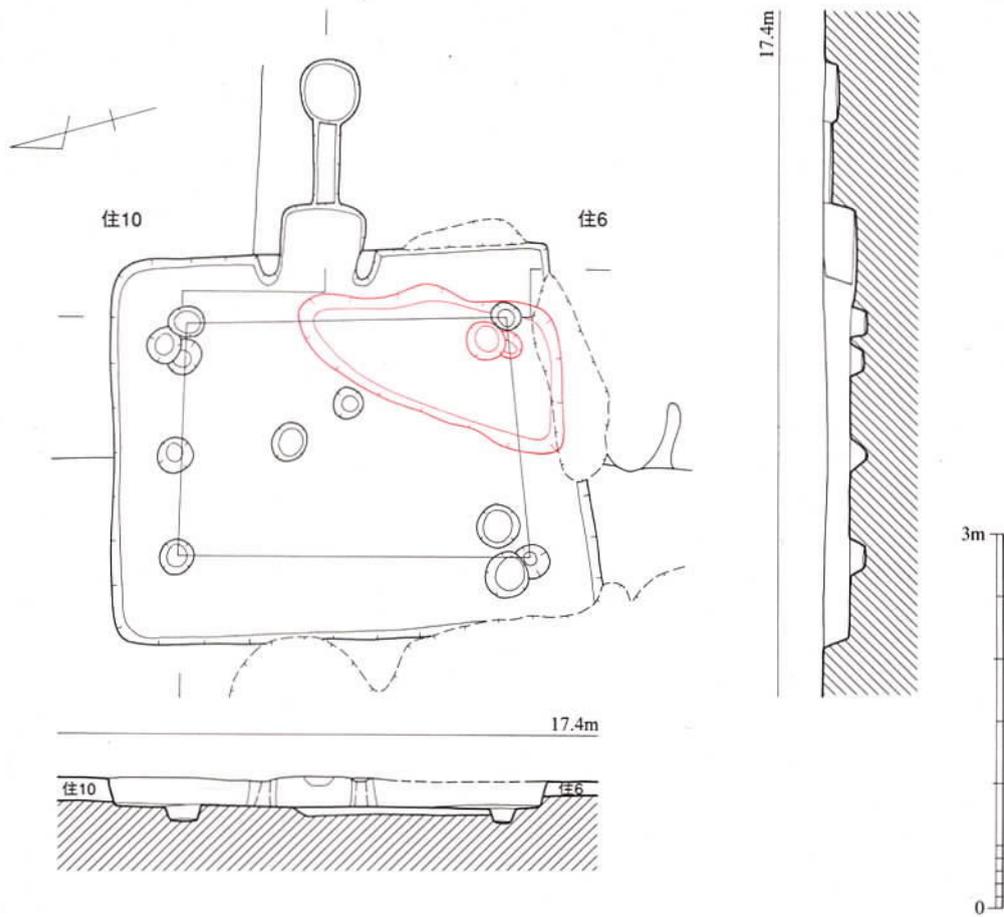
須恵器（19） 19は高台付の坏である。器壁はやや厚く、平坦な底部から屈曲して胴部と接合し、直線的に外反して口縁部を収める。高台の位置はわずかに内側に入り、断面はほぼ正形状を呈する。胎土は精良で細砂粒を少量含み、焼成は良好で色調は暗灰色～灰色を呈する。口縁部径12.6cm、高台径8.6cmをはかる。

#### 5号竪穴住居跡（第15図、図版4-1）

調査区中央部東側に位置し、6・10号住居跡を切る。第2遺構面の26・27号住居跡とも重複し、これらより新しい。複雑な切り合いを有する調査区南東部の住居跡群の中では、2号、8号とともに切り合い上は最も新しい住居跡である。東壁中央部に突出型のカマドを付設しており、主軸は略東西方向で15度ほど南に振れる。床面からは柱穴が切り合った状態で多く検出され、支柱穴を決めるのが困難であったが、柱穴の位置と深さから図示した4つのピットを支柱穴と判断した。住居跡の南壁と西壁は攪乱によって大きく破壊されていたが、全形は把握でき、主軸長はカマド部を除いて3.1m、幅は3.8mをはかる幅広の長形状を呈する。残存深さは25cm程度をはかる。住居跡の南東部の床面に浅い掘り込みを検出した。断面は船底型を呈する。埋土は暗褐色粘質土が主体で、部分的に地山由来の暗黄褐色粘砂質土がブロック状に入っており、3号住居跡同様人為的に埋め戻された可能性がある。出土土器と切り合い関係から、8世紀前半～中葉に位置づけたい。

#### カマド（図版4-2）

住居跡の東壁中央部に方形の燃焼部を掘り込み、さらにその奥壁から一段高く煙道部を付設するタイプのカマドである。燃焼部は幅65cm、奥行45cm程度の大略方形、煙道部の長さは65cm程度をはかり、煙道部の先端には円形のピットが付設されている。煙道の立ち上がり部分をピット状に作ったものと考えられ、底部が煙道よりやや深く作られているのはカマド内部への雨水等の流入を防ぐためか。被熱による硬化面や赤変部は確認されなかったが、燃焼部の側・奥壁中位より上にススの付着による黒変部分が確認された。カマド袖は地山由来の黄褐色土をベースとした地山より粘性の強い土で構築されている。カマド埋土は大別3層からなり、最下層の4層は灰層、3（・3'）層



第15図 5号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

は焼土ブロックを含むためカマド天井の崩落土と考えられる。2層は住居跡の埋土（下層）と共通しており、以上からこのカマドの埋没過程は、灰層の掻き出しは行われず、まずカマドの天井が潰れ、その後住居跡の埋没と同じ過程で埋没したものと考えられる。住居跡が廃絶後すぐに人為的に埋め戻されたものとするれば、カマドは人為的に潰された可能性が高い。

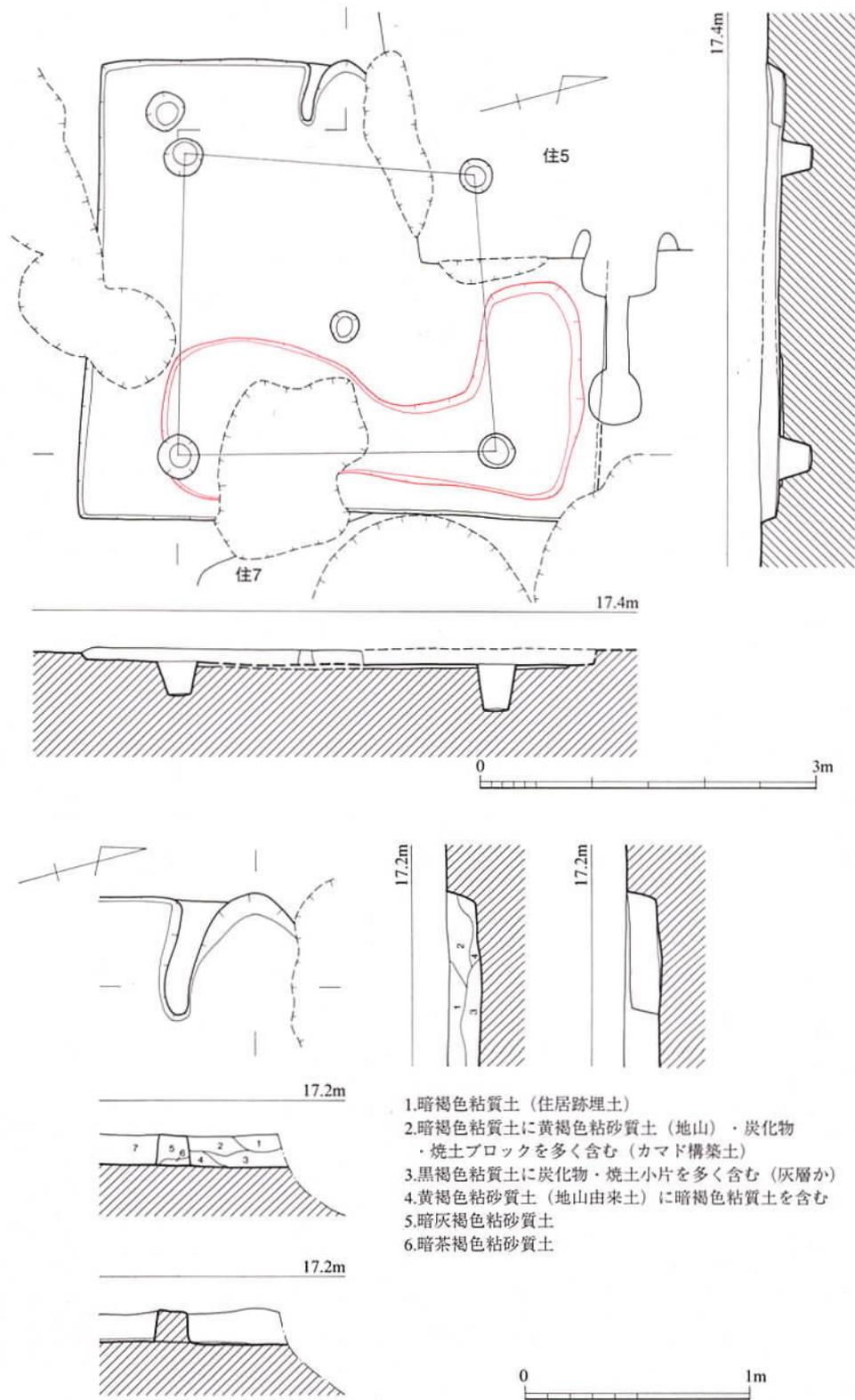
#### 出土土器（第21図）

土師器（1・2・5） 1は大型の甑あるいは甕型土器である。底部は失われているが、胴部上半から口縁部にかけては直線状に開きながら如意状に外反する器形を有する。立ち上がり角度が著しく斜めであり、その全体型にはやや疑問もあり、立ち上がりが図示したよりも急角度でバケツ状の胴部を有する可能性も考えられるが、小片のため不明である。外面・口縁部はナデ仕上げ、内面ケズリ調整。胎土はやや粗く粗砂粒を含む。焼成は良好で色調は淡橙褐色を呈する。口径は27cmをはかる。2は椀型土器。平たい底部から急激に湾曲して立ち上がる器形を持つ。表面は摩滅しており調整は不明。胎土はなめらかで混和物はほとんどなく、焼成はやや甘く色調は黄褐色を呈する。口径は13cmをはかる。5は小型の甕型土器か。口縁部のみ残存しているがおそらくバケツ形の器形を有するものか。胴部外面と口縁部付近は回転ナデだが、胴部内面はケズリのまま。胎土はやや粗く粗砂をわずかに含み、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。口径は12cmをはかる。

須恵器（3・4・6・7） 3は口縁端部にかえりを有する坏である。かえり部はまだ長い内傾が顕著であり、坏の深さも極めて浅くなっている。口縁部～内面は回転ナデ、外面下方は灰が被っており調整不明。胎土は精良で焼成は良好、色調は青灰～灰白色を呈する。口径は10.2cm。4は高台を有する坏の底部である。平たくやや上げ底気味の底部から明瞭に屈曲して立ち上がる器形を有する。高台は低く断面は長形状を呈する。調整は外面が回転ナデ、内面は屈曲以上は回転ナデ、底面は横ナデ。高台径は10cmをはかる。6も坏の口縁部。直線的に外反しながら立ち上がる口縁部のみが出土した。口縁部中位には沈線のような浅い段がみられる。器壁が厚く、径が小さいため、やや全形に不安が残る。調整は内外面ともに回転ナデ、胎土は精良で混和物はわずか、焼成は良好で色調は灰白色を呈する。口径は11cmをはかる。7は坏蓋である。屈曲する端部付近が残る。調整は内外面ともに回転ナデ、胎土は精良でわずかに細砂粒を含み、焼成は良好で色調は黄灰色を呈する。小片のため径の復元にはやや不安が残るが、12cmとして図示した。

#### 6号竪穴住居跡（第16図、図版4-3・5-1）

調査区の中央部東側に位置し、北側を5号住居跡に切られ、東側で7号住居跡を切る。第2遺構面で検出した26・27号住居跡とも切り合い関係にあり、特に27号住居跡とはほぼ重なり合う。西壁の中央部に内接型のカマドを持ち、主軸は東西方向で、16度ほど北に振れる。住居跡の北壁は大きく壊され、特に5号住居跡のカマドの煙道部付近は、煙道の付設時に広く掘削され埋め戻されたために壁がほとんど残っておらず、煙道部の下にわずかに壁の下端部分が確認される程度であった。規模は、東西方向の主軸が4.1m、南北方向が4.6mをはかり、全体形状はやや横長の長方形を呈する。残存深さは15cm程度。支柱穴は4本とも確認され、カマドの対面の壁に沿って平面形状は不整形、断面形状は船底状の床下掘り込みが確認されたが、これは下層遺構の可能性が高い。埋土は暗褐色粘砂質土で、他の住居跡の埋土にしばしば認められるような地山ブロックは認められなかった。出土土器と切り合い関係から、7世紀末～8世紀初頭前後に位置づけたい。



第16図 6号竖穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

## カマド（図版5-2）

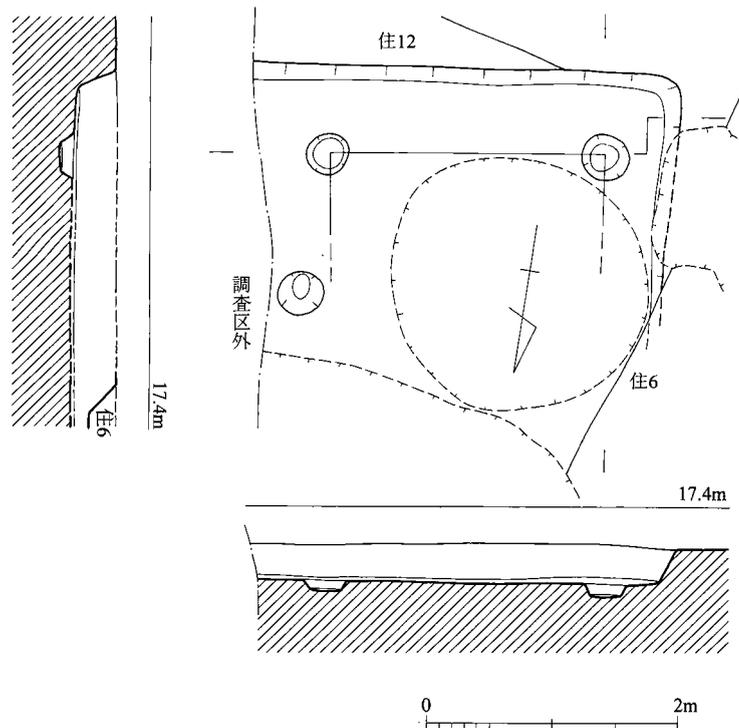
住居跡の西壁中央部に付設された内接型のカマドである。壁際から馬蹄形に55cm程度袖を構築して燃焼部を囲い込み、奥壁はわずかに壁を削り込んで煙道部への接点を作り出しているが、煙道部は削平により失われている。燃焼部の平面形状は、袖の先端がやや内側に湾曲するが極端な馬蹄形は呈さず、円形に近いと考えられるが、右袖は攪乱により破壊されており全体形状は不明。床面に硬化面や赤変部は確認されなかった。埋土は4層からなり、2・3層はカマド天井部の崩落土と考えられるが、4層は焼土や炭化物を含まない点でやや異なり、袖の上部が壊れたものか。カマド上層に確認される住居跡埋土は、カマド天井部が潰れてから流れ込んだものと考えられる。

## 出土土器（第21図）

土師器（8・9） 8は椀型土器。器壁は極めて薄く、胎土が精良で、精製品と考えられる。底部からゆるやかに内湾しながら口縁部へと至る。焼成は良好だが、表面は摩滅して、調整は不明。色調は淡橙褐色を呈し、口縁部径は12cmをはかる。9は甕あるいは鉢形土器。胴部より上半が出土しており、丸みを帯びた胴部から屈曲してわずかに外反しながら口縁部が伸びる形状を呈する。

## 7号竪穴住居跡（第17図、図版5-3）

調査区中央部東隅で検出された。西側を6号住居跡により切られ、南側で12号住居跡を切る。中央を近代の石組み井戸により大きく破壊されており、北壁も攪乱により失われている。西壁も6号住居跡や攪乱により破壊され、東側は調査区外に伸びているため、規模は不明。12号住居跡とは軸をずらして大部分が重なるため床面の確定と柱穴の検出が難しく、特に柱穴は南側に2つ確認したが、いずれも極めて浅く疑問が大きい。残存状況は深さが30cm以上あって、今次調査の中では最も深い住居跡のひとつである。出土土器は土師器の小片のみで、図示できるものはないため、時期については6号住居跡より先行するとしかたない。



第17図 7号竪穴住居跡実測図（1/60）

## 8号竪穴住居跡（第18図、図版5-3・6-1）

調査区中央東側に位置し、北側で9号住居跡を、南側で10号住居跡を切る。また、第2遺構面で検出した3号土坑とも直接的な新旧関係にあり、8号住居跡が古い（詳しくは3号土坑の項で後述）。東壁中央部に突出型のカマドを有し、主軸は東西方向から約10度南に振れる。南東部のコーナーを攪乱により破壊されているが、他はほぼ全形を保ったまま検出された。主軸方向の住居跡の長さは3m、幅は4.4mで、かなり幅の広い長方形を呈する。残存深さはおよそ15cmと比較的浅い。主柱穴は攪乱で破壊されたと考えられる南東部の1つを除いて確認され、北側半分には不整形の床下掘り込みも検出された。埋土は暗褐色粘砂質土でやや砂質分が多く均質であり、堅く締まっていた。出土土器と切り合い関係から、おおよそ8世紀前半～中葉に位置づけたい。

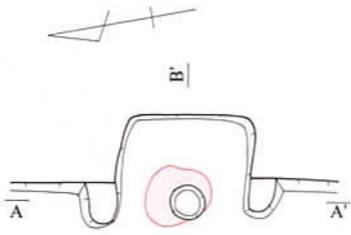
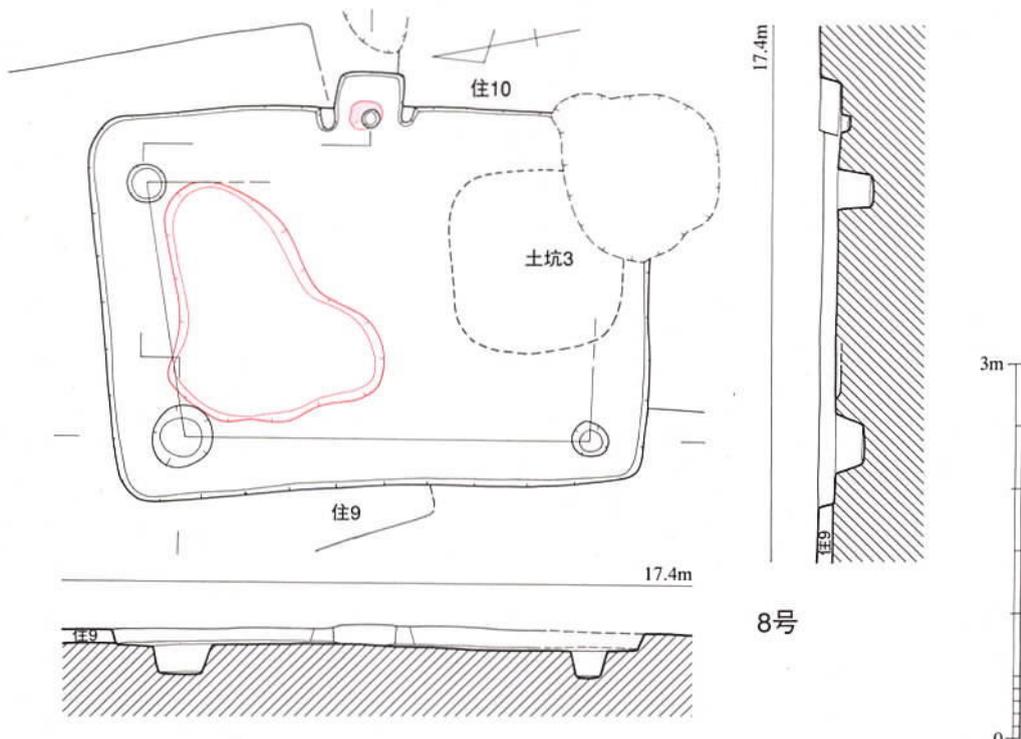
## カマド（図版6-2）

住居跡東壁のほぼ中央部に、幅50cm、奥行き30cm程度の略長方形の燃焼部を掘り込み、15cm程度の長さの袖を両側に付設して、突出型のカマドを作りつけている。袖間のほぼ中央部に支脚の抜き跡と考えられる小ピットが検出され、その周囲が被熱により赤変していた。カマド袖は地山を含む粘性のやや強い粘砂質土により構築され、堅く締まっていた。カマドの埋土は4層からなり、最下層の4層の上に灰層（3層）が堆積していた。これは、カマドの使用中に既に4層が堆積していたことを示しており、4層は、カマド壁が使用中に崩落することにより形成された可能性が高い。やや厚く堆積した2層は焼土ブロックや炭化物を多量に含み、カマドの天井部の構築土が崩落したものと考えられる。その上から住居跡埋土と同じ土層である1層が堆積しており、本カマドは廃棄後に灰が掻き出されないまま天井が崩落し、その後住居跡本体とともに埋没したものと考えられることができる。

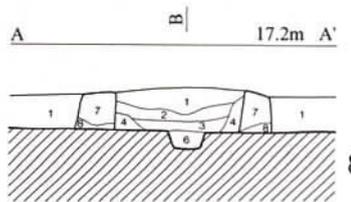
## 出土土器（第21図）

土師器（10・11） 10は小型の甕型土器。やや丸底のバケツ状の底～胴部からわずかに内湾しながらまっすぐ立ち上がり、口縁部が如意状に外反する器形を持つ。口縁部の外反度合いは弱い。口縁部付近は回転ナデにより仕上げ、胴部外面はハケ目、内面はケズリ痕を良く残す。胎土の精度は中程度で、細砂粒をやや含む。焼成は良好で色調は橙褐色～灰黄褐色を呈する。口縁部径は12cmをはかる。11は高坏の脚部。全体的に焼成がやや甘く、摩耗している。脚外面は板状工具によるナデ単位が明瞭に残り、脚内面はナデ調整。坏部内面は摩耗が進んでおり明瞭ではないが、ナデか。胎土は精良で、色調は橙褐色を呈する。

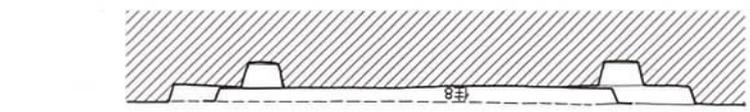
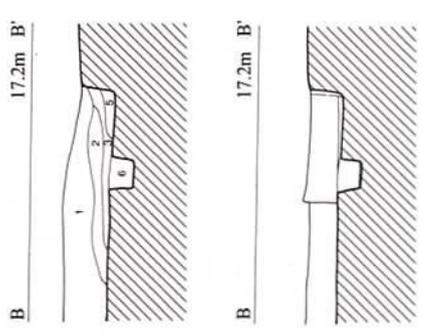
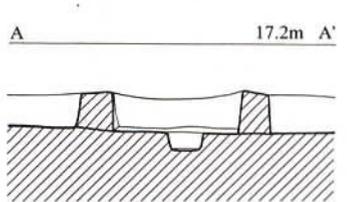
須恵器（12～14） 12～14は坏蓋。12は端部に明瞭なかえりを有するもの。器高が比較的高く、図示した中では古い属性を有する。残存部は全体的に丁寧な回転ナデ仕上げ。胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は良好で色調は黄灰色を呈する。口径は17cmを計るが、破片が小さくやや自信がない。13はかえりが退化して屈曲に変化した直後と考えられる口縁端部を有する。器高は12と比べてやや低くなり、やや新しい様相を呈する。残存部は全面的に丁寧な回転ナデ仕上げである。胎土は精良だが細砂粒をやや多めに含み、焼成は良好で色調は灰白色を呈する。破片が小さく形はやや不安が残るが、16cmで図示した。14は端部を屈曲させるもの。天井部が低く、上面に回転ヘラケズリ痕を明瞭に残す。端部は回転ナデ仕上げ、内面は横ナデ。胎土は精良だが細砂粒をやや多く含み、焼成は良好で色調は灰色を呈する。口径は13cmをはかる。



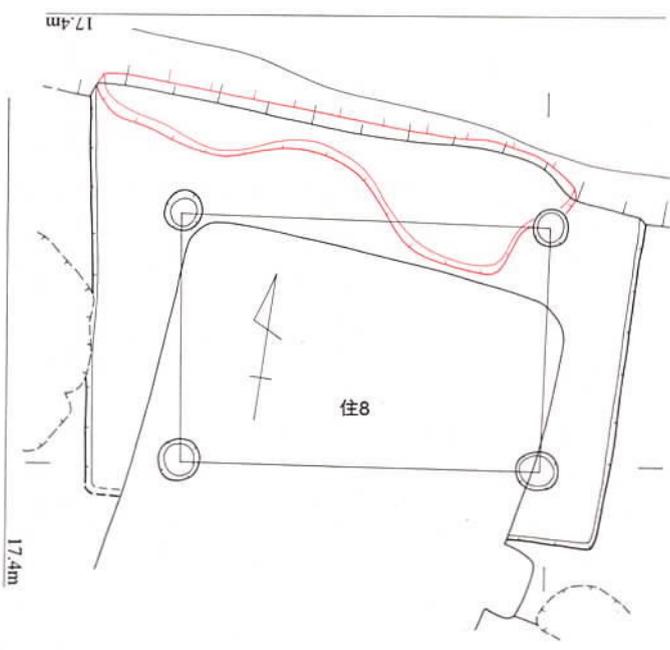
- 1.暗褐色粘質土 (住居跡埋土)
- 2.暗茶褐色粘砂質土に焼土大片を多く含む (カマド構築土)
- 3.黒褐色粘質土に焼土・炭化物小片を多く含む (灰層)
- 4.茶褐色粘砂質土に焼土小片をわずかに含む
- 5.茶褐色粘砂質土
- 6.暗褐色粘質土に焼土・炭化物小片をわずかに含む
- 7.暗茶褐色粘質土
- 8.暗茶褐色粘砂質土



8号カマド



9号



第18図 8号竪穴住居跡・カマド、9号竪穴住居跡実測図 (1/60・1/30)

### 9号竪穴住居跡（第18図、図版5-3・6-2）

調査区中央部東側に位置する竪穴住居跡。南東部の段上の住居跡群の中では最も北側に位置し、北側を段落ちによって削られて北壁を全て失っている。南側は3号土坑、8号住居跡によって壊されるが、南壁の一部は残る。カマドは検出できなかった。大きく破壊された北壁または南壁に付設されていたものか。カマドの想定位置から主軸は南北方向と考えられ、約10度ほど西に振れる。住居跡の大半を8号住居跡によって破壊されているが、支柱穴は4本とも検出でき、このほかに住居北側に不整形の床下掘り込みを確認した。規模は南北は不明だが3.2m以上、東西は4.2mほどをはかる。残存深さは15cm弱で、床面標高は8号住居跡とほぼ同じ。出土土器と切り合い関係から、8世紀前半～中葉に位置づけられる。

#### 出土土器（第21図）

須恵器（15・16） 15・16ともに坏蓋。いずれもボタン状のつまみと屈曲させる端部を有すると考えられる。15は平坦な天井部からやや下方に湾曲させ、再び水平に短く伸びて端部に至る形状を有する。器高は低い。表面にハケ目状の工具痕と思われる刻目状の痕跡が認められる。胎土は精良で細砂粒をわずかに含み、焼成は良好で青灰色を呈する。調整は全体に回転ナデ仕上げで、内面中央部に一部横ナデ痕が認められる。復元口径15cmをはかる。16は天井部からゆるやかに屈曲して直線的に口縁部まで伸びる器形を有する。ボタン状のつまみの中央部をわずかに突出させる。胎土は精良で白色細砂粒を少量含み、焼成は良好で灰色を呈する。前面に丁寧なナデを施し、口縁部とつまみ部の周辺は回転ナデにより仕上げる。口縁部径は14.3cmをはかる。

### 10号竪穴住居跡（第19図、図版5-3）

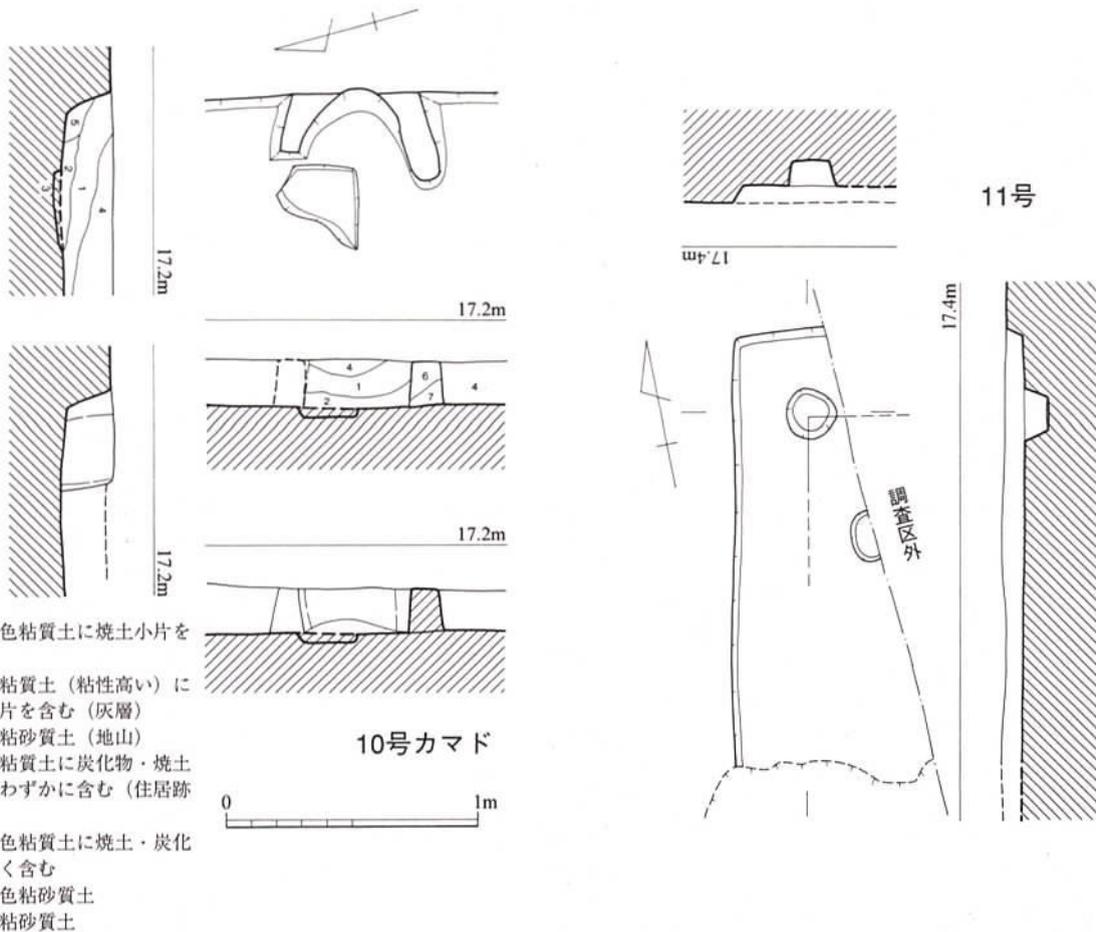
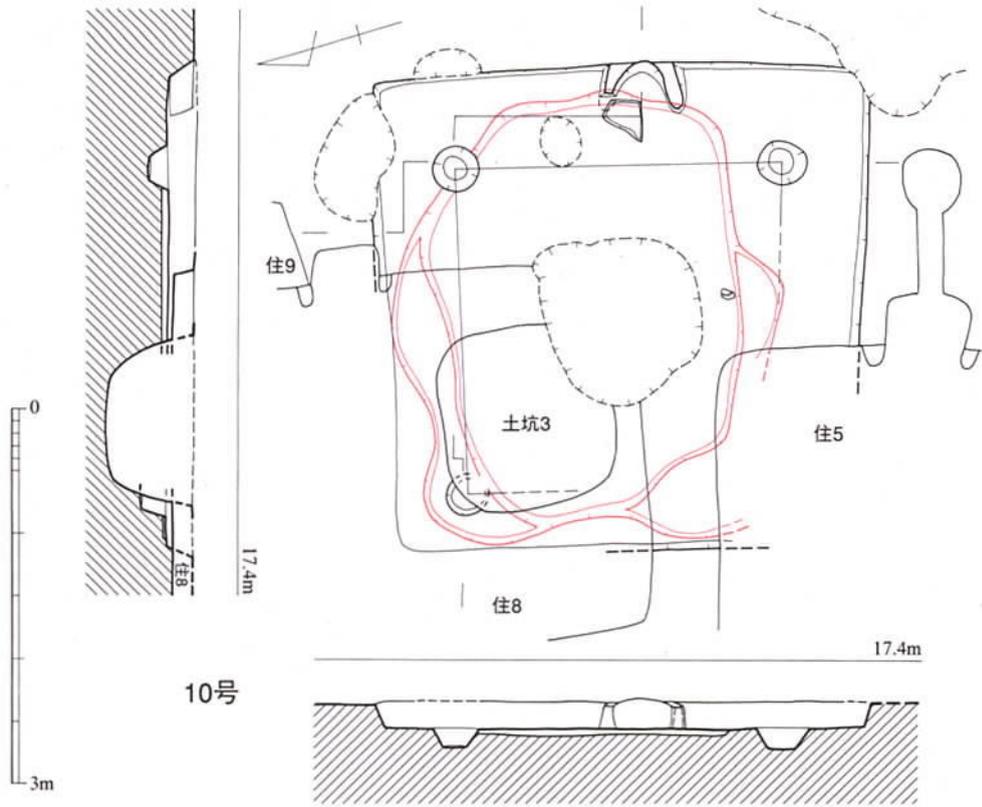
調査区中央東側に位置し、5号住居跡と8号住居跡にそれぞれ南北西側を切られる。第2遺構面検出の28号住居跡とも重なりを持ち、これより新しい。東壁中央に内接型のカマドを有し、軸は東西方向で南に16度ほど振れる。東西・南北ともに3.9mをはかり、平面形態はほぼ正方形を呈する。残存深さは20cm程度。大きく破壊されているにもかかわらず支柱穴のうち3本を確認できた。残る南西隅の一本は5号住居跡により壊されている範囲に存在した可能性が高く、5号住居跡の床面中にいくつかピットを確認したが、位置や深さがあわず確定できなかった。埋土は大きく1層で、暗褐色粘質土であるが、下層ではやや地山由来の暗黄褐色土の混入がみられた。出土土器と切り合い関係から、7世紀末～8世紀初頭と考えてよからう。

#### カマド

住居跡東壁の中央部に内接型のカマドが付設される。住居跡壁体への掘り込みはほとんどなく、全体が地山由来の暗黄褐色土をベースとした粘質土によって構築されている。平面形状は円形を呈する。検出時に左袖の一部を破壊し、左前面を掘りすぎてしまったが、右袖は良好な形で検出できた。袖の長さは35cm程度とやや短く、燃烧部は小さい。袖間は推定で40cm程度。被熱による赤変・硬化面の形成は確認されない。埋土は3層に分けられ、最下層である2層が灰の堆積土、比較的厚く堆積する1層は焼土小片を含み、天井部の崩落層と考えられる。この上に住居跡の埋土と同じ層が堆積しており、天井部が潰れたあとに住居跡の埋没と同じ過程で埋没したものと考えられる。

#### 出土土器（第21図）

土師器（17～19） 17は甑の把手部分である。把手は失われており、付け根部分のみが残存する。



1. 暗茶褐色粘質土に焼土小片を含む
2. 暗褐色粘質土（粘性高い）に焼土小片を含む（灰層）
3. 黄褐色粘砂質土（地山）
4. 暗褐色粘質土に炭化物・焼土小片をわずかに含む（住居跡埋土）
5. 暗茶褐色粘質土に焼土・炭化物を多く含む
6. 暗茶褐色粘砂質土
7. 茶褐色粘砂質土

第19図 10号竪穴住居跡・カマド、11号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

胎土は精良で焼成はやや甘く、表面は全体に摩耗が進んでいる。色調は灰橙色～黄橙色を呈し、内外面ともにナデ仕上げだが指頭圧痕を良く残す。18は椀型土器。底部からゆるやかに湾曲して口縁部を丸く収める小型の土器で、器壁はやや厚い。胎土には細砂粒をやや含み、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。復元口径は9.8cmをはかる。床下掘り込み出土。19は坏。後述する須恵器の坏(20)と同様の形態を持ち(須恵器模倣坏)、平坦な底部から屈曲して、やや開きながら上方に伸びる。高台を有し、断面形態はやや外に開きながら端部を丸く収める大略平行四辺形状を呈する。調整は前面に丁寧なナデを施し、高台付近は回転ナデ仕上げ。胎土は精良で混和物は少なく、焼成は良好で色調は淡橙褐色を呈する。高台径は11.6cmをはかる。

須恵器(20) 20は坏。平坦な底部から屈曲して開きながら上方に伸び、直線的あるいはやや開きながら口縁部を収める。高台の断面形態は19とやや異なり、ほぼ長形状を呈する。調整は全体を回転ナデ・横ナデによって仕上げ、底部にはヘラ切り痕跡が残る。胎土は精良で細砂粒をやや含み、高台径は8.4cm。

### 11号竪穴住居跡(第19図)

調査区中央部東隅、10号住居跡の東側に隣接して検出した。東側の大半は調査区外に続き、南側は攪乱により大きく破壊されており、規模は不明であるが、西壁は10号住居跡とほぼ平行しており、南北を主軸とした場合東に10度ほど振れるものと考えられる。カマドは検出されず、調査区外の北・東・南いずれかに付設されたものか。残存深さは15cmほどと比較的浅い。柱穴は北西部の一つのみを確認した。出土土器と切り合い関係から、7世紀末～8世紀初頭と考えておきたい。

### 出土土器(第21図)

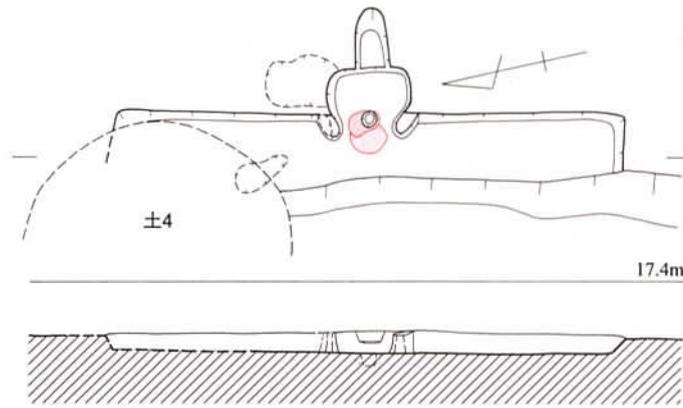
土師器(21・22) 21は大型の甕型土器である。口縁部のみが出土したが、おそらく繭型の胴部で頸が良く絞まり、如意状に強く湾曲しながら外反する口縁部へと続く全体形状を有すると考えられる。調整は全体にナデで胴部にはケズリ痕がみられる。胎土はやや粗めで細砂粒を少量含み、色調は淡橙褐色で焼成は良好。口径は22.6cmをはかる。22は須恵器模倣坏である。平坦な底部から屈曲して直線的(あるいはわずかに外反しながら)に上方に伸びる口縁部を有すると考えられる。高台を有し、断面形態はわずかに平行四辺形気味の長方形でやや斜めに付く。調整は高台付近が回転ナデ、他は横ナデ。胎土は精良で混和物は少なく、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。高台径は8cmほどをはかる。

### 13号竪穴住居跡(第20図、図版7-1)

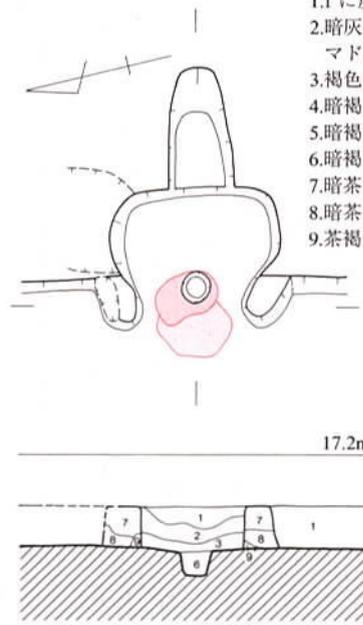
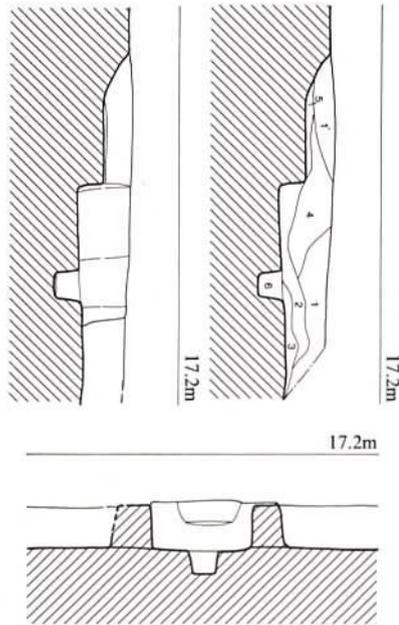
調査区南側中央部で検出した。調査区南東部の段の西側に、住居跡の東壁部分が残存していた。住居跡の中央より西側部分は全て段落ちにより削平されて失われ、北東部のコーナー付近も4号土坑により破壊されていた。ただ、幸運なことに唯一残された東壁の中央部にカマドが比較的良好な状態で残存していた。したがって主軸は東西方向で、13度ほど南に振れる。主軸方向の幅は不明だが、南北幅は4.1mほどをはかる。残存深さは15cmほどである。床面に掘り込まれた施設等は確認できなかった。カマドの形態や出土土器から8世紀初頭～前半に位置づけられるか。

### カマド(図版7-2)

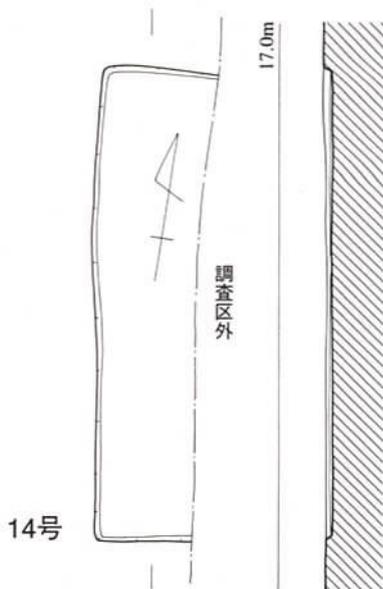
唯一良好な状態で残された東壁のほぼ中央部に、突出型のカマドを検出した。カマドの左側壁は



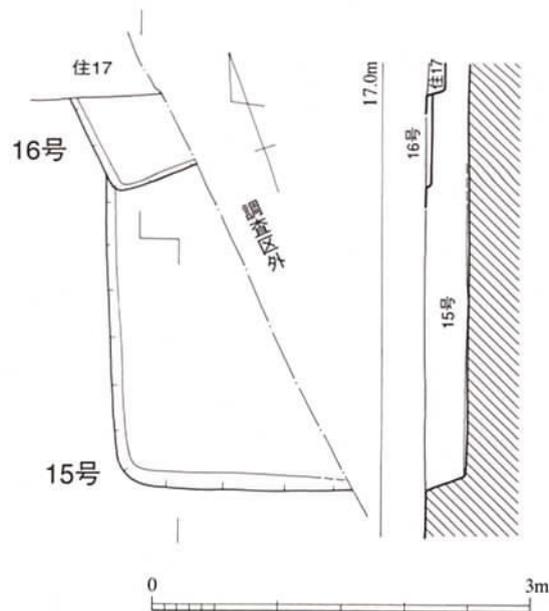
13号



- 1.暗褐色粘質土 (住居跡埋土)
- 1:1 に炭化物・焼土小片をわずかに含む
- 2.暗灰褐色粘質土に焼土ブロックを多く含む (カマド構築土)
- 3.褐色粘質土に炭化物を多く含む (灰層か)
- 4.暗褐色粘質土に焼土細片をやや多く含む
- 5.暗褐色粘質土に炭化物をわずかに含む
- 6.暗褐色粘質土に炭化物・焼土小片を含む
- 7.暗茶褐色粘質土
- 8.暗茶褐色粘質土に焼土小片をわずかに含む
- 9.茶褐色粘砂質土



14号



第20図 13号竪穴住居跡・カマド、14~16号竪穴住居跡実測図 (1/60・1/30)

一部攪乱により破壊されていたが全体形状を知るには十分な残存状況であり、突出部の幅は約60cm、奥行きは35cm、地山由来の暗黄褐色粘砂質土をベースとした茶褐色系の粘質土によって15～20cm程度の長さの袖が構築され、燃焼部の奥行きは50cm程度をはかる。袖はやや内向きに付設されて開口部をせまくしており、開口部の幅は40cm程度となる。熱効率を考えたものであろう。袖間のほぼ中央部に支脚の抜き取り跡と考えられる小ピットを検出した。ピットの前面は非常に良く焼けて硬化面を形成しており、さらにその前面にも被熱による赤変部分が広がっていた。カマド奥壁からさらに煙道部が伸びていたが、煙道部はピットを含め80cm以上の長さを持つ2号・6号とは異なり、30cm程度伸びたところから斜め上方に向かって伸びており、全長で45cm程度しか確認できなかった。日誌遺跡で検出された突出型のカマドの中では、比較的古相を呈するものか。埋土は大きく5層に分けられ、最下層には灰層、その直上にカマド構築土、その上から住居跡の埋土が堆積していた。

#### 出土土器（第21図）

土師器（24） 丸底にバケツ状の胴部、小さく外反する口縁部を持つ小型の甕型土器の口縁部のみの資料である。口縁部の屈曲が短い。調整は口縁端部のみ回転ナデ、胴部内面はケズリ、外面はナデ。胎土は中程度で少量の細砂粒を含み、焼成は良好で色調は淡橙褐色～黄褐色を呈する。口径は13.6cmをはかる。

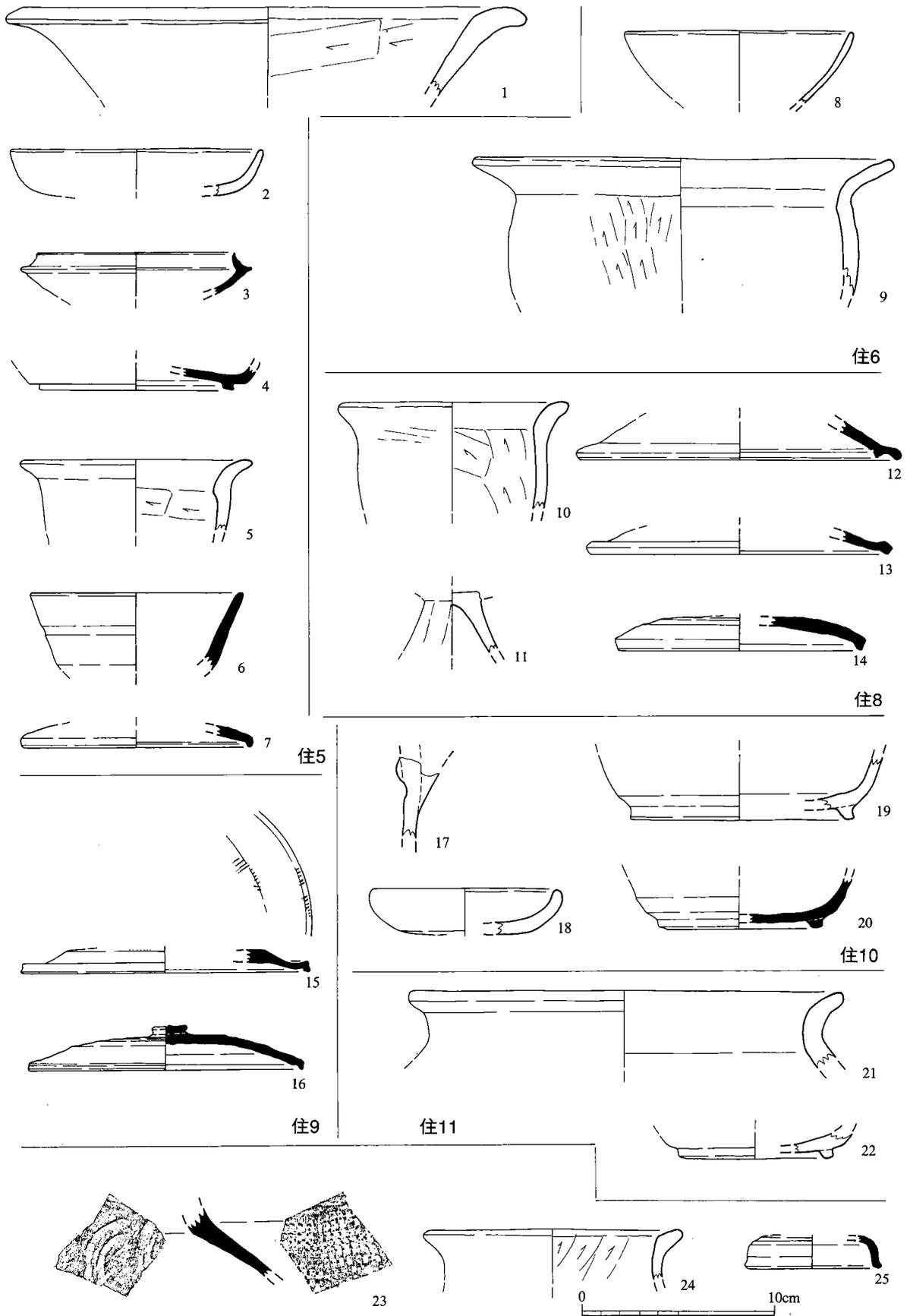
須恵器（23・25） 23は大型甕の胴—頸部境付近の破片である。小片のため大きさは図示し得ない。表面には内外ともに明確なタタキ調整痕が残り、タタキ締めによって器壁はかなり薄く仕上げられている。胎土は精良で砂粒はほとんど認められず、焼成は良好で硬質。色調は内面が暗灰色、外面が青灰色。25は高坏の蓋として提示したが、小形の坏の口縁部か。平坦な天井部からほぼ直角に屈曲して、口縁端部でわずかに外反する器形を有する。屈曲部には沈線状の段が認められる。胎土は精良で混和物は認められず、焼成は良好で色調は濃灰色を呈する。天井部外面に一部回転ヘラケズリ痕が認められるが、口縁部は内外面ともに丁寧な回転ナデ。口径は小さく、7cmほどをはかる。

#### 14号竪穴住居跡（第21図）

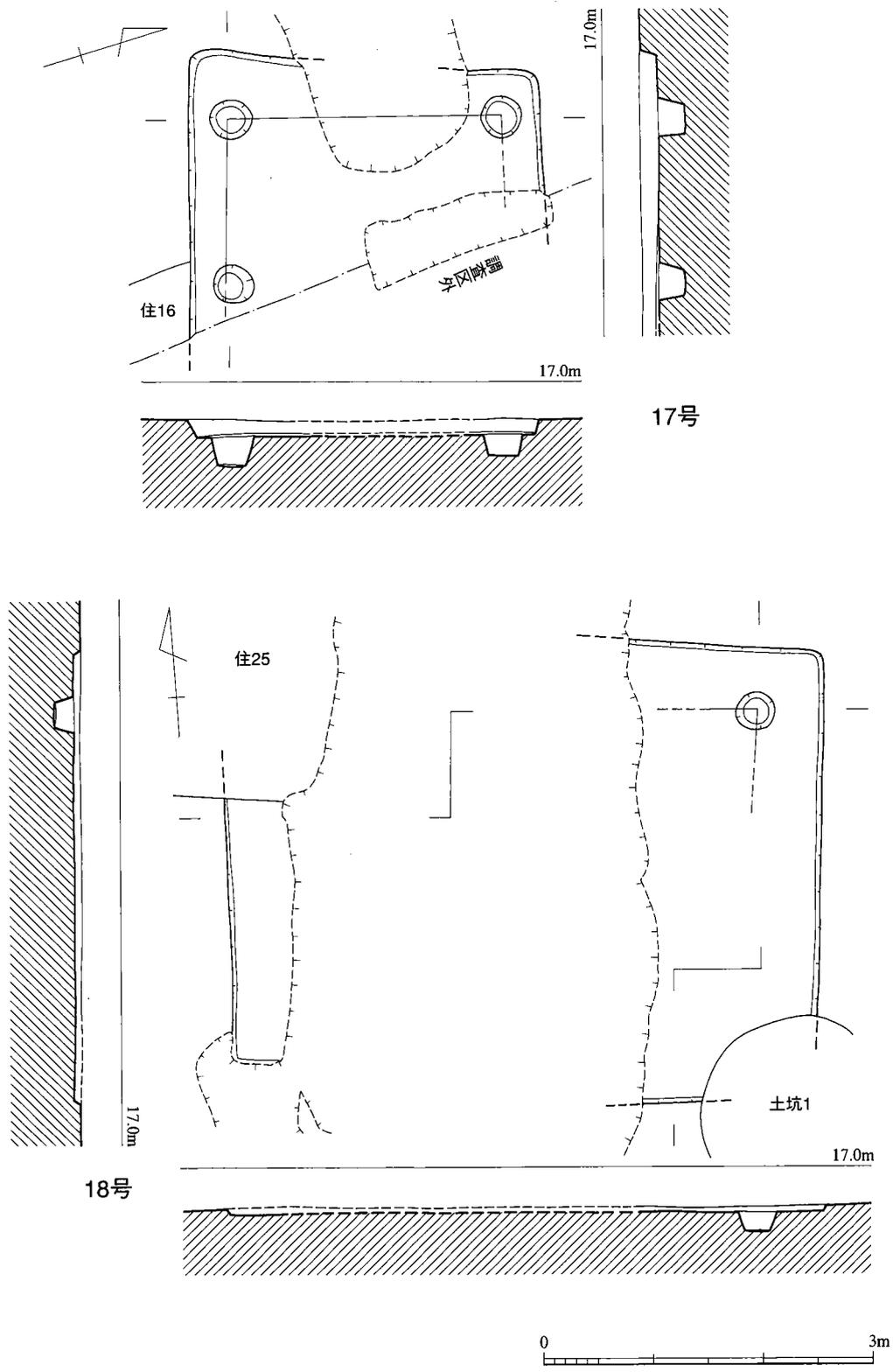
調査区の北よりの東側調査区端部に検出した方形で極めて浅い掘り込みである。この付近は先述の段の下に当たり、削平が著しいために遺構はほとんど残っておらず、この方形の掘り込みも残存深さが数cmと極めて浅い上に、大半が東側の調査区外に広がっており、竪穴住居跡と断定することは難しい。しかし、近辺に同様に極めて浅いながらも方形の掘り込みを持ち、床に柱穴と考えられるピットを持つ、竪穴住居跡と考えられる遺構が複数存在しており、この掘り込みも竪穴住居として報告する。本住居跡はその大半が調査区外に広がっており、全体形状を知るのは難しい。南北長のみが把握でき、3.8mをはかる。出土遺物は土師器の小片がわずかにみられただけであり、いずれも図示し得ない。したがって時期の特定はできない。

#### 15号竪穴住居跡（第21図、図版7-3）

調査区北部の東端部、14号住居跡のすぐ北側から検出された、直角のコーナーと直線的な辺を持つ遺構である。大半が調査区外に広がっているため全体形状を知り得ず、竪穴住居跡とするにはやや疑問も残るが、ここでは竪穴住居跡として報告する。北側は16号住居跡に破壊され、東側の大半が調査区外に広がる。残存深さは30cmほどをはかるが、本住居跡が掘り込まれた地山は基本層序の



第21図 5・6・8・9～11・13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第22图 17·18号竖穴住居跡実測图 (1/60)

項で述べた暗～黒褐色粘質土で、遺構埋土も黒褐色粘砂質土であったために床面に気づかずに本来の深さよりもかなり掘り下げてしまった可能性が高い。本来は、近辺の14・16・17号住居跡などと同様せいぜい数～10cm程度の深さであったものか。この結果、柱穴の検出にも失敗した。主軸方位を南北にとると、東に18度ほど振れる。出土土器は土師器の小片ばかりで図示し得るものではなく、時期も不明である。

#### 16号竪穴住居跡（第20図、図版7-3）

調査区北東部に位置し、15号竪穴住居跡の北側を切り、17号竪穴住居跡に切られる。大半が東側の調査区外に広がっており、全体形状は不明で、南西コーナー部のみを確認した。残存深さは数cm程度と極めて浅く、埋土は暗茶褐色粘砂質土で基盤層とよく似る。主軸方位を南北にとるとほぼこれに沿う。出土土器はなく、所属時期は不明。

#### 17号竪穴住居跡（第22図、図版7-3）

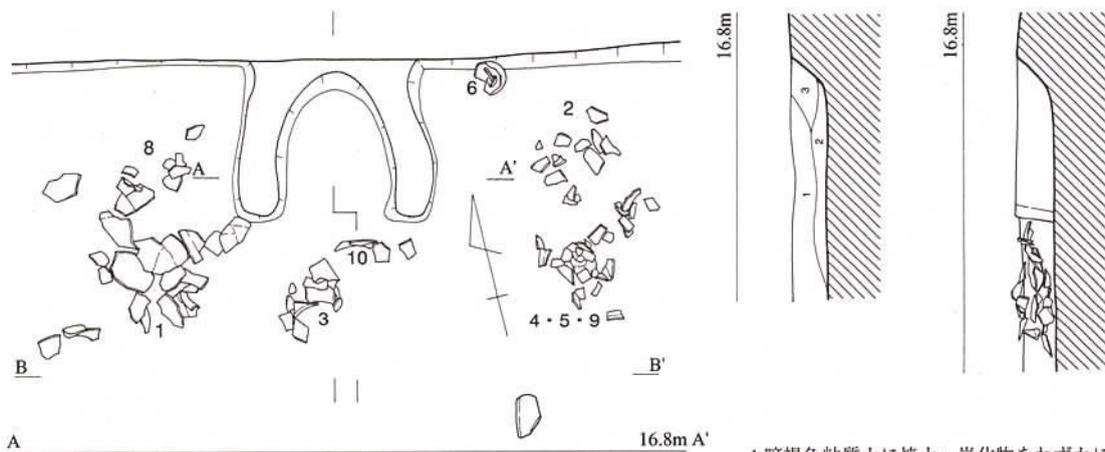
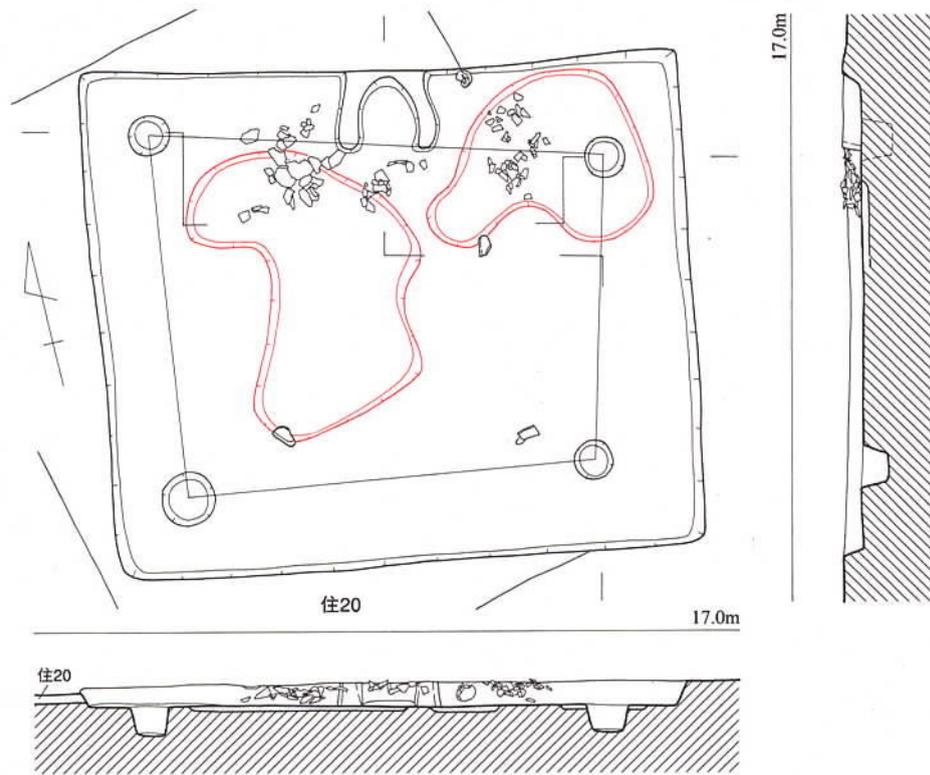
調査区北東隅で検出した。16号住居跡を切る。住居跡の東側半分ほどが調査区外に広がり、西側中央部などを攪乱により破壊されている。床面から主柱穴と考えられるピットを3つ検出したが、このうち南東部の一つは他のピットとの位置関係から主柱穴ではない可能性もある。住居跡の規模は南北幅のみ判明し、およそ3.2mほどをはかる。残存深さは10～12cm程度。遺物は土師器の小片が出土したが図示し得るものはない。

#### 18号竪穴住居跡（第22図、図版8-1）

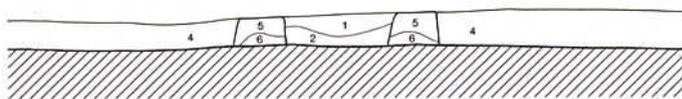
調査区北東部で検出した。14号住居跡の西側に位置する。中央部を後述の3号攪乱坑により、北西コーナーを25号住居跡、南東コーナーを1号土坑により破壊されているが、おおよその全形は把握でき、規模は東西5.2m、南北4.1mほどをはかる東西にやや幅広い長方形状を呈する。残存深さは数cm程度で極めて浅い。破壊から免れた北東コーナー付近に、唯一柱穴と考えられるピットを検出できた。出土土器はなく、時期は不明。ただし、14～18号住居跡、後述の25号住居跡はいずれも層序の項で触れた調査区北東の暗～黒褐色土層の上に切り込んでおり、少なくともこの基盤層の形成以降のものと考えられる。

#### 19号竪穴住居跡（第23図、図版8-2・3）

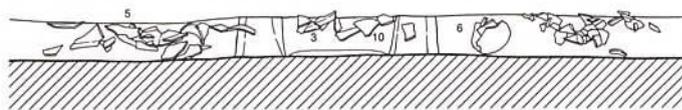
調査区中央北側で検出した比較的大型の竪穴住居跡である。20号住居跡と軸方向こそ違えどほぼ重なり、これを切る。北壁中央部に内接型のカマドをもち、主軸を南北方向とすると12度ほど東に振れる。規模は南北長さが4.1m、東西幅が4.75mほどをはかり、平面形態はやや幅の広い長方形状を呈する。残存深さは10cm程度である。住居跡の埋土は暗褐色粘質土で、この中から床面から数cm浮いた状態で多くの土器が検出された。土器の出土状況は、住居跡の中央部付近では床面に近くほぼ床に接している破片もみられたが、壁に近い部分ではやや浮くように出ており、高いものでは床面より数cm上位から出土するものもあった。土器片は、ある程度接合できる破片でまとまりを作っていたが、完形（あるいはほぼ完形）に復元されるものは一個体もなく、一見するとゴミ捨て場のようにも考えられるが、埋土は分層できず、徐々に埋没した証拠は把握できなかった。床面からは、



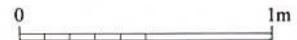
A 16.8m A'



B 16.8m B'



1. 暗褐色粘質土に焼土・炭化物をわずかに含む (住居跡埋土)
2. 暗灰褐色粘質土 (灰層か)
3. 暗褐色粘質土に焼土・炭化物小片を多く含む (カマド崩落土が住居跡埋土と混合したもの)
4. 暗褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 茶褐色粘砂質土



第23図 19号竪穴住居跡・土器出土状況・カマド実測図 (1/60・1/30)

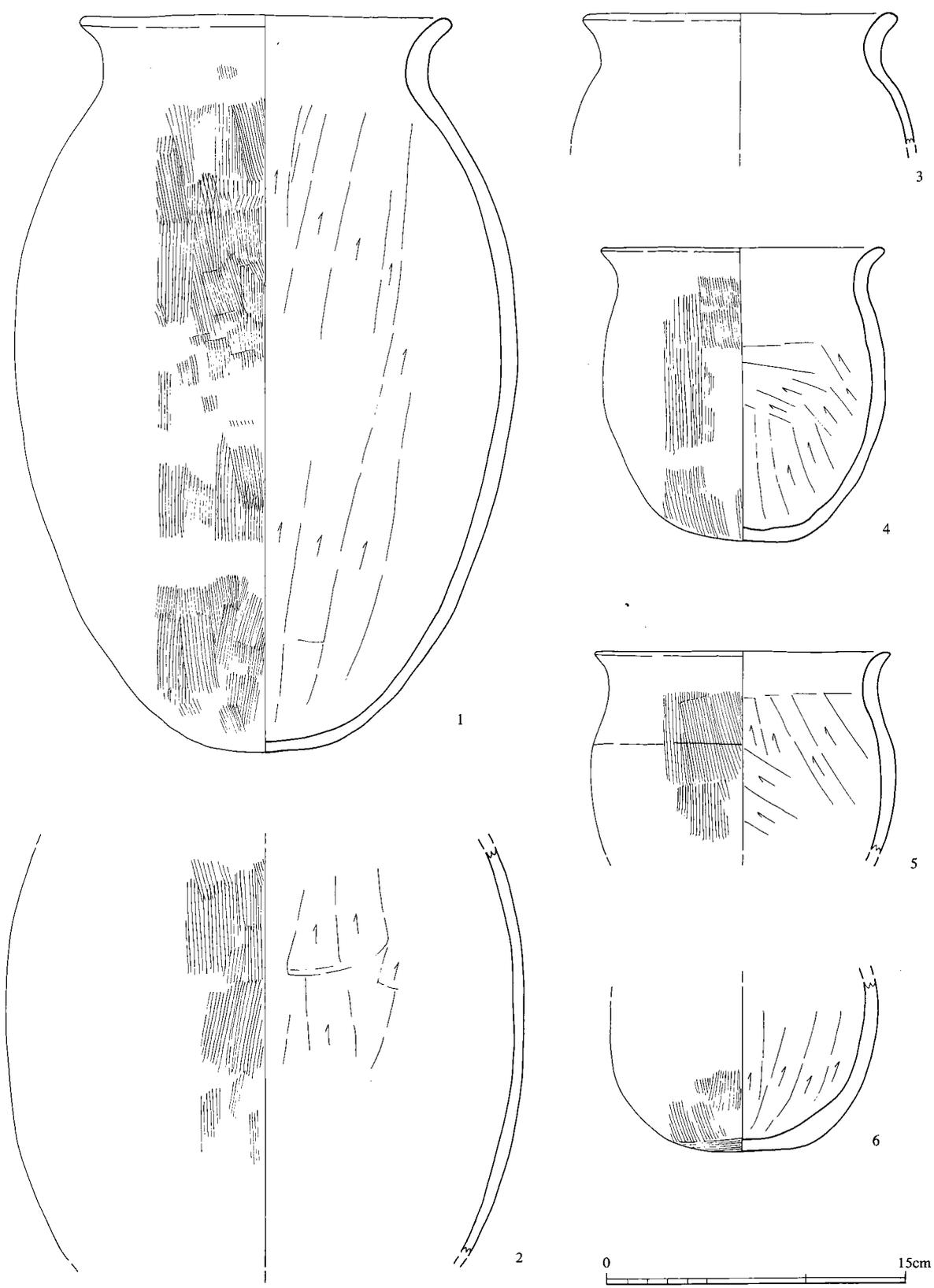
主柱穴と考えられるピットが4つ検出されたほか、中央部と北東隅に不整形の床下掘り込みが確認された。出土土器からはやや時期を断定しがたいが、出土した甕型土器の多くが繭型の胴部を持つものであること、カマドが内接型で突出型のカマドを持つ住居跡よりも古い可能性が高いことから、7世紀代（後半以降）に位置づけておきたい。

#### カマド（図版9-1）

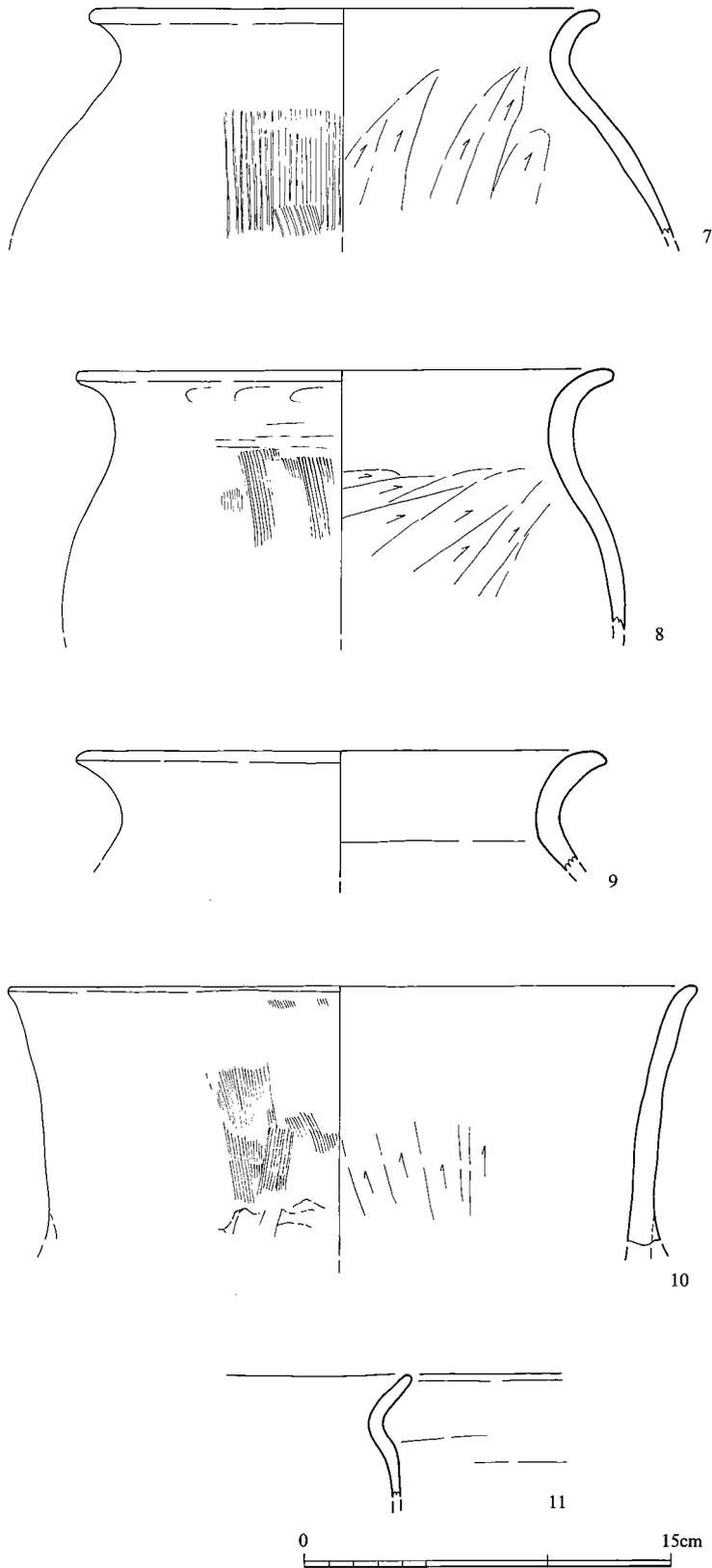
住居跡の北壁のほぼ中央部に、内接型のカマドが検出された。残存している深さの中では住居跡の壁を掘り込んでおらず、カマドの壁体全てが地山由来と考えられる茶褐色粘質土を含む暗～黒褐色粘質土によって構築される。カマドの平面形態は大略⊏型で焚き口に向けてやや広がっており、わずかに内湾して燃焼部を形成する。燃焼部の規模は幅が40cm、奥行きが50cmとやや大型で、焚き口付近に暗赤褐色に変色した部分が検出されたが、やや掘りすぎたために失われた。煙道は削平のため確認できなかったが、斜め上方に抜けるものか。カマド埋土は大きく2層に分かれ、下層には灰層が厚く堆積し、上層にはカマド壁体・天井と考えられる焼土や炭化物の薄片を多く含む、住居跡埋土とよく似た土が認められた。このことから、カマドの天井部が崩落する前に住居跡の埋土がカマド内に流入して、同時にカマド壁体が少しずつ崩落して埋土と混ざりながら埋没していることが分かる。

#### 出土土器（第24・25図、図版15・16）

土師器（1～11） 1・2・7～9は大型の甕型土器である。いずれも丸底に長球形（繭型）の胴部を持ち、頸部がやや強く締まってから口縁部を強く如意状に外反させる器形を持つものであろう。1は全形が判明する資料であるが完形ではなく、半分程度が残存する。丸底からゆるやかに立ち上がって長い繭型の胴部へと至り、頸部がやや強く締まってから如意状に強く外反する器形を持つ。頸～胴部境には明瞭な稜は認められないが、内面にはケズリ調整と横ナデ調整の接点に不明確な境界が認められる。底部付近は内外ともにナデ調整を行うが、胴部は内面が単位の非常に長いケズリ、外面はやや単位の短いハケ目により調整される。ケズリ調整は下から上、ハケ目調整は上から下方向が基本で、外面調整を行う際には天地を逆に置いていた可能性が高い。頸～口縁部は回転ナデにより丁寧に仕上げる。胎土はやや粗めで比較的大きな砂礫を含み、焼成は良好で色調は橙色～黄褐色を呈する。器高は37.2cm、胴部最大径は25.2cm、口径は18.6cmをはかる。2は1と同じ器形を持つ甕型土器の胴部片である。色調や胎土の質がよく似ていたため当初1と同一個体である可能性を考えたが、器壁の薄さ、調整などに若干違いが認められ、出土位置も異なることから別個体として報告する。残存部は胴部であり、緩やかな長円（繭）型を呈する。調整は内面がケズリ、外面はハケ目である。内面のケズリ調整は下から上方に向かって施されるが、単位は1と比べてやや途切れがちである。外面のハケ目調整の方向は確認できず、1と比べてやや粗雑である。最大径26cmほどをはかる。胎土はやや粗くやや大きめの砂粒を含み、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。7も同様の器形を有する大型の甕である。胴部上半から口縁部にかけて残存していた。1と比較して胴部のふくらみ角度が顕著であり、最大径がより大きくなる可能性が高い。この結果全体形は1よりもややずんぐりした形になるか。胎土はやや粗めでやや大きめの砂粒をまばらに含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。調整は胴部内面が下から上方向のケズリ、胴部はおそらく上から下方向のハケ目。口縁部付近は内外ともに丁寧にナデ仕上げを行う。口縁部径は21cmをはかる。8も同様の器形を持つ甕であるが、前述の3点と比べてやや小型である。胴部のふくらみも比較的小さく、胴部最大径



第24図 19号竖穴住居跡出土土器実測図その① (1/3)



第25図 19号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/3)

と口縁部径がほぼ同じサイズとなる。胎土はやや粗めで5mm以下の砂粒をまばらに含み、焼成は良好で内・外面ともに橙～灰黄褐色を呈する。調整は内面が斜め方向のケズリ、外面が縦方向のハケ目、口縁部付近はナデ仕上げを施すが、外面に成型時の指頭圧痕が残る。口径22cm、胴部最大径24cm弱をはかる。9はやはり同様の器形を持つ大型の甕であり、これも口縁部のみ遺存するため全体の器形は不明である。焼成がやや甘く表面が摩滅しているために表面調整がやや不明瞭であるが、口縁部付近には回転ナデ痕がみられる。色調は橙色で胎土はやや粗く、細砂粒をまばらに含む。口径は復元で21.8cmをはかる。3～6は小型の甕型土器である。いずれも丸底でやや細長い球形の胴部を持ち、頸部が緩く締まって口縁部が如意状に外反する器形を持つ。3は胴部上半から口縁部にかけての資料である。全体に摩滅しており調整は不明。胎土はやや粗く細砂粒を全体に含み、色調は淡橙～黄橙色を呈する。口径は15.8cmをはかる。4は全形が判明する資料である。頸部のしまりがやや緩いため口縁部の外反度も軽い。外面ハケ目、内面はケズリ調整、口縁部は回転ナデ仕上げ。焼成がやや甘く全体に摩滅気味。胎土は精良だが細砂粒がやや目立ち、中には1cmを超える砂粒もみられる。色調は橙～灰橙色、器高は14.2cm、口径は14.8cm。5は胴部～口縁部が残存する。4よりもさらに頸部のしまりと口縁部の外反が緩い。内面はケズリ、外面を

ハケ目、口縁部付近を回転ナデ調整により仕上げる。胎土は比較的精良で細砂粒をまばらに含み、焼成は良好で色調は赤褐色～褐色。復元口径は14.8cmをはかる。6は胴部下位～底部が残存する資料。内面をケズリ、外面ハケ目調整。胎土は比較的精良で5mm以下の細砂粒をやや多く含み、焼成は良好で色調は赤褐色～橙褐色を呈する。10は甑形土器の口縁部片である。わずかに外湾しながら伸びる器形を持つ。把手が取り付く部分から割れているが、把手を接着した痕跡が残る。調整は胴部が内面ケズリ、外面ハケ目調整で、把手の取り付く部分は不定方向の粗いナデ仕上げ。口縁部は丁寧な回転ナデ仕上げ。焼成は良好だが表面はやや摩滅し、色調は橙色を呈する。胎土は精良で細砂粒を含む。口径は29cmをはかり、比較的大型である。11は小型の椀（鉢）型土器か。小破片で全形がやや不明だが、おそらく丸底とやや平たい胴部を持ち、頸部で屈曲して直線的で短い口縁部を持つものか。胎土は精良で細砂粒をやや含み、焼成がやや甘いため表面は摩滅がみられるが、外面を板状工具によるナデ、口縁部は回転ナデか。

## 20号竪穴住居跡（第26図、図版8-2）

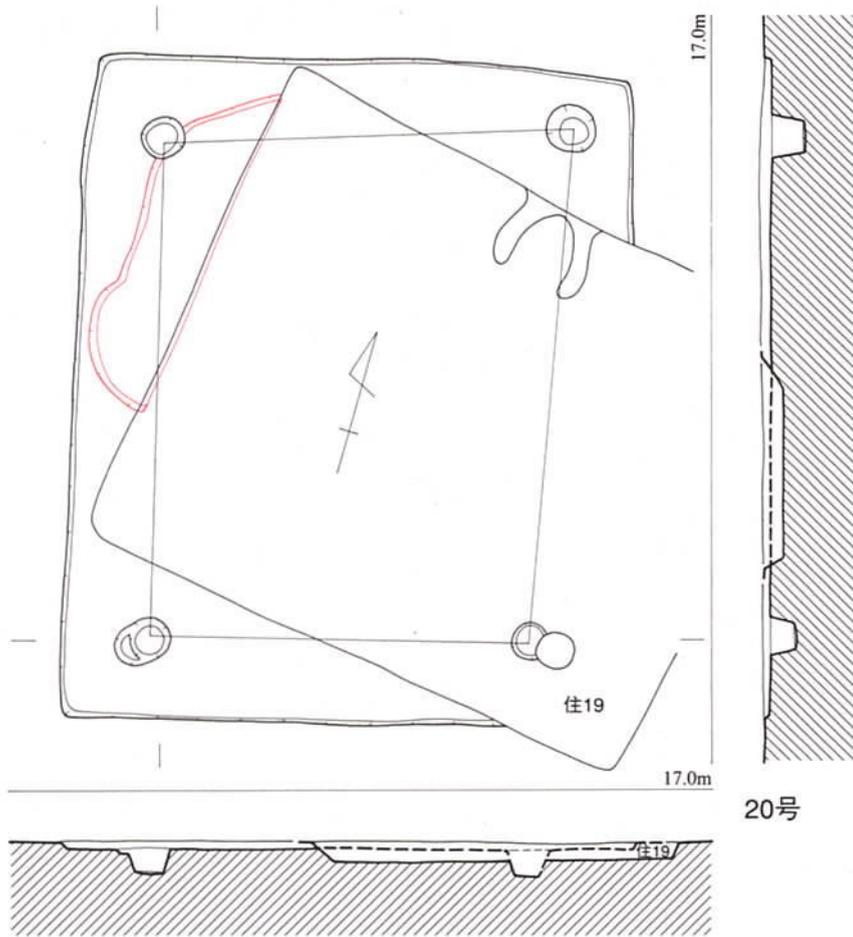
調査区中央北側で検出した住居跡である。19号住居跡とほぼ重なるが、軸がずれるため全形が分かる状態で検出できた。19号住居跡に大きく破壊され、特に南東部コーナー付近から東壁にかけてはほとんど失われている。カマド位置は不明であるがおそらく失われた東壁付近に付設されたものか。この想定に従い軸を東西にとると、東西長が4.4m、南北幅が5.2mのやや横に長い長方形の平面形態となるが、これは19号住居跡など本調査区で多くみられる住居跡の平面形態であり、また本調査区ではカマドの位置が東側か北側に限られることと合わせ、この想定を裏付けるものといえよう。主軸は真東から12度ほど北にずれる。残存深さが10cm程度と浅いために19号住居跡に床面を大きく破壊されていたが、それにもかかわらず柱穴を4本と一部に床下掘り込みを確認できた。出土土器は土師器の小片のみで図化できるものはない。19号住居跡に切られていることからこれよりも古く、7世紀代の所産であろうか。

## 21号竪穴住居跡（第26図、図版9-2）

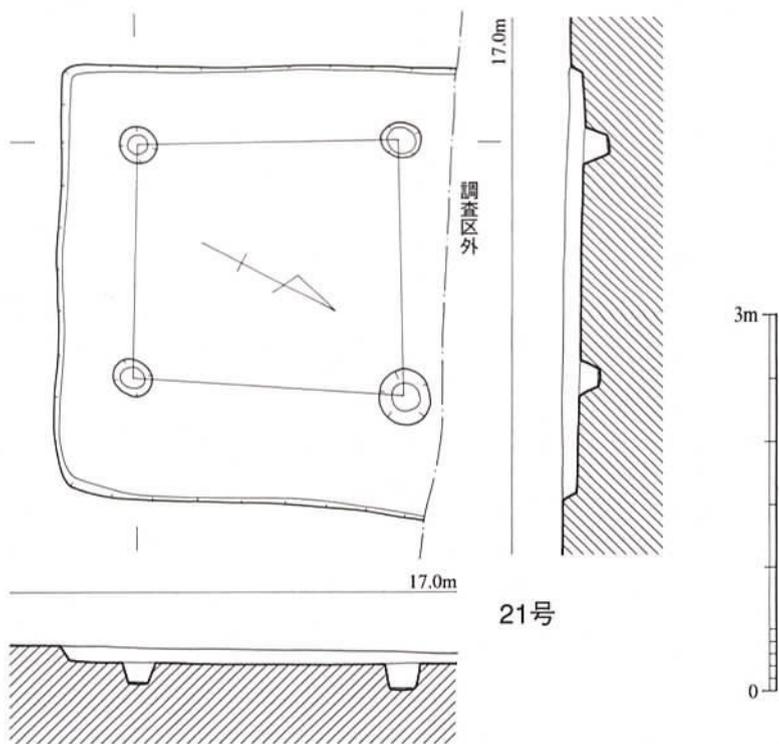
調査区中央北端部で検出した。第2遺構面で検出した29号住居跡と重なりを持ち、これより新しい。北壁の全てが調査区外に広がっており、カマドが検出されなかったことから、北側の調査区外にカマドが存在した可能性が高い。住居跡の主軸を南北にとると30度近く西に振れている。住居跡の規模は、把握できる東西方向で3.4mをはかり、やや小振りである。残存深さは15cm前後で、埋土は暗褐色粘質土であるが、下層には地山由来の白色の砂質分を多く含む。床面からは柱穴を4本検出した。この柱穴の位置から考えて、住居跡の南北長は現状（3.1m）をさほど超えるものではなく、平面形はほぼ正方形を呈するものと考えてよからう。出土土器や切り合い関係から、所属時期は7世紀代末～8世紀前半の幅で考えたい。

## 出土土器（第30図）

土師器（1） 1は土師器の高坏。脚上部～坏底部のみが残存し、全形は不明だが、低脚で小型の高坏か。焼成がやや甘いため外面が摩滅しており調整はやや不明瞭であるが、脚外面が工具ナデ、内面は指ナデ、坏部内面も横ナデか。胎土は精良で細砂粒を若干含み、色調は淡橙褐色を呈する。



20号



21号

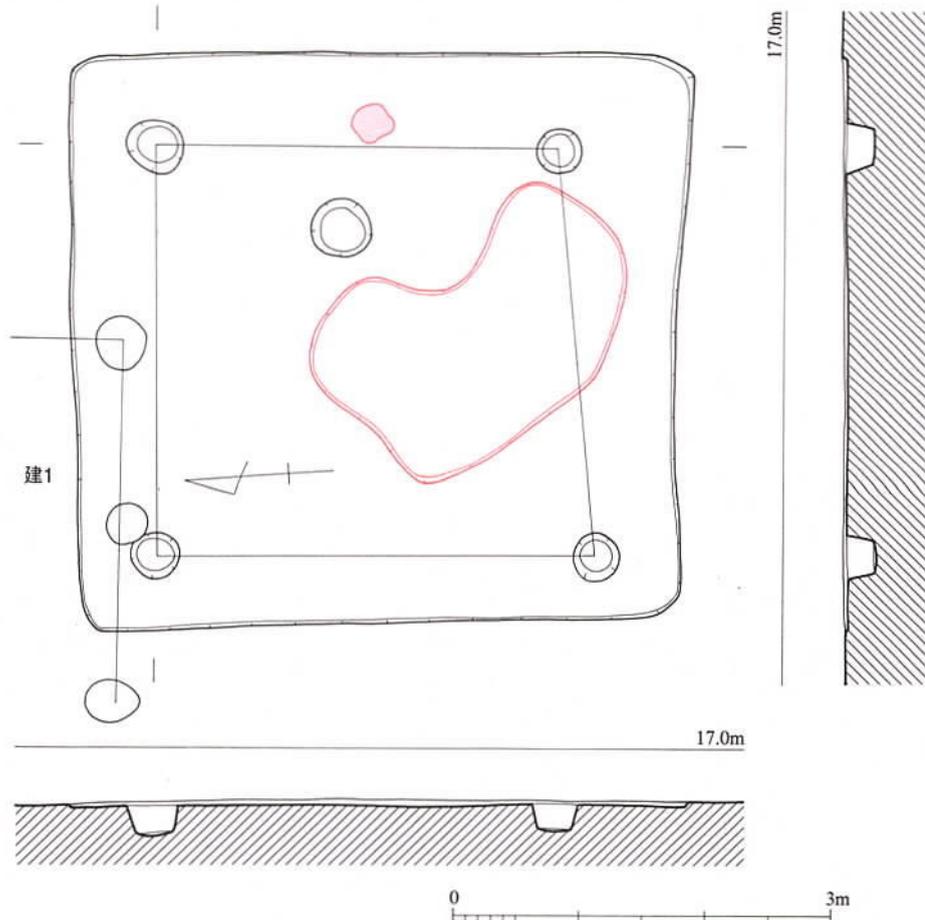
第26図 20・21号竪穴住居跡実測図 (1/60)

### 22号竪穴住居跡（第27図、図版9-3）

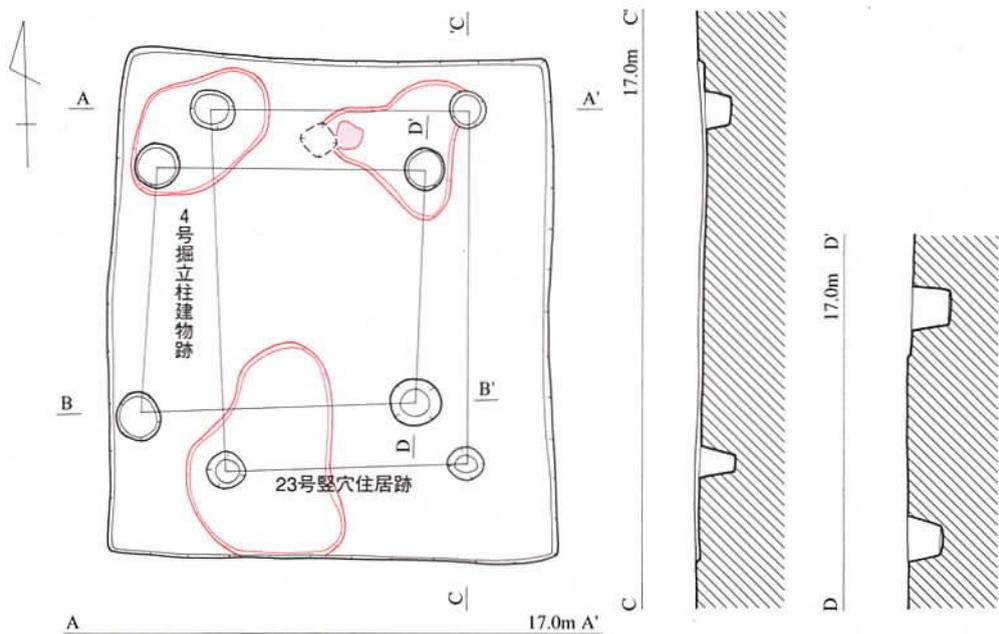
調査区北西部で検出した竪穴住居跡である。1号掘立柱建物と切り合い関係を有し、22号住居跡が新しい。住居跡は著しく削平されており、残存深さは数cmと極めて浅かった。このため、住居跡の北西部は壁がほとんど失われたような状況でやや線引きが難しかったが、遺構検出当初からカマドの床面と考えられる赤変部が露出しており、この赤変部とわずかに確認できた他の壁などとの位置関係から遺構の全形を確定した。カマドは本来東側の壁の中央部に内接型のものが付設されていたと考えられるが、削平のため袖は失われ、被熱による床面の赤変部だけを確認することができた。床面からはこのほかに4つの主柱穴とピット、そして不整形の床下掘り込みが検出された。住居跡の規模は東西を主軸にとると東西長が4.6m、南北幅が4.8mをはかり、平面形態は大略正方形を呈する。方位は真東から南に約3度前後振れる。出土土器がないために時期比定は難しい。

### 23号竪穴住居跡（第28図、図版10-1）

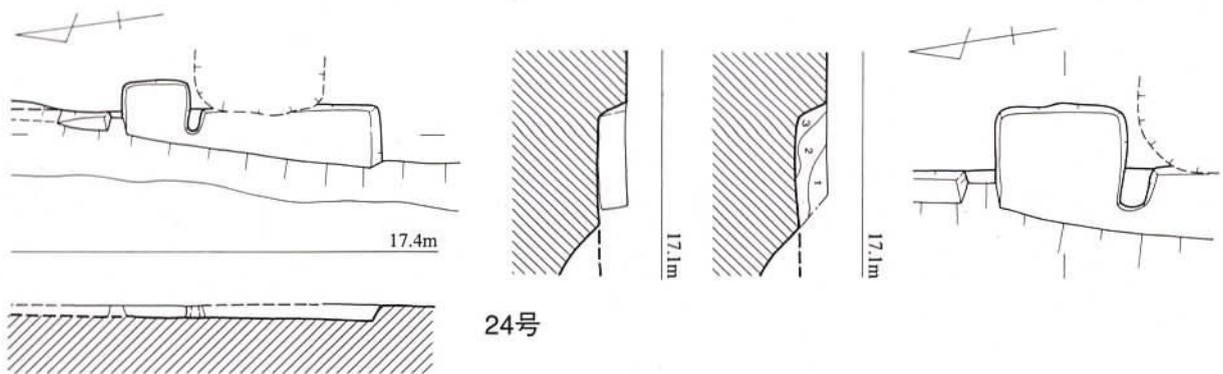
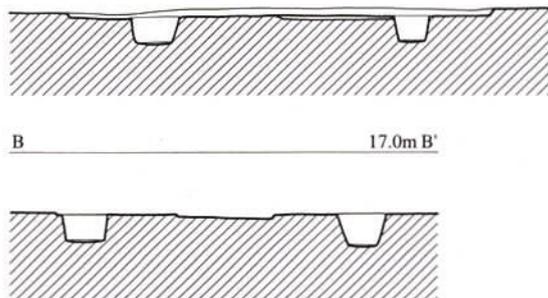
調査区北西隅で検出した竪穴住居跡である。22号住居跡の西側に隣接する。22号住居跡と同様に著しく削平されており、残存深さが5cm弱しかなかったため、住居跡の北壁中央付近にカマドによる被熱を受けて赤変したとみられる赤色の硬化面を検出したが、カマドの袖を検出することはできなかった。硬化面の位置から、おそらく内接型のカマドがあったものと考えられる。主軸方位は南北で、わずかに西に振れる。住居跡の規模は、南北4.0m、東西3.9mのほぼ正方形を呈し、隣接す



第27図 22号竪穴住居跡実測図 (1/60)



23号住居跡・4号建物跡



24号

- 1.暗茶褐色粘砂質土に炭化物小片を少量含む（住居跡埋土）
- 2.暗褐色粘質土に炭化物・焼土小片を多く含む（カマド構築土か）
- 3.暗灰褐色粘質土（灰層か）



第28図 23号竪穴住居跡、4号掘立柱建物跡、24号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

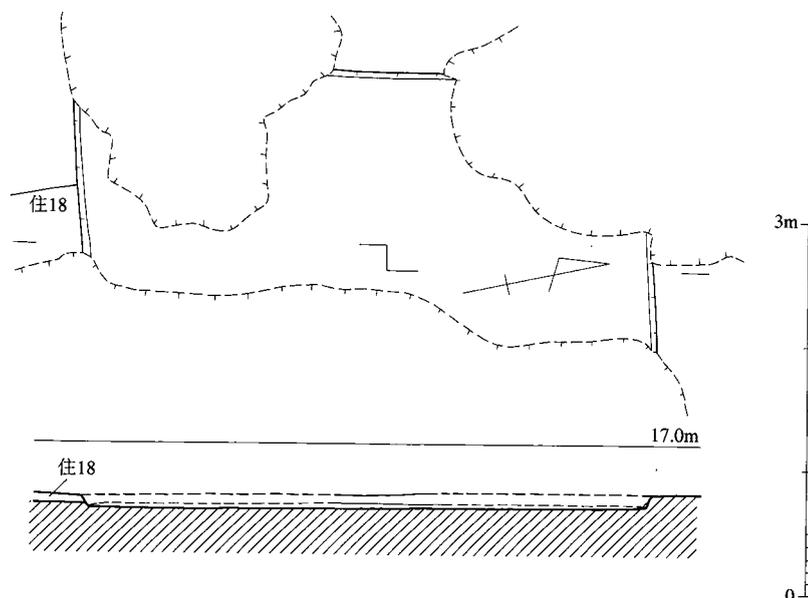
る22号住居跡と比べやや小型である。4号掘立柱建物（おそらく竪穴住居跡の柱穴のみ残ったもの）と重複し、これより新しい。遺物はほとんど出土しておらず、時期を決めることは難しい。

#### 24号竪穴住居跡（第28図、図版10-2）

調査区中央やや東よりで検出した。調査区東側の段の上で、住居跡の東側の壁とカマドを検出したが、住居跡の大半は段落ちよりも西側に広がっていたものと考えられ、削平により失われていた。また、残存している東壁も、一部攪乱により破壊されている。東壁の中央部付近と考えられる場所に突出型のカマドを検出した。住居跡の大半が段落ちにより失われているために規模を把握することは難しいが、カマドで折り返すと推定幅は1.8mほどになるだろうか。かなり小型の住居跡である。主軸は東西方向から8度ほど南に振れる。埋土は暗茶褐色粘砂質土で、残存深さは深いところでも12cm程度である。出土土器から時期を述べるのはやや難しいが、おおよそ8世紀を前後するあたりであろうか。

#### カマド

住居跡の東壁を奥行き25cmほど、幅ほど長方形に掘り窪め、袖を15cmほど構築してカマドの燃焼部を作り出したものである。煙道部は削平により失われて、痕跡は確認できない。住居跡が小型であるのに対応してカマドも小規模である。埋土は大きく3層に分かれ、最下層が粘性の強い灰層で、奥壁を中心に堆積する。2層は炭化物や焼土の小片を多く含み、厚く堆積することから、カマド構



第29図 25号竪穴住居跡実測図（1/60）

築土が崩落したものと考えられる。最上層は住居跡の埋土と同じ暗茶褐色粘砂質土であり、カマドの天井が崩落したあとに流入したものであろう。

出土土器（第30図）

土師器（2） 2は大型の甕の口縁部か。口縁部片であり全形を復元するには難があるが、あえて述べれば、この時期にしばしばみられる胴部繭型のものではなく、おそらく底部がすぼまるバケツ型を呈するものか。器壁は比較的薄く、調整は口縁部付近が回転ナデ、胴部内面はケズリ、外面はハケ目を施す。焼成がやや甘いためか器壁の摩滅が進んでいる。胎土は比較的良質で細砂粒をやや多く含み、灰黄褐色を呈する。口縁部径は27cmをはかる。カマドの埋土中から出土した。

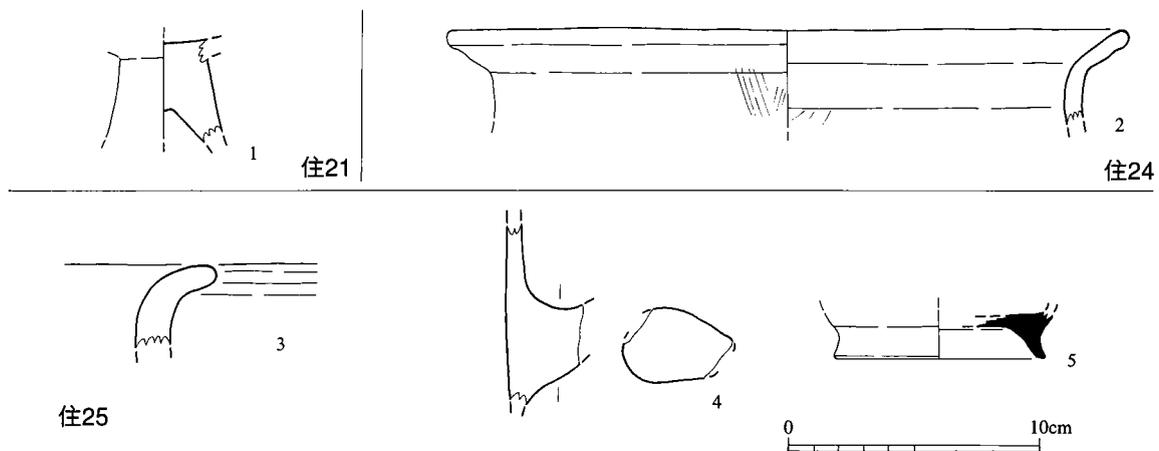
25号竪穴住居跡（第29図、図版8-1）

調査区北東部で検出した。18号住居跡と重複し、これより新しい。東側の大半を3号攪乱坑により大きく破壊されて東壁を失っており、このほかに南西部のコーナーを2号攪乱坑により、北西部のコーナーも攪乱坑により破壊されて失っている。残存深さも10cm弱と浅く、柱穴等も確認できなかった。規模は南北長のみ判明し、約4.5mをはかる。方位は南北を主軸とすればこれより12度ほど東に振れる。出土土器より、7世紀後半～末に位置づけられるか。

出土土器（第30図）

土師器（3・4） 3は大型の甕の口縁部片である。小片であり全体形や口縁部径は不明だが、おそらく繭形の胴部を持つものか。胎土はやや粗く細砂粒を多く含む。焼成はやや甘く、器表が摩滅しているため調整は不明。色調は淡橙褐色を呈する。4は甕の胴部片で、把手の取り付け部分である。小片のため径や傾きは不明である。表面はやや摩滅しているが調整は判明し、内面、外面ともに粗い指ナデを行っている。把手の断面形態はかなり不整形である。胎土は精良で混和物はほとんど確認されず、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。

須恵器（5） 坏の底部片である。平坦な底部から屈曲して上方に伸びる器形を有する。高台があり、断面形態はかなり細く伸びる。高台の付着位置がかなり屈曲部に近い。調整は、高台付近の外面が回転ナデ、その他の部位は横ナデで丁寧に仕上げる。胎土は精良で混和物をほとんど含まず、焼成は良好で色調は淡橙褐色を呈する。高台径は復元で8.4cmをはかる。



第30図 21・24・25号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

## 第2項 掘立柱建物跡

先述の通り調査区の西側は水田耕作時に大きく削平されていた。この削平は南側にいくほど著しく、北側には数棟の竪穴住居跡がかろうじて残っていたが、南側には全く存在せず、ピット群が広がっているだけであった。しかし、これらのピット群は本来竪穴住居跡等の柱穴であった可能性が高いと考え、できるだけ建物として把握するよう心がけ、2・3号掘立柱建物の2つの建物を想定するに至った。ただ、これらは竪穴住居跡の柱穴の可能性もあるが、一方では1間×1間の規模の掘立柱建物である可能性もあり、調査・報告においては掘立柱建物の項で取り扱うこととしたい。また、これとは別に調査区北西部で1・4号掘立柱建物を調査しているが、このうち4号掘立柱建物も1間×1間であり、竪穴住居跡の柱穴の可能性もある。

### 1号掘立柱建物跡（第31図、図版12-1）

調査区北西部で検出した1間×2間の東西棟である。主軸は東に対して8度ほど南に振れる。2号竪穴住居跡と切り合い関係にあり、22号竪穴住居跡が先行する。ややゆがんでおり柱間は一定ではないが、梁行、桁行ともに心心間でおおよそ1.4mほどをはかる。検出時に埋土の中央に黒色の粘質土が径15センチほどの円形に分布していたが、半裁して土層を検討したところ、柱を抜いたあとに表土が流入したものと判明した。柱穴は非常に浅く、平均で20cm弱しか残っていなかった。出土遺物はなく時期は不明。

### 2号掘立柱建物（第31図、図版12-2）

調査区西側やや南寄りで検出した。かなりゆがみが著しく、特に北西の柱穴が大きくはずれた位置にあったため、掘立柱建物として報告するのはややためらわれた。しかし、埋土や深さが共通することから、積極的に取り上げた。埋土は黒褐色粘質土で、下層はやや砂質分が多い。3本の柱穴の底部に段が認められるが、このうち南側の2本の底部がやや掘りすぎており、本来は中間の段の部分が底部に当たるものであろう。ゆがみのため正確ではないが、軸を南北方向とするとおおよそ16度東に振れる。柱間は心心間で2.1m×1.9mをはかり、竪穴住居の柱穴とすればおおよそ3.5m×2.9m程度の小規模なものであったと考えられる。出土遺物はなく、時期は不明。

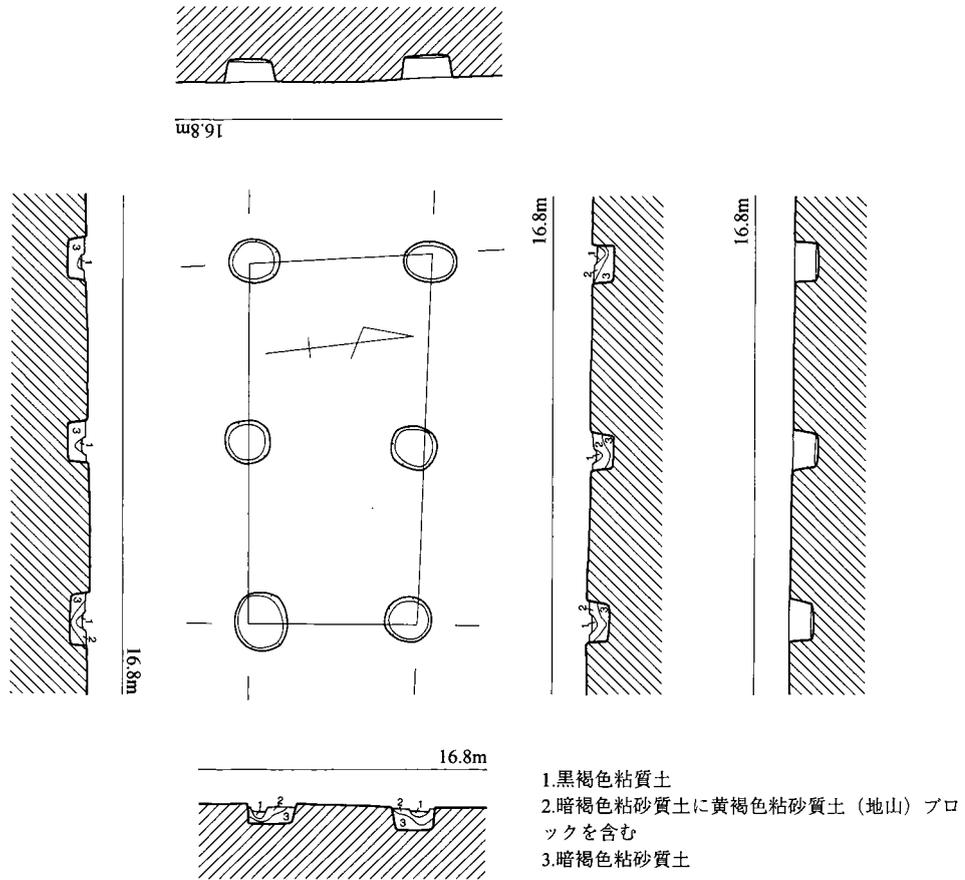
### 3号掘立柱建物（第31図、図版12-2）

西側段落ちのほぼ中央で検出された1間×1間の建物であり、2号建物と同様に竪穴住居跡の柱穴である可能性を考えて積極的に取り上げた。2号建物よりもさらに小規模で、柱間は心心間で1.8m×1.2mほどである。竪穴住居跡であるとするれば、規模は2.8m×2.1mほどとなろうか。柱穴の埋土はいずれも黒褐色粘砂質土であり、深さは全て15cm内外で共通する。軸を南北方向とすれば、北に向かっておおよそ11度ほど東に振れる。出土遺物は認められず、時期は不明である。

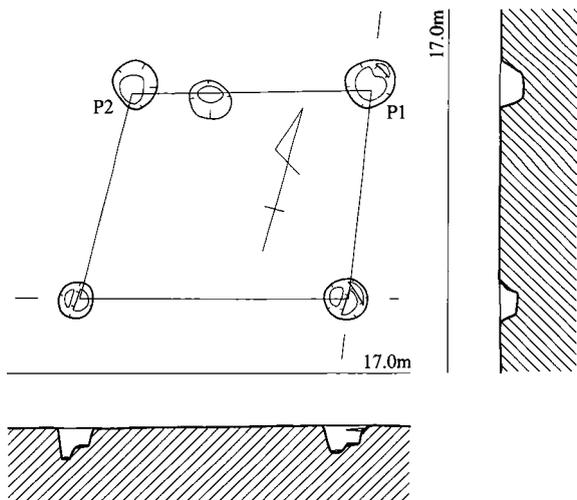
### 4号掘立柱建物（第28図）

調査区北西部で検出された1間×1間の建物跡である。23号竪穴住居跡と重複し、これを先行する。柱間距離はいずれも心心間で、東西2.1m×南北1.8mをはかり、やや東北に細長い。主軸はほぼ南北方向である。出土遺物は認められず、時期は不明である。

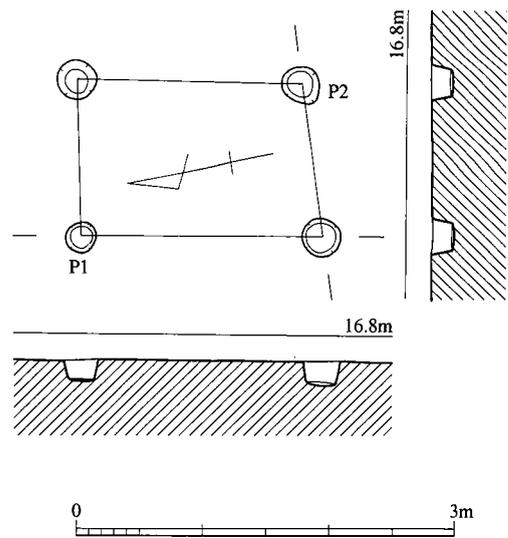
1号



2号



3号



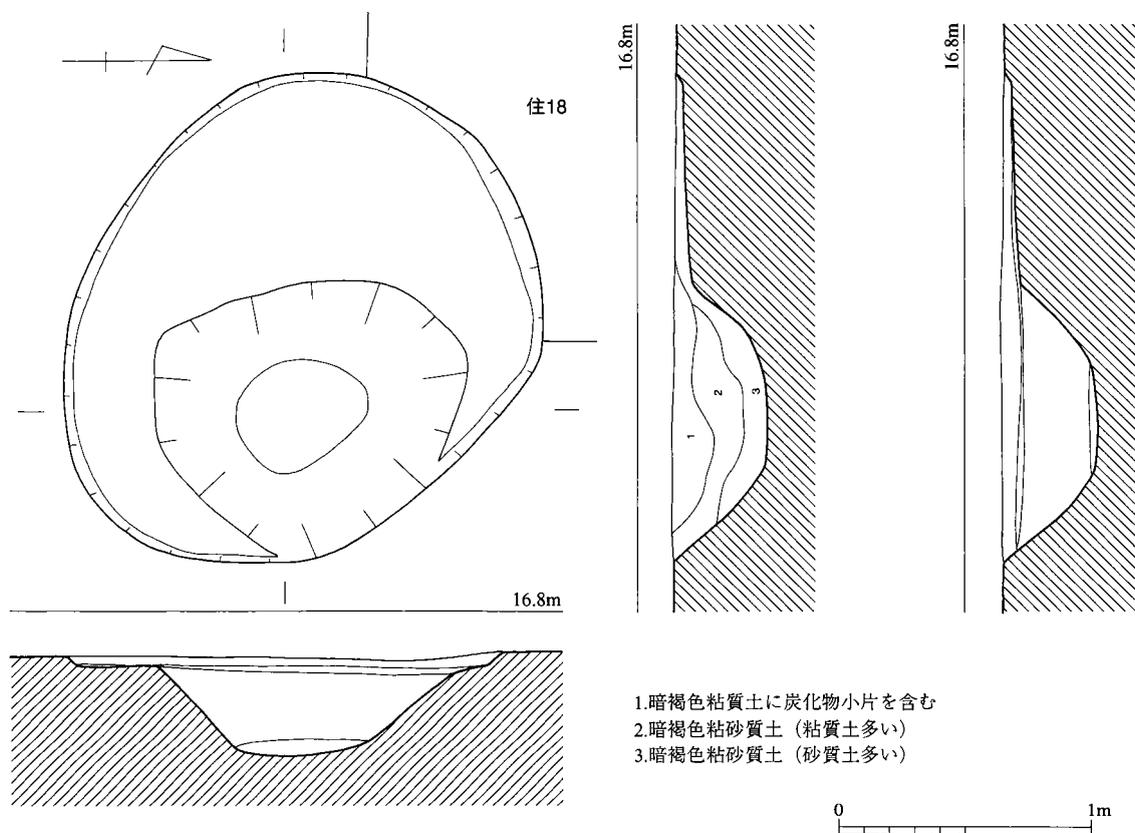
第31図 1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

### 第3項 土坑

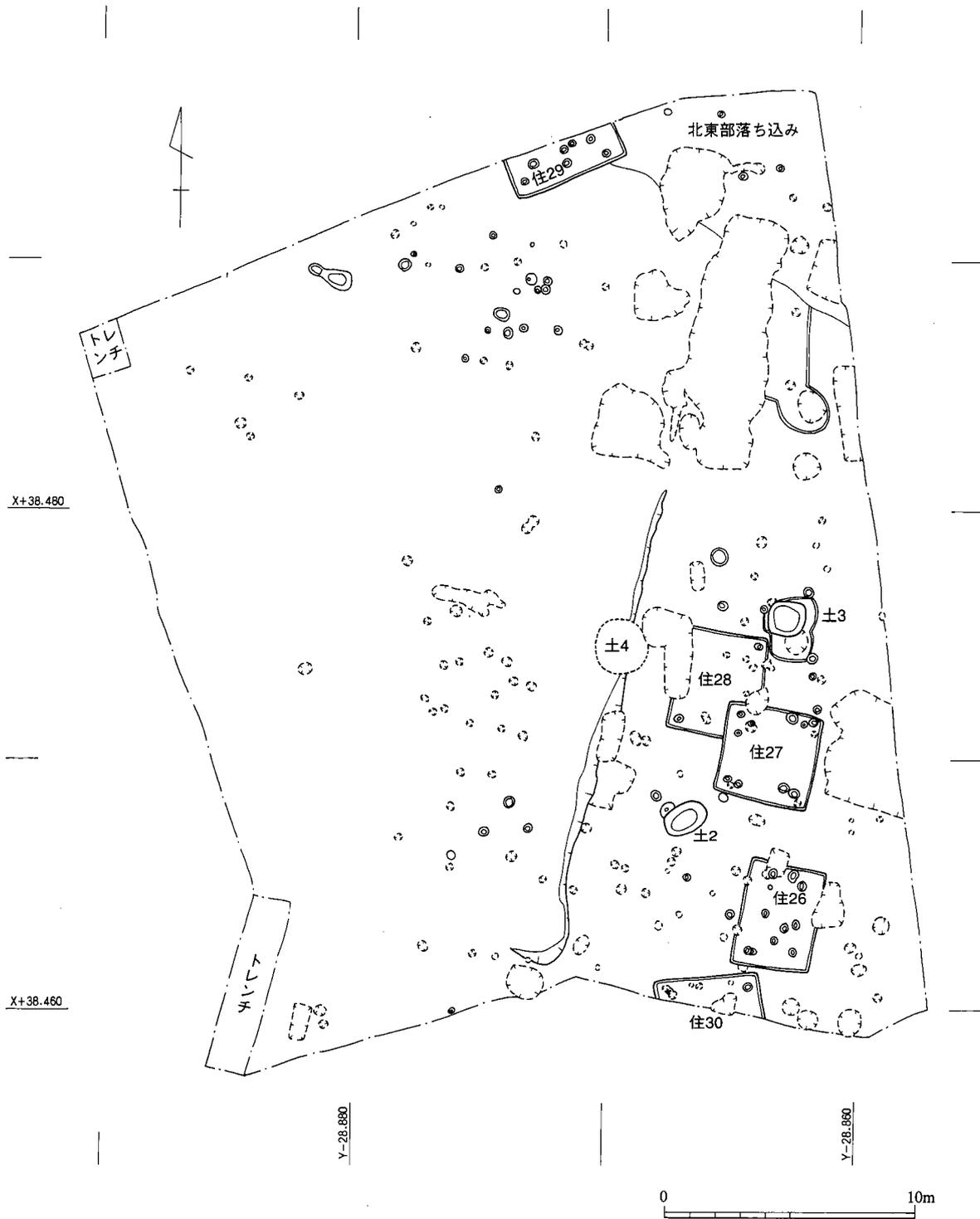
第1遺構面からは多くのピットが検出されたが、土坑といえるほどに規模が大きかったものはこの1号土坑だけであった。ちなみに、中世の井戸である4号土坑は、本来この面から検出されるはずであったが、先述のように攪乱土坑の直下にあったためにその存在を認識することができず、第3遺構面で検出したため、第3遺構面の検出遺構の項で報告することとする。

#### 1号土坑（第32図、図版12）

1号土坑は調査区中央部東側で検出した。調査区東側の段の北側の段落ち部にあり、大きく削平されたものと考えられる。付近には14・18号竪穴住居跡、3号攪乱坑などがあり、このうち18号住居跡とは北側で切り合い関係があつて1号土坑が新しい。土坑は二段掘りとなっており、1段目が最大径195cm程度の不整形円形、2段目が最大径65cm程度の不整形円形を呈する。断面はやや深い舟底状を呈し、土層は大きく3層に分けられるが、最下層の3層は1段目から2段目にかけて堆積している。堆積層はレンズ状を呈し、埋土に粘質土が多いことから、比較的徐々に埋没していった可能性が高い。遺物は土師器の破片が出土したが小片のため図示することができない。このため時期も不明である。



第32図 1号土坑実測図（1/30）



第33図 第2遺構面遺構配置図 (1/250)

### 第3節 第2遺構面の検出遺構と出土遺物

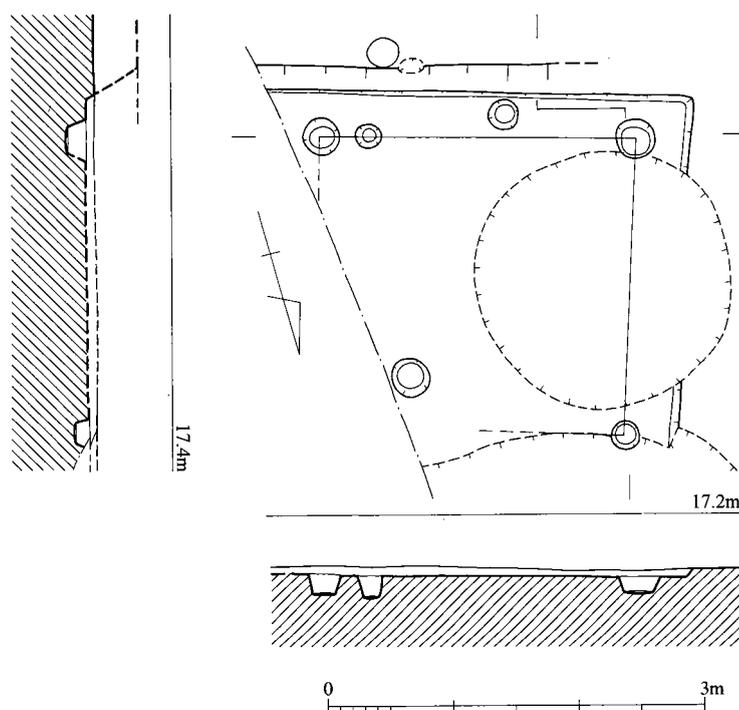
第2遺構面は、第1遺構面の特に南東部の段上で、切り合いが激しかったために遺構を全て把握することができず、第1遺構面の調査を終了したと判断して重機により包含層を除去しようとしたときに、掘り残した遺構の存在に気づいたため、急遽包含層の除去する深さをやや浅くして発掘を行ったために生じた遺構面である。従って、遺構は主に残存状況の良好な南東部の段上に集中し、12・26～28・30号竪穴住居跡、3号土坑をここから検出したが、これらは本来は第1遺構面で検出されるはずであった遺構群である。また、浅い谷状地形の存在する調査区北東部では、基本層序の項で述べた第2層（暗褐色粘質土）が第1遺構面とのあいだに存在しており、この下から29号竪穴住居跡を確認した。

ただし、本来の旧地形が南・西側に向かって高くなっていったために、調査区南側は日詰遺跡の中では最も高い場所となっており、隣接する第I調査区で第2遺構面として発掘を行った遺構面が、第1遺構面の下約20cmほどですでに部分的に現れていた。これに気づかずに発掘を行った結果、本来第3遺構面で検出されるはずの弥生時代の遺構（2号土坑）を第2遺構面で調査してしまうことになった。ここでは、図面上の都合もあって第2遺構面として発掘した遺構を全て報告する。

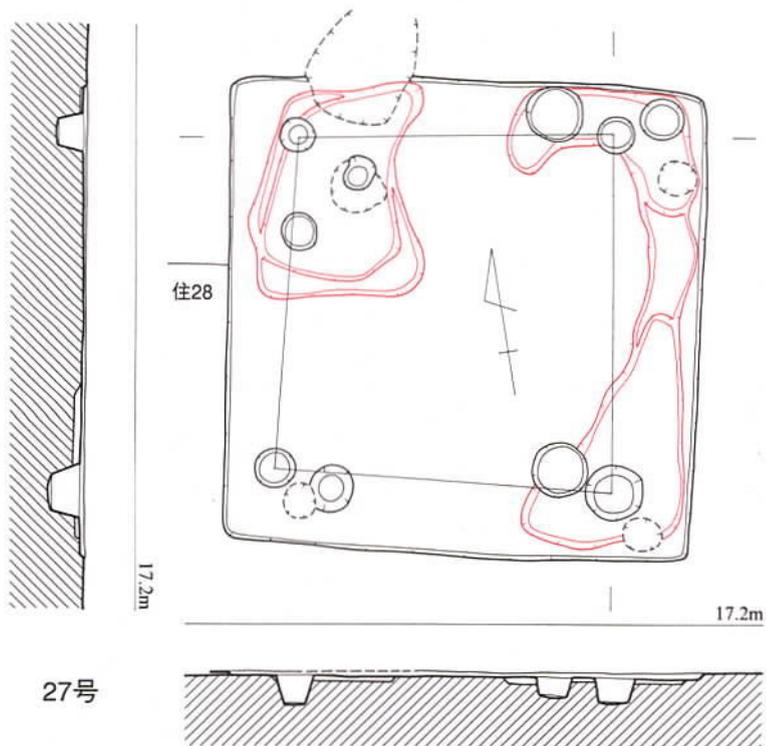
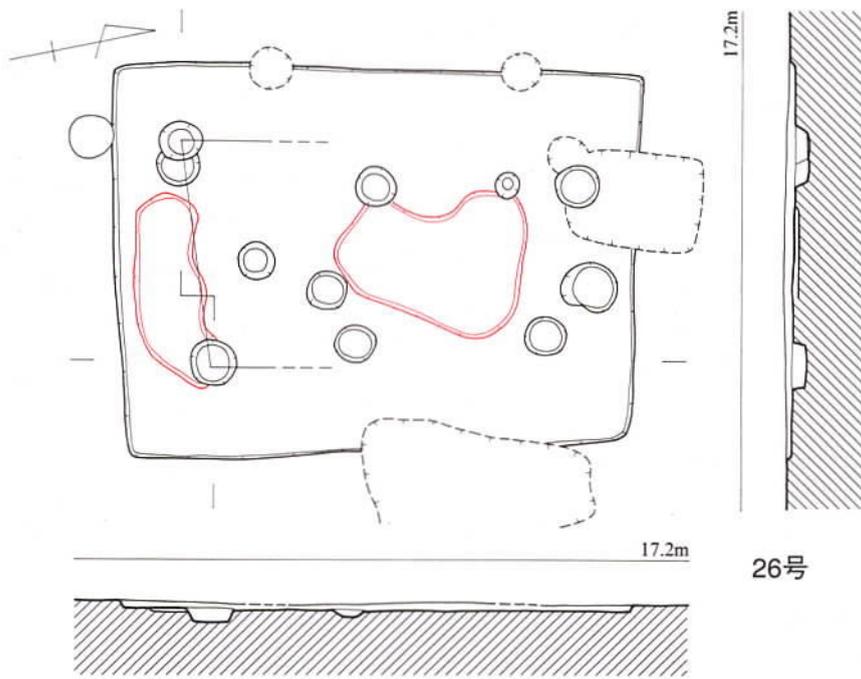
#### 第1項 竪穴住居跡

##### 12号竪穴住居跡（第34図、図版6-3）

12号竪穴住居跡は、第1遺構面調査時にその存在に気づき、調査を行ったが、7号住居跡とほぼ重複しており、西側にあつてこれと切り合う6号住居跡や攪乱などによっても大きく破壊されていたため、全形を正確に把握できず、完掘することができなかった。しかし、上述のような経緯で第



第34図 12号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第35图 26·27号竖穴住居迹实测图 (1/60)

1 遺構面から20cmほど下げて遺構検出を行った結果、掘り残していた12号住居跡がきれいに把握できたため、第2遺構面の遺構として改めて調査を行ったものである。第34図には、第1遺構面で部分的に把握できていた住居跡の南壁も図示している。

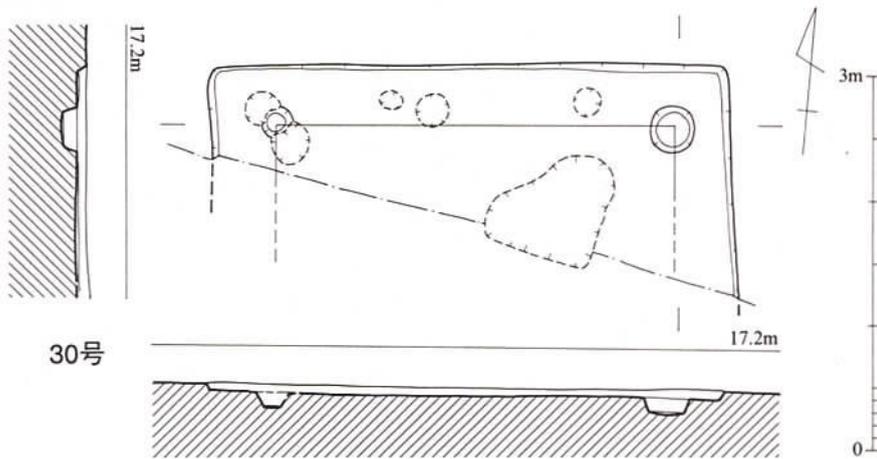
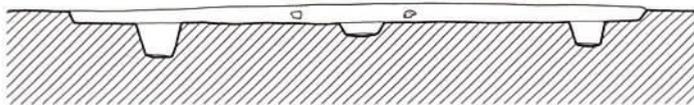
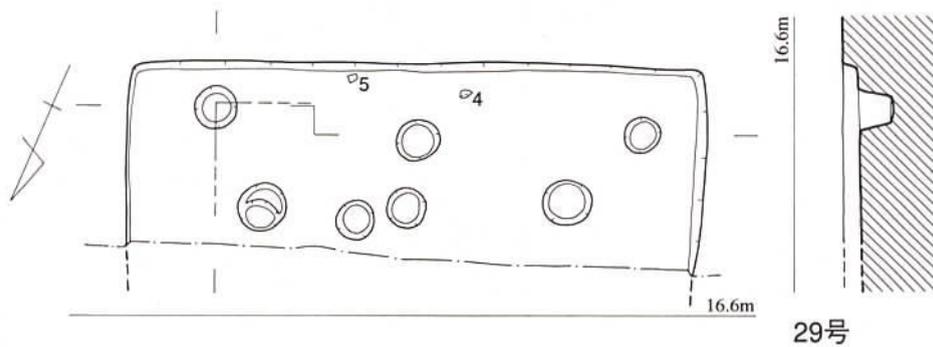
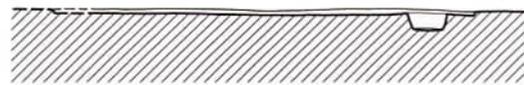
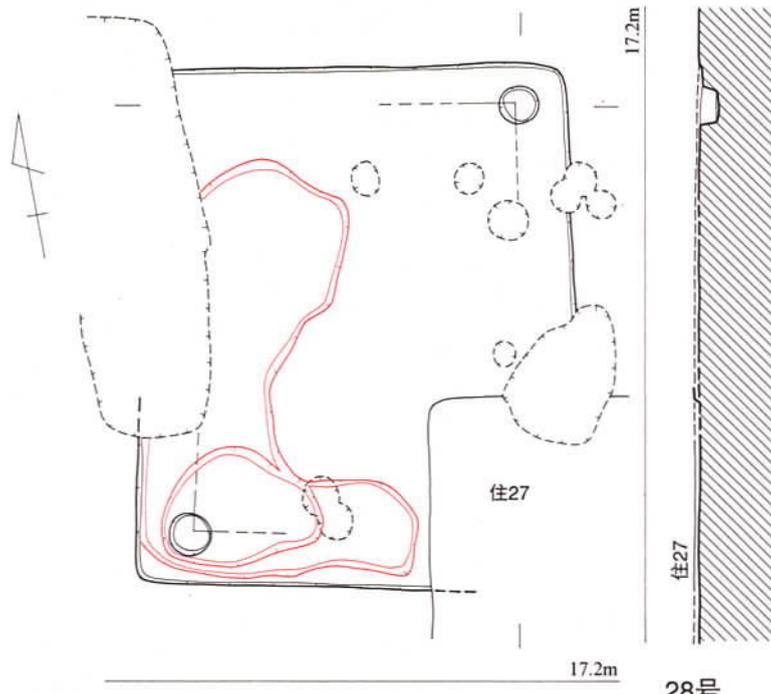
12号竪穴住居跡は調査区中央東隅に位置し、第1遺構面の7号住居跡とほぼ重複していてこれより古い。また、同じく第1遺構面の6号住居跡とも重複しており、これにも先行する。第1遺構面からの残存深さは30cmほどを測るが、実際に第2遺構面で検出したときの残存深さはおよそ5cmであった。住居跡の中央西側を近代の石組み井戸により破壊され、北壁も攪乱により失い、東壁は調査区外に存在するため正確な規模は不明であるが、柱穴の位置から推測して、およそ東西3.4m、南北3.0mほどの東西に幅広い長方形状を呈するものと考えられ、カマドは北側に付設されていた可能性が高い。この推測を元に主軸を略南北方向に設定すると、北より約17度東に振れる。埋土は暗褐色粘砂質土で、下層には地山由来と考えられるやや明るい色の砂質土混じりの土がみられる。出土土器は土師器・須恵器の小片のみで時期を決めることは難しい。

### 26号竪穴住居跡（第35図、図版10-3）

30号竪穴住居跡とともに、第2遺構面検出のきっかけとなった住居跡である。調査区の東南部に位置し、第1遺構面検出の3・4号住居跡と重なりを持ち、これらより古い。住居跡の東壁を攪乱により、また北壁の一部を第4号住居跡の床面で検出した土坑により破壊されており、カマドを検出することはできなかったが、存在するとすれば東壁の中央部、攪乱で壊された部分にあったものか。そうであれば、住居内部に焼面や焼土等がみられなかったことから、突出型のカマドの可能性が高い。仮に東カマドと考えて主軸を東西にとると、東西長は3.2m、南北幅は4.1mで平面形態は幅の広い長方形状を呈する。この平面形態は突出型のカマドを持つ住居跡にしばしば認められ、この点からも本住居跡が突出型のカマドを有していた可能性が示唆される。主軸方位は正確には東西から約13度ほど南に振れる。残存深さは数cm程度であったが、表土を20cmほど除去していることを考えると、第1遺構面からの深さは25cm程度と考えられる。床面を精査してピットを多数検出したが、柱穴と確定できるものは検出できなかった。図には南側の二つのピットを主柱穴として示しているが、ともに浅いため疑問が大きい。床面にはピットの他に不整形の浅い堀方を確認し、床下掘り込みとして報告する。埋土は暗褐色粘砂質土。土器は小片がわずかに出土しただけであり、いずれも図示することはできない。切り合い関係から、7世紀代と考えておく。

### 27号竪穴住居跡（第35図、図版11-1）

調査区中央部東側で検出した。28号住居跡と切り合い、これよりも新しい。また、第1遺構面で検出した5・6号住居跡とも重なりを持ち、両者より古い。特に、6号住居跡とはほぼ重なり合うが、規模は27号住居跡の方が小さい。カマドは検出できなかったが、本来は存在しており削平のため把握できなかったものと考えられる。主軸方位を仮に6号住居跡と同じ西とすると、住居跡の方位は10度ほど北に振れ、住居跡のサイズは東西3.75m×南北3.8mで、平面形態はほぼ正方形を呈する。残存深さは数cmと極めて浅く、第1遺構面からの削平を20cmと想定すると深さは25cm前後であったものか。床面からはピットをいくつか検出し、その中から位置・深さ等より主柱穴と考えられるものを提示した。このほか、住居跡の東西に床下掘り込みを検出したが、このうち東側の掘り込



第36图 28~30号竖穴住居跡実測図 (1/60)

みはすでに6号住居跡である程度掘削していた。床面のレベルがほとんど変わらないために6号住居跡に伴うと誤認したものと考えられ、本来は本住居跡に伴うものであろう。出土遺物は小片のみで図示できるものはない。第1遺構面検出住居群との関係から、7世紀代に位置づけておきたい。

#### 第28号竪穴住居跡（第36図、図版11-1）

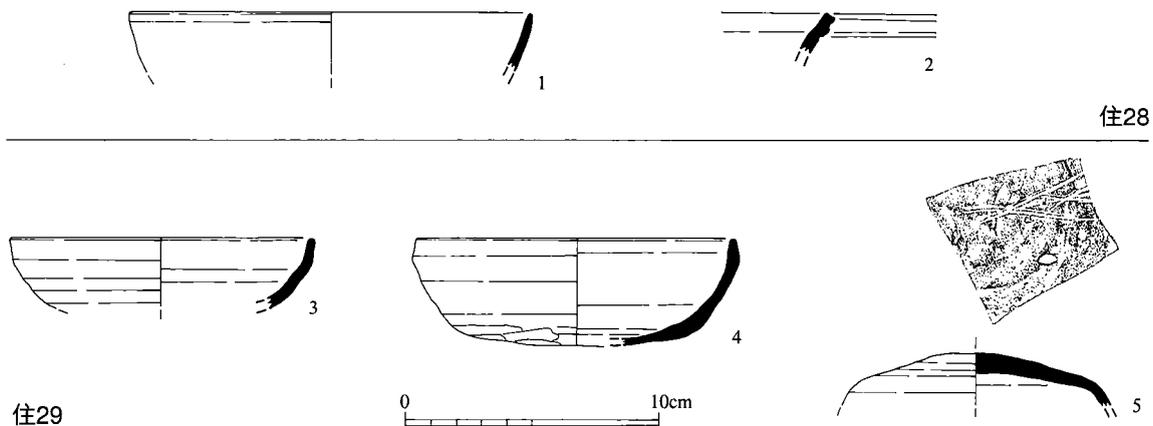
調査区中央部やや西よりで検出した住居跡である。27号住居跡と切り合い関係にあり、これに先行する。また、第1遺構面検出の5・10号住居跡と部分的に重複し、これらよりも古い。27号住居跡に切られる南西コーナー部と、攪乱に破壊される東壁中央部・西壁の大半を除いて全形が判明し、規模は東西3.6m、南北4.1mほどをはかり、平面形態はやや南北に長い長方形状を呈する。住居内部から焼土等は確認されず、カマドの付設された位置は不明であったが、平面形態がやや南北に長いことから考えると、破壊された東西どちらかの壁に設置されていたものか。仮にこの考えに従い主軸を東西方向とすると、東側が約12度ほど南に振れる。残存深さは数cmで、第1遺構面からの削平を20cmと考えると、本来25cmほどは残っていたものと考えられる。埋土は暗褐色の粘砂質土で色調がやや明るく、砂質分を若干含む。出土土器はわずかであるが、7世紀後葉～末頃が示唆され、これは切り合い関係とも矛盾しない。

#### 出土土器（第37図）

須恵器（1・2） 1は坏の口縁部である。やや内湾しながら上方に伸びる口縁だけが残されているが、おそらく底部は平たく、底一胴部境に屈曲を持つものであろう。ただし、口縁部の傾きからみてこの屈曲は緩やかだった可能性が高く、高台を付すようになる前の段階の資料の可能性もある。胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は良好で色調は灰色を呈する。口縁部径は小片のためやや不安があるが、16cmで復元して図示した。2は小型の甕または提瓶、横瓶の口縁部か。小片のため径は図示し得なかったが、直径がおおよそ20cm内外になるものと考えて大過あるまい。器壁が薄く、さほど大型品ではないと考えられることから、提瓶あるいは横瓶の可能性が高い。口縁端部外側を肥厚してその中央部をわずかに窪ませる。口縁端部内側には段等がみられない。胎土は精良でわずかに細砂粒が混じり、焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。

#### 第29号竪穴住居跡（第36図、図版11-2）

調査区北端中央部やや東よりにて検出した。第1遺構面で検出した21号住居跡とほぼ同じ位置にあってこれより古い。21号住居跡よりさらに北側によっているために、住居跡の半分以上が調査区外にはみ出してしまっており、このため全形は不明である。調査区内にカマドは検出されず、おそらく21号と同様に北側にある可能性が高いが、東西どちらかの壁に付設されていた可能性も残る。遺構面は北に向かって傾斜しており、住居跡の残存深さも北に行くほど浅くなるが、おおよそ15cm内外である。この住居跡が検出された調査区北東部では、第1遺構面と第2遺構面とのあいだに基本層序の項で述べた2層（暗褐色粘質土）が堆積しており、この層の下で検出された29号住居跡は、第1遺構面で形成された21号住居跡とは明らかな時期差があるものと考えられる。このことは出土土器からも肯定でき、本住居跡の形成時期は7世紀前半と考えてほぼ間違いないであろう。



第37図 28・29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

#### 出土土器 (第37図、図版16)

須恵器 (3～5) 3・4は坏である。やや丸い底部からゆるやかに内湾しつつ口縁部へと至る形状を持つものである。3は蓋の可能性もあるが、ここでは坏として提示した。3は底部が失われており底部形状は不明だが、4とほぼ同様の形状を呈するものか。3は口縁部のみであり、調整は回転ナデ。4は屈曲より上部を丁寧な回転ナデ、底部の外表面はケズリ痕が残り、内面は横ナデ仕上げ。両者ともに胎土は精良でわずかに細砂粒を含み、焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。口径は3が12cm、4が14.8cmをはかる。器高は4のみ判明し、およそ4.3cmをはかる。5は坏蓋として提示した。天井部のみ残存しており丸みを帯びた形状を持つ。調整は、天井部端部から口縁部にかけては回転ナデを施し、天井部内・外表面は横ナデ仕上げ。外面にヘラ記号を残す。

#### 30号竪穴住居跡 (第36図、図版11)

調査区南端部の中央やや東よりで検出した。調査区南・東側の段の上であり、大半が南側の調査区外に伸びる。第1遺構面で検出した1号住居跡とほぼ重複する位置にあるが、軸がややずれており、別の住居跡と判断した。1号住居跡の付近、特に東壁付近は細かい攪乱が非常に多く、また冬季の調査であって該当地が調査区の南側に隣接する住宅の陰になったこともあり、近辺では遺構の検出にやや難があり、本来は第1遺構面で把握すべきところを失敗してしまった。住居跡の南半分以上が調査区外にあり、全形は不明である。また、調査区内からはカマドを検出することができなかったが、付近の住居跡の状況から、東壁に付設されていた可能性が高いものと考えられる。住居跡の規模は東西長のみが判明し、約4.1mをはかる。残存深さは5cm程度であり、第1遺構面から本住居跡の床面まではおよそ25cm程度をはかるものと考えられる。床面からはピットをいくつか検出し、そのうちの2本を主柱穴として提示した。しかし、深さが浅いためやや疑問が残る。上述の事情や埋土に砂質分が多く含まれていて地山との判別がやや難しかったことなどからピットの検出を十分に行うことができなかったことを考慮すると、本来の主柱穴は別に存在する可能性も否定できない。本住居跡からは土師器・須恵器の小片が出土したがいずれも図示できるほどのものはない。従って時期は不明であるが、1号住居跡との関係から7世紀代と考えられる。

## 第2項 土坑

第2遺構面からは、土坑を2基検出した。このうち、3号土坑は8世紀代の土器が出土しており、10号住居跡や攪乱と重なっていたために第1遺構面で検出できなかったものである。また、もう1基は弥生時代に属し、本来は第1・2遺構面に属するものではない。先述のように、旧地形は北から南に向かってゆるやかにあがっており、低い北側では第1～第3遺構面のあいだにそれぞれ間層が認められた（第1・2遺構面の間層は基本層序図の2層、第2・3遺構面の間層は同じく3層）が、北側では第2・3遺構面間に間層が認められなかった。このため、第2遺構面の調査時に、調査区北側における第3遺構面と同じ遺構面が露出し、遺構が検出されたものと考えられ、本来2号土坑は第3遺構面に伴うものであったと考えられる。

### 2号土坑（第38図、図版13-1）

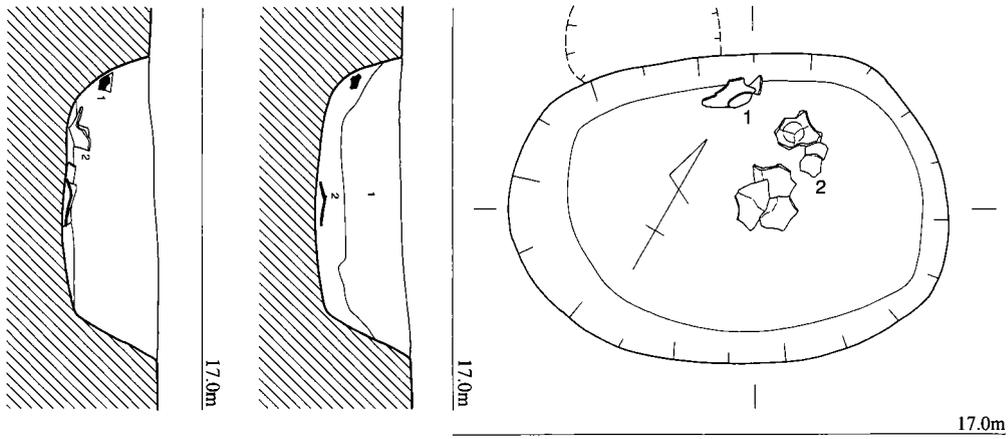
2号土坑は調査区南側中央部の段上で検出した。上述のようにこの付近では第2・3遺構面がほぼ同じレベルにあり、本来第3遺構面で検出されるはずであった弥生時代の遺構として、2号土坑が検出された。2号土坑は平面形態が長軸を大略南西-北東方向にとる長楕円形を呈し、規模は長軸が1.8m、短軸が1.2mほどを呈し、残存深さは40cm弱である。一部を攪乱により破壊されるが残存状況は比較的よい。埋土は古代の遺構よりもやや明るい色調で砂質分を多く含み、大きく2層に分層できたが埋没にさほど時間がかかった様子は認められない。地山にはこぶし大以下の小礫がかなり多く含まれ、埋土にもこの地山由来の礫がみられる。床面と壁に張り付くようにして2点の弥生土器が出土した。出土土器から、弥生時代前期後半のものである。

### 出土土器（第39図、図版16）

1は弥生前期板付式の壺型土器の底部である。底は平底で比較的薄く、底-胴部境に段は形成されずなめらかに移行する。胴部中位より上は失われて全形は明らかではない。全体的に摩滅が進んでおり表面調整はやや不明瞭だが、内・外面ともにナデ仕上げか。胎土はやや精良で細砂粒を多く含み、焼成は良好で色調は暗橙褐色を呈する。2は板付式併行期の甕型土器である。比較的大きな破片で出土したが完形には復元できなかった。おそらく割れたために廃棄されたものだろう。全体の器形は大略バケツ状を呈するが、胴部のふくらみと口縁部の外反はかなり明瞭である。底部にはやや厚みがあり、底-胴部境はなめらかに移行する。口縁端部にはやや太めの工具による全面刻みが施される。摩滅・剥離が進んでおり内・外面ともに調整は不明瞭だが、外面の一部にはハケ目の痕跡が認められる。1・2の供伴関係に問題はなく、甕には端部全面刻みなどのやや古い属性は残るものの、板付Ⅱ式のやや新しい段階（Ⅱb式）併行期に位置づけられよう。

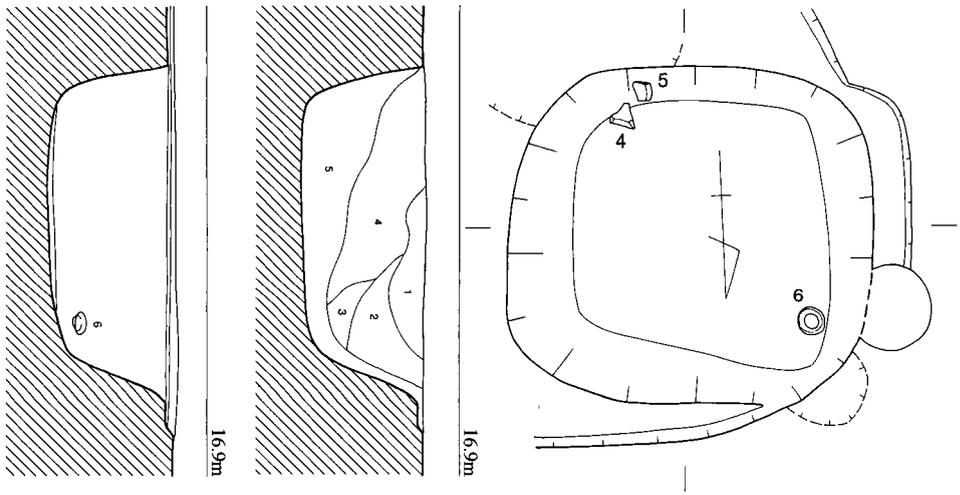
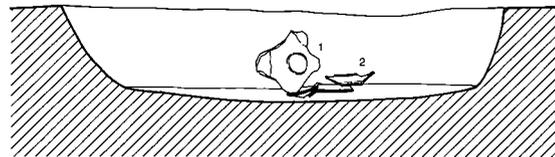
### 3号土坑（第38図、図版13-2）

3号土坑は調査区中央東側で検出した。第1遺構面では、この土坑の上に比較的浅く大きな攪乱坑が広がっており、この攪乱坑の埋土に影響されて土色に変色していたため、遺構と認識することができず、付近を8・10号住居跡として発掘した。その後、第2遺構面の検出時に、この箇所を精査したところ土坑を検出し、調査したところ8・10号住居跡よりも新しい遺物が出土したため、本来第1遺構面でこれらを切り込む土坑であったことが判明した。土坑の平面形態はやや不整形な隅丸長形状を呈し、規模は長軸長軸約1.4m、短軸約1.3m、深さは検出状況で50cmほどをはかり、



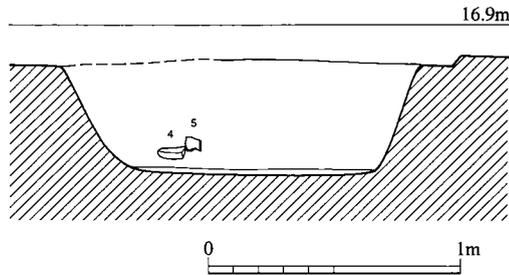
- 1.暗茶褐色粘砂質土
- 2.暗褐色粘質土

2号



- 1.暗褐色粘質土に暗灰褐色粘質土ブロックを  
やや含む
- 2.暗褐色粘質土
- 3.暗褐色粘質土に暗灰褐色粘質土ブロックを  
多く含む
- 4.暗灰褐色粘質土に炭化物をやや含む
- 5.暗灰褐色粘砂質土

3号

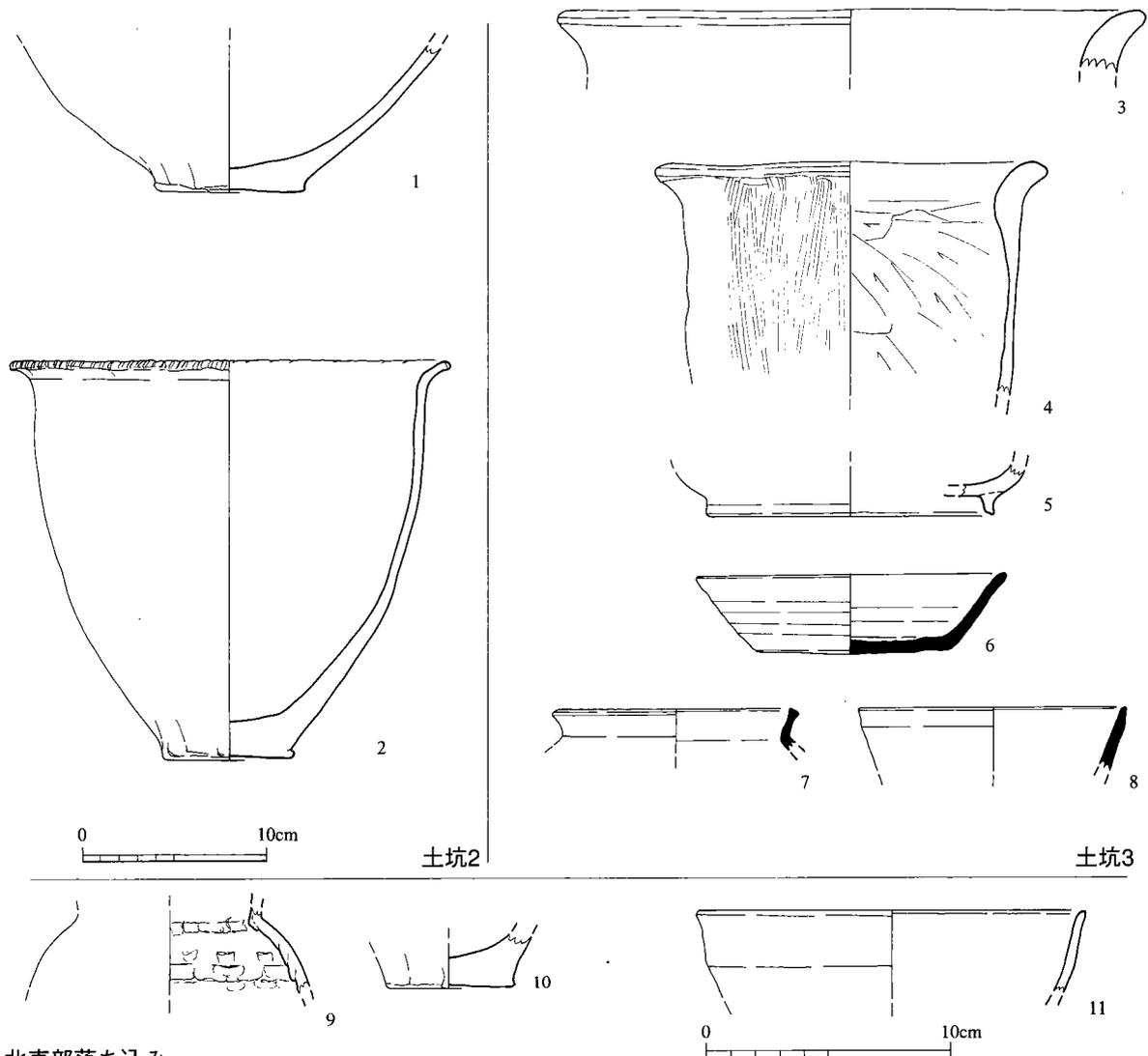


第38図 2・3号土坑実測図 (1/30)

第1遺構面からは70cmほどの深さを有していたと考えられる。埋土は大きく4層に分けられ、各層はレンズ状を呈する。出土土器から、8世紀後半前後に位置づけられよう。

出土土器（第39図、図版16）

土師器（3～5） 3・4は甕型土器である。3は大型、4は小型であるが、器形はおそらく共通し、いずれもバケツ型の胴部からほぼ垂直あるいはやや開きながら口縁部へと至り、わずかに如意状に外反するものであろう。3はわずかに如意状に外反する口縁部のみが出土した。口径は24cmをはかる。全体に回転ナデを施す。胎土は中程度で細砂粒を多く含み、焼成は良好で色調は黄橙～浅黄橙色を呈する。4は口径が16cmをはかる小型の甕である。胴部はゆるやかに内湾しながらわずかに開き、頸部から上は如意状に外反する。外面調整はハケ目で、内面はケズリ込んで器壁を一部極めて薄く作る。胎土は細砂粒を多く含むが比較的精良である。焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。5は坏である。底-胴部境の屈曲部と高台が残る。底部は平坦で、口縁部への立ち上がり角度はやや緩やかである。高台は細長く伸びかけているがいまだ伸びきってはいない。外面は回転ナデ、内面は横ナデ痕が認められる。高台径は約11.8cmをはかる。



北東部落ち込み

第39図 2・3号土坑、北東部落ち込み出土土器実測図（1・2・9・10は1/4、他は1/3）

須恵器（6～8） 6は坏である。平底で、直線的に斜めに伸びる口縁部を持つ。胴部内・外面に回転ナデ痕を残し、底部ヘラ切り、底-胴部境には回転ヘラケズリ痕を残す。口縁部径は12.6cm。胎土は精良で細砂粒をわずかに含み、焼成は良好で色調は灰色を呈する。7は小壺の口縁部である。口縁部が短く開く部分のみ残る。口径は10cmをはかる。8は坏の口縁部である。ゆるやかに内湾しながら伸びる器形である。口径は11cmをはかる。いずれも良質な胎土である。

### 第3項 その他の遺構

#### 北東部落ち込み（第33図）

調査区の北東部に黒～暗褐色粘質土が基盤層となっている部分があり、堆積は厚いところで30cm以上あった。第2遺構面の調査終了後に、第3遺構面を検出しようとして重機でこの黒褐色粘質土を掘削し始めたところ、遺物が出土したため、人力で掘削を行った結果、これが北に開く緩やかな谷状地形であることが判明した。本調査区ではこの谷状地形の西側の肩部を検出したことになる。県道をはさんで隣接する第I区の調査を担当した大庭氏によれば、北西隅にもわずかながら同様の基盤層が確認されたという。大庭氏が確認した第I区の黒褐色粘質土はおそらくこの谷の東側肩部に相当するものと考えられ、谷本体は現在の県道33号線の直下に存在するものだろう。

この黒褐色粘質土は、第2遺構面に属する遺構の中で最も古いと考えられる29号竪穴住居跡の基盤層であり、この谷状地形が埋没したのは29号住居跡の掘削よりも古い段階である。また、第3遺構面からは弥生時代中～後期に比定された第I区7号溝の延長（第II区1号溝）が検出されており、第3遺構面の最も新しい遺構となるため（4号土坑を除く）、埋没はこれよりも新しい段階と考えられ、この谷状地形の埋没は弥生時代後期～7世紀のあいだに起きたと考えられる。

なお、この黒褐色土は粘性が強く、粒度がそろっていた。従って、この黒褐色粘質土の堆積は非常に静かな水中で起きたと考えられ、堆積環境としては沼や湖が考えられる。先述のように本調査区の北側には筑後川の旧河川があり、谷状地形はこれに隣接していることから、この旧河川が三日月湖のような状態となって低湿地状に広がっており、谷状地形はこの一部分をなしていた可能性がある。ただし、近接する場所でほぼ同時期に集落・水田として使われていた大的遺跡では、水田面の標高が15.2m、居住域の標高が15.6m程度となっており、黒褐色土の上面レベル（16.0m前後）よりかなり低いことは問題である。より小規模な沼状遺構であったのか。今後の調査を待ちたい。

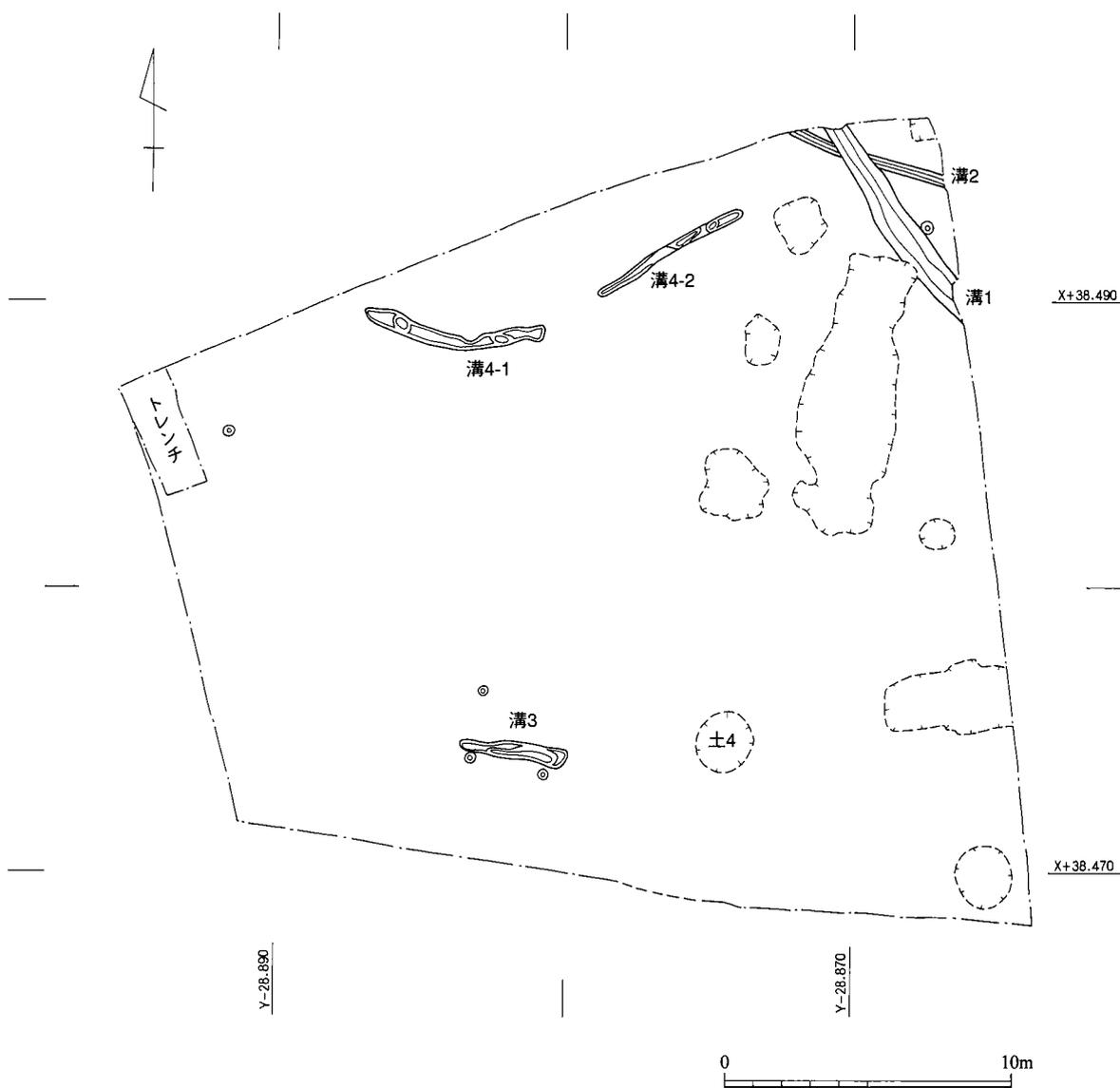
#### 出土土器（第39図、図版16）

弥生土器（9・10） 9は壺型土器の肩部である。球胴の上半部から明瞭に屈曲して立ち上がる部分までが残存する。表面は丹が残るが剥落部が多く、本来は外面の全体に丹が塗られていた可能性もある。内面には粘土帯接合時の指頭圧痕が明瞭に残る。調整や器形などから後期土器の可能性が高いが、小型器種なので調整が雑なのかもしれない、中期土器の可能性も残る。胎土は精良だが細砂粒をやや多く含み、焼成は良好で色調は丹塗り部以外は淡橙色を呈する。10は甕型土器の底部。平底で外面調整が粗く、前期後半～中期初頭に位置づけたい。焼成は良好だが摩耗しており調整は不明瞭。胎土はやや粗く細砂を多く含む。色調は淡橙色を呈する。

土師器（11） 椀型土器の口縁部である。ゆるやかに内湾しながら立ち上がり口縁部付近で外湾する器形を持つ。焼成は良好で、内・外面にススが付着して黒褐色を呈する。胎土は精良で細砂粒をわずかに含む。口径は小片のためやや不安があるが、16cm程度をはかる。

#### 第4節 第3遺構面の検出遺構と出土遺物

先述のように第3遺構面は調査区南側では第2遺構面として調査を行った深さにあり、第2遺構面の調査の中で終了していた。このため、第3遺構面の調査に着手した段階では、念のため全面にわたって表土を剥ぎ、検出を行ったものの、遺構は調査区の北半分のみ存在する状況であった。そのため、調査区南側は途中から排土置き場として利用することとし、この箇所については平面図の作成等も行わなかった。調査区北側では、中世の井戸と考えられる4号土坑のほか、溝状遺構を4条検出した。このうち1号溝は東側に隣接する日詰遺跡第I区の7号溝と同一の遺構と考えられ、弥生時代の土器が出土した。第1区の調査成果から、弥生時代中～後期の遺構と考えられる。このほかの遺構からは土器等の検出はなかったが、第3遺構面は弥生時代と考えて大過あるまい。



第40図 第3遺構面遺構配置図 (1/250)

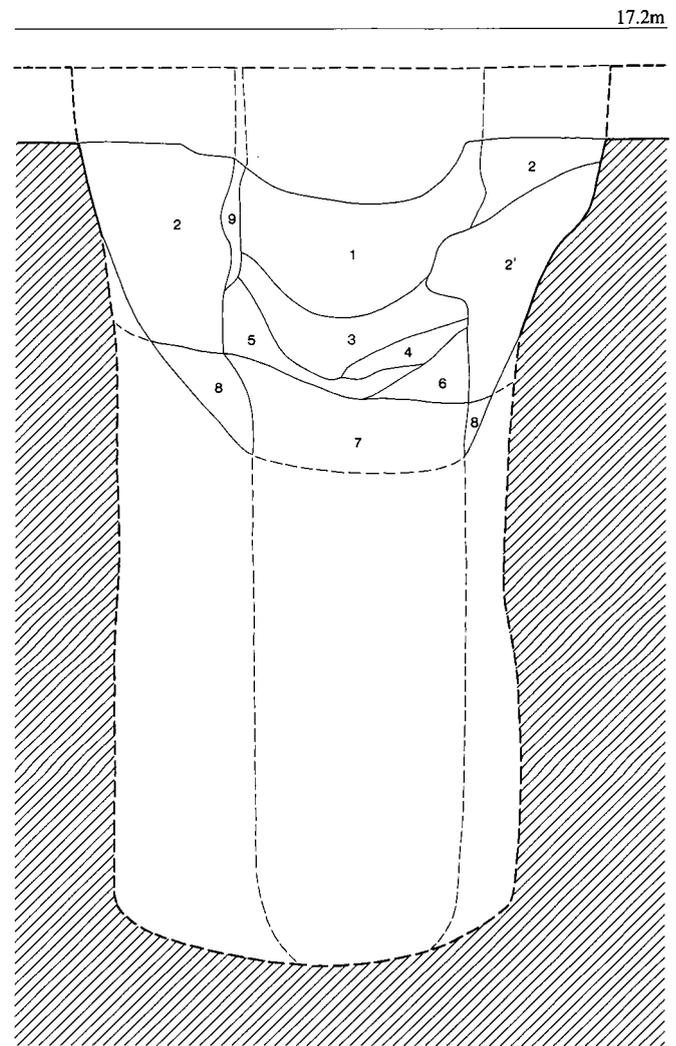
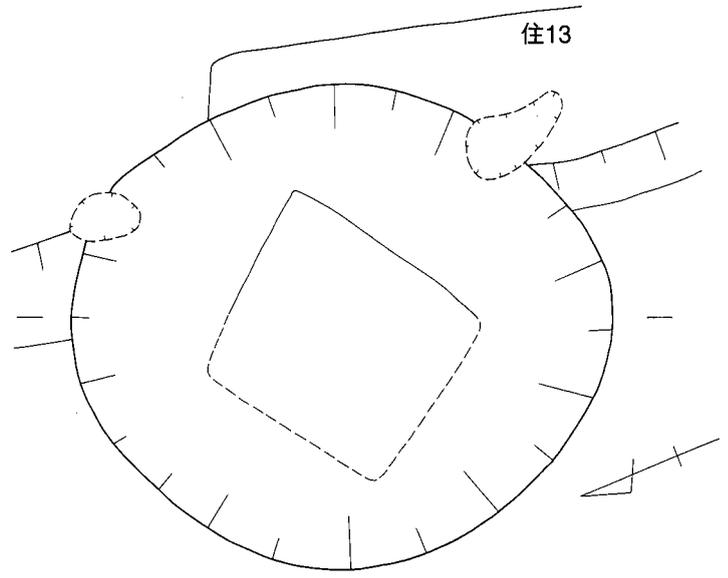
第1項 土坑

4号土坑（第41図、図版13-3・14-1）

4号土坑の検出経緯についてはすでに述べたとおりである。簡単に振り返っておくと、本来第1遺構面で検出できたはずであったが、土坑の上に攪乱があって第1・2遺構面の検出中にこれを検出できず、第3面まで下げたときに上にあった攪乱坑の影響がなくなって初めて遺構が存在することが確認できたため、第3遺構面の遺構として調査を行ったものである。従って、検出時にはすでに上部を30cm程度削平されていた。断面図ではこの部分を点線で示しておいた。また、上部の攪乱坑を掘る際に間違えてこの井戸の埋土を50cmほど掘り下げてしまったが、その際に中世土器が多量に出土した。第1遺構面の包含層・攪乱出土として提示した（第44図）土器の中に中世の碗・小皿が多数提示してあるが、これらはほぼこの土坑から出土したものと考えて間違いのないと思われる。しかし、取り上げの時に攪乱から出土したものとしてしまっており、報告でも同様に扱っているので留意されたい。

また、遺構が非常に深く掘削途中で水が湧いてきて調査が困難となったため、途中で掘削をあきらめ調査の最終段階で重機により断ち割って深さを確認したため、遺構の半分より下は土層図をとることができなかった。この部分についても断面図に点線で示してある。なお、平面図については第1面における想定検出状況を示している。

4号土坑は、直径2.2m、深さ3.2mをはかる井戸跡である。上位こそやや



1. 暗茶褐色粘砂質土に地山由来小礫を多く含む
2. 暗茶褐色粘質土。均質
- 2'. 2に地山由来の鶏卵～拳大礫を多く含む
3. 暗褐色粘質土に地山由来小礫をやや多く含む
4. 暗灰褐色粘砂質土に地山由来小礫をやや多く含む
5. 暗褐色粘砂質土に地山由来小礫を多く含む
6. 5とよく似るが砂質土が多い
7. 暗褐色粘砂質土に地山由来小礫を特に多く含む
8. 暗褐色粘質土に地山由来小礫を特に多く含む
9. 黒褐色粘質土。均質

第41図 4号土坑実測図 (1/30)

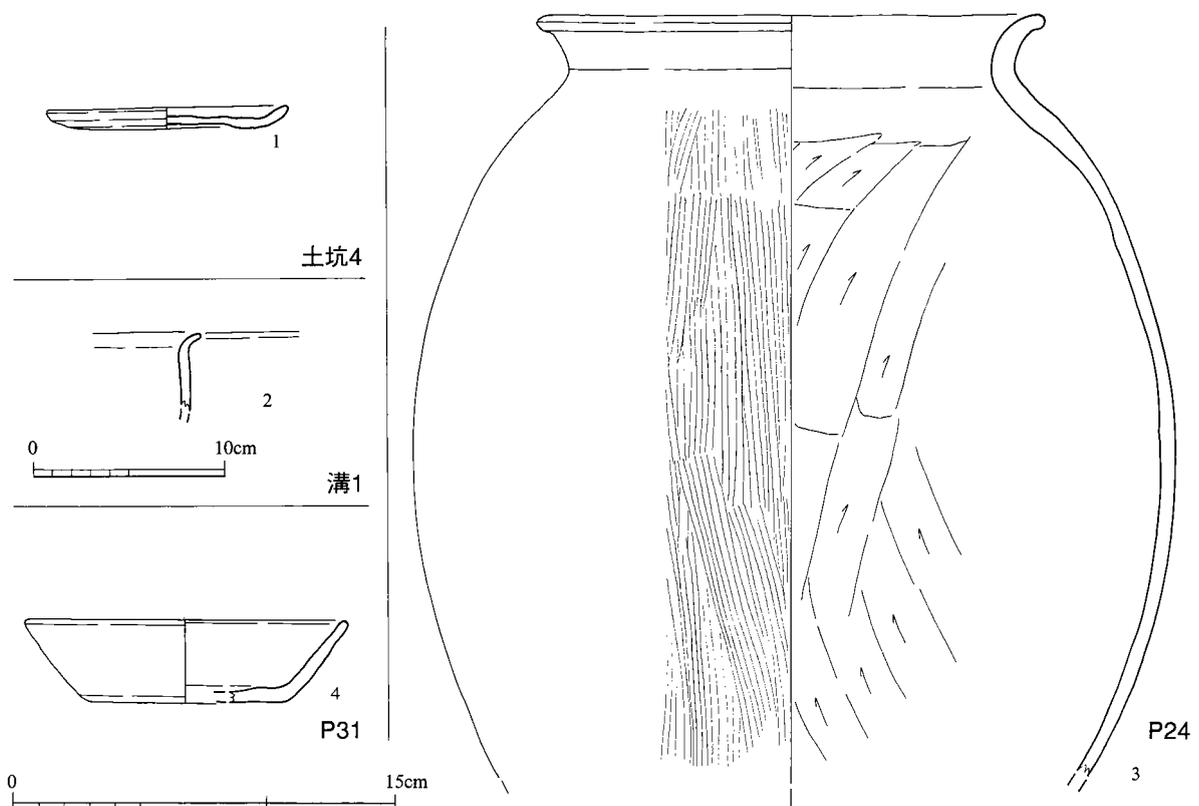
広がるものの中位より下はほぼ垂直に壁が伸びている。検出面を精査したところ、土質の異なる方形の部分を確認した。断面で確かめたところ、この方形の枠は下方まで続いており、この外側には地山由来の小礫を大量に含む粘質土が詰まっていた。これは井戸枠の裏込めと見られ、方形の枠はおそらく木製の井戸枠であったと考えられる。

井戸枠と考えられるラインは一部で複雑に折れ曲がっており、埋没する際に井戸枠の一部が破れて裏込め土がせり出したものと考えられる。井戸枠内の埋土は下層については図示することができなかったが、さほど細かく分かれるようには見えず、おそらく中位までは一気に埋没したのと考えられる。一方、上層の埋土は比較的細かく分層でき、レンズ状堆積を示すことから、埋没にはやや時間がかかっている可能性が高い。

井戸枠の裏込め土は、上層から中層にかけては礫も含むものの粘質土が比較的多く認められたが、下層にいくほどに礫を多く含み、湧水点より下は礫がぎっしり詰まった状態であった。井戸作りに関する言い伝えとして、良い水がでる湧水点よりやや掘り下げ、裏込め土にはこの湧水点より上は粘質土を使って埋め戻すことで、十分濾過されない雨水などが湧水点より上から井戸に浸み出して井戸の水質が悪化するのを防ぐ手法、また底には厚く玉石を敷き詰めて湧水点からの良質な水を確保する手法が紹介されており（大久保ほか1958）、この井戸の構造も同様の手法をとっているものと理解できる。なお、湧水点は井戸底面より80cmも上であった。

#### 出土土器（第42図、図版16）

土師器（1） 1は土師質の小皿である。底部は平坦で立ち上がりが短く低い。底部はヘラ切り後指押し整形あるいは工具によるナデ。内部、口縁部はナデ仕上げ。胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は良好で色調は灰橙褐色を呈する。



第42図 4号土坑、1号溝、ピット出土土器実測図（2は1/4、他は1/3）

## 第2項 溝跡

第3面からは溝状の遺構を4条検出したが、この中でしっかりした掘り方を持っていたのは1・2号溝のみで、3・4号溝は深さも浅く長さも短いため、本当に溝状遺構なのか、それとも土のシミを掘ってしまったのか疑問が残る。ここでは主に1・2号溝について報告し、3・4号溝については簡略に述べるに留めたい。

### 1号溝跡（第43図、図版14-2）

調査区の北東隅を、南東から北西に走る溝である。調査区の隅をかすめるように伸びているため検出された長さは短く、およそ8mほどである。検出面が南から北にかけて大きく下がっており、溝底もこの傾斜に順次徐々に北に向かって傾斜するが、遺構面の傾斜よりはやや緩やかで、南端部の深さは55cm程度あるが、北端部の深さはこれよりやや浅く25cm程度しかない。最大幅は1mほどをはかる。2号溝と切り合い関係を持ち、これより新しい。断面は逆台形を呈する。埋土は3層分層でき、下層の2・3層が埋没したあと、一気に1層が埋没している。いずれも粘質土である。断面形態と方向から、東側に渠道を挟んで隣接する第I区の第2遺構面で検出した7号溝の延長と考えられるが、第I区では幅1.5m、深さ60cm程度残存している状態で検出されており、本調査区では著しく削平されているものと考えられる。弥生前期土器が1点出土した。

### 出土土器（第42図）

弥生土器（1） 1は弥生前期の甕の口縁部片である。小片であり径は復元できない。如意状に外反する口縁部形態であり、刻目は確認できないが前期板付Ⅱ式土器の範疇で把握できる。表面は摩耗しており調整は不明である。細砂粒を少量含み、焼成は良好で色調は暗灰褐色を呈する。

### 2号溝（第43図、図版14）

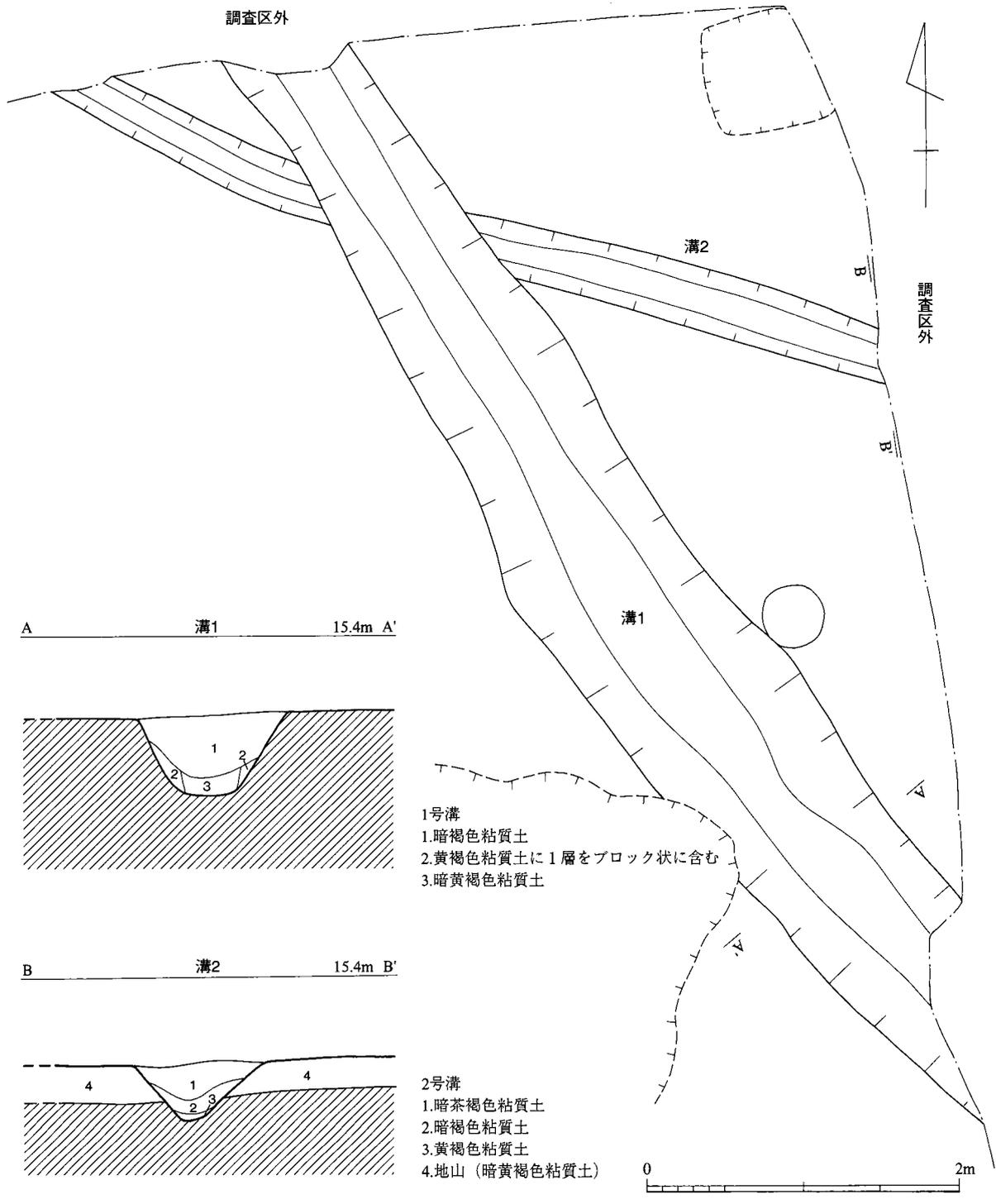
1号溝とはほぼ同じ位置、すなわち調査区の北東端部で、大略東西方向に伸びているのを検出した。東側がやや南に下がる位置にあり、正確には西北西から東南東に向けて延びると表現できよう。溝の規模は極めて小さく、幅は最大でも40cm、深さはわずか15cm程度しかなかったが、埋土は灰色味を帯びており、黒褐色の検出面の中ではくっきりとみることができた。なお、調査区の壁で土層を観察すると、深さは40cm弱あり、遺構検出時にやや下げすぎたことが分かる。延長は6m弱検出され、さらに東側に向かって伸びていたが、第I区ではこれにつながる溝は確認されていない。1号溝に切られており、これよりも古い。出土遺物はなく、時期は不明である。

### 3号溝（第40図）

調査区の中央南側で検出した浅い溝状遺構である。深さは10cmもなく、出土遺物もないため、土のシミを掘ってしまった可能性もある。埋土は暗黄褐色粘砂質土で砂質分が多い。

### 4号溝（第40図）

調査区の北側を略東西方向に断続的に走る溝状遺構である。幅は最大で80cm程度、深さは深いところで20cm程度で、埋土は砂質分が多い褐色粘砂質土である。出土遺物はなく時期は不明である。



第43図 1・2号溝実測図 (1/40)

## 第5節 その他の遺物

### 第1項 ピット出土土器（第42図、図版17）

3は繭型の胴部を持つ大型の甕型土器である。胴部最大径が大きく全体にやや丸みを帯びており、比較的古いものである可能性が高く、7世紀初頭～前半代の資料か。外面はハケ目調整、内面はケズリ調整を施し、口縁部は回転ナデ仕上げ。復元口径は20cmをはかり、胴部最大径は30cm程度。胎土は中程度で細・小砂粒をやや多く含み、焼成は良好で色調は黄褐色～淡橙褐色を呈する。

4は土師器の坏である。平坦な底部から屈曲して直線的に口縁部へと開く。胎土が精良で焼成はかなり良く、硬質であることや、形態などは8世紀頃の須恵器の坏と共通するが、色調が明るい灰色の土師質であり、似非須恵土師器と考えられる。

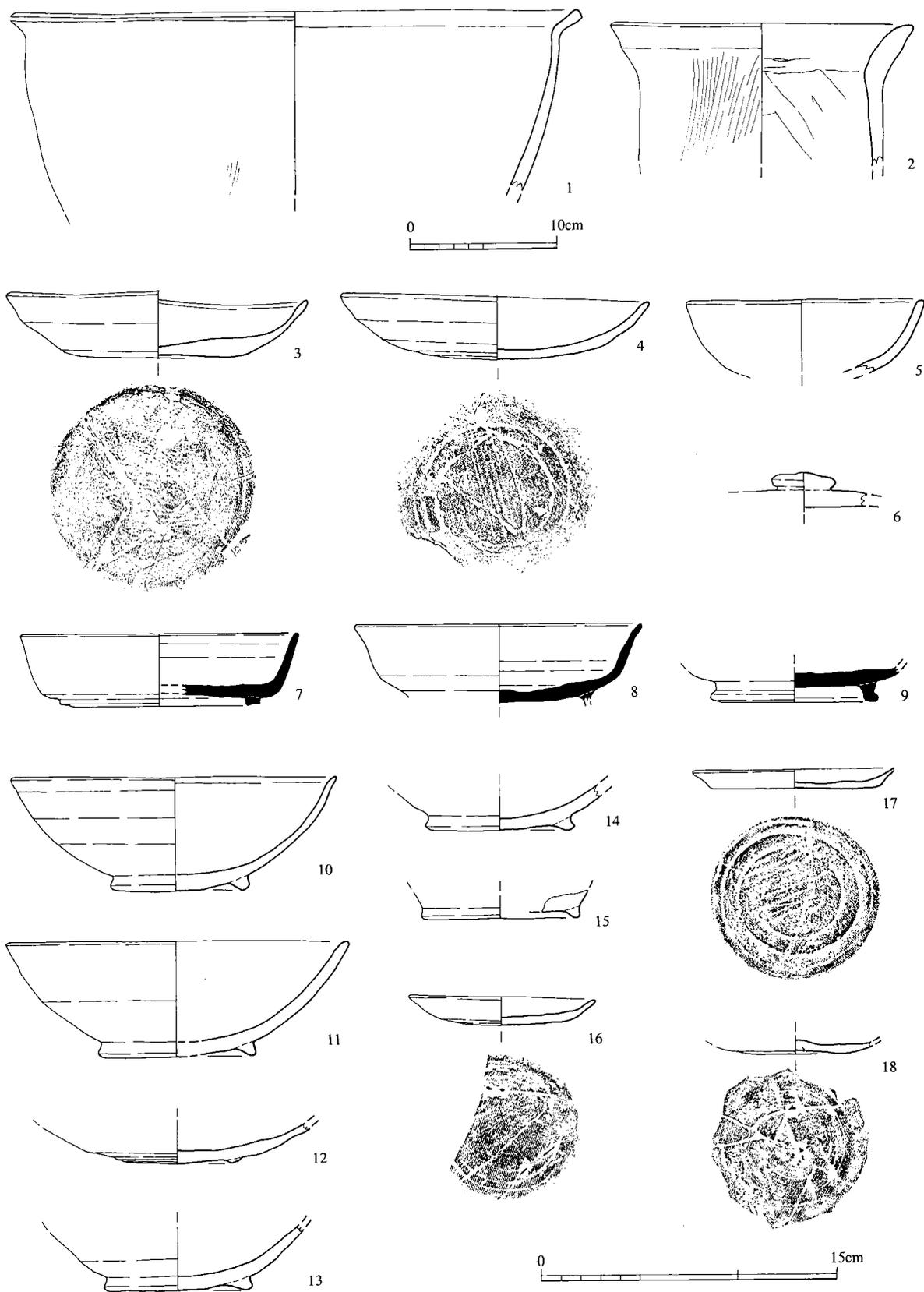
### 第2項 第1遺構面上包含層、攪乱坑出土土器（第44図、図版17・18）

**弥生土器（1）** 1は弥生前期の甕型土器である。口縁部が如意状に外反する板付式の甕である。胴部のふくらみが認められ、口縁部の外反部も明瞭に屈曲することから、板付Ⅱ式の中でも比較的新しい段階の前期後半におくことができよう。内・外面ともに剥離が著しく、調整は不明瞭だが、胴部にわずかにハケ目痕が認められる。口径は39.4cmをはかり、かなり大型である。胎土はやや精良で細砂粒を多く含み、焼成は比較的良好で色調は内・外面ともに灰黄褐色を呈する。

**土師器（2～6）** 2は丸底の底部とバケツ状の胴部、わずかに如意状に外反する口縁部を有する小型の甕型土器である。胴部内面を良く削り、口縁部付近は横ナデ調整にとどめることで口―胴部境内面に明瞭な稜を作り出している。内面はケズリ、外面はハケ目痕跡が明瞭に残る。口縁部径は15.4cmをはかる。胎土はやや粗く細砂粒を多く含み、焼成は良好で色調は明赤褐色を呈する。7世紀末～8世紀前半に位置づけられる。3・4は椀である。丸底から弱く湾曲しながら立ち上がる形態を持つ。底部はヘラ切り・ヘラ削りにより調整されるが、その上から板状工具によるハケ目痕のような痕跡を残す。口縁部は回転ナデ、その他は横ナデ痕が認められる。3の口縁部径が15.2cm、4の口縁部径が15.5cmである。いずれも胎土は精良で細砂粒を若干含み、焼成は甘く色調は灰黄褐色～黄橙色を呈する。8世紀中頃～後半の資料か。5も椀である。丸底からゆるやかに立ち上がって口縁部に至る器形は3・4と似るが、5の方が深い。器壁はやや厚く、調整は内・外面ともに丁寧なナデ仕上げである。胎土は精良で細砂粒を少量含み、焼成は良好で色調は淡橙褐色を呈する。口径は12cmをはかる。6は須恵器模倣坏蓋である。天井部とボタン状のつまみが残存する。天井部上面に回転ヘラケズリ痕が残る。胎土は精良で細砂粒をわずかに含み、焼成は良好で色調は黄褐色を呈する。

**須恵器（7～9）** 7～9は坏身片である。いずれも平坦な底部から屈曲して直線的、またはやや外反しながら口縁部へと伸びる器形を持つ。いずれも高台が付き、7は断面長方形、8は不明ながらやや細く広がるか、9は外に広がりやや古相を呈する。調整はいずれも底部内面が横ナデ、口縁部と高台付近は回転ナデで共通するが、底部外面は8のみほかと異なり、7・9は横ナデで仕上げるが8にはヘラケズリ痕が残る。胎土は精良で焼成は良好、色調は灰色～灰黄色を呈する。

**瓦器（10～15）** 10～15は瓦器椀である。器形は共通性が高く、いずれも丸底からゆるやかに内湾しながら開き気味に立ち上がり、口縁端部のみわずかに外反させる。断面三角形の高台が付くが、



第44図 第1遺構面上包含層・攪乱坑出土土器（1は1/4、他は1/3）

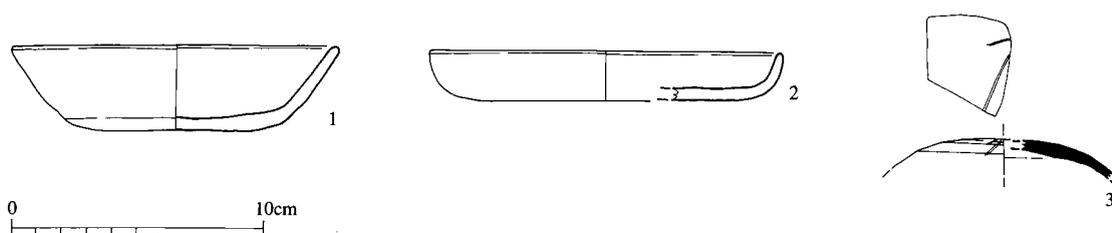
高台が低く丸底のため、底部外面はしばしば口台と同じレベルまで下がる。12は器形がほかとはやや異なり、高台が極端に低く立ち上がりも低い。また15も器形が異なっており、平底から屈曲して上方に伸びる口縁部の傾きが急角度となっている。表面調整は内外面ともにミガキが認められるものがあるが、摩耗して不鮮明なものも多い。色調は外面はいずれも灰褐色～黄灰褐色を呈し、内面は10・11・13が黒色、12・14は外面と同じ灰褐色～黄灰褐色を呈する。径は、口径が10は16.4cm、11は17.3cm。高台径は10が7cm、11が8cm、12が6.3cm、13が7.4cm、14が7.5cm、15が8cmをはかる。いずれも12世紀のものだろう。

**中世土師器 (16～18)** 16～18は土師器の小皿である。いずれも平坦な底部からやや屈曲して短い口縁部へと至る器形を有する。底部はヘラ切り痕がよく残り、その後指押し調整で仕上げる。口縁部は回転ナデ、坏部内面は横ナデ仕上げ。粘土紐を回転させて積み上げる様子がよく分かるものが多い。径が分かるのは16・17で、16が9.5cm、17が10.1cmをはかる。胎土はいずれも精良で砂粒をほとんど含まず、焼成は比較的良好で、色調は16・17は白黄褐色を呈し、18が淡橙褐色を呈する。これらも12世紀に収まるものと考えられ、これらの中世土器の大半は先述したように4号土坑から出土した可能性が高い。

### 第3項 第2遺構面上包含層出土土器 (第45図、図版18)

**土師器 (1・2)** 1は平坦な底部から屈曲してゆるやかに伸びる坏である。底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、編物の圧痕が認められる。口縁部の内・外面は回転ナデ、坏内部は横ナデ仕上げ。口縁部径は12.8cm、底部形は8cmほどをはかる。胎土は良質で細砂粒を若干含み、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。8世紀後半に位置づけられよう。2は碗型土器である。平坦で広い底部を有し、明瞭な屈曲部を持たずゆるやかに内湾する短い口縁部を持つ。器壁はやや厚めである。焼成がやや甘いために全体に摩滅が進んでおり、表面調整は不鮮明だが、内・外面ともにナデ仕上げか。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。色調は白黄色を呈する。7世紀後半～8世紀代に位置づけたい。

**須恵器 (3)** 3は須恵器の坏蓋である。小破片のため全形は不明であり、天井部から肩部にかけての形態のみ判明する資料である。天井部は丸みを帯び、肩部にかけてゆるやかに湾曲しており、明瞭な屈曲部を持たない。調整は、天井部付近が横ナデで、肩部には回転ヘラケズリ痕を残すがその範囲は狭く、口縁部にかけては回転ナデを施す。ヘラ記号が認められる。胎土は精良だが細砂粒をやや多く含み、焼成は良好で色調は灰色を呈する。7世紀前半代の資料か。



第45図 第2遺構面上包含層出土遺物実測図 (1/3)

#### 第4項 その他の遺物（第46図、図版18）

その他の遺物として、各遺構や包含層等から出土した土器以外の遺物を報告する。土製品として土錘、製塩土器が、石器として軽石と砥石が、金属器として鉄斧と銅銭が検出された。

土錘（1～6） 1～6は土錘である。1は3号土坑出土。最大直径1cmをはかり、孔径は3mm程度。全体の2/3ほどが残存すると推定される。現状の重量は2.5gであり、復元重量は3.75g程度、全長は4cm程度と推定される。胎土は精良で混和物はみられず、焼成は良好で灰褐色を呈する。2も3号土坑出土。最大直径は1よりやや太く1.2mm程度、孔径も太く5mm弱をはかる。推定全長は4cm程度で、全体の1/6程度が残存していると考えられ、現状の重量は1.5gであるので、本来は9g程度の重さがあったものと思われる。孔内面に心材への巻き付け時の粘土巻き込み痕がみられる。胎土は精良で混和物は認められない。焼成はやや甘く、色調は灰白色を呈する。3は第1遺構面から出土した。最大径2cm弱、孔径6mm程度と推定されるやや太めの土錘である。全体の1/4程度が残存し、現状の重量は4.3gあり、復元重量は17.2g程度。全長は5cmを超えると思われる。胎土は精良で砂粒を含まず、焼成は良好だが表面はやや摩耗する。色調は灰白色を呈する。4も第1遺構面から出土した。直径1cm、孔径3mm、全長おそらく4cm弱で、1と同様の土錘である。現状の重量は2.7gあり、4/5が残存しているため復元重量はおよそ3.4g程度と考えられる。胎土は精良で砂粒はほとんどみられず、焼成は良好で色調は橙褐色を呈する。5も第1遺構面から出土した。大型の土錘である。最大直径が3.4cm、孔径は1.4cmほどをはかる。全長は7cm程度か。現状で31.2gの重さがあり、およそ1/4が残存していると推定されることから、復元重量は124.8g程度と考えられる。胎土は精良で混和物はみられず、焼成はやや甘く色調は灰白～浅黄橙色。6は第2遺構面から出土した。最大直径おそらく1.6mm程度、長さは5cm程度を測ると推定されるやや大きめの土錘である。孔径は4mmと小さい。現在の重量は2.2g程度であり、およそ1/5が残存していると考えられ、本来の重量は11g程度であったろう。胎土は精良で混和物は少なく、焼成は良好で赤褐色～灰褐色を呈する。これらの土錘はいずれも一点ずつ心材に巻き付けて指で整形し、心材から抜き取って焼成したものである。特に5の表面には明瞭に指頭圧痕が残る。筑後川での網漁などに使ったものであろうか。

製塩土器（7・8） 浮羽バイパス関連の古代の遺跡の調査ではしばしば製塩土器片が出土するが、本遺跡でも破片が2点出土した。7は8世紀前葉の3号住居跡から出土した。胴部片である。内面に布目圧痕を明瞭に残し、外面は工具ナデにより調整される。胎土はやや粗く細砂粒を多く含む。焼成は良好で赤褐色～灰橙褐色を呈する。8も8世紀前葉の10号住居跡より出土した。胴部下部の破片である。やはり内面に布目圧痕を持ち、外面はヘラ削りあるいは工具による強いナデにより調整される。胎土は精良で混和物は少なく、焼成は良好だがやや表面が摩耗する。色調は灰橙色～黄橙色を呈する。

石器（9～11） 9・10は軽石である。いずれも多孔質で軽く、水に浮く。擦り跡等は確認できなかった。摩耗等によりかなり変形しており、本来の形態を推測することは難しい。筑後川での漁に浮子として使われたものか。9は8号住居跡から、10は5号住居跡から出土した。11は砥石かと思われる。表面に幅1cm、深さ2mmほどの断面が弧を描く浅い筋が一条認められた。筋の方向に沿ってうっすらと擦痕が見え、丸いものを研いだ可能性がある。大きく重いため置き砥石と考えられ、石目は細かく中砥と考えられる。



第46図 遺跡出土土製品、製塩土器、石器、金属器実測図（11は1/3、他は1/2）

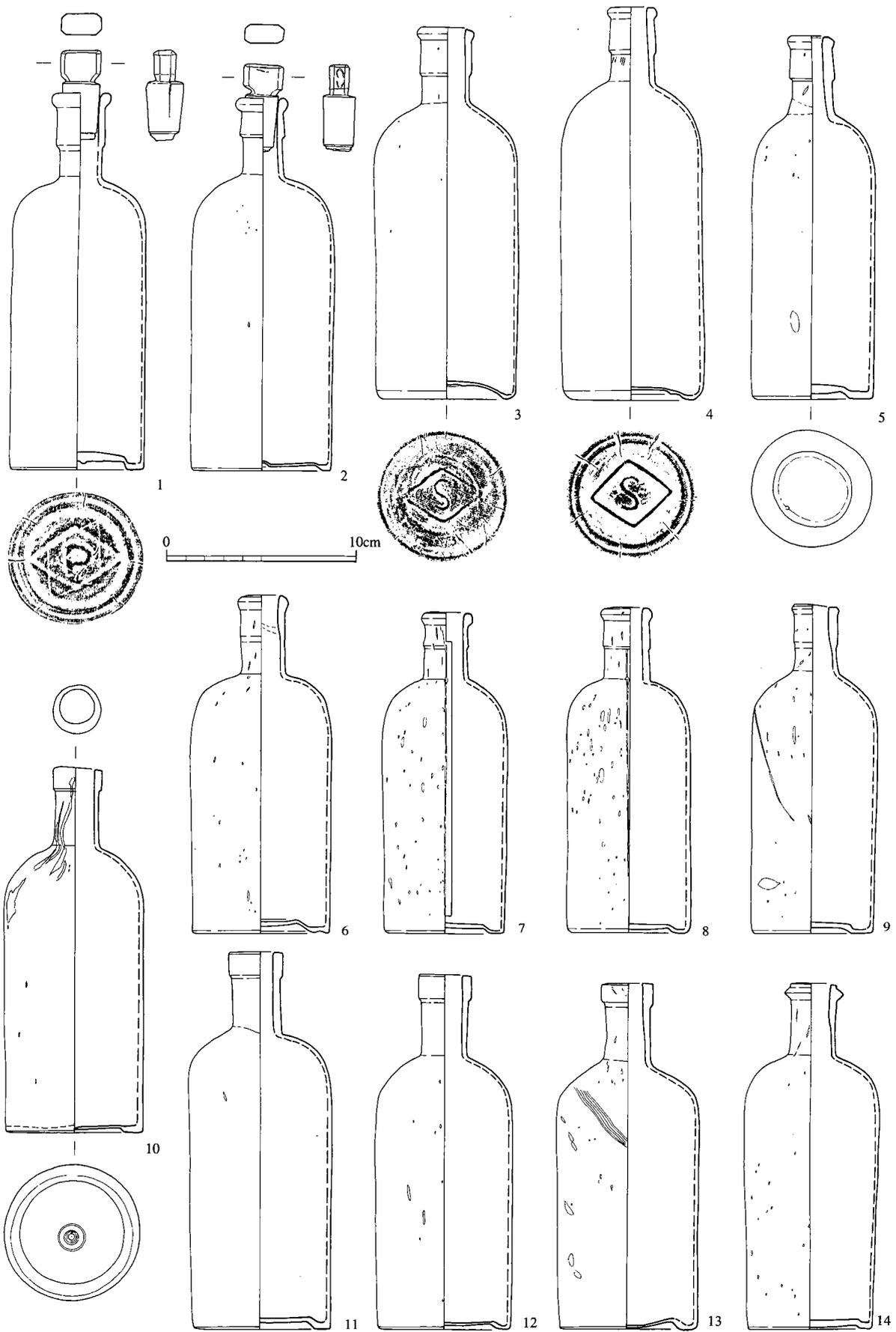
金属器（12・13） 12は袋状鉄斧である。北東部落ち込み（2層）中から出土した。錆化が著しく、箇所によっては1 cm以上も錆の厚さがある、外面からは本来の形態を推定することは難しかったが、たまたま発掘時に中央から割ってしまっていたため、内面の様子が観察でき、袋状鉄斧であることや大まかな形態が判明した。大きさは錆を含めて全長およそ9 cm、厚さ2 cm程度、中央の割れた部分での本来のサイズは幅3 cm、厚さ1.2 cmをはかり、刃部がわずかにバチ状に開く形態を持つものか。13は銅銭である。表に「寛永通寶」と浮き彫りにより描かれるが裏は無文である。厚さは0.8 mm程度しかなくごく薄い。直径は2.4 cmをはかる。中央に隅丸方形の孔があり、一辺0.6 cmをはかる。

#### 第5項 近代攪乱坑出土の遺物

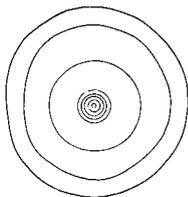
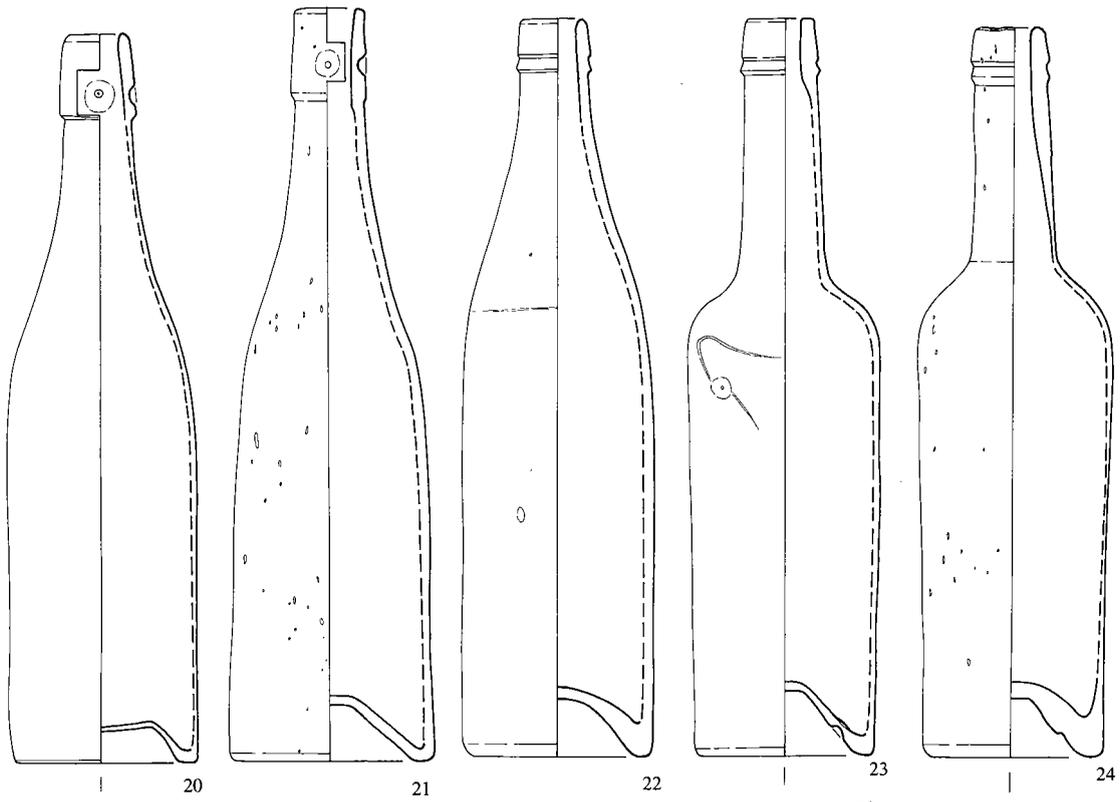
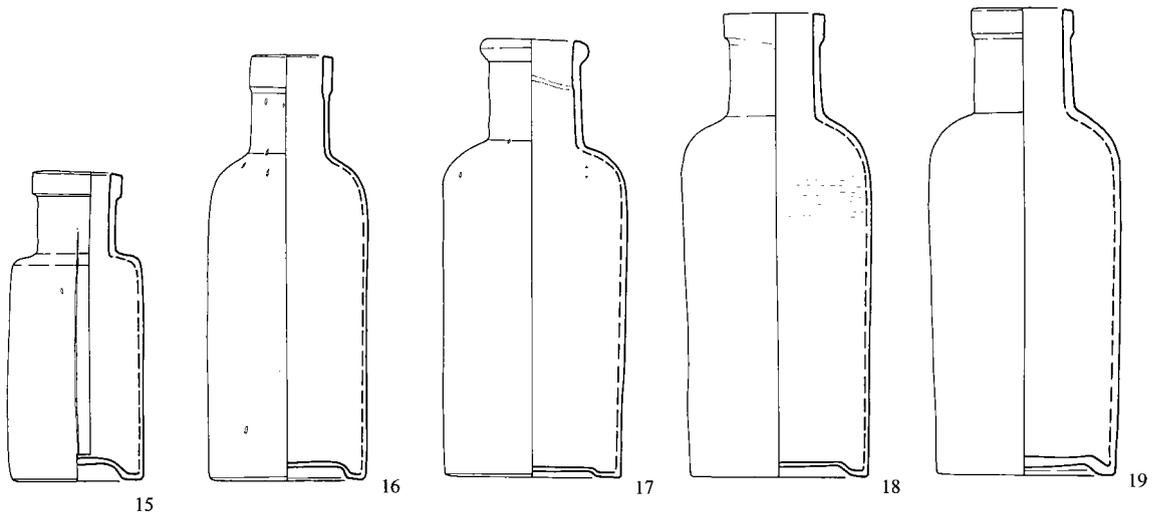
近代の攪乱坑を調査していたところ、ガラス製品や陶磁器がまとまって出土した。当初は全て攪乱坑出土で一括して取り上げていたが、先述のように石炭殻の詰まった最も大きな攪乱坑（3号攪乱坑）から明治後半～昭和初期の駅売りの茶瓶が出土し、この攪乱坑が両筑軌道と関係のある遺構であるらしいことが認識されるにいたって、攪乱坑から出土した遺物群が注目された。そこで、途中からこの3号攪乱坑と、これに隣接する1・2号攪乱坑から出土した遺物群については、ほかの攪乱坑出土遺物とは別に取り上げることとしたが、途中で1・2号攪乱坑の取り違えが起き、出土遺物が混乱をきたした。そこで、ここではまず1・2号攪乱坑の出土遺物を提示し、これとは別に3号攪乱坑からの出土遺物を示すこととしたい。

#### 1・2号攪乱坑出土遺物（第47～51図、巻頭図版3、図版19・20）

定型的なガラス瓶類（1～35） 1～14は、円筒状の胴部を持ち、肩が張って頸部が細い、薄青～薄緑色（ガラス色）を呈するガラス瓶の一群である。これらのうち、口縁部の内面がすれてすりガラス状になっている1・2については、ガラス製の栓を使用していたと考えて共伴した栓をはめてみたところサイズがほぼ適合したため、この状態で図示している。ほかはおそらくコルクやゴム製の栓であったのだろう。7・8は型整形で同じ規格で作られた（型はおそらく別か）と考えられるが、その他は全て口吹整形のため、サイズや形が少しずつ異なる。いずれも器壁の中に気泡を含み、大きいものでは長径1 cm、幅5 mm程度の気泡を含むものもある。また、7・8を除いて表面には全て横方向に回転させながら擦った跡があり、口吹後の整形時に回転させて布や新聞紙などにこすりつけて形を整えた痕跡と考えられる。底部は全て型に押しつけて整形しているようであり、1には菱形を組み合わせた中に「P」、3・4には菱形の中に「S」の文字が陽刻で刻まれる。ゆがみがかなり大きいもの（5・11・13）や、上下からみてガラスがかなり片寄っていて器壁の厚さが一様でもの（10）が認められる。口縁端部の形態には大きく分類して3種類があり、丸く肥厚させるもの（1～9）、直線的に肥厚させるもの（10～13）、三角形の突帯を貼り付けたような形状を呈するもの（14）が認められる。15～19は円筒状の胴部と良く張った肩部、やや広口の口頸部を持つガラス瓶の一群である。口頸部を平たく肥厚するもの（15・16・18・19）と半円状に肥厚するもの17がみられる。いずれも底部は若干の上げ底で、器壁の厚さは2～3 mm程度である。色調は15・17が透明、16・18が薄青色（ガラス色）、19は濃青色を呈する。20・21は、円筒状の胴部と緩やかななで肩の肩部、細い口頸部を持つガラス瓶の一群である。底部は上げ底状を呈するが、20は上げ底の頂



第47図 1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その① (1/3)



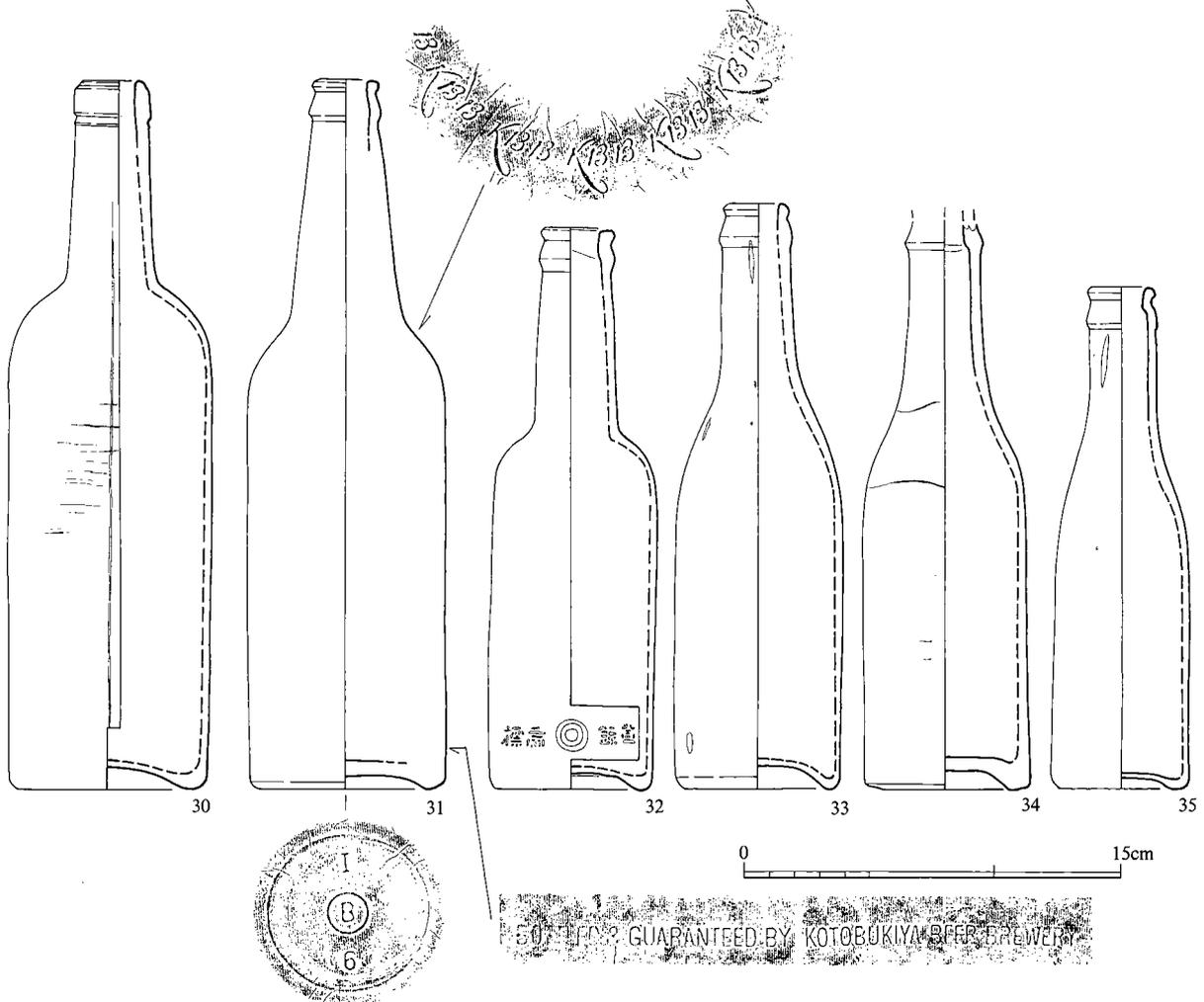
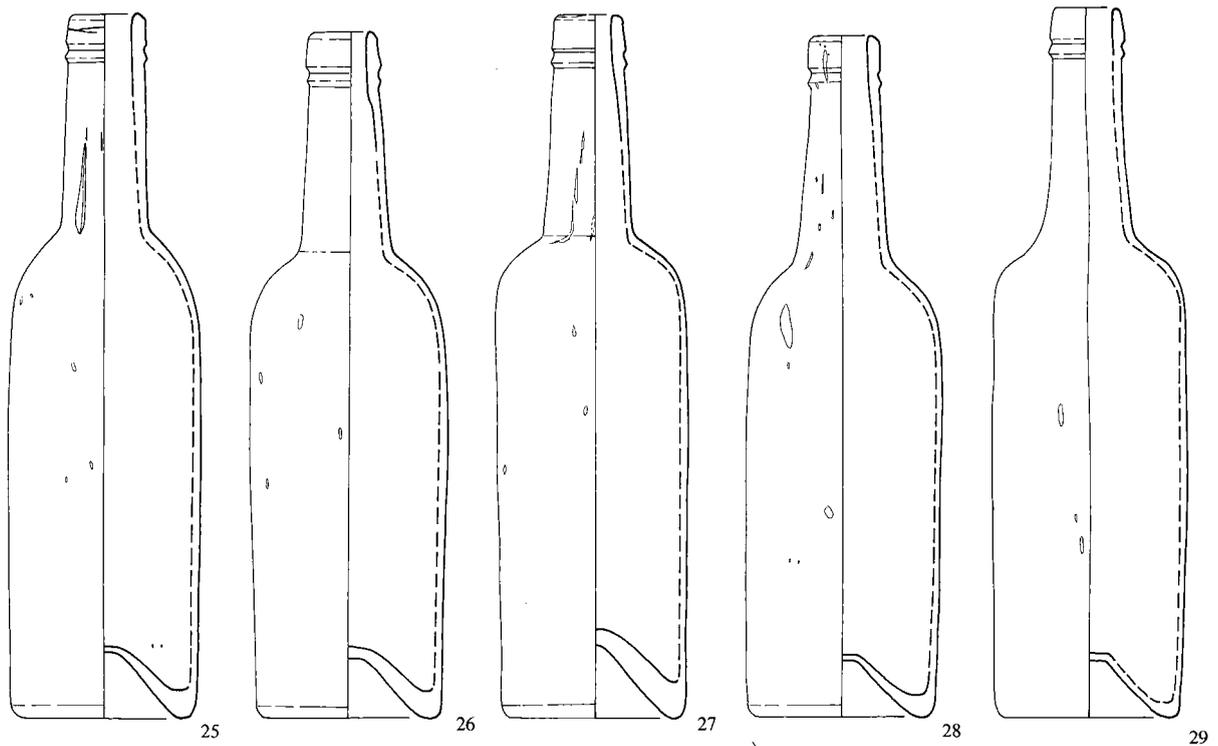
0 10cm

第48図 1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その② (1/3)

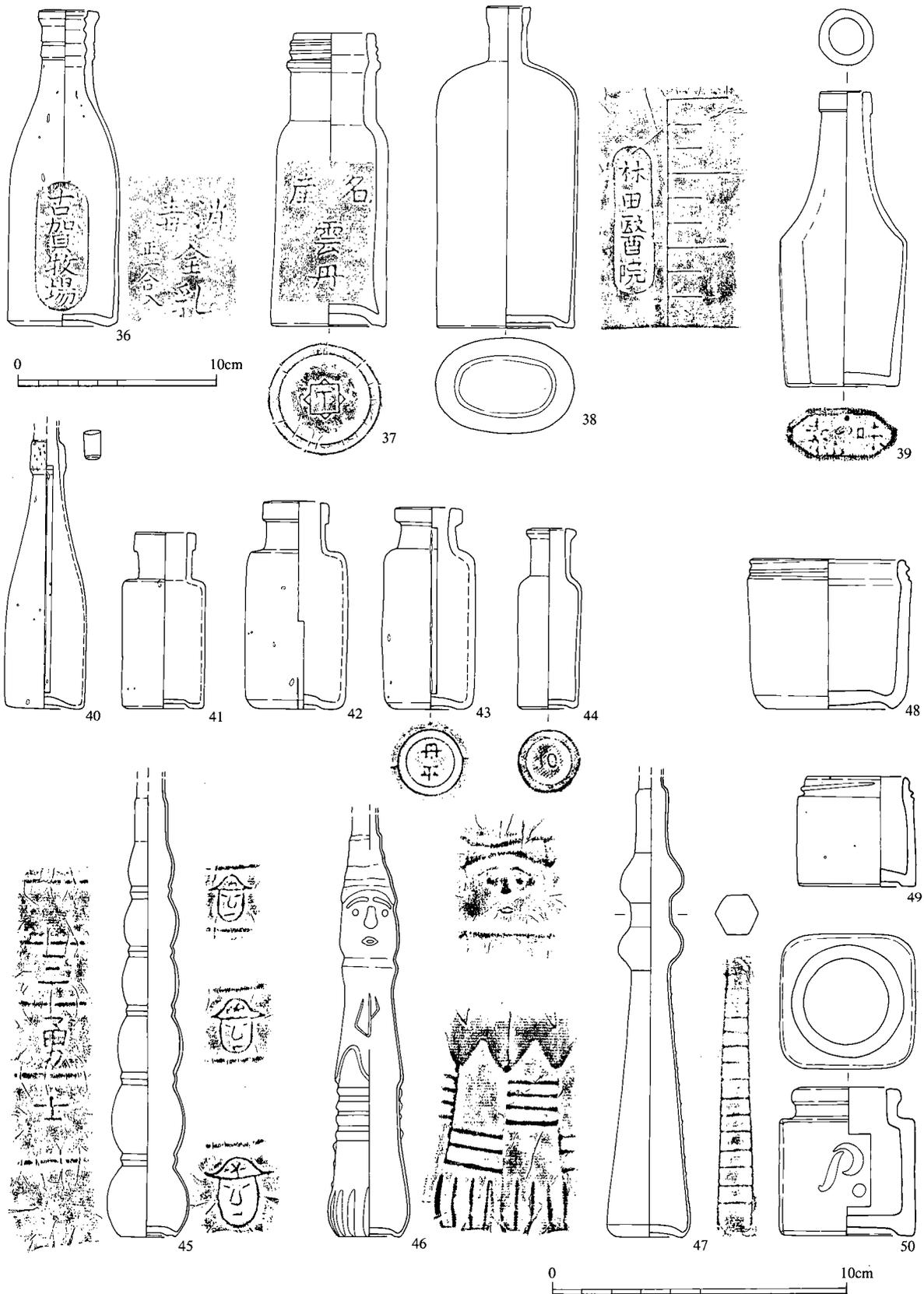
部が平坦に作られている。上げ底は澱などを沈殿させるためのもので、醤油やワイン等の容器にしばしばみられる。21は特に気泡が多い。口縁部は3 cmにわたって肥厚させており、両側面に貫通しない穿孔をあけている。この窪みはガラスが柔らかいうちに作られている。おそらくここに金具を引っかけてゴム等の栓を密着させていたと考えられる。これは密閉用の器械を持たない家庭において瓶を複数回使用するための密閉方法であり、醤油などを持ち込んだ瓶に入れて売ってもらうための瓶と考えられる。22は頸部までの器形は20などと共通しているが口縁部形態が異なり、突帯を1条付し、その上を肥厚させている。これはコルク等の栓をはめて針金等で固定するという密閉方法をとっていた口縁部形態で、形状や色調（濃茶色）などから醤油などを工場で作って密閉して売するための回収-再利用瓶と考えられる。23~29は上げ底、円筒状の胴部、強く張った肩、突帯を1条付す口縁部を持つ瓶で、形態からワイン用の瓶と考えられる。23・24は底部に「AKADAMA PORT WINE」の押印（陽刻）を施す。また、25は肩-頸部境に製作時にできたものと思われる縦筋が入る。24・29はゆがみが大きく、特に29は頸が大きく傾く。このほか、ほとんど全ての瓶に表面整形時に横方向に回転させた擦痕が入る。気泡は全てにみられるが、特に28には大小様々なサイズの気泡が多く認められる。色調は、23が緑、24が浅緑、25~27が濃茶、28が濃黄緑、29が濃緑色を呈する。30・31は大型のビール瓶である。いずれもやや上げ底で円筒状の胴部と強く張った肩を有する。両者とも型整形であり、合わせ型の筋が縦に二本入る。また30には胴部上半に横方向のしわが何条か走るが、おそらく型の内部で冷却されるときにできたものであろう。30は前述のワイン瓶と同様の口縁部形態を有し、コルク等で栓をして針金等で留めたものだろう。31は現在のビール瓶と同様の口縁部形態を有し、王冠により蓋がされたものである。31の肩部には「KBB」、胴部下位には「BOTTLED & GUARANTEED BY KOTOBUKIYA BEER BREWERY」と陽刻で記される。色調は両者とも濃茶色。32は小型のビール瓶である。形状は先述の31と変わりはない。底部には表に「登録©商標」裏には「大日本麥酒株式會社製造」（いずれも文字は右から左方向）と白色でプリントされる。色調は濃緑色。33~35は、やや上げ底の底部と円筒型の胴部を持ち、ゆるやかに細い頸部へと至る形状を持つ。口縁部は31・32と同じ形態で、王冠により蓋をしてあったものである。おそらくサイダー等の飲料用の瓶であろう。色調は33・34が淡緑色で、35は濃緑色。33・34にはゆがみが認められ、特に33は著しい。35は型整形である。30~35の全てに小さな気泡が認められるが量は比較的少ない。

その他のガラス容器（36~49、51~57）

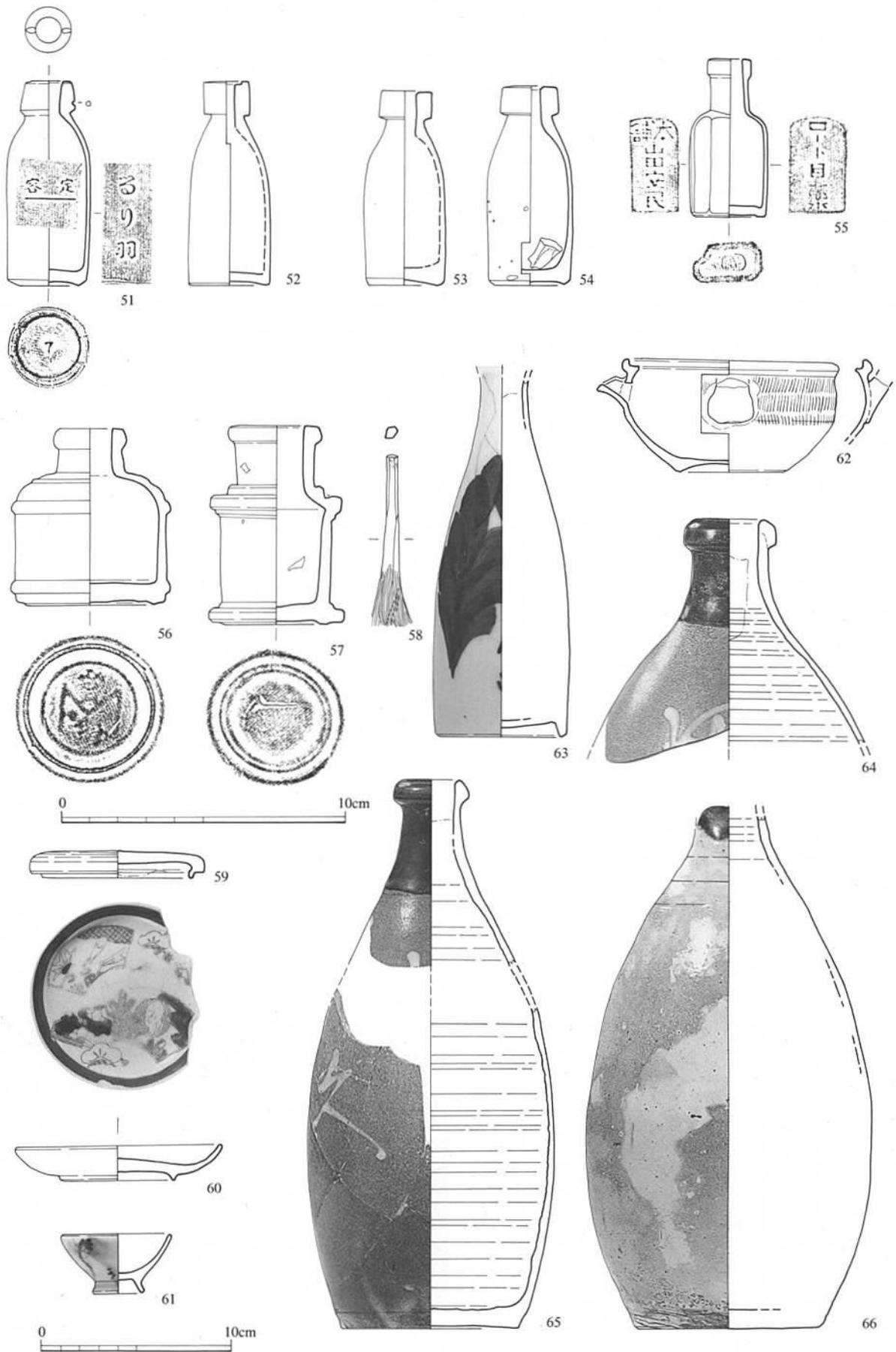
36は牛乳の容器である。わずかな上げ底に筒状の胴部、なで肩と細い口縁部を有し、口縁部の内側にねじこみ溝をもつ透明の瓶である。内栓タイプである。型整形であり、陽刻で表に「古賀牧場」、裏に「消毒全乳正一八〇入」と記される。37はウニの瓶詰め容器で、透明でわずかに橙色を呈する。型整形で、側面に陽刻で「名産雲丹」（「名産」は右から左）、底部には社標をあしらったかと思われる「T」を二つの四角で囲んだ紋様が記される。38は飲み薬の量り売りの瓶である。透明で、横断面形態が長卵形を呈し、型整形で側面に「林田醫院」の文字と目盛が陽刻で記される。この林田醫院は、田主丸町内で当時開業していた眼科医とのことである。39は味の素の瓶である。無色透明のガラス製で、型整形、横断面形態は平たい八角形状を呈し、底部に陽刻で「味の素」（文字は右から左）と記される。40は内容物不明の小瓶である。型整形で、色調はわずかにガラス色を呈し、高さが8 cmほどと小さく器壁も極めて薄い。全体型は小型の一升瓶のような形である。口縁部を肥厚させ、そこから先が極めて薄く伸びるが、折り取られている。おそらくアンプル（ガラスで口を



第49図 1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その③ (1/3)



第50図 1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その④ (36~38は1/3、他は1/2)



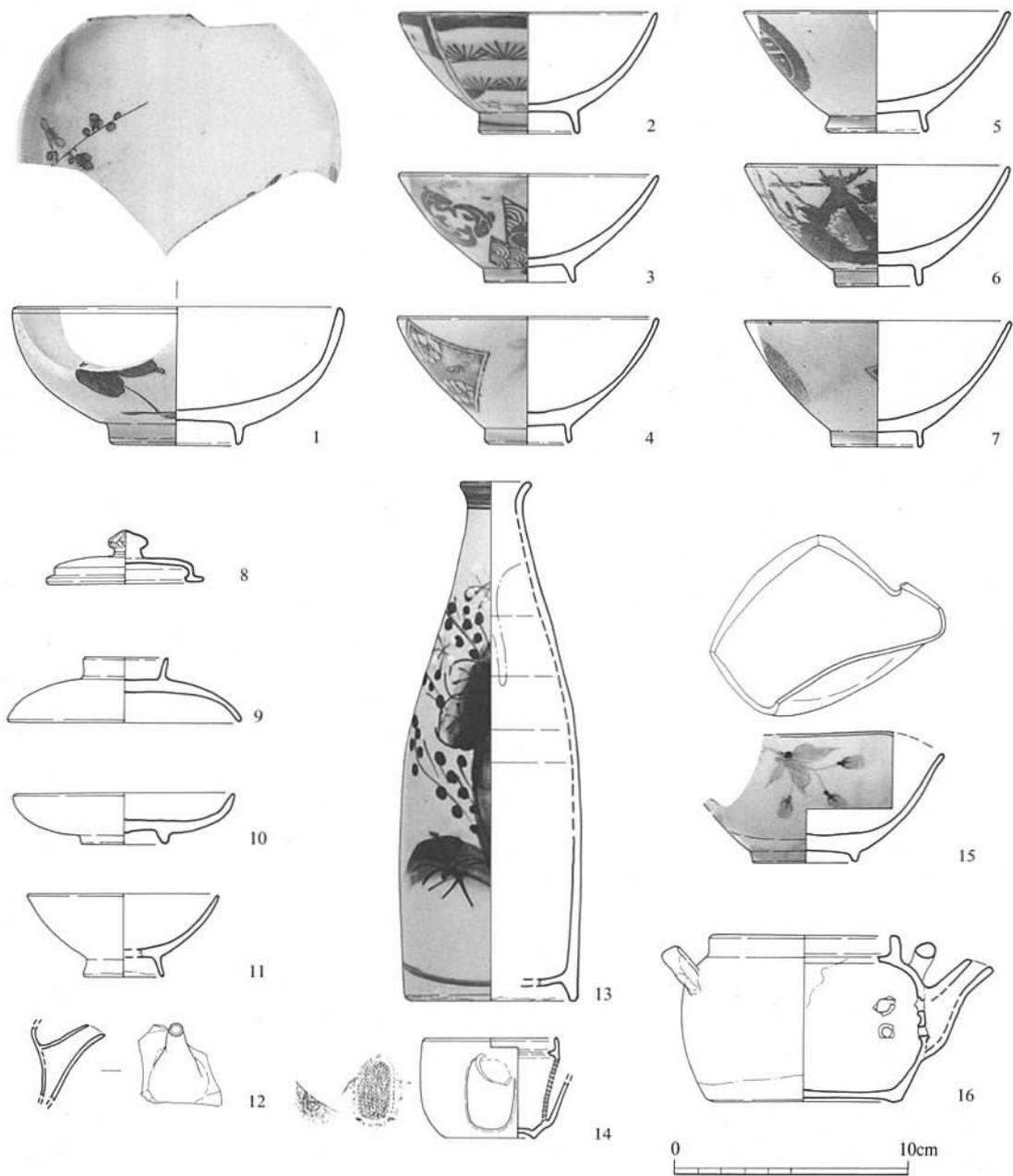
第51図 1・2号攪乱坑出土近代遺物実測図その⑤ (59~66は1/3、他は1/2)

密閉した容器で、先端を折り取って使う)と考えられる。41～43は丸薬等の容器か。色調は茶色で、筒状の胴部と良く張った肩、肥厚した口縁部を持つ一群である。おそらくコルク栓等により密閉されたものか。いずれも型整形で、43は底部に「丹平」(現在もある製薬会社名)と陽刻で記す。44・55は目薬の瓶である。44は無色透明のガラス製で、筒状の全体型を呈し、肩部がやや張って口縁部を丸く肥大させる。断面形は正円で、型整形で底部に「10」と陽刻する。55は濃青色を呈し、横断面形が面取りをした長方形で、一カ所の隅を丸くえぐり取ったような形を呈する。これは、箱に入れて販売するときここにスポイトを入れるための仕組みとのものである。ともにコルク栓と考えられる。型整形で、表に「本舗山田安民」(本舗は右から左)、裏に「ロート目薬」と記す。45～47はニッキ水の瓶である。それぞれ特徴的な全体型を呈するが、薄いガラス色を呈し、器壁が薄く、器壁に気泡を多く含み、型整形で口縁部はアンプル状となって折り取られている点が共通する。45の表面には陽刻で「三勇士」、裏面には三人の兵隊の顔が描かれる。46にはスカートをはいた女の子と思われる姿が瓶の全面に描かれる。47ははしご状の目盛が描かれる。48・49はクリーム等の容器か。型整形で、ねじこみ式の蓋が付属していたと考えられる。48は白色、49は無色透明である。51～54は液体の薬品の容器であろう。いずれも型整形でよく似た器形を有し、無色透明である。51の口縁部には栓を固定するための金具を付ける小孔と窪みがある。51の側面には「るり羽」・「定容」(文字は右から左)、52の側面には「げんろく」・「コノスジ定容」(文字は左から右)と記される。いずれも薬品名と内容量を示したものであろう。54中にはコルク(木質)栓の破片と考えられる木質物が認められた。56・57はインク等の容器である。いずれも型整形で、56の底部には陽刻で「M」と記され、57の底部にも陽刻で「√」状の記号が記される。57の内部には、内容物を塗布するための一木作りのハケ(58)が入っており、容器の内部とこのハケは濃い紫色に染まっていた。内容物はガリ版刷り用の修正液ではないだろうか。

**陶磁器類(50、59～66)** 50はインク瓶あるいは軟膏等の容器であろう。胴部横断面形は面取りされた正方形で、口縁部は正円形。白色わずかに茶色がかった色調で、胴部の一面には青色で「p」と記される。59は合子の蓋である。60は小皿である。見込みに赤上絵で扇子と梅の花が描かれる。61～66は酒器である。61は猪口である。外側に青・ピンクの下絵で梅の木。62は酒注器である。黒色を呈するが変色した結果であろう。外面上部に飛びカンナを施し、この部分は本来朱色か。把手が一方の身に付き、注口には濾過用の小穴などをつけない。63～66は徳利である。63は注ぎ徳利である。外面に青下絵で植物の葉、「左仏画」か。64～66はいわゆる貧乏徳利である。やや太めの64・66と細めの65があり、容量の差であろう。通常外面に造り酒屋の名称が書いてあり、64・65には「田…」とある。田主丸町の「田」か。66は口縁部を除き完存するが、文字はみられない。

### 3号攪乱坑出土遺物(第51図、巻頭図版4、図版20)

**陶磁器類(1～16)** 1は鉢である。見込みと外面に青・ピンクの下絵で同種の花が描かれる。2～7は飯茶碗である。いずれも外面に青下絵があり、4・5・7は模様・器形とも一致する。8は合子の蓋。宝珠型のつまみが付き、外面に白色化粧土で花。内面に炭の手書きで「トス22」か。9は坏または椀の蓋である。外面に青色の下絵で菊(?)の葉を描き、葉脈と輪郭を金色、花を赤の上絵で描く。10は小皿である。ロクロ引きで底部内面の釉を掻き取り、一と一を組み合わせたマークを墨で書く。11は無紋の猪口である。12は注器である。注口部のみ完存する。型作りで内面に布



第52図 3号攪乱坑出土近代遺物 (1/3)

圧痕。胴-注口境には濾過用の小穴・網等をつけないため、おそらく酒注器と考えられる。13は注ぎ徳利である。ややくすんだ白色の地に、青下絵で植物を描き、花の部分に粘土を貼り付けて花びらを表現する。口縁部は下絵で緑色に着色。焼成前に高台を刃物で削っている。全体に付着した釉を削り取って露胎としたものか。底部が欠けているが意図的な穿孔にも見える。15は片口である。外面に下絵でピンク色の花を描く。16は注器である。胴部はロクロ引きで、弦をかける耳を注口の直線上に2つ配置する。注口-胴部境には、外面から注口接着前に穿孔により二つの穴を縦に配す。釉はやや黄緑がかった黄褐色で外面中～上位のみに着色する。駅茶瓶である。

## 第4章 福岡県久留米市日詰遺跡から出土した炭化種子とその意義

小畑 弘己\*

### 第1節 遺跡の調査と概要

遺跡の名称：日詰（ひづめ）遺跡第2次調査地点

遺跡の所在地：福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城

調査期間：平成14年11月5日～平成15年2月11日

調査担当者：小澤佳憲

遺跡の年代：古代（7世紀末～8世紀前半）

遺跡の立地：扇状地端部で河川氾濫原に隣接する微高地上、標高17m

### 第2節 扱った試料

分析試料は、古代（7世紀末～8世紀前半）に属する3号・5号・6号・10号・13号・19号竪穴住居跡のカマドから採取した焼土・灰層である。うち3号・5号・6号・13号竪穴住居跡のカマド内の試料から炭化種子が検出された。これらの資料は実体顕微鏡を使用して、種子選別・観察・写真撮影を行った。遺構別の試料量と検出種子の状況は以下の第1表のとおりである。

第1表 日詰遺跡フローテーション法分析結果

試料名	試料量 (L)	種子検出状況
3号竪穴住居跡カマド内土	75	イネ・コムギなど種子5点検出
3号竪穴住居跡カマド埋土	42	イネ・コムギ・マメなど種子10点検出
5号竪穴住居跡カマド内土	150.5	イネ・コムギなど種子8点検出
6号竪穴住居跡カマド内土	62	不明種子3点検出
8号竪穴住居跡カマド内土	69	なし
10号竪穴住居跡カマド内土	63	なし
13号竪穴住居跡カマド内土	104	イネ・オオムギなど種子8点検出
19号竪穴住居跡カマド内土	40	なし
19号竪穴住居跡内土	30	なし

### 第3節 出土種子の概要（第2表）

イネ *Oryza sativa* L. (第53図-11)

イネは胚乳の状態出土した。完形になるものは少なく、13号竪穴住居跡カマド埋土内から出土したものが唯一である。他は半欠品である。13号竪穴住居跡出土種子の計測値は、長さ5.0mm、幅2.4mm、厚2.1mmである。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. (第53図-12)

オオムギは唯一3号竪穴住居跡カマド埋土内から出土した。果実は長楕円形で、腹面には縦溝が

第2表 各試料ごとの種子出土点数および個体数

試料名	検出種子( )は破片数を示す)												
	最小個体数	イネ	オオムギ	コムギ	ヒエ	アワ?	マメ科(アズキ)	アサ	ホタルイ	カモジクサ属?	不明1(雑草)	不明2(マメ科?)	不明
3号竪穴住居跡カマド内土	5	(1)		3(1)									
3号竪穴住居跡カマド埋土	10	(3)		2	1		(1)			1			(2)
5号竪穴住居跡カマド内土	8	(4)		(1)		(1)		1	1				
6号竪穴住居跡カマド内土	3											(2)	(1)
13号竪穴住居跡カマド内土	8	1	(1)		2						1		(3)
最小個体数	34	9	1	7	3	1	1	1	1	1	1	2	6

ある。背面はほぼ平坦で基部に楕円形のヘソが認められる。胚部をわずかに欠失する。現存長で4.5mm、幅2.2mm、厚さ1.5mmである。腹面に穎の剥離痕(椿坂1998)が認められ、皮性オオムギと思われる。

コムギ *Triticum aestivum* L. (第53図-1~3・7)

果実は端部の丸い楕円形を呈し、腹面には縦溝がある。背面はほぼ平らで基部に円形のヘソが認められる。3号竪穴住居跡のカマド内から完形3点、破損品1点、同カマド埋土から完形2点、5号竪穴住居跡のカマドから欠損品1点出土している。第53図の1・2および7は劣化が激しい。とくに7は表面の凸凹が目立ち、激しく変形している。同3は小型のやや丸みを帯びたもので、著しく小さいが、未成熟果の可能性もある。1は長さ3.9mm、幅2.6mm、厚さ2.0mm、2は長さ3.5mm、幅2.4mm、厚さ1.5mm、3は長さ2.5mm、幅1.7mm、厚さ1.3mm、7は長さ3.6mm、幅2.6mm、厚さ2.0mmである。これ以外に3号竪穴住居跡カマド埋土から出土した長さ3.4mm、幅2.2mm、厚さ1.9mmの穎果がある。いずれも小型の部類に入るもので、エゾコムギ(吉崎・椿坂1990)の範疇に属する。

ヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno (第53図-4・10)

穎果は長楕円形で、側面観がD字状を呈するのが特徴である。背面に穎果の2/3ほどを占めるA形の胚の窪みが認められる。3号竪穴住居跡内カマドから1点(4)、13号竪穴住居跡内カマドから2点出土した。穎果状態であるが、内外穎片の一部が付着したのものもある。3号住居跡出土品は、長さ1.5mm、幅1.1mm、厚さ8mm、13号住居跡出土品は、長さ1.8mm、幅1.4mm、厚さ1.0mm(4)と長さ1.6mm、幅1.2mm、厚さ0.7mmである。

アワ *Setaria italica* (L.) P.Beauv. ?

5号竪穴住居跡カマドから出土した1点の穎果は、胚部を含めた下半分を欠損しているが、頭部が厚く、アワである可能性がある。ただし、ヒエが主体となっている状況から、本個体独自の個性の可能性もある。幅1.3mm、厚さ1.1mmである。

#### アサ *Cannabis sativa* L. (第53図-8)

瘦果は長さ4~5mm程度の広楕円形や卵形を呈する。一側面は鈍稜のある狭卵形(やや扁平)で、他方は稜をなすのが特徴である。1点のみ5号竪穴住居跡のカマドから出土した。本品は果実の中身(子葉?)であり、一方の上半分が欠けている。現生資料(第54図-1)および鷹取五反田遺跡出土資料(第54図-2)の側面観と比較してみるとその形態的特徴が類似することが分かる。現存で長さは3.0mm、幅は2.0mm、厚さ1.8mmである。

#### マメ科 FABACEAE (第53図-5)

3号竪穴住居跡のカマド埋土から出土した。被熱による変形とその後の劣化が激しく、種の同定が困難である。長楕円形の粒形で、側面観も扁平な楕円形である。外皮は片面のおよそ1/3ほどを残して剥落している。ヘソの部分が欠落しているが、大きさは種子長軸に対して1/2ほどを占めている。現存する部分で、長さ4.6mm、幅3.1mm、厚さ2.7mmである。形態およびその大きさからアズキ(*Vigna angularis* Ohwi et Ohashi)と思われる<sup>(1)</sup>。

#### ホタルイ *Scripus juncooides* Roxb.

瘦果は広倒卵形で側面は半広卵形(平凸レンズ形)である。瘦果の側辺は半広卵形をなす。1点のみ5号竪穴住居跡カマド内から出土した。長さ1.6mm、幅1.4mm、厚さ0.8mmである。湿地や溝を好む1年草である。

#### カモジグサ属? *Agropuron* sp. (第53図-6)

瘦果の形態は、線状長楕円形で、背面は丸みがあり、腹面の両側縁は内方にやや曲がり、槌状を呈する。胚の窪みがわずかにみられる。3号竪穴住居跡カマドから出土した。長さ3.4mm、幅1.3mm、厚さ0.9mmである。草原や道端、樹園地、畑地などに生育する。

#### 不明 (第53図-13・14・15)

13は13号竪穴住居跡のカマドから出土した種子である。片方に偏る雨滴形の体部をもつ。側面観はD字形で下膨れである。長さ1.8mm、幅1.4mm、厚さ1.0mmである。

14・15は6号竪穴住居跡のカマドから検出した種子である。長楕円形の平面形をもち、側面観もほぼ長楕円である。それぞれ外皮をわずかではあるが残している。15は子葉の半分が取れたような形態であり、マメ科に属するものと思われるが、明瞭なヘソが観察できない。現存部で、14が長さ2.9mm、幅2.5mm、厚さ2.5mm、15が長さ3.8mm、幅2.9mm、厚さ2.1mmである。

## 第4節 考察

### 第1項 ムギ類・雑穀の増加

本遺跡出土の炭化植物種子は、有用植物として、イネ科のイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、アワ(?), マメ科のアズキ、クワ科のアサ、そして雑草類のホタルイ、カモジグサ(?)から構成される(表2)<sup>(2)</sup>。これらの出土した遺構の時期は7世紀末~8世紀前半である。穀物のみの点数を比較すると、イネ9点(43%)に対して、ムギ類8点(38%)、雑穀(ヒエ・アワ)4点(19%)とムギ類と雑穀が6割を占めている。この穀物構成をみると、8世紀後半代の北海道中東部を除く日本列島通有の特徴(小畑2000・2003a)を示している。この時期のムギ類・雑穀増加の背景には中世温暖期<sup>(3)</sup>を契機とした風水害・旱魃の発生にともなう農作物被害に対処するために、朝廷が発布

した政令および税制優遇策（義倉）に起因するものと解釈した（小畑 2000・2003a）。しかし、その前後の時期の穀物構成の動向が不明なため、量的増加が急激なものか緩慢なものか解釈することはできなかった。今回、筑紫平野においてもイネ以外にムギ類や雑穀を含む穀物がそれより半世紀前から栽培されていた可能性が示されたことは、今回の調査の大きな成果の一つである。古墳時代の例が明確ではないが、同平野に所在する弥生時代中期後半の鷹取五反田遺跡では、イネにアワのみが加わる穀物構成をみせており、同一地域内の資料において古代におけるムギ類や雑穀の増加を裏付ける貴重な資料となった。その増加傾向の開始時期は少なくとも8世紀の初頭に遡ることは確実である。これは、雑穀奨励策の政令発布に先んじて、イネ以外の畑作雑穀類が広く受け入れられていたことを意味するもので、政令発布の背景に十分な畑作の技術と品種が出揃っていた可能性が高い。

## 第2項 ムギ類の品種と伝播問題

本遺跡出土のオオムギは皮性オオムギの可能性があり、小型のコムギとともに、これも西南日本の古代のムギ類の特徴を備えている。これら品種と伝播の問題は複雑である。以下問題の所在を小畑（2004）から抜粋して以下に挙げる。

G.W.クロフォードによれば、日本と韓国の考古学的なコムギは非常に小型であり、通常のコムギやインド型の小型コムギ（*Tr. aestivum* sp. *sphaerococum*）とは粒の形態が異なり、固有の形態であるという（Crawford 1992）。一部の新しい事例を除いて、北日本のコムギは極度の小型コムギであった可能性が指摘されている。これは日本型コンパクトコムギ（Crawford 1992）もしくはエゾコムギ（吉崎 1992）と称されている。

同様のコムギは南沿海州地域の、ゴルバトカ遺跡、アナニエフカ遺跡、イズヴェストナーヤ・ソプカ遺跡、シャイガ遺跡など、古代・中世の城塞遺跡出土の資料中にも認められる（Янушевичи др 1990, Сергушева 2002a・2002b）。この地域のコムギには普通種（*Triticum aestivum* L.）とコンパクト種（*Tr. compactum* Host）、そして稀ではあるがエンマ種（*Tr. dicoccoides*）が存在する。また、オオムギは裸性の短粒種（*Hordeum vulgare* var. *nudum*）と皮性の長粒種（*Hordeum vulgare*）に分類される。本地域の初期鉄器時代のオオムギは裸性オオムギであるが、皮性オオムギは古代になって出現する。そして、遺跡ごとの差はあるものの、皮性オオムギよりも裸性オオムギの比率が高い点が本地域の特徴の一つである。これはこの南沿海州地方の特徴的なオオムギの品種が裸性オオムギであったことを示している。

また、裸性オオムギと皮性オオムギはわが国の出土例中にも認められる。両種は古代には北海道東北部と北海道西南部以南の列島全域、という分布域上の棲み分けをみせ、さらにはそれぞれ特徴的な穀物構成をとるのが大きな特徴である（吉崎 1992, 椿坂 1998, 小畑 2000・2003b）。裸性オオムギは皮性オオムギに比べ耐寒性に劣るので、西日本に栽培が多いとされるが、裸性と耐寒性との連鎖の確証はないという。E.A.セルグシェーフによれば、裸性オオムギの起源は北中国であり、1936年の北中国においては、生育期間が短い（38～45日）という利点のためモンスーン気候に適合して、しかも利用が便利であることから、主体を占めるほど普及していたという（Сергушева 2002b）。

計測値のみで朝鮮半島の事例を検討すると、青銅器時代と初期鉄器時代のオオムギやコムギは大

型（皮性・普通）と小型（裸性・コンパクト）の2種類が存在するものの、古代以降には次第に小型種へ収斂していく傾向が認められる。つまり、北緯40度以南の地域においては、時代の経過とともに皮性オオムギとコンパクト（小型）コムギへ淘汰され、それ以北では裸性オオムギや普通コムギが残存していた状況が予想されるのである（小畑 2003b）。北大構内の遺跡の一つである遺伝子工学遺跡から出土したコムギは38粒のみがコンパクトで残りは大型であること、ポプラ並木遺跡出土のコムギも大型であり、その年代も $210 \pm 50$ 年BPと新しく、当地における普通サイズのコムギの出現は新しい現象と目されている（Crawford 1992）。

極東地域においては、コムギの場合は、通時的にみて中型品種から小型品種、そして多形態（品種）への分化という過程が想定できそうである<sup>(4)</sup>。また、オオムギの場合も韓国においても、青銅器時代以降、大きさから見る限り皮性オオムギと裸性オオムギの両種が存在していた可能性がある。つまり、わが国の穀物の母体となる大陸側の品種は時期や地域ごとに多様な品種が存在し、日本列島内においては、縄文時代後期以降に流入した一つの品種が継続して栽培されるのではなく、大陸側との交渉によって、数回の波及があったと見るほうが妥当である。

裸性オオムギにみられる地理的分布の偏りを考慮すると、コムギやオオムギが北海道を経由して到来した可能性も大いにある。すでに吉崎昌一はこの沿海州地域の裸性オオムギに着目して、日本古代のオオムギの系譜として北方ルートの存在を想定していた（吉崎 1992）。最近のE.A.セルグシエワの分析（Сергушева 2002a・2002b）によって、沿海州地方においては裸性オオムギが初期鉄器時代以降主流を占め、いわば北方系のオオムギといえるような状況が明確になってきた現況では、サハリンやアムールランドと関連の強いオホーツク文化の穀物がこの裸性オオムギを主体としている点（椿坂 1998）、そして文献上にみる靺鞨（同仁）文化の穀物がアワ、ムギ、キビであったこと（菊池 1989）などを考慮すると、吉崎の想定した穀物の北方ルートがこの古代以降に時期に開拓された可能性が益々大きくなってきた（小畑 2004）。

このような状況からみて、本遺跡資料は北部九州地域において、古代の小型コムギと皮性オオムギ資料を新たに追加した点で意義がある。また、その時期も従来の年代よりも遡る8世紀初頭段階の資料として重要である。

### 第3項 アサの栽培問題

また、アサは弥生時代には各地から出土しており（寺沢 1986）、本地域では鷹取五反田遺跡において多量に出土している。鷹取五反田遺跡はこれまで発見されたアサの出土量ではおそらく全国一ではないかと思われる<sup>(5)</sup>。朝鮮半島においても縄文時代晩期～弥生時代併行期の青銅器時代の忠清北道忠州市早洞里遺跡（許文會他 1997）や初期鉄器時代の同丹陽郡垂楊介遺跡（許文會 1998）から出土しており、最近では疑問符付ではあるが新石器時代の同沃川郡大川里遺跡（허문회 2003）からも青銅器時代的な構成をもつ穀物に伴って発見されている。古代の例は報告例が少ないが、子葉の状態で同定できたことにより、今回は1点ではあるがその存在を確認できた。このことから本地域で連綿と栽培されてきた畑作有用植物であったと考えられる。

### 第4項 その他

雑草としてホタルイが含まれ、周辺に水田などの湿地が存在した可能性が示された。また、比較

的乾燥した土手や草地、畑地に生えるカモジグサも存在した可能性があり、ヒエ・アワ・ムギ類・アサ・マメなどの畑作物（陸田種子：はたつもの）とイネという水田作物（水田種子：たなつもの）の存在を考えると、これら雑草の示す生育環境から、これら栽培穀物も遺跡の近隣で栽培された可能性が高く、弥生時代の鷹取五反田遺跡の穀物（イネ・アワ）や栽培植物（アサ）の構成（小畑2003b）をみても、この地域が水田と畑作の両方が行える環境であったことを示している。

## 第5節 おわりに

本遺跡出土資料は出土資料そのものもさることながら、偶然の発見ではない、カマドを中心とした乾燥遺構から種実検出を目的として意図的に行ったフローテーション法による調査によって、本土壌からも確実に種実資料を得ることができることを実証した点で大きな意義があるものと思われる。今回水洗した土量はおよそ600リットルであり、2人で4日ほどの作業量である。その後の選別は1人で2日余りを要した。九州は穀物の伝播地域としてきわめて有望な地域であり、先に述べたように副次的な穀物流入の可能性もあるため、農耕開始期のみならずその後の展開を注視していかなければならない。その意味でも通時的かつさまざまな地域を網羅した穀物や植物性食物、有用植物の構成を探る必要があり、遺跡調査において意図的な働きかけが必要である。今後周辺地域での種実検出の気運が高まることを期待する。

本報告の体裁および種子の観察記述は札幌市文化財報告などで吉崎・椿坂が統一採用している方法および記述を参考とし、これに従ったことを明記しておく。

なお、本研究には、財団法人味の素の文化センター平成13年度研究助成金「植物遺存体からみた古代食物と食文化－雑穀の起源と展開－」および日本学術振興会平成16年度科学研究費補助金「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」（研究課題番号：16320110）の一部を使用した。

## 註

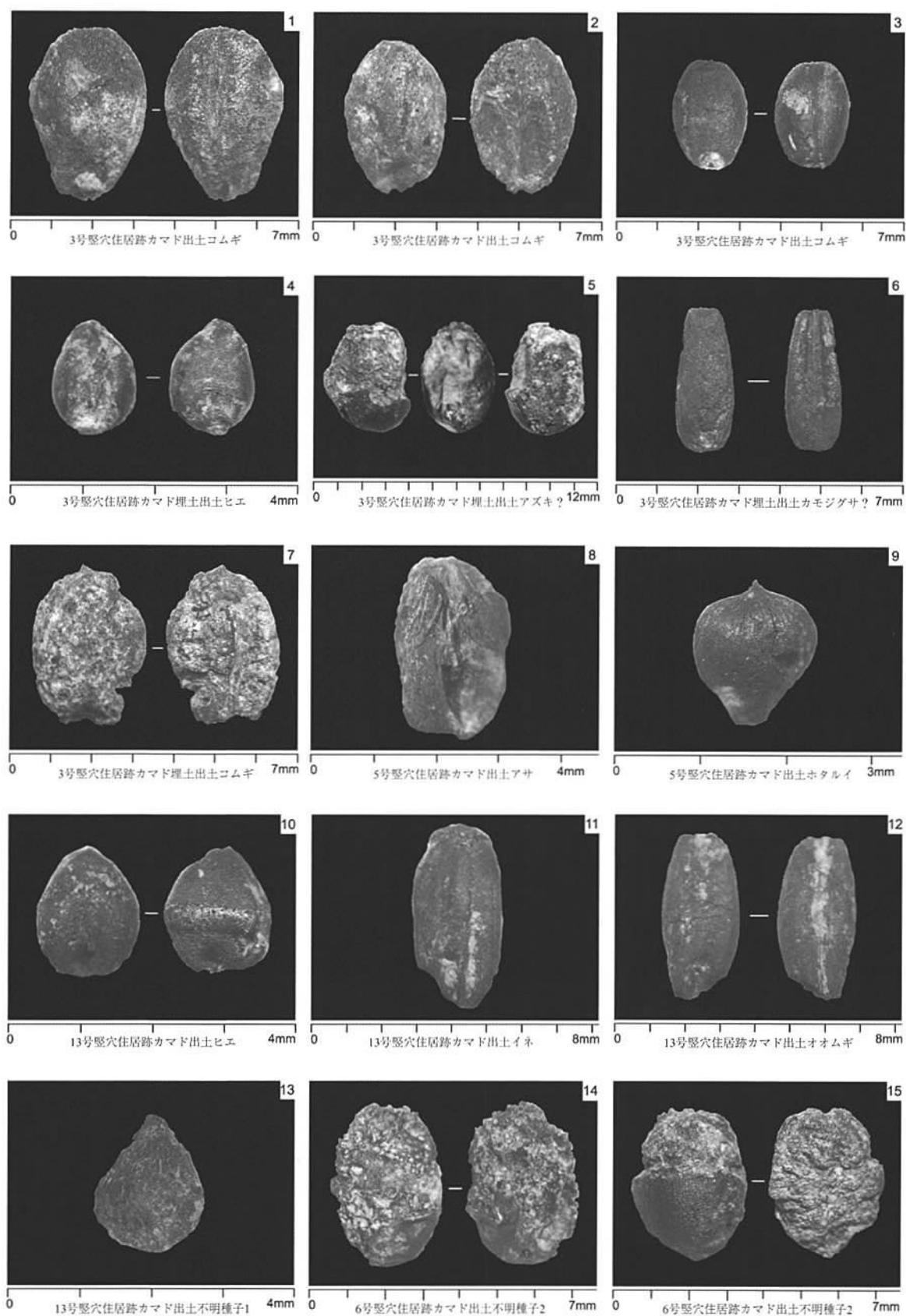
- (1) ただし、同様の形態的特徴をもつものとして、ヤブツルアズキやノラアズキなどがあり、同定には注意を要する（吉崎・椿坂 2001）。
- (2) 本遺跡出土の穀物については、すでにその種構成のみ発表済みである（小畑 2003b）が、今回提示した構成と異なる。本報告をもって訂正しておく。
- (3) 西暦740年頃の万葉寒冷期の極寒期から西暦880年代の大仏温暖期の温暖極期までの160年間に平均的気温が5℃も上昇した（安田 1999）。現在の温暖化が50年で1℃上昇すると言われるので、それよりも激しい急激な温度上昇であった。この影響は西暦780年頃から頻発する災害となって表出している。
- (4) 最近、長崎県壱岐郡原の辻遺跡では、弥生時代中期（高野 2004）、弥生時代後期と古墳時代初頭（高宮 2004）の小型のコムギが報告された。この小型コムギはすでに吉崎によって弥生時代前期相当期の青森県八幡遺跡12号住居跡から発見されていた（吉崎 1992）。しかし、その経路に関しては、不明であったが、朝鮮半島に近い原の辻遺跡において、弥生時代中期に遡る資料が出たことは、その経路を考える上できわめて興味深い。そして、原の辻遺跡の中期のコムギは長さ3.8mm、幅3.3mmと長さ3.5mmと幅2.9mmと、丸い形態（長幅比：1.2）を呈するのに対し、後期と古墳時代初頭のコムギは平均値で、長3.1mm、幅1.9mmと長さ3.0mm、幅2.0mmと、細長い形態（長幅比：1.5）を呈しており、品種差が存在した可能性もある。朝鮮半島（大韓民国）ではこれらに相当する形態のコムギはチュンラン遺跡と府院洞遺跡と、三国時代の遺跡であり、わが国でも古代の一群に類似するものがあるが、このように小さな例や丸い形態のものはきわめて少ない（小畑 2003b・2004）。資料や計測値の情報が少ないことにも起因しているが、今後半島域の資料の増加が望まれる。
- (5) 現在筆者らが分析中であり、その一部は第1回九州古代種子研究会（平成16年5月29・30日、宮崎県西都市開催）にて発表した。

## 参考・引用文献

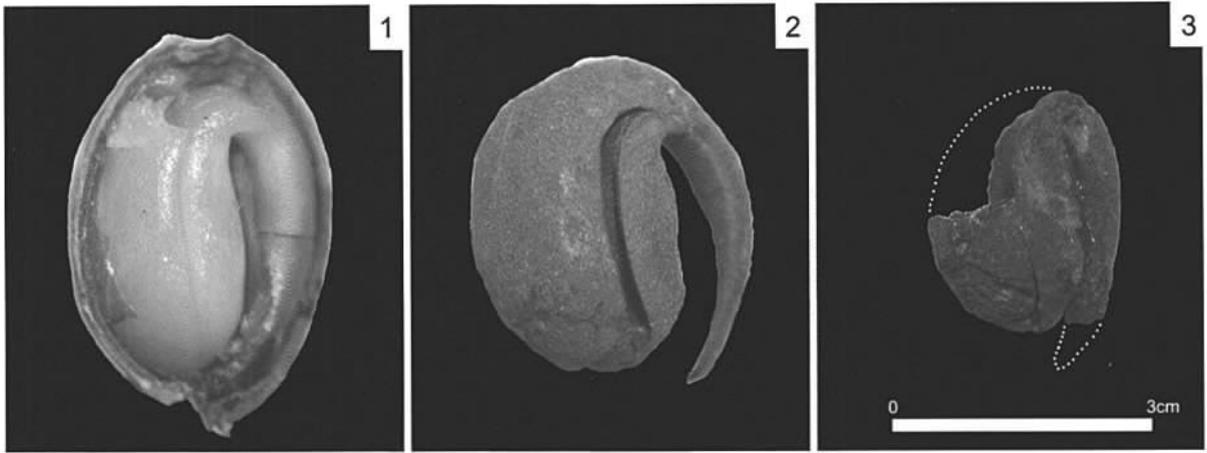
- 小畑弘己，2000：熊本大学構内遺跡における古代コムギの検出とその意義について．人類史研究会第12回大会発表予稿集，39-42頁．人類史研究会．
- 小畑弘己，2003a：植物遺存体からみた古代食物と食文化．食生活研究，vol.23，32-45頁．食生活研究会．
- 小畑弘己，2003b：植物遺存体からみた古代食物と食文化-雑穀の起源と展開．財団法人味の素食の文化センター第13回食文化研究助成成果報告書．
- 小畑弘己，2004：東北アジアの植物性食料．先史・古代東アジア出土の植物遺存体，2．平成13年度～15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書，基盤研究（B）（2）展開．課題番号13551006：先史・古代九州出土植物遺存体に関する実証的研究，179-200頁．熊本大学文学部．
- 菊池俊彦，1989：靺鞨と流鬼－7世紀の東北アジアの民族と文化－．北方言語・文化研究会編：民族接触－北の視点から－，247-272頁．六興出版．
- 高宮広土，2004：原の辻遺跡出土の植物遺体．先史・古代東アジア出土の植物遺存体，2．平成13年度～15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書，基盤研究（B）（2）展開．課題番号13551006：先史・古代九州出土植物遺存体に関する実証的研究，16-37頁．熊本大学文学部．
- 高野晋司，2004：長崎県原の辻遺跡の植物種子．先史・古代東アジア出土の植物遺存体，2．平成13年度～15年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書，基盤研究（B）（2）展開．課題番号13551006：先史・古

- 代九州出土植物遺存体に関する実証的研究, 37-200頁, 熊本大学文学部.
- 椿坂恭代, 1993: アワ・ヒエ・キビの同定. 吉崎昌一先生還暦記念論集—先史学と関連科学—. 261-281頁. 吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会.
- 椿坂恭代, 1998: オオムギについて. 時の絆—石附喜三男先生を偲ぶ道を辿る—, 245-250頁. 石附喜三男先生を偲ぶ会刊行会.
- 寺沢薫・寺沢知子, 1981: 弥生時代植物質食料の基礎的研究—初期農耕社会の前提として—. 考古学論攷. 檀原考古学研究所紀要, 5, 1-129頁. 奈良県立檀原考古学研究所.
- 寺沢薫, 1986: 畑作物. 季刊考古学, 14, 23-31頁. 雄山閣出版.
- 安田喜憲, 1999: 気候変動と文明の盛衰—地球温暖化の時代に何がおこったのか—. 科学, 69-7, 572-577頁. 岩波書店.
- 山田悟郎・椿坂恭代, 1989: オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀. Project Seeds News, 1, 2頁.
- 吉崎昌一, 1991: フローテーション法によって栽培種子の確認された北海道内の遺跡一覧. Project Seeds News, 3, 19頁.
- 吉崎昌一, 1992: 古代雑穀の検出—考古植物学的調査の展開—. 考古学ジャーナル, No 355 (特集・種の考古学), 2-14頁. ニュー・サイエンス社.
- 吉崎昌一, 1995: 日本における栽培植物の出現. 季刊考古学, 50, 18-24頁. 雄山閣出版.
- 吉崎昌一・椿坂恭代, 1990: サクシュコトニ川遺跡にみられる食料獲得戦略. 北大構内の遺跡, 8, 23-35頁. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 吉崎昌一・椿坂恭代, 2001: 先史時代の豆類について—植物考古学の立場から—. 豆類時報, 24, 1-9頁.
- 許文會, 1998: 丹陽垂楊介遺跡出土의穀物. 垂楊介遺跡発掘15周年記念学術発表会要旨, 69-79頁. 丹陽郷土文化研究会.
- 허문희, 2003: 신석기시대 집자리 출토 국물분석. 옥천 대천리 신석기유적, 125-128頁. 한남대학교 중앙박물관 총서, 16.
- 許文會・李隆助・禹鐘允, 1997: 忠州早洞里青銅器時代住居跡出土穀物. 年報, 16, 151-163頁. 忠北大学校博物館.
- Gary W.Crawford, 1992: Prehistoric Plant Domestication in East Asia. The Origins of Agriculture, pp.7-38.
- Сергушева Е.А., 2002a: Культурные растения Бохайского городища Горбатка (Приморский край) по палеозитоботаническим данным.. *Седьмая Дальневосточная конференция молодых историков*, pp.223-231. Владивосток.
- Сергушева Е.А., 2002b: Опыт изучения семян культурных растений со Средневековых городищ Приморья.. *Археология и культурная антропология Дальнего Востока и Центральной Азии*, pp.187-200. Владивосток.
- Сергушева Е.А., 2003: Археоботанические исследования в лаборатории палеоэкологии человека.. *Россия и АТР*. Ном.3, с.6-12. Владивосток.
- Янушевич З.В., Вострецов Ю.А., Макарова С.А., 1990: Палеозитоботанические находки в Приморье (Препринт) ., Владивосток.

\*熊本大学埋蔵文化財調査室



第53図 日詰遺跡出土の炭化種子



第54図 現生資料と遺跡出土アサ

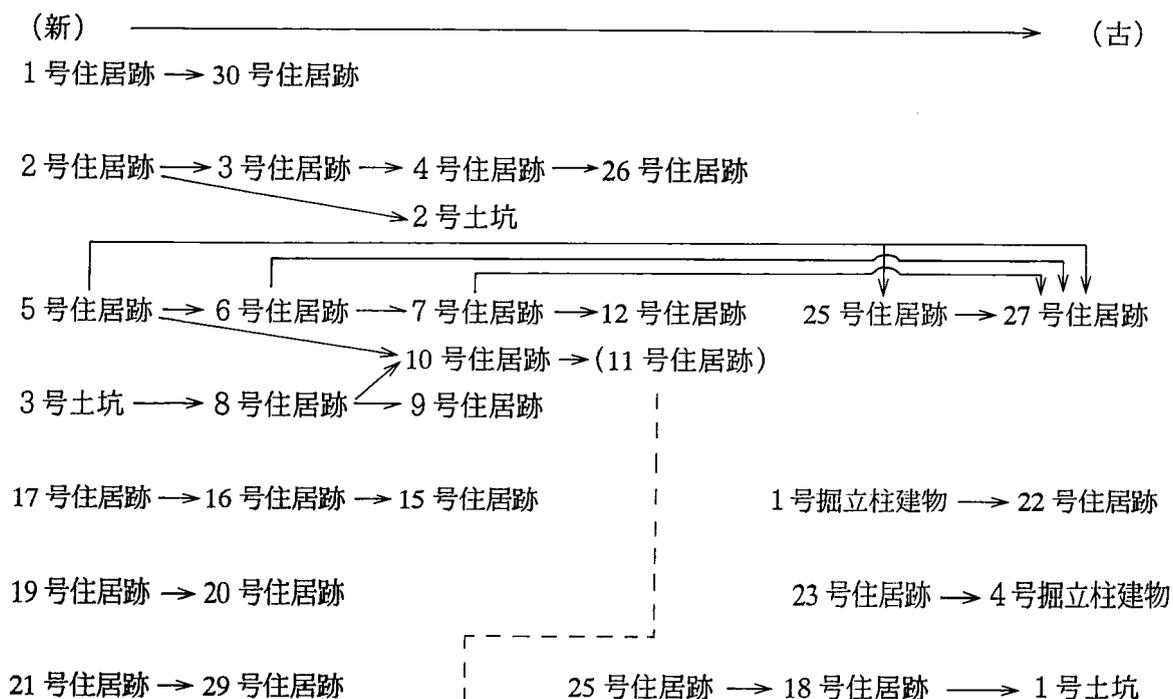
(1：現生アサ, 2：鷹取五反田遺跡出土アサ, 3：日詰遺跡出土アサ)

## 第5章 考察

### 第1節 古代の遺構群について

**住居跡の切り合い関係** 本遺跡群で検出された遺構の大半は、古代に属するものである。集落は削平のため調査区の東半分をほとんど失っており、西側の削平を免れた段上を中心として残っていたが、本来は調査区のほぼ全面にわたって古代の集落が広がっていたものと考えられる。東西に隣接するⅠ・Ⅲ区でもやはり古代の集落が広がっていることが確認されており、この見解を裏付けるものといえよう。

本調査区で検出された古代の遺構は、そのほとんどが竪穴住居であり、出土土器から時期の判明するものの大半が7世紀末～8世紀前半に比定された。これらは、著しく切り合っており、この短い時間幅の中で頻繁に立て替えを繰り返しながら生活していたものと考えられる。以下に、切り合い関係の整理をしておく。



第55図 日詰遺跡第2次調査検出遺構群の切り合い関係

**切り合い関係における「系列」** さて、このように切り合い関係を整理すると、切り合い関係にいくつものまとまりがあることに気づく。まず、2号を最も新しい住居跡とする切り合い関係では、2号のほかに3号・4号・26号という計4棟がおおよそ7世紀末～8世紀中葉の時間幅で連続して次々と建て替えられている（系列①）。次に、5号を最も新しい住居跡と知り切り合い関係では、5号を筆頭として6号・7号・12号・25号・27号という6棟（系列②）と、同じく5号から8号・

9号・10号（・11号）という4（+1）棟（系列③）が、やはり7世紀（後半～）末～8世紀中葉の時間幅の中で連続して建て替えられている。このことは、7世紀末～8世紀中葉という時間幅の中で、各系列に示されるような住居の建築主体が5棟前後の住居跡の立て替えを次々に行っている可能性を想起させる。ただし、系列②と③においては、最も新しい住居跡である5号住居跡が共有されており、また6号住居跡と10号住居跡、11号住居跡と7号住居跡がそれぞれ近接した位置関係にあって、併存したとは考えられないことから、両系列が同時併存するためにはよほど上手に近接した場所に住居を作らねばならず、これらの系列の併存はやや疑問視される。この点について検討を進めたい。

住居跡の建て替えにおいては、特に古代以降は、切り合う住居同士が群構成を持つという現象がしばしばみられる。この群はそれぞれ建て替えの一連単位の単位であるとして、同一主体によるものであるとする理解は一般的であり、本調査区でもこのように考えることは妥当のように見えると先述した。しかし、筆者は、こういった見解についてはやや疑問を抱いていた。というのも、第1点として、切り合う住居跡同士が継続関係を持つということは、住居跡を埋め戻したばかりの軟らかい土を新たな住居の壁として掘りくぼめるということであり、これは新しい住居の耐久性を犠牲にする行為であって合理的ではない上に、住居を作っているあいだ、古い住居に住むことができない点で不利ではないかと考えていたからである。また、第2点として、こうした系列がしばしば（本調査区の系列②と系列③のように）非常に近接しているという事例がみられる点からも、これらの系列を本当に併存するものと考えていいのかどうか疑問を持っていた。というのも近年、黒井峯遺跡などの調査成果から、古墳時代後期以降の集落内部では居住区画がある程度明瞭化して一定の土地を占地し、竪穴住居のほかに近接して平地式住居や高床式倉庫、家畜小屋と思われる掘立柱建物などを営んでいたことが明らかとなってきた。竪穴住居の周囲にはある程度の面積を持つ「生活空間」が存在していた可能性が高くなっているからである。

本調査区における系列②と③の関係は、この点について興味深い事例を示すかもしれない。というのも、最後に埋没した5号竪穴住居跡が、系列②と③の双方に切り合いを持っていること、また双方の系列が極めて近接した場所に竪穴住居を作っており、遺構こそ切り合わないものの、軒先の延長は重なり合って、同時併存する可能性のある住居跡を認定するのが困難な状態を呈することから、この竪穴住居群を構築した主体は一つであり、竪穴住居一基ごとに双方の系列間を行き来するように作っていた（竪穴を掘削する場所を交互に変えていた）可能性が考えられるからである。

ただし、このように考えるとやや問題が残る。というのは、この9（+1）棟が、双方の系列が作られた7世紀末～8世紀中葉というあいだに連続して作られていたとすると、一つの竪穴住居の寿命がたかだか10年足らずという計算になる。また、一時期に併存する住居跡の数は、系列ごとに一つの住居が同時併存するという見方から比べて半減することになり、集落の規模がこれまでの想定よりかなり縮小することになる。

**竪穴住居の埋没環境** 今回の調査では、幸いカマド内の埋土の状況が良好で、カマドと住居跡の埋没過程を示すと考えられる事例がいくつか認められた。一つは、カマドの天井が崩落した上に、住居跡の埋土と同じ土が堆積するパターンであり、もう一つはカマド内にある程度住居内の埋土と同質の埋土が流入したあとにカマドの天井や壁体が崩落して堆積するというパターンであった。前者は、さらにカマド最下層に堆積する灰層を掻き出すかどうかによって細分できた。

まず、前者の埋没パターンを示すカマドを持つ住居として、2・5・6・8・10・13・24号住居跡を提示できる。いずれもまずカマドの天井が崩落し、その上に住居跡の埋土と同じ土質の土が堆積しており、カマドの天井が崩落したあとに住居跡が埋没していることが分かる。このうち、2号住居跡はカマド最下層の灰層の掻き出しが行われた可能性が高い。一方、後者の埋没パターンを示す住居跡として、3・19号住居跡を示すことができる。これらはいずれもカマド内の灰層の上に住居跡の埋土と同じ質の土が堆積しており、カマドの天井が崩落する前に住居跡が埋没を始めたことを示す。

これらは、竪穴住居の埋没環境を反映した堆積であると考えられる。まず前者であるが、カマドを意図的に潰すとみれば、廃絶後すぐにカマドを意図的に潰し、その後意図的に埋め戻した結果と理解できる。灰層の掻き出しや支脚の除去は、カマドを意図的に潰した可能性を思わせる。しかし、このような行為にしばしば伴う儀礼的行為（土器の配置や意図的な廃棄など）は、本調査区からは認められなかった。カマドを意図的に潰さないとみれば、カマドが自然に潰れるまで埋土の堆積が起きなかったことになり、住居の意図的な埋め戻しはされなかったことになる。しかしこの場合、上屋がなくなったあとしばらく、全く堆積が起きなかったと理解することになり、やや無理がある。

一方後者であるが、カマドが潰れないままに住居内に埋土が堆積し、カマド内にもこの埋土が流入していると理解することになり、早い段階における住居跡の意図的な埋め戻しは行われなかったとも考えられる。しかし、カマドを意図的に潰さなかっただけで、住居跡の意図的な埋戻し行為はあったという理解も可能であり、どちらかに決定することは難しい。

**19号竪穴住居跡出土土器について** この場合、19号竪穴住居跡の埋土のあり方が一つのヒントとなろう。19号竪穴住居跡のカマドの埋土は、第三章で先述したように、カマドの天井部が崩落する前に住居跡の埋土がカマド内に流入して、同時にカマド壁体が少しずつ崩落して埋土と混ざりながら埋没することによって形成されたと理解できた。このことは、住居跡の埋土は細分できなかったが、これが徐々に埋没して形成された層である可能性が高いことを示すものと思われる。このことは、19号住居跡出土土器のあり方からも理解できる。本住居跡から出土した土器は、完形あるいはほぼ完形に復元できるものは1点もなく、特に大型の土器はほとんどが接合しても1/3程度の破片にしかならないものばかりであった。このことは、宮内克己氏が住居廃絶時の儀礼に伴って埋められた土器と指摘した事例（宮内 2004）との大きな違いであり、おそらくは本住居がゴミ捨て場的な再利用のされ方をしたことを示すものと考えられよう。本住居跡は、廃絶後しばらくは竪穴部が露出しており、廃棄の場として利用されながら徐々に埋没した可能性が高い。

一方、本調査区内で検出した住居跡の大半を占めるカマド天井部が崩落した住居跡は、これとは対照的な埋没の仕方をしてしていると理解できる。これらの住居跡からは、土器がまとまって出土するような状況は認められず、カマドが意図的に潰されている可能性が高いことは、これらの住居跡が意図的に埋め戻された可能性を示唆する。また、下層に地山に由来すると思われる砂質分の混じった土が堆積している住居跡が多いことは、宮内氏の指摘する周堤を使った埋め戻し行為の存在を予測させる。以上の点は、本調査区内で検出された住居跡の大半が、廃棄後すぐに意図的に埋め戻されている可能性が高いことを示している。

**3号竪穴住居跡の埋没過程** このように理解すると、3号住居跡の埋没過程が問題となる。つまり、3号住居跡が19号住居跡と同様に埋没にしばらく時間がかかったと考えられるのであれば、2号←

3号←4号←26号という一連の住居跡の切り合い系列（系列①）において、3号住居跡に後続する2号住居跡を、3号住居跡の廃絶直後に掘削されたものと理解することが難しくなるのである。このことは、系列①のほかにもう一つ住居系列があり、交互に竪穴住居を作っていた可能性を支持する。しかし、3号住居跡の埋没過程については、土層は細分できず、出土土器もわずかであって、19号住居跡の埋没過程のように何らかの有力な証拠があるわけではない。また、その他の住居跡が廃絶後すぐに埋め戻されているのに、3号住居跡だけがすぐには埋め戻されなかったと理解することは、やや不自然かもしれない。

本遺跡は沖積地に立地しているため、基盤層も埋土も堆積土であって細分が難しいという悪条件があった。このため、土層の詳細な分析による埋没過程の検討ができず、上記の問題について明確な回答を用意することができなかつた。竪穴住居跡の埋没過程の検討については、近年有効な試みが講じられつつあり、今後の研究成果が期待される。本調査区で認められたような住居跡の切り合い「系列」について、検討が進むことを期待したい。

## 第2節 近代の遺構群について

**攪乱坑について** 本調査区から出土した近代の掘り込みについては、当初全て攪乱として処理していたが、3号攪乱坑から石炭殻が多量に出土し、これが両筑軌道と関わりを持つ可能性が高いこと、この3号攪乱坑の埋没時期を知るために有効な遺物が、隣接する1・2号攪乱坑から多量に出土したことから、報告においてはこれらの攪乱坑から出土した遺物を紹介した。ここでは、これらの遺物の年代について検討を行いたい。

まず攪乱坑同士の関係であるが、それぞれに直接的な切り合い関係はみられなかったものの、3号攪乱坑のうえに住宅が造られていたこと、この住宅は整骨院であり、薬品を入れるためと考えられるガラス容器（第47図1～14）が1・2号攪乱坑から数多く出土したことから、1・2号攪乱坑出土の遺物はこの住宅に関係するものである可能性が極めて高いと考えられ、3号攪乱坑が1・2号攪乱坑に先行するものであることはほぼ間違いない。そこで、まず、1・2号攪乱坑出土遺物の年代がある程度判明する資料についてみていきたい。

**1・2号攪乱坑出土遺物** まず、瓶の生産技術一般について述べたい。出土遺物は大きく分けて人口吹きガラスと機械吹き（自動製瓶機械）ガラスに分けられる。薬品用容器とワインの瓶の大半は人口吹きガラスであるが、薬品用容器の一部に型整形・機械吹きのものである。また、ビール瓶や小形の容器類はほぼ全てが型整形である。本調査区から出土した大型の瓶類であるが、機械製瓶方式が技術的に未熟な段階の製品と考えられ、機械による型整形でつくられた薬品用容器の2個体は、人口吹きによってつくられた同種のものよりも気泡が多く、ガラスの質が悪い。一方、後述する理由から、ビール瓶の製造に対してはかなり早くから自動製瓶機械が導入されていたようである。このことは、本調査区出土のワイン瓶が全て人口吹き成型であるのに対し、ビール瓶3本のうち2本が型成型、つまり機械によりつくられていることと整合する。日本において自動製瓶機械が普及したのは大正末期～昭和初期であることを考慮すると、これらの資料は、この機械製瓶方式の導入以降だが、未だ技術的には未熟な段階のもので、大型品や特殊用途品には製瓶機械が対応しきれていない段階、すなわち、自動製瓶機械が普及した直後（昭和初期段階）の製品群とみたい。

次に、個別の遺物のうち製作年代がある程度絞り込めるものについて述べていきたい。ワインの瓶について。赤玉ポートワインは壽屋（現サントリー）により1907年に発売され（発売当時は鳥井商店といった）、1973年に赤玉スイートワインに改名されている。赤玉ポートワインの商品名が刻印されたワイン瓶はいずれも人口吹き成型であることから、明治後期から昭和初期までのものと考えられる。ビール瓶について。王冠式の蓋のものが認められる。もともとはビール瓶の栓にもワインと同様コルク等を使用していたが、炭酸飲料の蓋としては不向き（抜くときにあふれ出すなど）であったという。王冠の発明は1891年（翌年イギリスで特許が申請された）。日本で王冠が使われはじめたのは明治33（1900）年以降であるが、当初は人口吹きガラスで瓶を製造していたため口径が不揃いであって、王冠式の栓には不向きであった。王冠の普及は、瓶の口径が規格化されて以降、つまり製瓶機械導入以降であり、上述のように大正年間以降と考えられる。壽屋ビールの名があるが、壽屋が日英醸造を買収してビールの生産を始めたのは昭和3（1928）年で、当初は買収以前の社名・商品名（カスケードビール）を使用しており、壽屋のブランドで「オラガビール」として生産されたのは昭和4～9（1929～1934）年である。なお、このオラガビールという名称は、当時の総理大臣田中義一の口癖「おらが…」に由来するものという。一方、大日本麦酒株式会社は、過当競争の懸念から、当時の大手であった日本麦酒・大阪麦酒・札幌麦酒の3者が明治33（1906）年に大同合併して成立したものであり、第二次世界大戦後の1949年に分割されるまで存続した。「るり羽」は白髪染めで、1911年に山登産業により発売され、現在でも商品名として使用されている。ロート目薬は信天堂山田薬房（後のロート製薬）により1909年に発売された。この「ロート」とは、開発者であるドイツ人のロートムント博士の名を取ったものという。昭和6（1931）年に信天堂は両口式点眼瓶という容器を開発するが、この容器は従来品よりもずっと目薬を差しやすかったといい、これが評判となって信天堂の「ロート目薬」は爆発的に売れたため、社名をロート製薬に変更したという。この両口式点眼瓶が登場するまで、図示したタイプの容器が使用されていたようであり、この瓶の下限を昭和6（1931）年に求めることができよう。「古賀牧場」は第2次世界大戦前まで朝倉町で営まれていた牧場である。味の素の瓶は1909年に発売された当初と同型のものである。発売当初は専用の容器がなく、化粧品の容器を転用したため、図示したような形のものになったという。当初のものには社名の押印すらもなかったといい、底部に陽刻のある本品は、発売当初よりもやや新しく、瓶の形が変わるまでのあいだの、およそ大正年間を使用されたものと考えられる。ニッキ水の瓶にある「三勇士」は「爆弾三勇士」のことである。爆弾三勇士とは、昭和7（1932）年の上海事変の際に、火のついた爆弾を抱えて敵陣に向かってつっこみ、爆死した久留米の第24師団所属の3名の兵士のことである。この逸話は「爆弾（肉弾）三勇士」としてマスコミに取り上げられ、3名は最初の軍神に祭り上げられるとともに英雄として子供達に親しまれたが、様々な事情からこのブームは急速に下火になったようである。以上のように、これらの資料の下限は、おおよそ1930年代中頃までとみられ、これらの資料がおおよそこの時期までの廃棄物であることが分かる。

なお1～19の一群は一般の家庭ではあまり扱うことのないと考えられる瓶類である。調査区が浮羽バイパスの建設用地として買収される前に宅地として使用されていたときの住宅の1軒が整骨院であり、この整骨院は昭和10（1935）年前後にこの場所に開業したという話を聞き取り調査で耳にした。おそらくこれらの瓶類はこの整骨院で使用されたものであろう。

**3号攪乱坑出土遺物** 3号攪乱坑から出土した遺物は陶磁器が大半を占め、やや年代決定に難があ

るが、注目すべき資料として16を挙げたい。16は旧博多駅構内を吉塚本町遺跡として調査した際に出土した「駅茶瓶」に良く類似する資料である（巻頭図版3）。報告書（井上編1992）によると、吉塚本町遺跡で出土した駅茶瓶は徳利型と急須型に大別でき、いずれも坏がセットとしてつくとい、容量は徳利型が1合5勺（270cc）、急須型が2合（360cc）と1合5勺という。出土品は1合5勺の急須型である。これらは明治24～25（1891～92）頃には販売されており、当初は徳利型であったが後に急須型も販売されるようになったという。製作した窯は福岡市南区の野間焼と佐賀県北茂安町の白石焼で、野間焼がロクロ、白石焼が型整形であったとされており、日詰遺跡出土資料はロクロ整形であることから、野間焼の製品と考えられる。野間焼の製品の大半は博多駅に卸されていたというので、本資料は博多駅で販売された駅茶瓶と考えられる。駅弁とともに売られて内容物は列車内で消費されたと考えられることから、大半が駅あるいは鉄道と関係の深い場所に廃棄されたと想定でき、この資料が出土した3号攪乱坑は鉄道関係の遺構である可能性が高い。本攪乱坑からは、先述のようにおよそ150m<sup>3</sup>にも及ぶ石炭殻が出土したが、鉄道関係でこのように多量に石炭を使用するものとなれば蒸気機関車がまず思い浮かぶ。付近では、調査区に隣接する現県道33号線付近を、大正元（1911）年から昭和5（1930）年まで、両筑軌道という鉄道が走っており、調査区近辺には板町駅があったとされる。この駅はターミナルではないため、ここに石炭殻の廃棄坑があるのにはやや疑問も残るが、ほかの可能性を想定するのは難しく、本攪乱坑は両筑軌道を走っていた蒸気機関車から出た石炭殻を捨てる土坑であったと考えられる。

**両筑平野の鉄道** 明治中頃から昭和初期にかけては、各地で盛んに鉄道が敷設された時期であった。特に筑豊地区では炭坑から石炭を運び出すための鉄道が各所に引かれ、一大動脈網を形成していたが、両筑平野でも筑豊地方からはやや遅れて明治末期に、主に交通・物資運搬手段として鉄道が盛んに引かれた。筑後川北岸では明治41年に現筑紫野市二日市（以後特に断らない限り地名は現在のものを使用）と甘木市を結ぶ朝倉軌道が引かれ、明治45（1912）年には朝倉町恵蘇宿まで、大正11（1921）年には杷木町まで延長された。朝倉軌道は、大刀洗飛行場完成に伴って昭和14（1939）年に国策として引かれた国鉄甘木線（鹿児島本線基山駅—甘木）と路線が競合するため、昭和15（1940）年に廃線となった。また、大正10（1920）年には朝倉軌道の依井駅から大刀洗飛行場を経由して小郡市松崎へと至る中央軌道が開業し、昭和2（1927）年には鹿児島本線田代駅まで延長された。この中央軌道は、昭和4（1929）年に朝倉軌道に買収され、昭和9（1934）年まで営業した。また、中央軌道の開業と同年、八女から久留米を経由して甘木へと至る三井電気軌道が開業した。これは、九州鉄道（現西日本鉄道株式会社）に買収され、昭和33年八女—久留米間が廃線となり、残った久留米—甘木間が西鉄甘木線として運行を続けている。

一方、筑後川の南岸では、明治36（1903）年に筑後馬車軌道として現在の国道210号線付近に鉄道が開業した。当初は吉井—田主丸間だけであったがすぐに延長され、翌37（1904）年には久留米—吉井間、大正元（1912）年には日田—久留米間を結ぶ両筑平野の大動脈となるとともに、動力も馬から石油発動機車、ついで蒸気機関車へと変更され、社名も筑後軌道に改められた。なお、筑後軌道は昭和3（1928）年にほぼ並行して久大本線が開通するとともに廃線となった（深谷1997）。

**両筑軌道について** 筑後川北岸での朝倉軌道の開通、そして南岸での筑後軌道の開通により、両者を結ぶ鉄道を開設しようという気運が高まり、大正元（1912）年に朝倉軌道甘木駅と筑後軌道田主丸駅間を結ぶ鉄道が開設された。これが両筑軌道である。両筑軌道は、開設の翌年には甘木市秋月

までの15.12km全線が開通し、さらに八丁峠を越えて筑豊地方の嘉穂郡碓井町までを結ぶ計画さえあった。実際、国鉄上山田線の碓井駅と碓井町飯田とを結ぶ路線が両筑軌道の手によって大正9(1920)年に開業している。両筑軌道の経営は順調であったが、大正10(1921)年に筑後川流域を大洪水が襲い、その際に筑後川にかけられていた木製の橋(現在も両筑橋の東側の水中にこの橋の基礎が残る)が流失するという大損害を被ってからは経営が急速に悪化した。結局この橋は架け替えられず、橋の両側で折り返し運転をしながら経営を続けるが、昭和5(1930)年には田主丸-甘木間が廃止され、翌6(1931)年には残る甘木-朝倉間を保有する会社も朝倉軌道に買収されるに至る。なお、甘木-秋月間は昭和13(1938)年に廃線となっている(深谷1997)。

#### 石炭殻の量について

出土した石炭殻の量は、おおよそ150m<sup>3</sup>にも及ぶ膨大な量であった。石炭殻の量は使用した石炭の質、つまり石炭の中にどれだけ灰分を含むかによって決まるといい、この割合は産地によって異なる。両筑軌道で使用された石炭の産地は、地理的条件から筑豊か大牟田の可能性が高いと考えられるが、これらの炭田から出荷された石炭の灰分はおおよそ15~30%程度だったという。仮に灰分が20%のものを使用していたとすると、燃やされた石炭は750m<sup>3</sup>、重量にして1125kg程度となり、小型蒸気機関車の燃費をおおよそ15km/kgと考えると、16,000km以上の距離の走行が可能となる。両筑軌道の田主丸-秋月間はおよそ16kmほどあり、500回程度の往復が可能である。両筑軌道は最盛期で一日24回程度往復していたといい、この程度の量は20日分にも満たない計算になる。計算の前提が不確定であるためこの計算がどこまで有効かは分からないが、おそらく本調査区から出土した石炭殻ではとても両筑軌道で使用された石炭をまかない切れたとは考えられず、そのごく一部に当たるものと考えていいであろう。先述のように本調査区に近接する板町駅はターミナル駅ではないことから、両筑軌道で使用された石炭の殻を本格的に廃棄するとすれば本調査区はふさわしい場所とはいえず、そのごく一部が廃棄された場所であったと考えたい。

資料の年代 両筑軌道の田主丸町内部分の廃線は、上記のように昭和5(1930)年である。調査区付近を以前所有していたお年寄りによると、敗戦後すぐに付近は宅地として売りに出されたとのことで、昭和初期(1930年代)には宅地となっていたと考えられる。このことは出土遺物の示す年代とも一致する。前述のように、3号攪乱坑よりも新しいと考えられる1・2号攪乱坑から出土した遺物群は、おおよそ1930年代中頃までの資料と考えられる。このことは、3号攪乱坑が両筑軌道に関係の深い遺構であったことを如実に示すとともに、1・2号攪乱坑の埋没時期がこれよりわずかに遅れる1930年代の出来事であった傍証ともなる。従って、本調査区から出土した近代遺物群は、おおよそ1930年代に埋没したものであり、遺物群の使用年代の下限が1930年代中頃であることが理解される。埋没時期をほぼ特定でき、当時の製瓶技術・物資流通などについて多くの情報が得られる本資料群は、極めて価値の高い考古資料であるといえよう。



3号攪乱坑(石炭殻廃棄土坑)の完掘状況

## 第6章 おわりに

日詰遺跡の第2次調査の成果を述べてきた。最後に、調査の成果を概観してまとめとしたい。

日詰遺跡第2次調査対象範囲（日詰遺跡Ⅱ区）において最も古い遺構は、弥生時代前期後半の土坑であった。平面形態が長円形をしており、おそらく貯蔵穴と考えられる。隣接する第Ⅰ区でも、ほぼ同時期・同規模・同形の土坑が2基検出されており、これらとともに弥生前期後半の一時期、集落を構成していたと考えられる。しかし、これ以外にこの時期の明確な遺構は認められなかった。この時期の集落本体は南側に広がる段丘上にあつて、本調査区がこの集落の縁辺部に位置した可能性は高い。しかし、この集落は小規模かつ不安定なものであつた可能性がある。

後続する時期の遺構として、北側低地に伸びる溝群（1・2号溝）が挙げられる。しかし本調査区内ではこれらの溝に伴う遺物はほとんど検出されず、これらの時期的な位置付けは難しい。隣接する第Ⅰ区の報告においては、本調査区の1号溝に当たる7号溝を弥生時代中～後期としており、ここではこれに従っておきたい。2号溝の時期は不明だが、これよりも古いものである。

次に、出土遺物から7世紀初頭～前半と考えられる住居跡として、21号住居跡を挙げるができる。また、これと重複する29号住居跡はこれより古いものであるが、時期を明確にできなかった。これらは検出層位は異なるが、下層の29号住居跡を、本来の掘り込み面よりも下層で検出した可能性は高く、Ⅰ区の調査成果からもこれを古墳時代以前の所産と考えることにはやや難があると考えられ、これらをほぼ同時期の所産の可能性が高いものとして考えておきたい。また、時期を明確にできなかった住居跡のうちいくつかもこの時期の所産である可能性が高い。

本調査区内で最も多く検出されたのが、7世紀末～8世紀中頃の遺構群である。住居跡を20棟以上確認した。比較的大規模な集落が広がっていたと考えられる。

中世においては、井戸が1基確認された。遺物も出土しており、やはり集落跡として活用されていたと考えられる。

近代の遺構として、両筑軌道に関連する遺構と、その直後時期のゴミ穴と考えられる遺構を確認した。

以上のように、今次調査では、弥生時代から近代にわたる多種多様な調査成果を挙げるができた。田主丸地区における浮羽バイパスの工事はまだ中途であり、今後も埋蔵文化財の調査が続く。これらを含め、さらなる地域史の解明に取り組むことが、我々に課せられた大きな課題であろう。

### 参考文献

井上裕弘編，1992：吉塚本町遺跡。福岡県文化財調査報告書，97。福岡県教育委員会。

大久保森造・大久保森一，1958：石積の秘法とその解説。理工図書。

坂本紘二，1996：自然のリズムから生れた水利の技術。田主丸町史編集委員会編：田主丸町史，第一巻（川の記憶）。

田主丸町。

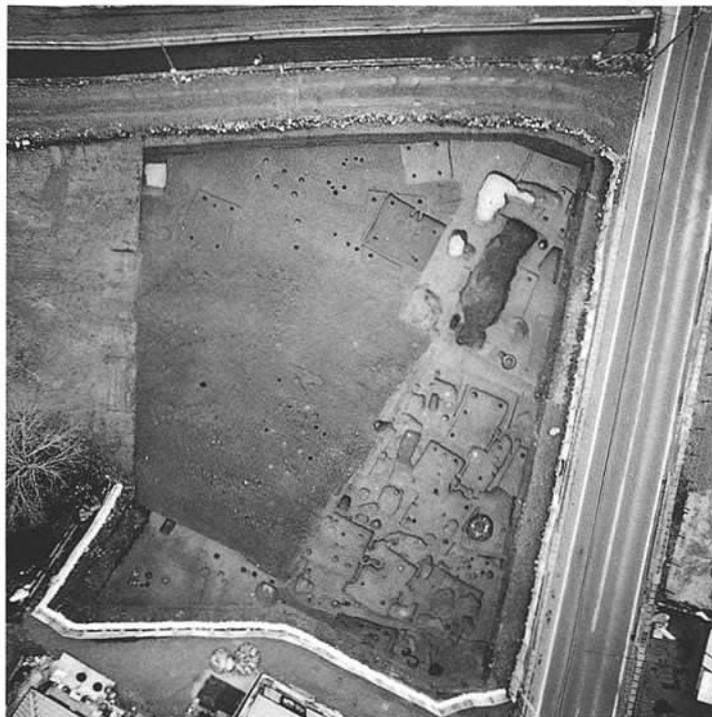
野田繁太・久保田正・田村信雄・石井近義編，1957：大石長野水道沿革誌。大石堰土地改良区。

深谷真三郎，1997：近代化とムラの商工業。田主丸町史編集委員会編：田主丸町史，3（ムラとムラびと，下）。

田主丸町。

宮内克己，2004：竪穴住居跡の廃絶。九州考古学，79。九州考古学会。

# 图版



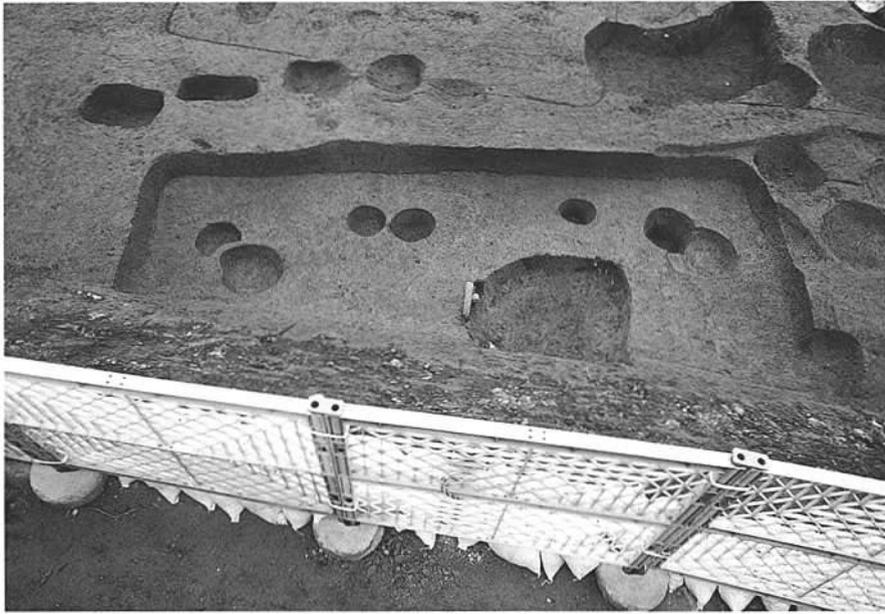
1 第1遺構面完掘状況（南から）



2 第2遺構面完掘状況（南から）



第3遺構面完掘状況（北から）



1 1号竪穴住居跡（南から）



2 2号竪穴住居跡（西から）



3 2号竪穴住居跡カマド（西から）



1 3号竪穴住居跡 (西から)



2 3号竪穴住居跡カマド  
(西から)



3 4号竪穴住居跡 (南から)



1 5号竪穴住居跡 (西から)



2 5号竪穴住居跡カマド  
(西から)



3 6号竪穴住居跡 (東から)

1 6号竪穴住居跡カマド  
(東から)

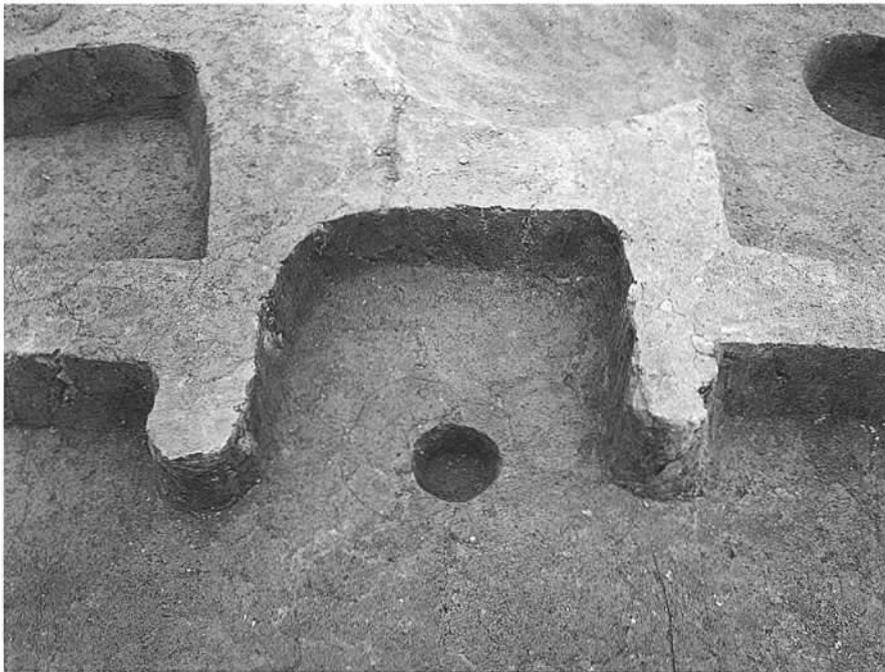


2 7号竪穴住居跡 (北から)



3 8～10号竪穴住居跡  
(西から)

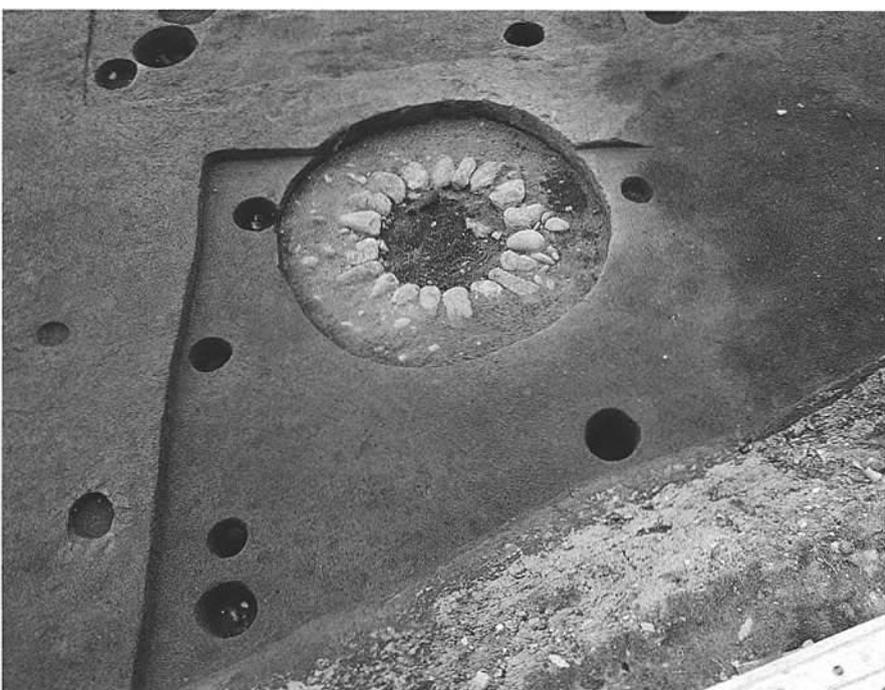




1 8号竪穴住居跡カマド  
(西から)



2 9号竪穴住居跡カマド  
(西から)



3 12号竪穴住居跡 (東から)



1 13号竪穴住居跡（西から）



2 13号竪穴住居跡カマド  
（西から）



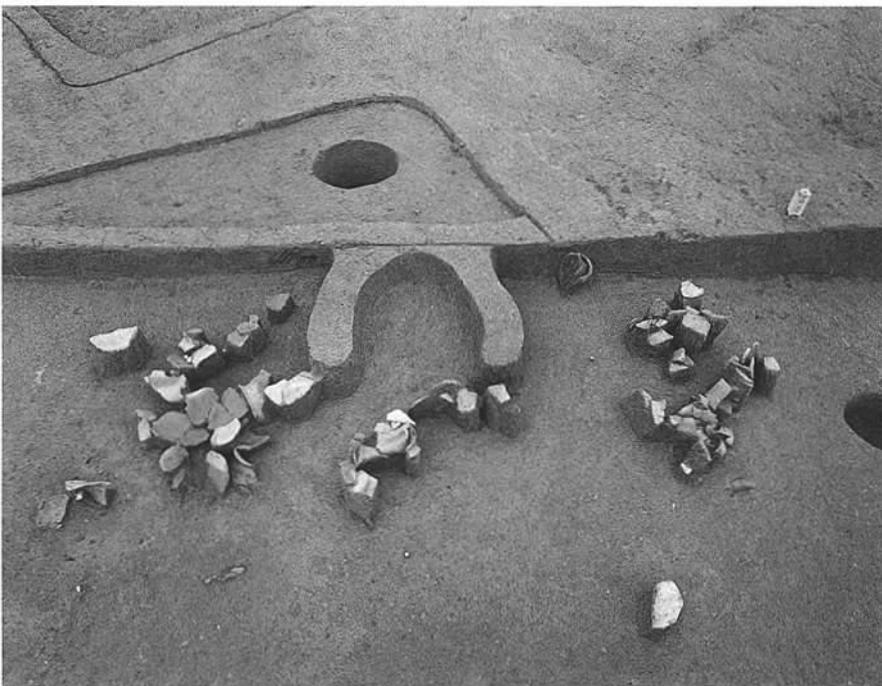
3 15～17号竪穴住居跡  
（西から）



1 18・25号竪穴住居跡  
(東から)



2 19・20号竪穴住居跡  
(南から)



3 19号竪穴住居跡カマド  
・土器出土状況 (南から)

1 19号竪穴住居跡カマド  
(南から)

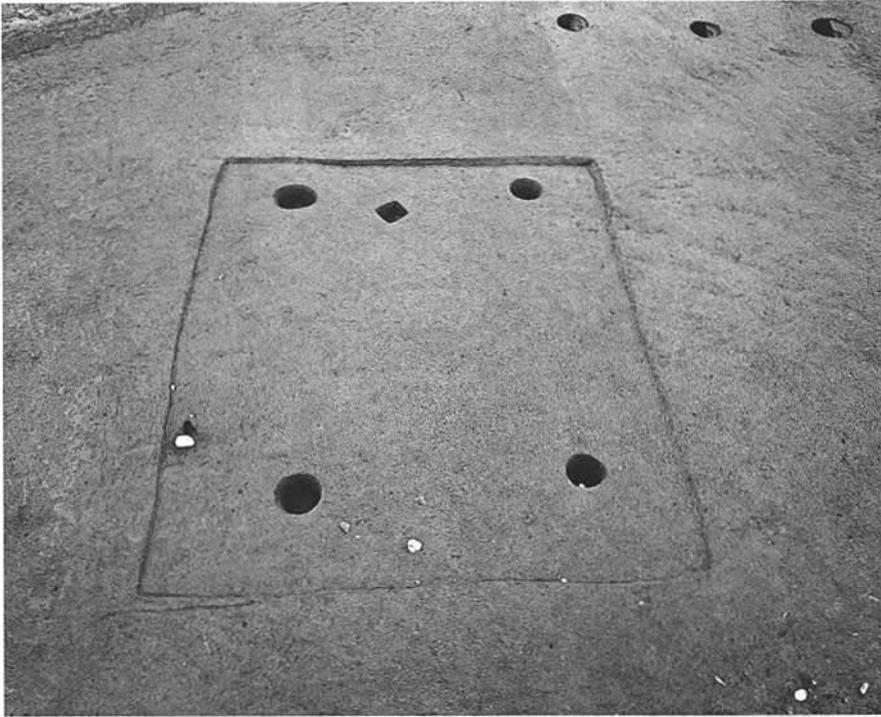


2 21号竪穴住居跡 (北から)



3 22号竪穴住居跡 (西から)

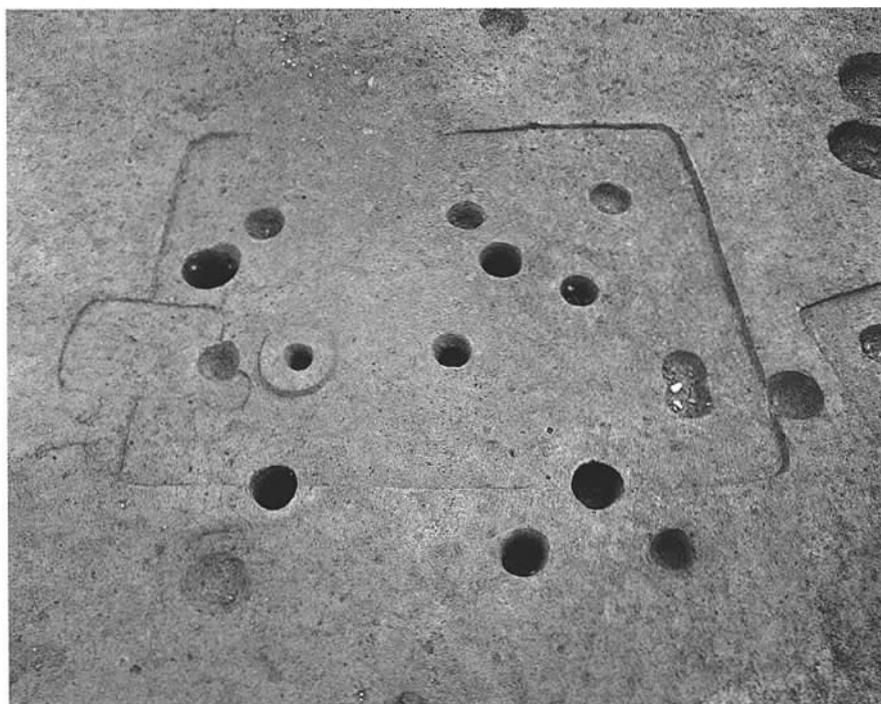




1 23号竪穴住居跡（南から）

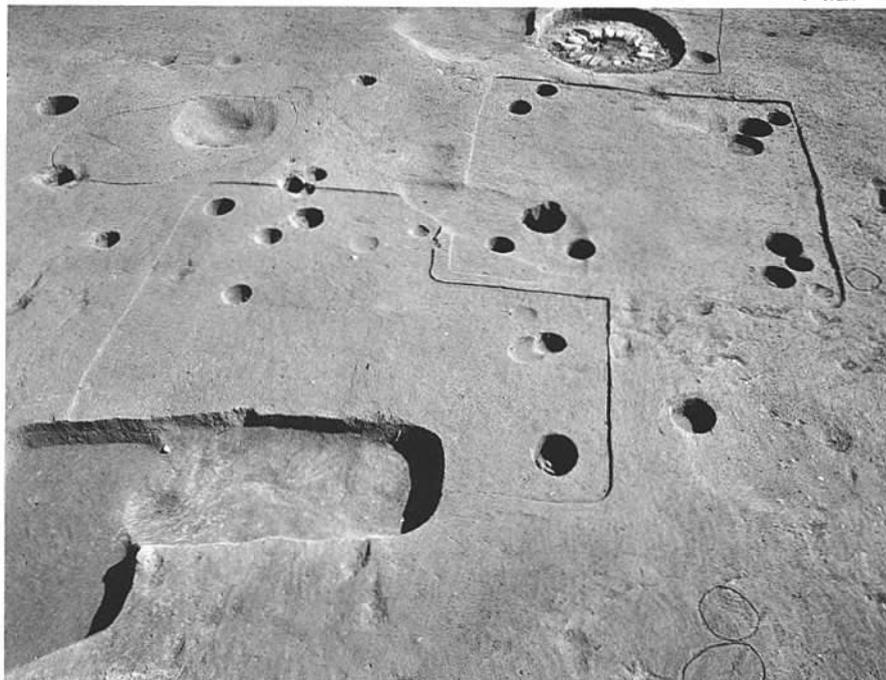


2 24号竪穴住居跡（西から）

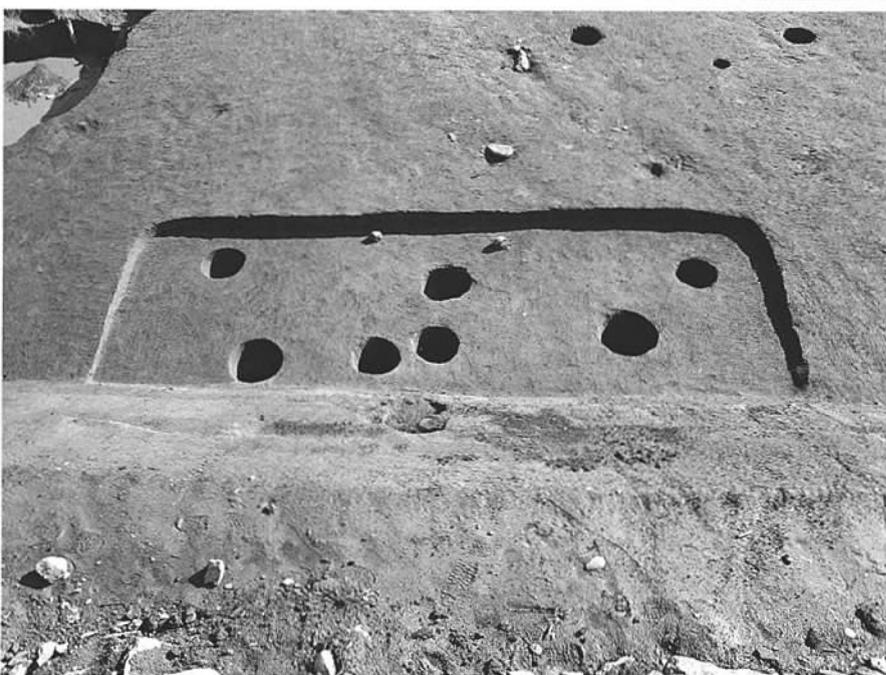


3 26号竪穴住居跡（西から）

1 27・28号竪穴住居跡  
(西から)

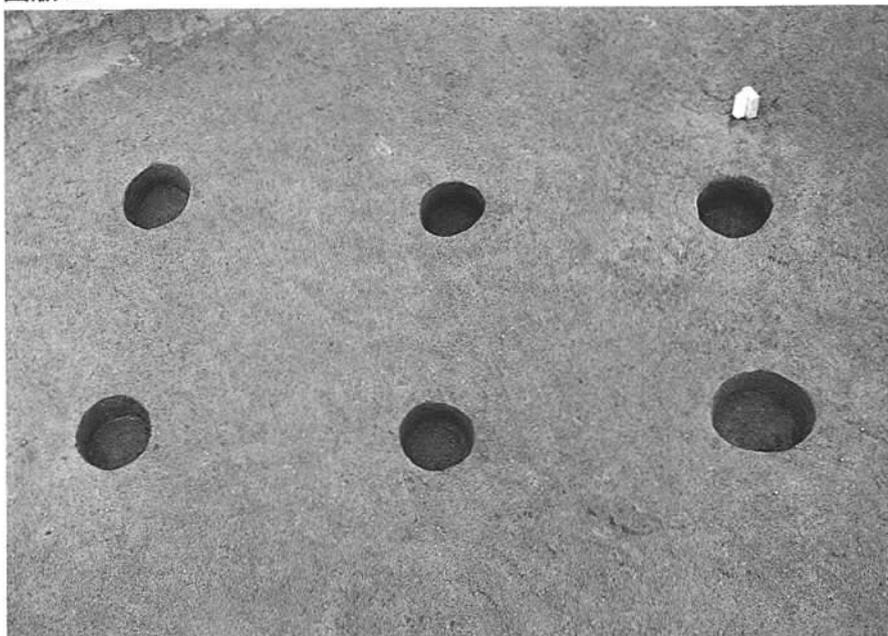


2 29号竪穴住居跡 (北から)

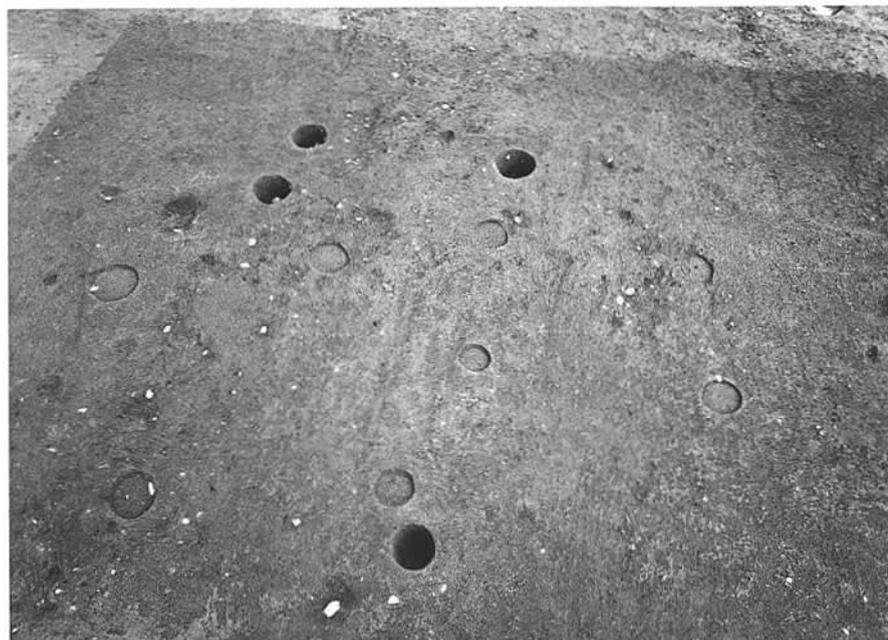


3 30号竪穴住居跡 (南から)

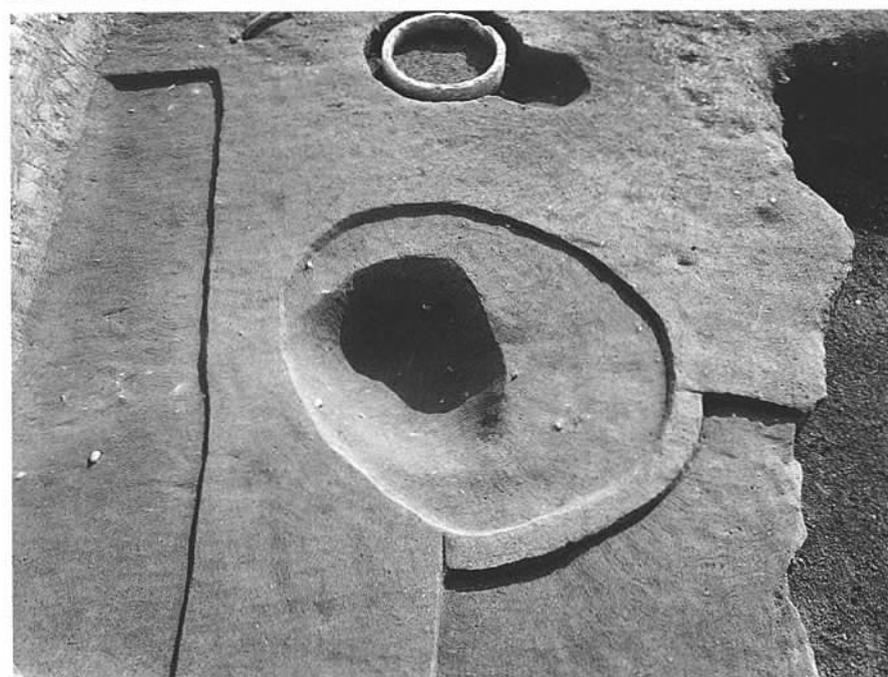




1 1号掘立柱建物（南から）



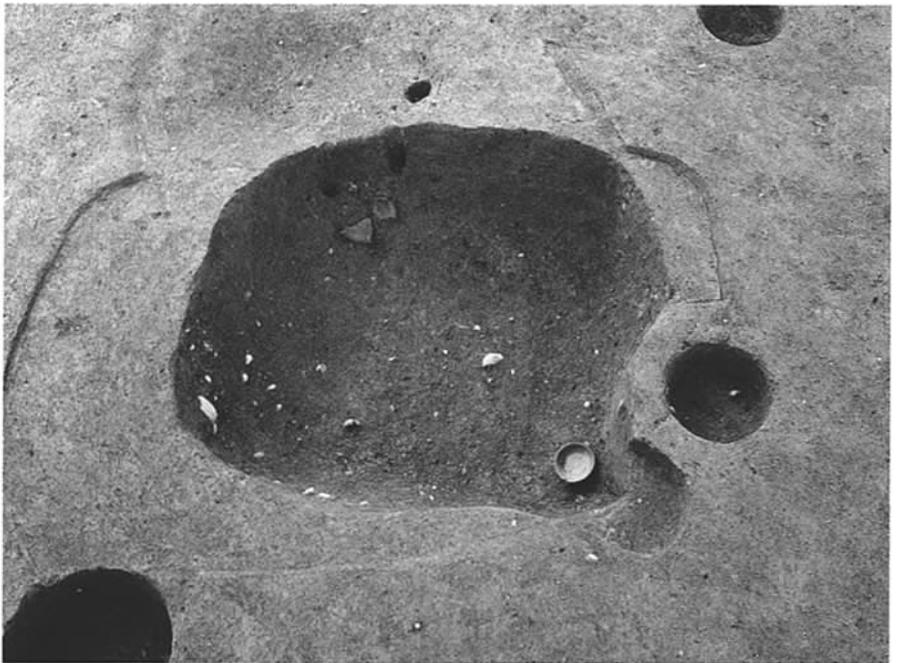
2 2・3号掘立柱建物検出状況（南から）



3 1号土坑（北から）



1 2号土坑（北から）



2 3号土坑（北から）



3 4号土坑（東から）



1 4号土坑土層（西から）



2 1号溝土層（北から）



3 2号溝土層（西から）



14-13



24-3



14-18



24-5



14-15



14-17



24-1



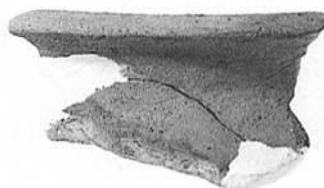
24-4



25-7



24-6



25-9



25-10



25-11



37-4



37-5



39-1



39-6



39-2



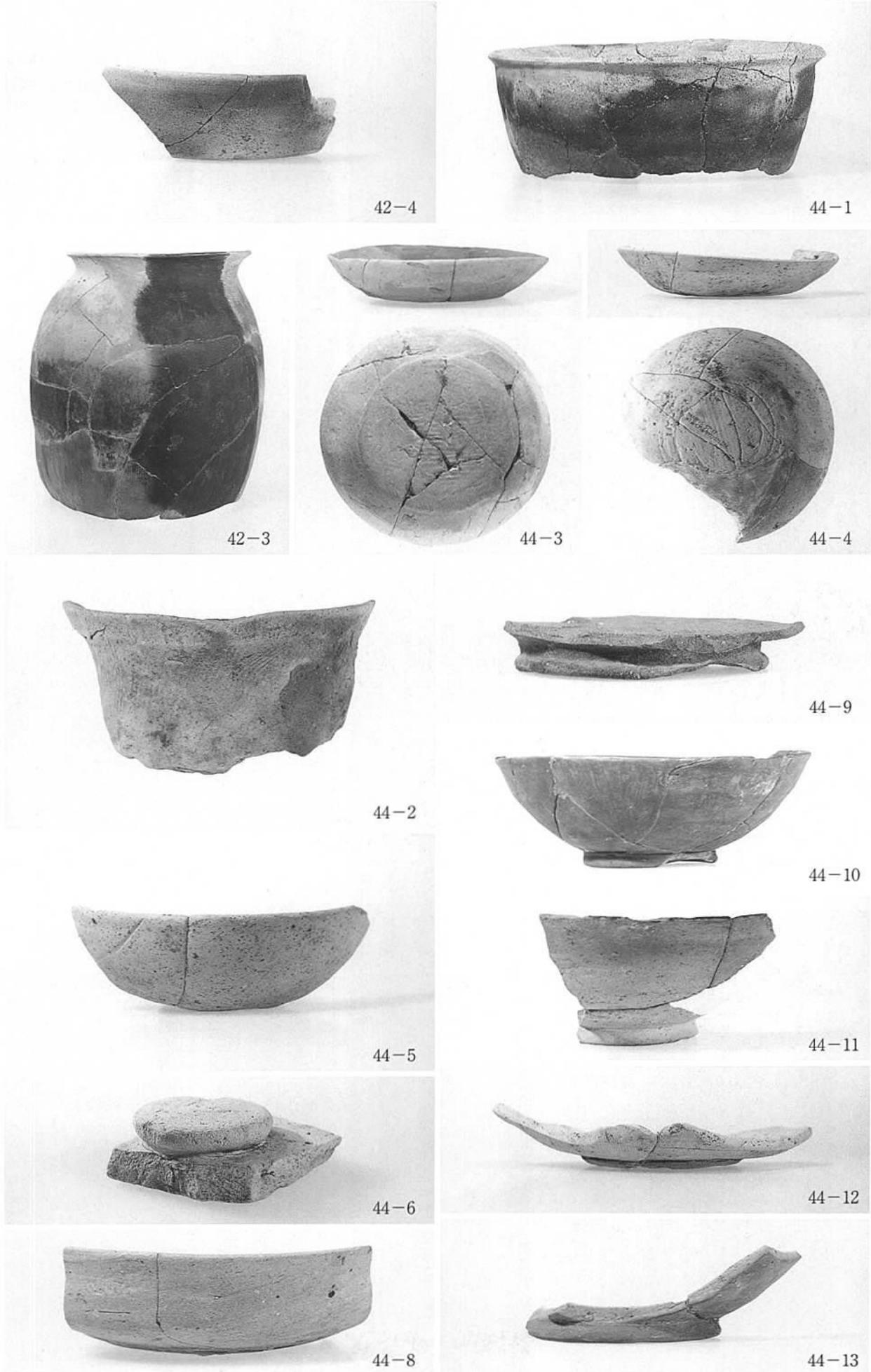
39-4



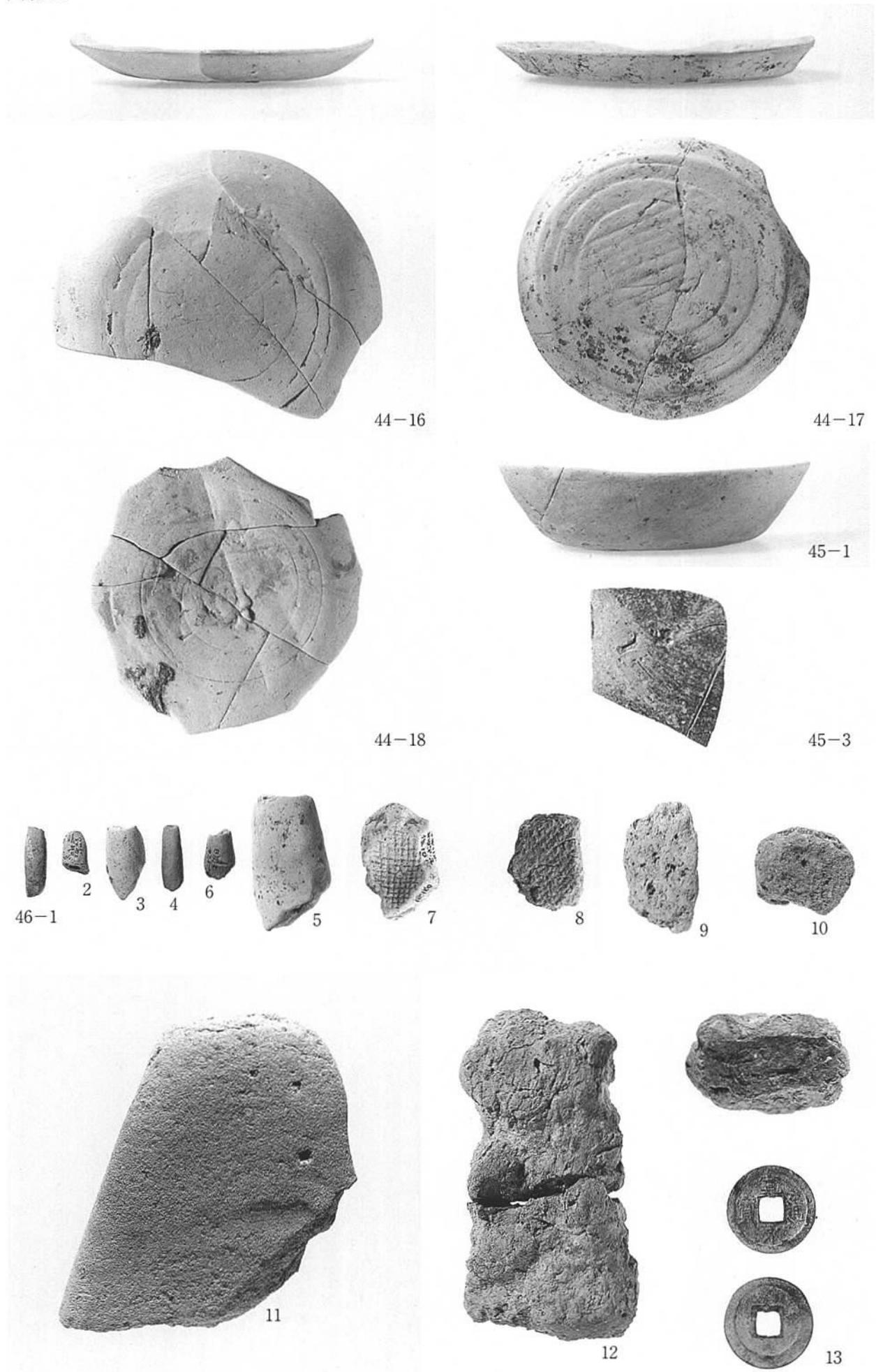
39-10



42-1



ピット、第1遺構面上包含層・攪乱坑出土土器



44-16

44-17

45-1

44-18

45-3

46-1

2

3

4

6

5

7

8

9

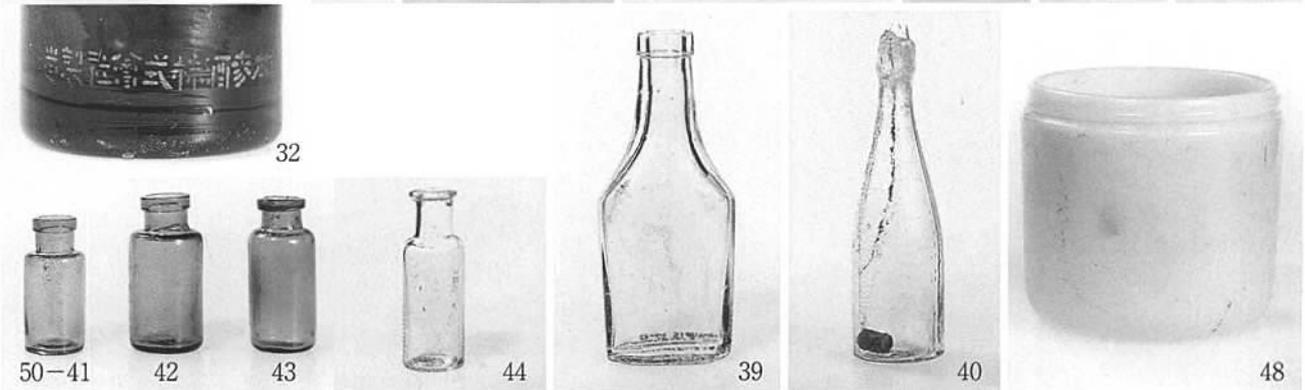
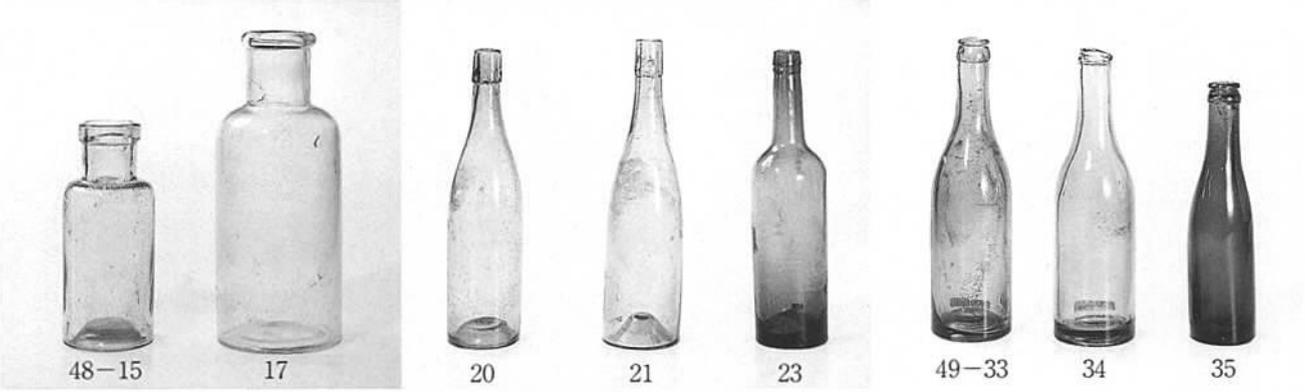
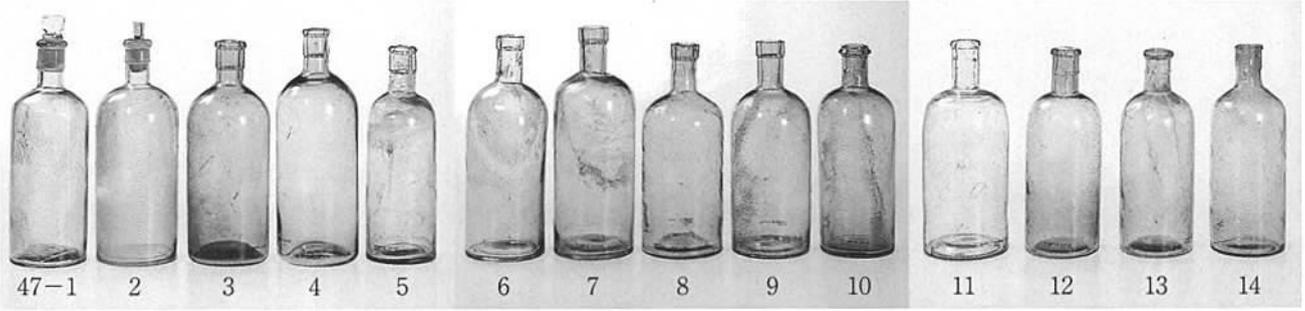
10

11

12

13

遺跡出土土製品、製塩土器、石器、金属器



1・2号攪乱坑出土近代遺物



50-49



50



51-51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



51-62



52-12



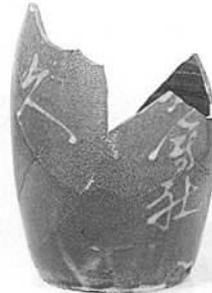
52-14



63



65



66



66



52-13



8



9



10

1~3号搅乱坑出土近代遺物

報告書抄録

ふりがな	ひづめいせき							
書名	日詰遺跡							
副書名	福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	小澤 佳憲							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	平成17（2005）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
ひづめいせき 日詰遺跡	ふくおかけんくめしたぬしまるまちたぬしまるとよき 福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城	402036		33°20'59"	130°41'13"	20021105- 20030211	計 2600㎡	浮羽ハイ パス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
日詰遺跡	集落	奈良時代	竪穴住居跡30棟 土坑4基 ピット・溝	土師器・須恵器 近代陶磁器・ ガラス				

## 福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2114107
登録年度	登録番号
16	5

一般国道  
210号

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第22集

### 日誌遺跡Ⅱ

平成17年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 九州チューエツ株式会社  
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号